群馬県勢多郡大胡町

堀越並木（A・C地点）遺跡

「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集

並木Ｃ地点遺跡全景

並木Ｃ地点遺跡Ｊ１Ｈ完掘状況

同遺跡Ｊ２Ｈ完掘状況

並木Ｃ地点遺跡Ｊ５・７Ｈ完掘状況

同遺跡Ｊ６Ｈ・集石

〈参考資料〉並木Ｂ地点遺跡全景

同遺跡　土坑群

はじめに

「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」の事業に係わる発掘調査報告書の第３集が刊行されました。今回の並木遺跡の調査報告では、パンケース100箱にのぼる縄文時代前期～後期に亙る土器や石器が出土し、敷石住居跡や土坑等も見つかりました。特に、調査区の東側で見つかった「捨て場」からは足場が無い程の土器と石器が出土しました。この土器の中には、東北地方や信越地方のものが見られ、交易の広さが窺われます。

この周辺は、以前に調査された縄文時代後期を主体とする土器等が出土した堀越西一丁田遺跡、その北方には縄文時代中期の甲諏訪遺跡、南方では同前期の堀越中道遺跡があります。

今後、調査される並木遺跡の東側台地部分の調査により、詳細な遺跡の分布や土器が検出されることで縄文時代の生活の一端が覗かれると期待します。

発掘調査の実施から本書の作成にわたりご協力・ご指導をいただきました各位に感謝申し上げると共に末筆ではありますが関係者の皆様の苦労を謝して序といたします。

平成16年３月

大胡町教育委員会

教育長　松本浩一

例　言

1　本書は、「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」の実施に伴い、平成13年度と平成14年度に発掘調査を実施した発掘調査報告書である。

2　遺跡の名称は、遺跡の中心を占める字並木に大字の堀越を付して堀越並木遺跡とする。

《発掘調査》

堀越並木Ａ地点遺跡（堀越水押地内）

平成14年１月10日～同月23日

堀越並木Ｃ地点遺跡（堀越2101－１地先ほか）

平成14年９月18日～同年12月25日

《整理》平成15年５月19日～16年３月26日

3　発掘調査は、大胡町教育委員会が中部農業総合事務所との委託契約に基づき、直営で実施した。

4　調査組織及び本書の作成組織は、下記のとおりである。

事務局　　文化財担当

教 育 長　松本浩一　　係　長　山下歳信

事務局長　井上健児　　主　査　藤坂和延

5　本書の編集と執筆は、山下が行った。

6　石器（石鏃・石斧）の実測・トレースは技研測量設計株式会社、遺物の写真撮影・土器ネーミングは山武考古学研究所、石材同定はパリノ・サーヴィ（株）に委託した。

7　発掘調査によって出土した遺物は、総て大胡町教育委員会文化財事務所に付設する収蔵庫で管理・収蔵している。

8　発掘調査から本書作成の過程で下記の方々や機関からのご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略）

群馬県中部農業総合事務所　農村整備部整備第一課　技研測量設計㈱　須賀工業㈱

パリノ・サーヴィ㈱　山武考古学研究所　サノヤ産業㈱　縄文セミナー参加の諸氏

鈴木徳雄　増田　修　谷藤保彦　関根慎一　小川卓也　福田貫之　水谷貴之

伊藤順一　斎藤　準

9　発掘調査参加者（順不同・敬称略）

勅使川原幸枝　小沢チズエ　井上美代子　萩原秀子　荒井愛子　杉淵富雄

登坂うた子　中村富子　須田善正　大原芳江　石原スミエ　角田美知代

梅澤きく江　友永　茂　荻野春子　阿部清子　須田　誠　瀬下　昇　錦　栄子

松村福二郎　嶋岡政雄　山下雅江　水谷貴之（調査補助員）

凡　例

1　第１図位置と周辺の遺跡は、大胡町役場発行の20,000分の１現況図に加筆して使用した。
2　第２図堀越並木遺跡とその周辺は、大胡町役場発行の2,500分の１現況図に加筆して使用した。
3　遺構番号の略称は、住居跡H、土坑Dとし、縄文時代の遺構なので頭にＪを付した。
4　遺構・遺物の縮尺は、挿図図版にスケールを付している。
5　Ｃ地点遺跡出土の土器は（　）で出土位置を表し、捨て場は略称（ス）とした。
6　遺構図中に記した断面基準線は、標高を示す。
7　遺構図中に示したＮ方向は、座標北である。
8　縄文土器の胎土内に繊維を含むものは、断面に●を付した。

抄　録

フリガナ　ホリコシナミキエー・シーチテンイセキ
書　　名　堀越並木(Ａ・Ｃ地点)遺跡
副 書 名　「県営農免･ふるさと農道整備事業勢多中央地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
巻　　次　第３集
編著者名　山下歳信
編集機関　大胡町教育委員会　〒371-0292 群馬県勢多郡大胡町堀越1115番地
発行機関　大胡町教育委員会　〒371-0292 群馬県勢多郡大胡町堀越1115番地

発行年月日　2004年３月26日

目　次

巻頭カラー図版１　並木Ｃ地点遺跡全景
２　並木Ｃ地点遺跡Ｊ１Ｈ完掘状況　Ｊ２Ｈ完掘状況
３　並木Ｃ地点遺跡Ｊ５・７Ｈ完掘状況　Ｊ６Ｈ・集石
４　《参考資料》並木Ｂ地点遺跡全景　同遺跡土坑群

はじめに　大胡町教育委員会　教育長　松本浩一
例　言
凡　例
挿図目次
挿表目次
写真目次
《抄　録》
第１章　発掘調査に至る経緯……1
第２章　遺跡の位置と周辺の遺跡……1～6
第３章　検出された遺構と遺物の概要……7～15

挿図目次

第１図　位置と周辺の遺跡……3
第２図　堀越並木遺跡とその周辺……4
第３図　Ａ・Ｃ地点遺跡全体図……5
第４図　Ａ地点遺跡全体図・土層図……6
第５図　Ｃ地点・Ｊ１Ｈ、Ｊ２Ｈ……9
第６図　Ｃ地点・Ｊ３～Ｊ５Ｈ……10
第７図　Ｃ地点・Ｊ６～８Ｈ、Ｊ１・２Ｄ……11
第８図　Ｃ地点・Ｊ４～７Ｄ、1～４号集石……12
第９図　Ｃ地点捨て場土器出土分布……16
第10図　Ｃ地点捨て場石器出土分布……17
第11図　Ｃ地点捨て場土層堆積状況……18
第12図　Ａ地点遺物(1)前期……24
第13図　Ａ地点遺物(2)前期～中期……25
第14図　Ａ地点遺物(3)中期（阿玉台式）……26
第15図　Ａ地点遺物(4)中期（阿玉台式）……27
第16図　Ａ地点遺物(5)中期（阿玉台式）……28
第17図　Ａ地点遺物(6)中期（阿玉台式）……29
第18図　Ａ地点遺物(7)中期（阿玉台式）・浅鉢形土器……30
第19図　Ａ地点遺物(8)中期浅鉢形土器・底部片・勝坂式系……31
第20図　Ａ地点遺物(9)中期（勝坂式系）……32
第21図　Ａ地点遺物(10)中期中葉～後葉（加曽利E式）……33
第22図　Ａ地点遺物(11)中期（加曽利E式）～後期（称名寺式）　34
第23図　Ａ地点遺物(12)後期（称名寺式）……35
第24図　Ａ地点遺物(13)後期（堀之内式）……36
第25図　Ａ地点遺物(14)後期土器片・石斧・石鏃……37
第26図　Ａ地点遺物(15)石鏃・凹石・石皿・玦状耳飾り等……38
第27図　Ｃ地点遺物(1)前期（二ッ木式・関山式等）……59
第28図　Ｃ地点遺物(2)前期（黒浜式等）……60
第29図　Ｃ地点遺物(3)前期（諸磯式・興津式）……61
第30図　Ｃ地点遺物(4)前期終末～中期初頭……62
第31図　Ｃ地点遺物(5)前期終末～中期初頭……63
第32図　Ｃ地点遺物(6)中期初頭（五領ヶ台式等）　64
第33図　Ｃ地点遺物(7)中期（五領ヶ台）……65
第34図　Ｃ地点遺物(8)中期（阿玉台式）……66
第35図　Ｃ地点遺物(9)中期（阿玉台式）……67
第36図　Ｃ地点遺物(10)中期（阿玉台式）……68
第37図　Ｃ地点遺物(11)中期（阿玉台式）……69
第38図　Ｃ地点遺物(12)中期（阿玉台式等）……70
第39図　Ｃ地点遺物(13)中期（阿玉台式等）……71
第40図　Ｃ地点遺物(14)中期（阿玉台式）……72

第41図　C地点遺物(15)中期(阿玉台式等)……73
第42図　C地点遺物(16)中期初頭～(勝坂式系)…74
第43図　C地点遺物(17)中期(勝坂式系)……75
第44図　C地点遺物(18)中期(勝坂式系)……76
第45図　C地点遺物(19)中期(勝坂式系)……77
第46図　C地点遺物(20)中期(勝坂式系)……78
第47図　C地点遺物(21)中期(勝坂式系・浅鉢形土器等) …79
第48図　C地点遺物(22)中期(浅鉢形土器等)……80
第49図　C地点遺物(23)中期(隆帯系土器)……81
第50図　C地点遺物(24)中期中葉末……82
第51図　C地点遺物(25)中期中葉末……83
第52図　C地点遺物(26)中期中葉末～加曽利E式 84
第53図　C地点遺物(27)中期(加曽利E式) ……85
第54図　C地点遺物(28)中期中葉末……86
第55図　C地点遺物(29)中期(加曽利E式) ……87
第56図　C地点遺物(30)中期(加曽利E式) ……88
第57図　C地点遺物(31)中期(加曽利E式) ……89
第58図　C地点遺物(32)中期(加曽利E式) ……90
第59図　C地点遺物(33)中期(浅鉢形土器等)……91
第60図　C地点遺物(34)中期(器台形土器等)……92
第61図　C地点遺物(35)中期(加曽利E式) ……93
第62図　C地点遺物(36)中期(加曽利E式) ……94
第63図　C地点遺物(37)中期(加曽利E式) ……95
第64図　C地点遺物(38)中期(加曽利E式) ……96
第65図　C地点遺物(39)中期(加曽利E式) ……97
第66図　C地点遺物(40)中期(加曽利E式) ……98
第67図　C地点遺物(41)中期(加曽利E式) ……99
第68図　C地点遺物(42)中期(加曽利E式・曽利式) ……100
第69図　C地点遺物(43)中期(加曽利E式・大木式等)……101
第70図　C地点遺物(44)中期(加曽利E式)……102
第71図　C地点遺物(45)中期(加曽利E式)……103
第72図　C地点遺物(46)中期(加曽利E式)……104
第73図　C地点遺物(47)中期(加曽利E式)……105
第74図　C地点遺物(48)中期(加曽利E式)……106
第75図　C地点遺物(49)中期(加曽利E式)……107
第76図　C地点遺物(50)中期(加曽利E式)……108
第77図　C地点遺物(51)中期(加曽利E式)……109
第78図　C地点遺物(52)中期(加曽利E式)……110
第79図　C地点遺物(53)中期後葉末～後期初頭 ……111
第80図　C地点遺物(54)後期初頭(称名寺式等) 112
第81図　C地点遺物(55)後期初頭(称名寺式) …113
第82図　C地点遺物(56)後期初頭(称名寺式) …114
第83図　C地点遺物(57)後期初頭(称名寺式) …115
第84図　C地点遺物(58)後期初頭(称名寺式) …116
第85図　C地点遺物(59)後期初頭(称名寺式) …117
第86図　C地点遺物(60)後期初頭(称名寺式)～後期(堀之内式) 118
第87図　C地点遺物(61)後期(堀之内式) ……119
第88図　C地点遺物(62)後期(堀之内式) ……120
第89図　C地点遺物(63)後期(堀之内式) ……121
第90図　C地点遺物(64)後期(堀之内式) ……122
第91図　C地点遺物(65)後期(堀之内～加曽利B式) ……123
第92図　C地点遺物(66)後期(加曽利B式)……124
第93図　C地点遺物(67)後期(加曽利B式)、同期(粗製土器) 125
第94図　C地点遺物(68)後期(粗製土器)、同期(底部片)…126
第95図　C地点遺物(69)後期(注口土器) ……127
第96図　C地点遺物(70)後期(注口土器) ……128
第97図　C地点遺物(71)土製円盤・玦状耳飾り等……129
第98図　C地点遺物(72)石斧(1) ……130
第99図　C地点遺物(73)石斧(2) ……131
第100図　C地点遺物(74)石斧(3) ……132
第101図　C地点遺物(75)石斧(4) ……133
第102図　C地点遺物(76)石斧(5) ……134
第103図　C地点遺物(77)石斧(6) ……135
第104図　C地点遺物(78)石斧(7) ……136
第105図　C地点遺物(79)石斧(8)、石鏃(2) ……137
第106図　C地点遺物(80)石鏃(2) ……138
第107図　C地点遺物(81)石鏃(3)、石錐、軽石製品、砥石等 ……139
第108図　C地点遺物(82)磨石・凹石(1) ……140
第109図　C地点遺物(83)磨石・凹石(2) ……141
第110図　C地点遺物(84)磨石・凹石(3) ……142
第111図　C地点遺物(85)磨石・凹石(4) ……143
第112図　C地点遺物(86)石皿(1) ……144
第113図　C地点遺物(87)石皿(2) ……145
第114図　C地点遺物(88)多孔石・石棒 ……146
第115図　C地点遺物(89)石斧(9) ……147
第116図　C地点遺物(90)石斧(10) ……148

挿表目次

《付表》並木A・C地点遺跡石器・土製品計測表　149～151

図版目次

図版１　1　A地点遺跡遺物出土状況　2　A地点遺跡遺物出土状況
図版２　1　A地点遺跡土層観察作業　2　A地点遺跡完掘状況
図版３　1　C地点遺跡全景(北東より)　2　同上(真上より)
図版４　1　J1H(南より)　2　J1H(北西より)
図版５　1　J１H遺物出土状況　2　同上
図版６　1　J1H完掘状況(真上より)　2　J2H(北西より)
図版７　1　J2H石斧出土状況　2　J2H完掘状況(真上より)
図版８　1　J5H完掘状況(北より)　2　J5・7H完掘状況(真上より)
図版９　1　J6H遺物出土状況　2　J6H炉・石皿出土状況
図版10　1　J7H遺物出土状況(北より)　2　同完掘状況(北より)
図版11　1　J８H炉　2　J1D遺物出土状況
図版12　1　J2D・J3Hの一部(右隅)　2　J4D周辺の遺物出土状況
図版13　1　J４D遺物出土状況　2　同上(近撮)
図版14　1　J4D周辺の完掘状況　2　J5D遺物出土状況
図版15　1　１号集石　2　２号集石
図版16　1　３・４号集石　2　捨て場遺物出土状況(北より)
図版17　1　捨て場A区遺物出土状況　2　同上
図版18　1　捨て場A区遺物出土状況　2　捨て場B区遺物出土状況
図版19　1　捨て場C区遺物出土状況　2　捨て場C～B区遺物出土状況
図版20　1　No118遺物出土状況　2　No324遺物出土状況
図版21　1　No343遺物出土状況　2　No119遺物出土状況　3　No918遺物出土状況
図版22　1　No238遺物出土状況　2　捨て場土層堆積状況
図版23　A地点遺跡出土遺物(1)
図版24　A地点遺跡出土遺物(2)
図版25　A地点遺跡出土遺物(3)
図版26　C地点遺跡出土遺物(1)
図版27　C地点遺跡出土遺物(2)
図版28　C地点遺跡出土遺物(3)
図版29　C地点遺跡出土遺物(4)
図版30　C地点遺跡出土遺物(5)
図版31　C地点遺跡出土遺物(6)
図版32　C地点遺跡出土遺物(7)
図版33　C地点遺跡出土遺物(8)
図版34　C地点遺跡出土遺物(9)
図版35　C地点遺跡出土遺物(10)
図版36　C地点遺跡出土遺物(11)
図版37　C地点遺跡出土遺物(12)
図版38　C地点遺跡出土遺物(13)
図版39　C地点遺跡出土遺物(14)
図版40　C地点遺跡出土遺物(15)
図版41　C地点遺跡出土遺物(16)
図版42　C地点遺跡出土遺物(17)
図版43　C地点遺跡出土遺物(18)
図版44　C地点遺跡出土遺物(19)
図版45　C地点遺跡出土遺物(20)
図版46　C地点遺跡出土遺物(21)
図版47　C地点遺跡出土遺物(22)
図版48　C地点遺跡出土遺物(23)
図版49　C地点遺跡出土遺物(24)
図版50　C地点遺跡出土遺物(25)
図版51　C地点遺跡出土遺物(26)
図版52　C地点遺跡出土遺物(27)
図版53　C地点遺跡出土遺物(28)
図版54　C地点遺跡出土遺物(29)
図版55　C地点遺跡出土遺物(30)
図版56　C地点遺跡出土遺物(31)
図版57　C地点遺跡出土遺物(32)
図版58　C地点遺跡出土遺物(33)
図版59　C地点遺跡出土遺物(34)
図版60　C地点遺跡出土遺物(35)
図版61　C地点遺跡出土遺物(36)
図版62　C地点遺跡出土遺物(37)
図版63　C地点遺跡出土遺物(38)
図版64　C地点遺跡出土遺物(39)
図版65　C地点遺跡出土遺物(40)

図版66　C地点遺跡出土遺物(41)
図版67　C地点遺跡出土遺物(42)
図版68　C地点遺跡出土遺物(43)
図版69　C地点遺跡出土遺物(44)
図版70　C地点遺跡出土遺物(45)
図版71　C地点遺跡出土遺物(46)
図版72　C地点遺跡出土遺物(47)
図版73　C地点遺跡出土遺物(48)
図版74　C地点遺跡出土遺物(49)
図版75　C地点遺跡出土遺物(50)
図版76　C地点遺跡出土遺物(51)
図版77　C地点遺跡出土遺物(52)
図版78　C地点遺跡出土遺物(53)
図版79　C地点遺跡出土遺物(54)
図版80　C地点遺跡出土遺物(55)
図版81　C地点遺跡出土遺物(56)
図版82　C地点遺跡出土遺物(57)
図版83　C地点遺跡出土遺物(58)
図版84　C地点遺跡出土遺物(59)
図版85　C地点遺跡出土遺物(60)
図版86　C地点遺跡出土遺物(61)
図版87　C地点遺跡出土遺物(62)
図版88　C地点遺跡出土遺物(63)
図版89　C地点遺跡出土遺物(64)
図版90　C地点遺跡出土遺物(65)
図版91　C地点遺跡出土遺物(66)
図版92　C地点遺跡出土遺物(67)
図版93　C地点遺跡出土遺物(68)
図版94　C地点遺跡出土遺物(69)
図版95　C地点遺跡出土遺物(70)
図版96　C地点遺跡出土遺物(71)
図版97　C地点遺跡出土遺物(72)

群馬県勢多郡大胡町

堀越並木（A・C地点）遺跡

「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

大胡町では、勢多郡富士見村～前橋市の小坂子を経て同郡大胡町を横断して同郡宮城村に至る事業名「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」に係わる農道建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査を平成12年度より開始しました。

同年の発掘調査は、前橋市と隣接する横沢芳山・同大塚遺跡が行われ、横沢芳山遺跡では良好な鍛治遺構、同大塚遺跡では、古墳二基等を検出しました。

平成13年度では上記遺跡の発掘調査報告書を刊行しました。発掘調査は大字堀越地内で60㎡の面積の並木Ａ地点遺跡を行いました。

平成14年度には町単で行われた並木Ｂ地点遺跡と今回報告する並木Ｃ地点遺跡、縄文時代の陥し穴を検出した堀越乙諏訪遺跡を調査しました。

並木Ａ地点遺跡の発掘調査は、北向きの傾斜面に茂る竹、同根っこの抜根から開始しました。試掘結果から縄文時代の土器が多く出土した事に基づき、出土遺物は平板測量による遺物分布図を作成した。その結果、同遺跡は捨て場と考えられた。

並木Ｃ地点遺跡の発掘調査も試掘結果に基づき、遺構面まで浅い南方の傾斜変換地から低地面へと表土(耕作土)を小型(0.25)の重機により掘削して行い、その後に遺構の確認を行った。東方で北向きの傾斜面から低地部に確認された「捨て場」の遺物出土状況は、技研測量設計(株)に委託してドット図を作成した。調査結果は、竪穴住居跡８軒、土坑７基、捨て場、近現代の溝２条の遺構を検出した。

グリットは第Ⅸ系国家座標に合わせた５ｍの方眼を設け、Ｘ＝47755　Ｙ＝-60985を基準として東西方向を西側より１２３・・13とし、南北方向を南側よりＡＢＣ・・・Ｐとして、南西隅の杭をもってグリット名とした。

調査報告書の作成は、中部農業総合事務所 所長 渡邊展章氏と町長 伊藤静雄との契約で、平成15年５月19日～同16年３月26日までの間で行われた。

第Ⅱ章　遺跡の位置と周辺の遺跡

勢多郡大胡町は、群馬県の中央やや南寄りに聳える赤城山の南麓に位置します。県都前橋市とは南～西方で接し、東方では同郡宮城村と同郡粕川村に接します。町の中心街区である場所は、戦国時代の大胡氏～近世初期の牧野氏の居城であった大胡城の城郭部とその城下に該当しますが、大胡バイパスの周辺に新しい商業区域が広がっています。

並木遺跡(１)は上毛電機鉄道の「大胡駅」から北々西に直線距離で2.2Kmあります。駅から遺跡までの順路を辿ると先ず600m程北進すると大胡町役場があります。この場所は大胡城(28)の城郭部である南曲輪(四ノ曲輪)に位置します。西方には低地を挟んで大胡小学校・中学校があり、この一帯が殿町と呼ばれる武家屋敷跡です。学校の西側を縦断する町道上ノ町・前野原線を北進すると大胡城主の菩提寺である養林寺(26)があり、その西方には大胡太郎の開祖と云われる長善寺があります。この付近も古く平安時代の集落があったと考えられます。同所より１Km程北進すると西方に縄文時代前期の二ッ木式期の集落跡と平安時代の把手付鍋や「立」の焼印、馬具等の鉄製品、「立」と書かれた墨書土器や礎石を有する竪穴

住居・掘立柱建物跡が検出され、下級官人に掌握されたと考えられる堀越中道遺跡(18)があります。東方にも平安時代の竪穴住居跡が検出された堀越乙関替戸遺跡(19)があります。

さらに北進すると道は二又に分岐し、左が町内で県道四ッ塚・原之郷・前橋線に接続する大胡10号線、右は隣接する宮城村に行く大胡11号線となります。この分岐地点から程なくすると今回報告する堀越並木遺跡のA・C地点遺跡があり、北～西方には薬師川が南流する低地が広がります。

遺跡の範囲は町道の分岐付近を中心として台地縁辺部から東～南方の台地平坦部に広がると考えられ、以前から縄文土器片等が多量に分布していた箇所です。

平成14年度に行った堀越並木A地点遺跡(以後、A地点)は、当事業で新設された農道と大胡10号線とが交差する隅切り部分に該当する箇所です。この隅切りの南では同線の拡幅工事で実施した堀越並木B地点遺跡と接します。遺跡は台地の縁辺部の一角にあり、北方向への傾斜面地です。

堀越並木C地点遺跡(以後、C地点)は大胡10線と11号線を結び、A地点に続く台地の縁辺部を通過する路線部分です。調査区内の傾斜変換部分での標高は218m前後で、緩やかに北～北西方向に傾斜しています。

再び周囲の遺跡を概観するとC地点の南で分岐して北～北東方向に走行する大胡11号線沿いには、縄文時代後期(堀之内～加曽利B式)の土器が多く出土した堀越西一丁田遺跡(2)が隣接し、さらに北上すると縄文時代中期の集落である甲諏訪遺跡(3)に続きます。大胡10号線を北上すると竪型製鉄炉や木炭窯、住居跡が検出された乙西尾引遺跡(4)等があります。

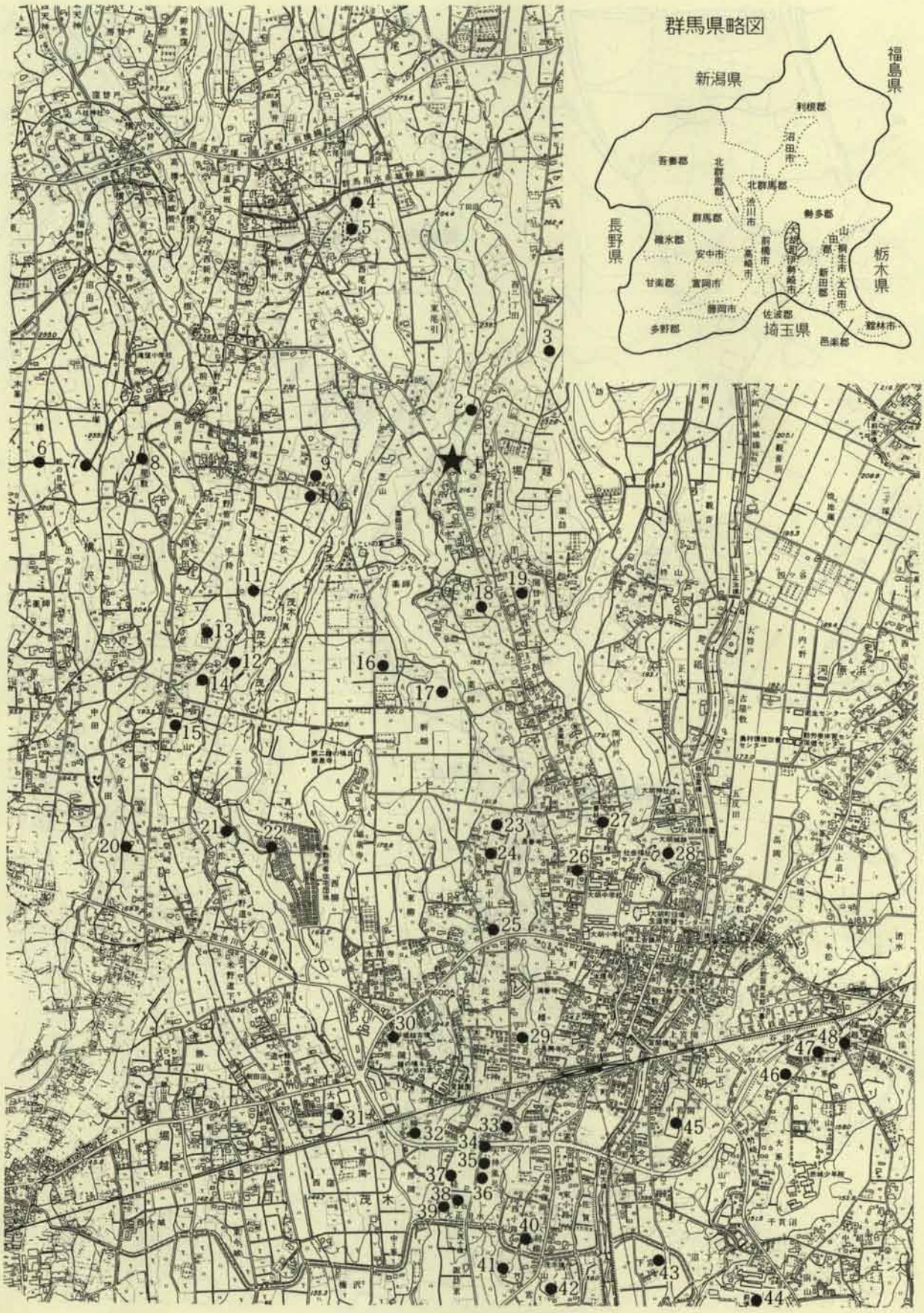
並木遺跡の西方は、薬師川や二本松川やその支流、さらに寺沢川が南流する低地と台地が交互に織り成しています。薬師川右岸の台地の東側縁辺部には古墳時代の集落跡である新畑遺跡(16・17)、同遺跡の南方にある同時期の集落跡の五十山遺跡(23～25)があり、さらに南下すると縄文時代後期(堀之内式)の注口土器が出土した天神遺跡(29)、瓦塔・淨瓶等の寺院に係わる遺物や朱墨土器等が出土した平安時代頃の拠点的集落である天神風呂遺跡(33～39)が分布します。同遺跡の南東方向には低地を挟んで藤岡・大胡線の両側に東・西小路古墳群(40)、縄文時代中期(加曽利E式)の集落と古墳を検出した西小路遺跡(41)と上ノ山遺跡(42)があります。

二本松川やその支流、寺沢川沿いにも多くの遺跡が存在します。縄文時代前期の二ッ木式期の集落跡である堀越丙・丁二本松遺跡(9・10)、横沢新屋敷遺跡(8)、同期の黒浜・有尾式期の集落跡である横沢向山遺跡(15)があります。同台地上には小円墳が多く築かれ、古墳群を構成していますが、その大半は痕跡を留める程度の残存であり、横沢新屋敷遺跡や横沢大塚遺跡(7)では記載漏れの古墳が検出されています。

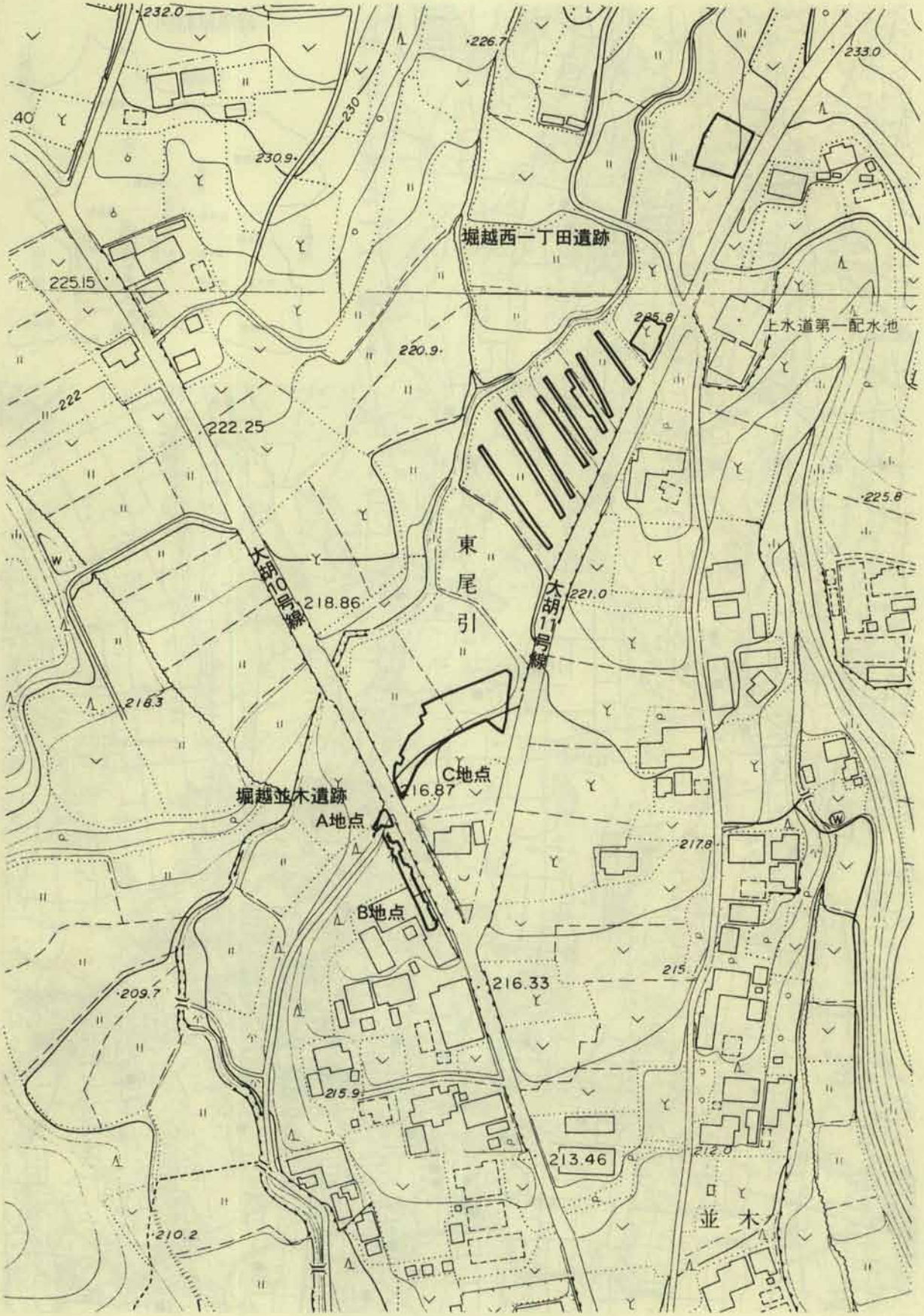
大胡城跡の崖下を流れる荒砥川の東では、弘仁九(818)年の地震に起因する泥流で埋没した水田址である中宮関遺跡(45)、縄文時代前期（諸磯式）の土器、須恵器窯・木炭窯・竪型製鉄炉等を検出した上大屋・樋越地区遺跡群(48)等があります。

〈遺跡名〉

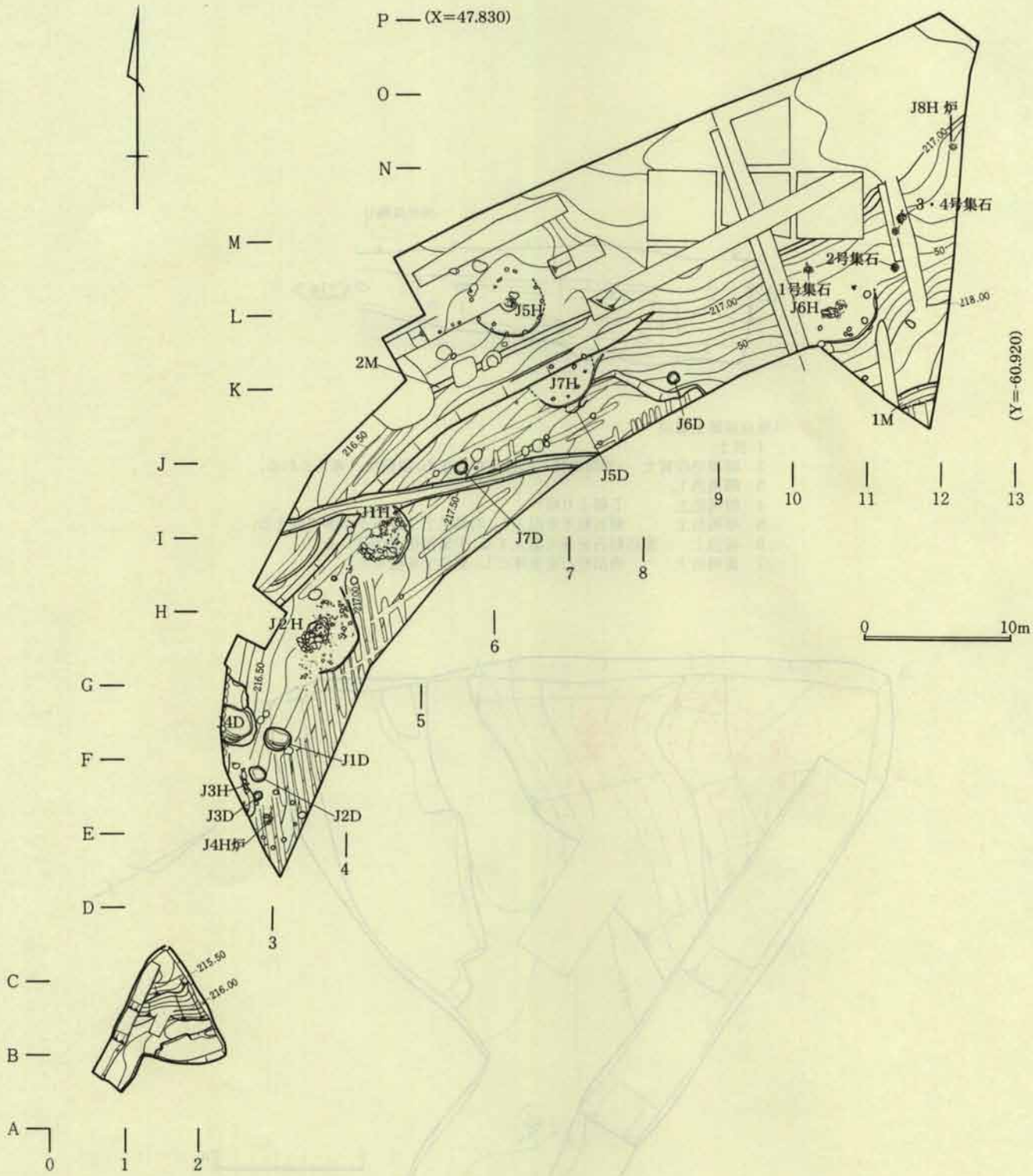
1 堀越並木遺跡	2 堀越西一丁田遺跡	3 甲諏訪遺跡	4 乙西尾引遺跡
5 西尾引遺跡	6 横沢芳山遺跡	7 横沢大塚遺跡	8 横沢新屋敷遺跡
9 堀越丙二本松遺跡	10 堀越丁二本松B地点遺跡	11・12 堀越丁二本松遺跡	13 横沢向田遺跡
14 横沢向山B地点遺跡	15 横沢向山遺跡	16 新畑C地点遺跡	17 新畑遺跡
18 堀越中道遺跡	19 堀越乙関替戸遺跡	20 柴崎遺跡	21 茂木二本松遺跡
22 真木遺跡	23～25 五十山遺跡	26 養林寺館址	27 殿町遺跡
28 大胡城跡(群馬県指定史跡)	29 天神遺跡	30 堀越古墳(群馬県指定史跡)	
31 茂木大道下遺跡	32 柳沢遺跡	33～39 天神風呂遺跡	40 東・西小路古墳群
41 西小路遺跡	42 上ノ山遺跡	43 下宮関遺跡	44 前橋東商業高等学校遺跡
45 中宮関遺跡	46 八ッガ峰遺跡	47 稲荷塚古墳	48 上大屋・樋越地区遺跡群



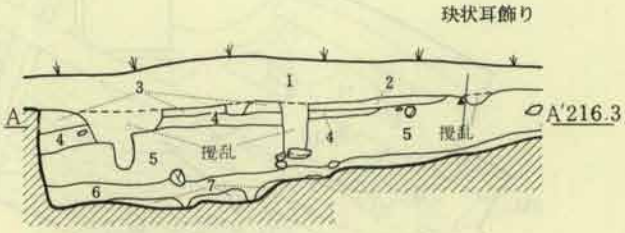
第１図　位置と周辺の遺跡



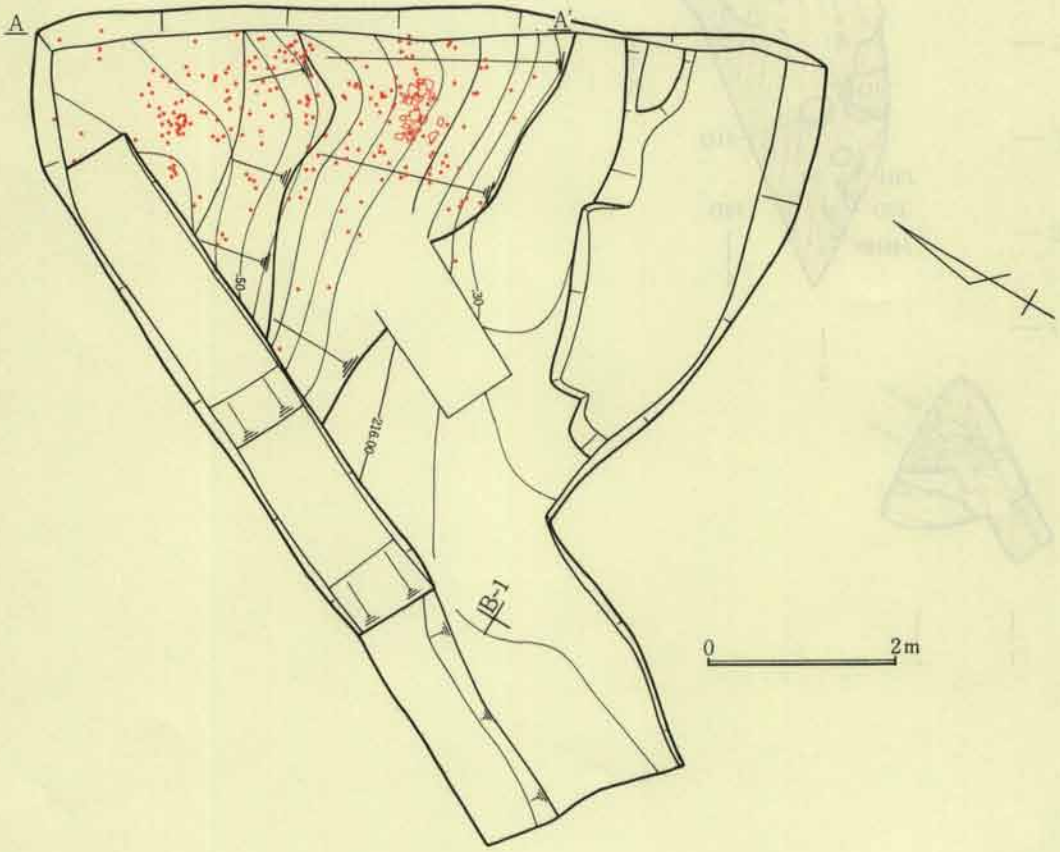
第２図　堀越並木遺跡とその周辺



第3図　A・C地点遺跡全体図



A地点遺跡土層図
1 表土
2 暗褐色砂質土 一部版築状に黒色土が挟まる。道路址と考えられる。
3 暗褐色土
4 暗褐色土 5層より暗い
5 暗褐色土 軽石粒子を混入し、明褐色土ブロックが多く混える。
6 褐色土 鹿沼軽石を多く混入する。少量褐色土が混じる
7 黄褐色土 鹿沼軽石を主体とし、褐色土を混える



第4図 A地点遺跡全体図・土層図

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物の概要

遺　構

《Ａ地点》（第４図）

住居や土坑の検出は無かったが、縄文前期～後期に至る遺物が狭い面積に多量に出土した結果、捨て場と判断した。台地部側の南東隅はゴミ捨て場となり、近現代のものが多くみられた。遺物は南西方向に傾斜する標高216.30m付近から低地方向に検出され、その大半は土層註の第４層に集中して出土した。

《Ｃ地点》（第３図）

遺構は、中期～後期と考えられる住居跡８軒と土坑７基、多量の土器・石器が出土した捨て場がある。住居跡は台地の縁辺部分に７軒と低地部分１軒が検出された。その残存状況は良好では無く、不明瞭な箇所が多い。西方で三軒の敷石住居跡があるが柄鏡形住居の形態かは不明であった。

Ｊ１Ｈ（第５図）

調査区の西方、Ｈ・Ｉ－４Ｇに位置する。標高217.30m付近で西方～北西方向に緩慢な傾斜地に検出された敷石住居址である。南東方向にＪ２Ｈがあり、北壁部分は近現代と考えられる１号溝、上面を耕作溝が走行し、敷石の残存状況等から台地部側の約半分のが残ると考えられる。

主体部に残存する敷石は半径２ｍ前後の円内にあり、南西～南東側に60～70cm程の幅で比較的大き目な偏平な河原石を帯状に設け、北東の壁面にも河原石が見られ、この間には小礫が点在する。北西に残る河原石も敷石として使用されたと考えられる。

炉はほぼ中央部分（破線の円形部分）に位置したと考えられ、焼土とカーボンの混じる暗褐色土を確認したが、規模・形状は不明である。壁は全体の１／３が東方に検出された。

出土遺物は、南々東の敷石間に深鉢（842）が出土した。その胴部下半は河原石によって圧し潰れた状態であった。その他に576・787の土器片、石製品の石鏃（1188・1192）がある。南西方向に敷石から2.4m程離れて埋設土器（752）が検出された。この埋設土器と炉址を結ぶライン（Ｎ－42°－Ｅ）は住居跡のほぼ中央を通過すると考えられる。そして埋設土器が当住居跡に伴うものであれば、住居の形態は柄鏡形住居と考えら、長軸長は6.6m以上あると推察される。

Ｊ２Ｈ（第５図）

調査区の西寄り、Ｇ－３Ｇにその大半を占め、北西方向の緩慢な傾斜面に検出された敷石住居址である。標高は台地部側の東方で217m前後で、北東にＪ１Ｈ、西方に土坑等が隣接する。

住居の形状と規模は南北に併走する耕作溝により著しく乱れている為に不明瞭である。敷石は西方の大半が不明である。石敷部分は南西部分にあり、偏平な河原石等を使用して東西2.15m、南北1.3m規模で平坦に敷かれている。この南には細長い偏平な２石が縁石状に配され、その南方に張り出して小礫が分布する。この部分が柄鏡形住居を形造る張り出し部分かは不明である。残る空間部分にも礫が散在する。炉址は石敷部分の北東部分、住居跡の中央部分にある。僅かに西～北辺を構成すると考えられる石組が残り、この隅に埋設土器（769）が検出された。この結果から方形の石囲い炉と推察される。壁は台地

側の南～東方に検出されたが、北方では不明瞭となった。この壁沿いに３カ所の柱穴がある。これらを総合して住居跡の形状と規模を推察すると半径2.5m前後の円形と考えられる。

遺物は中期後葉末～後期初頭の土器(747～749・755・763・784・788等)が東方の壁沿いと炉址に出土。石製品としては縁石の脇で磨石(1253)、炉址の北方に石皿片(1284)、分銅形の石斧２点(1183・1184)が北東壁沿いに出土した。

Ｊ３Ｈ（第６図）

調査区の西方、Ｅ－２Ｇに位置する。西方に向かう緩慢な傾斜面で標高216.75m前後を測る。その主体は町道大胡10号線下にあったと考えられ為、形状や規模等は不明である。東側でＪ２・３Ｄ、南側でＪ４Ｈと重複する。検出された東壁沿いに偏平な河原石が弧状気味に並んで検出されたことから、敷石住居址と考えられる。出土遺物は757がある。

Ｊ４Ｈ（第６図）

調査区の南西隅にあり、西方に向かってＥ－３Ｇポイントのある緩慢な傾斜面に検出された。標高は216.90m前後である。北方部分でＪ３Ｈ・Ｊ３Ｄと重複し、西方で町道大胡10号線に接する。

遺構の残存は悪く、南北方向に併走する耕作溝等によって著しく破壊され、僅かに炉址と柱穴が検出されたのみである。

炉址は60cm前後の方形の掘り方を有する。底面に焼土・カーボンを確認し、石が抜かれた痕跡がある事から石囲炉と判明した。検出された柱穴と炉址から、半径2.1m前後の規模を測る円形の住居跡と考えられる。出土遺物は不明である。

Ｊ５Ｈ（第６図）

調査区の中央やや西寄り、Ｌ－６Ｇを中心とする低地部分にあり、試掘時に炉址が検出された住居跡である。標高216.60m前後を測り、南東方向にＪ７Ｈが隣接する。

形状は残存する壁と柱穴の配置から半径2.3m前後の円形と考えられる。壁の掘り込みは残存の良い南壁の中央部分で10cmである。床面は不明瞭で堅緻面は確認できなかった。柱穴は南壁沿に８カ所検出され、１～1.4m間隔で配されている。トレンチの西方や北西部分に検出されたものは帰属は不明である。炉址の北や北西方向に黒褐色土に食い込んで大きい自然石が見られる。

炉址は掘り方の西に後期称名寺２式の所産である土器を埋設する炉と考えられる。炉体土器は強い被熱を受け、非常にもろい状態であり、今回は実測図等の掲載はしなかった。掘り方は１m前後の隅丸方形で中央部分が40cm前後の深さの掘り込みである。

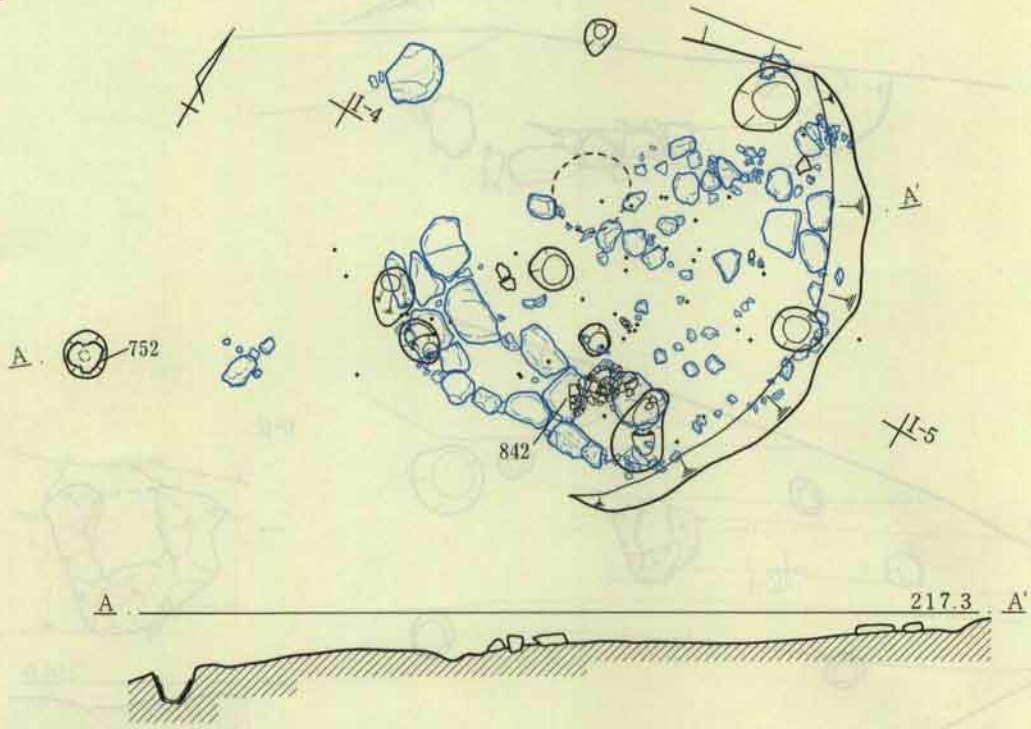
遺物は炉内から中期中葉～後期初頭(478・626・672・837・861・862)土器片が出土した。

Ｊ６Ｈ（第７図）

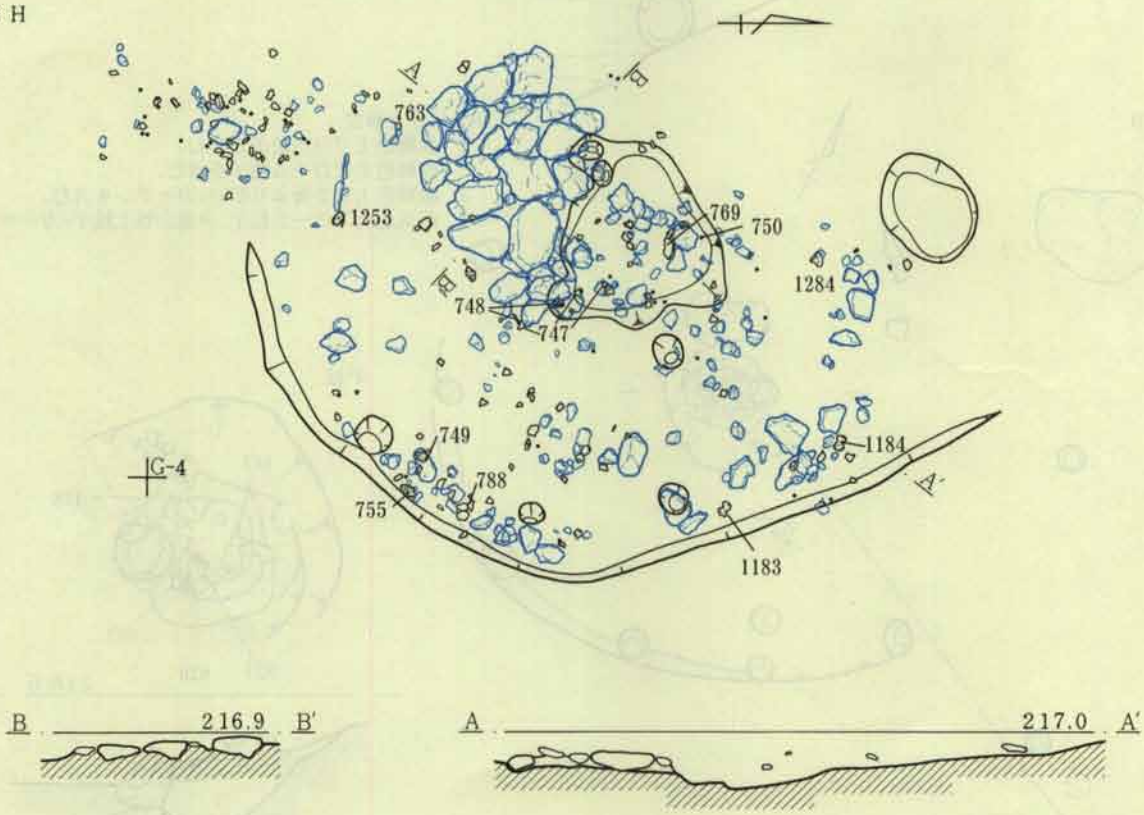
調査区の東方、Ｌ－10Ｇに位置する捨て場Ｂ区に検出され、北方向に向かう緩慢な傾斜面に位置する。標高は残存する南壁で217.70m前後である。北～北東方向には集石が隣接する。

規模は炉址を中心とした半径2.5m前後の円形と推察される。壁は台地側の南～東に確認され、壁沿いに柱穴が検出された。床面は不明瞭で、堅緻面は確認できなかった。

J1H

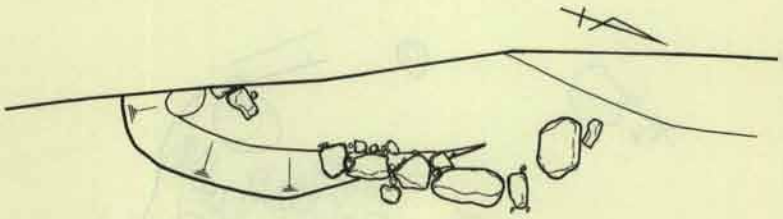


J2H

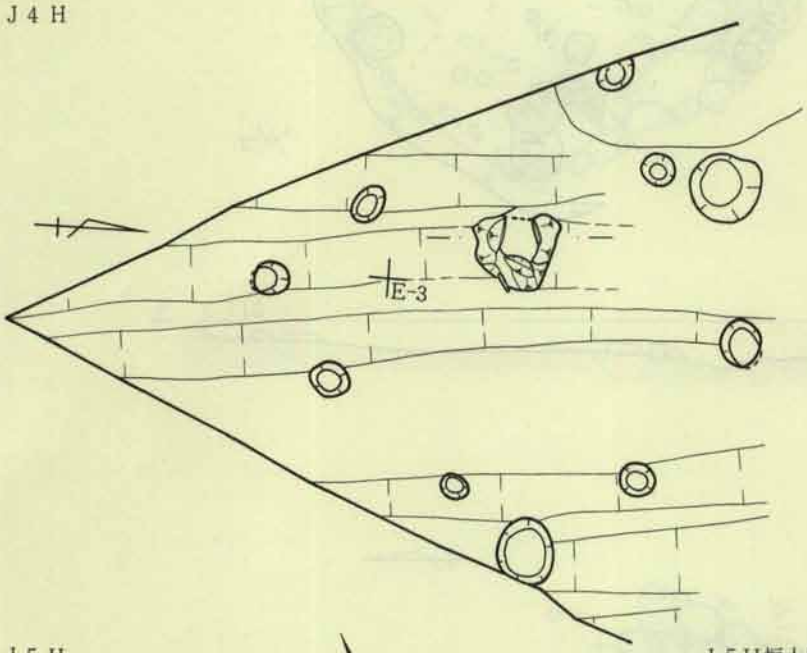


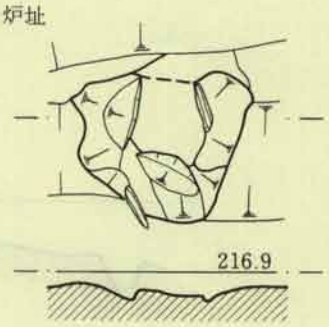
第5図　C地点　J1H・J2H

J３H



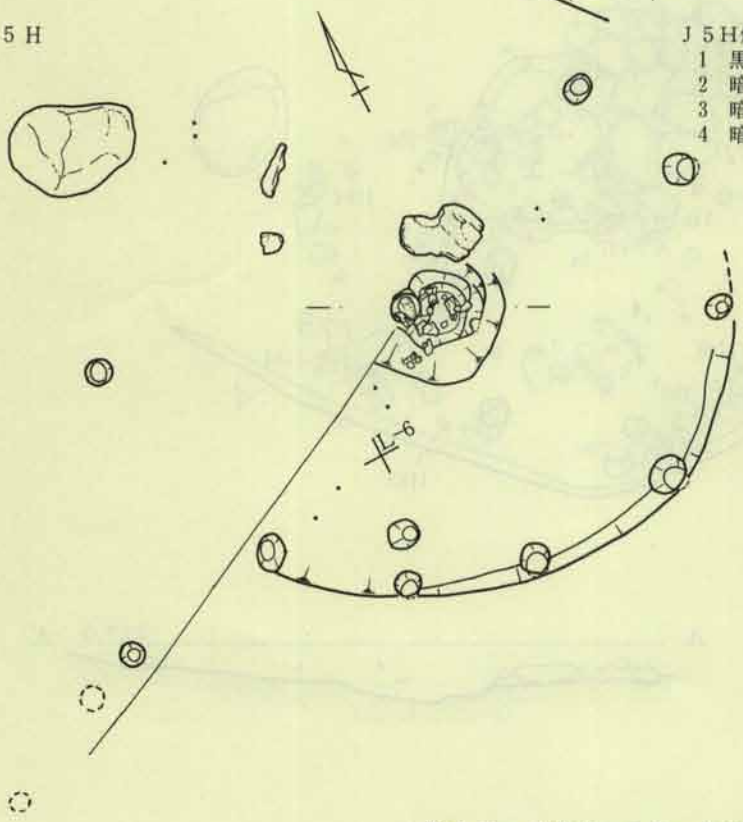
J４H

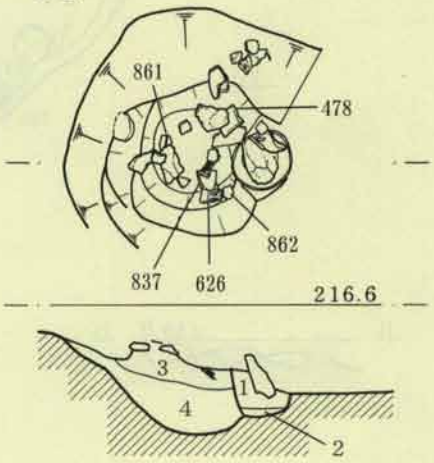




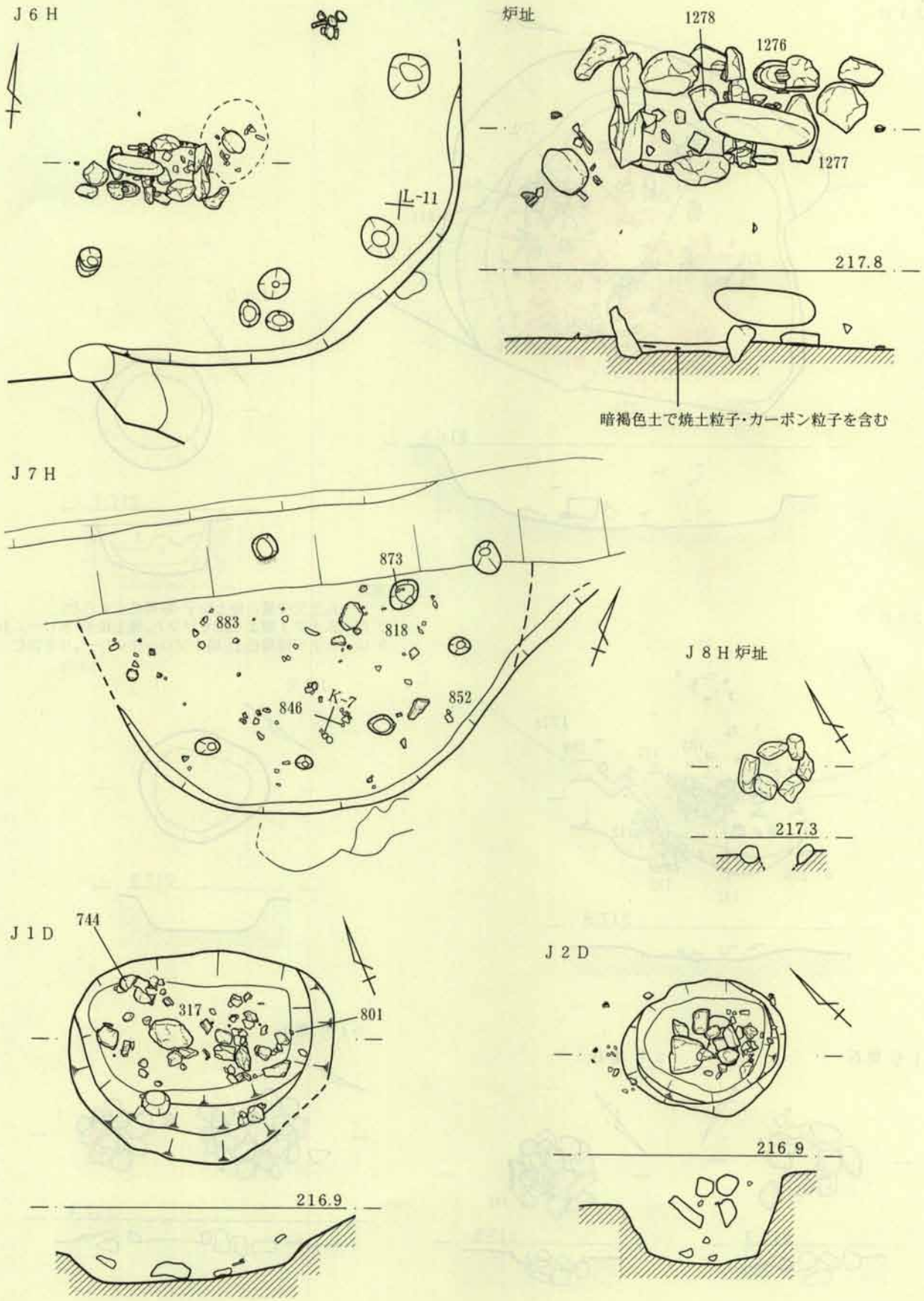
J５H

J５H炉土層註
1　黒褐色土で白色粒子を含む。
2　暗褐色土でローム粒子を含む。
3　暗褐色土で２層より暗い。カーボンを含む。
4　暗褐色土でローム粒子、少量の焼土粒子・カーボン粒子を含む。

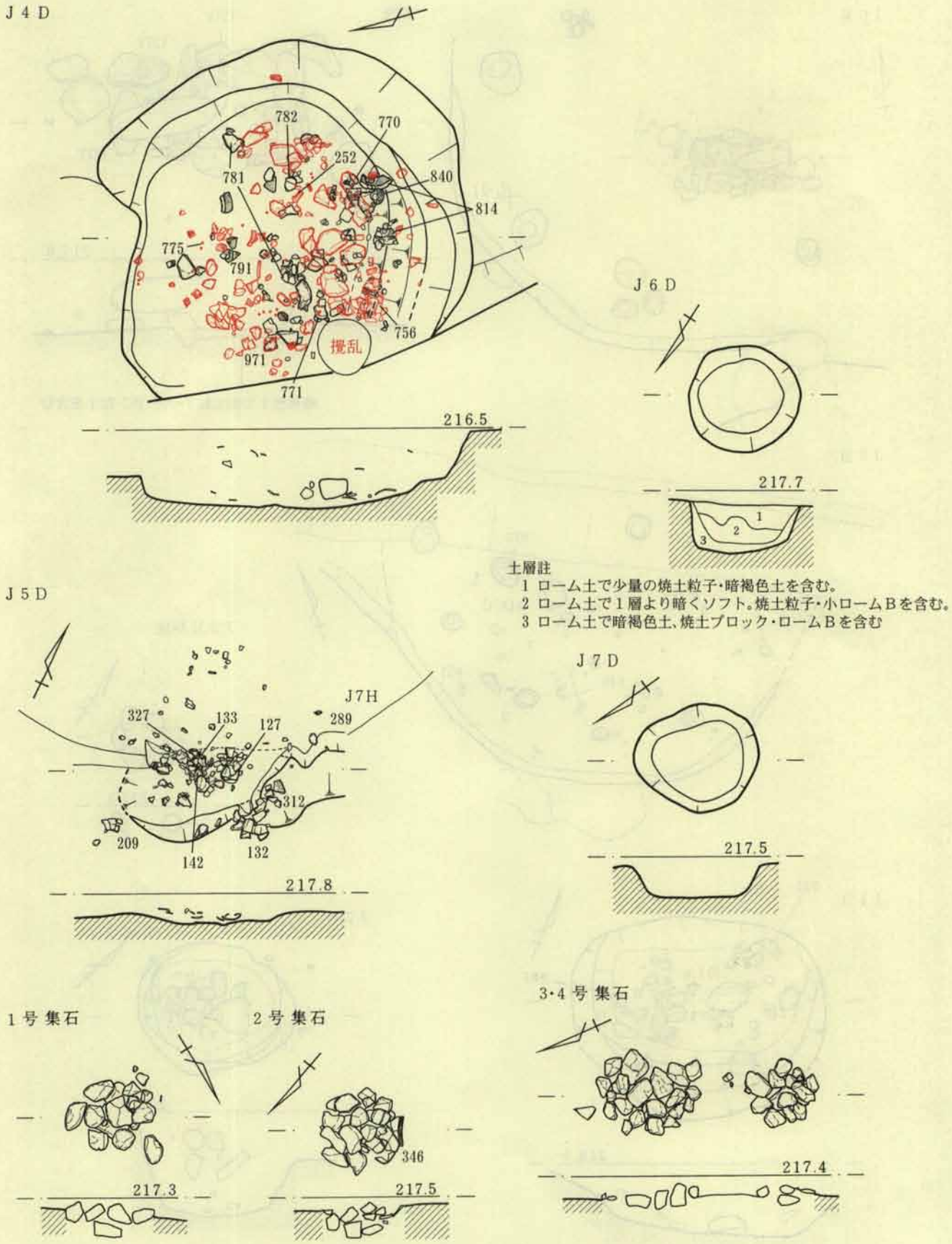




第６図　C地点　J３～５H



第7図　C地点　J 6～8H、J 1・2D



第8図　C地点　J 4～7D、1～4号集石

炉址は内径の一辺が45cm程を測る方形の石囲炉であり、北辺の一部が開口するが石抜きの痕跡は認められない。各辺を構成する礫は著しく被熱受け、剥離や変色が見られる。西辺の上面には直交する様に長さ60cmの細長い瓜状の礫が横たわり、立石の可能性も考えられる。

遺物は炉内から加曽利Ｂ式の破片(1005)と粗製土器(1016)等がある。その他に中期中葉～後葉の土器片(197・293・378・388・466・504・589・595)がある。

石製品としては、石皿が炉内部(1278)と西辺沿いに出土した。緑泥片岩で擦り面が抜け、穴の開いたもの(1276)と偏平自然礫を使用したもの(1277)の３点が出土した。その他に石鏃（1186・1187・1189）がある。

Ｊ７Ｈ（第７図）

調査区の中央付近、Ｋ－７Ｇポイント付近を中心として標高217.55m前後を測る台地変換部分に検出された。残存は北方部分が法面として切られている為に約半分である。台地部側の南壁ではＪ７Ｄが重複し、北西の低地部にＪ５Ｈが隣接する。

形状は円形を呈すると考えられ、規模は半径2.8m前後となろう。壁は台地部側に確認され、残存の良い中央部分で高さ20cmを測る。床面は平坦で比較的堅くしまっている。柱穴は残存する壁から30～40cm程の隔たりをもって弧状に配されている。炉址は法面に検出された柱穴状の掘り込みと考えられ、焼土化した部分を確認した。埋設土器を利用した炉址と推察される。

出土遺物は後期初頭の称名寺式（809・818・846・852）～後期前葉の堀之内式(870～873・884)等がある。

Ｊ８Ｈ（第７図）

調査区の東端の大胡線11号の路肩下にあり、Ｎ－12Ｇの捨て場Ｃ区で炉址のみが検出された。北方で傾斜変換点となる。炉址は石囲い炉で６石で構成されているが炉床は不明であった。

Ｊ１Ｄ（第７図）

調査区の西方、Ｆ２・３グリットに跨がり、西方向に向けて緩慢な傾斜面に検出された。台地側の東壁付近で標高は216.85mである。西方にＪ４Ｄ、南東にＪ２Ｄが隣接する。

形状は東西方向に長い隅丸方形で、南方がやや突出する。長軸方向での主軸はＮ－67°－Ｗにとる。規模は長軸長1.86m、短軸長1.52m、掘り込みは35cm前後を測り、底面は緩やかな西傾斜である。

覆土中には大小の礫があり、北隅の底面から両耳壷(744)がある。覆土中から中期中葉の土器(317)、後期初頭の土器（786・798・801・804)、石製品としては石錐(1231)が出土した。

Ｊ２Ｄ（第７図）

調査区の西方、Ｅ２グリットの北東部に位置する。西方向に向けて緩慢な傾斜面に検出された。標高は台地側の南東部分で標高216.80mである。北東～北部分にＪ１・２Ｄ、西方にＪ３Ｈが隣接する。形状は北西～南東方向に長い隅丸方形で、長軸方向での主軸はＮ－46°－Ｗにとる。規模は長軸長1.15m、短軸長95cm、掘り込みは最も深い中央部分で65cmを測り、底面はやや凹凸である。

覆土内の上面～下面に大小の河原石があり、縄文後期等の小破片（36・893）の土器が出土。

Ｊ３Ｄ（第６図）

調査区の西方、Ｅ２グリットの東に位置する。西方向に向けて緩慢な傾斜面に検出され、Ｊ２Ｄとほぼ同じ標高にある。Ｊ３・４Ｈと重複し、すぐ北にＪ２Ｄが隣接する。形状は55cm前後の径を測る円形で、35cmの深さである。覆土中からは小礫があったのみである。

Ｊ４Ｄ（第８図）

調査区の西方、Ｆ２グリットの中央部に位置する。台地と低地部の変換点付近に検出され、東方の台地部側で標高216.50mである。調査区に沿って玉石の石積があり、その掘り方により南西～西側が破壊されている。また、土坑内と東方に電柱埋設の深い円筒形の掘り込みがある。

平面形は隅丸方形と考えられ、東西３m、南北2.8m前後の規模を推察する。底面は五角形気味を呈し、中央部分が僅かに窪む皿状で深さ55cm前後である。立ち上がりは南壁が有段状となり、他は上部に向けて開口する。

遺物は中期中葉～後期初頭のものである。下層から後期初頭の遺物が出土し、上層で中期中葉の遺物(252)、後葉の加曽利Ｅ式（568・575・758）が混入していた。後期初頭の称名寺式期は、両耳壷(756)の他には770・771・775・781・782・791・814・840がある。堀之内式期は971の１点がある。石製品としては石鏃(1191)がある。

Ｊ５Ｄ（第８図）

調査区のほぼ中央、Ｊ６～７グリットに跨がって位置する。北方に向けて緩慢な傾斜面に検出され、Ｊ７Ｈと北で重複する。標高は台地部側の南方で217.70m前後である。土坑よりも土器溜りの表現が的を得ているかも知れない。Ｊ７Ｈとの重複関係からＪ５Ｄが古く、Ｊ７Ｈの領域(挿図に記した破線)外の南に出土した土器を当土坑の遺物と考える。土器は僅かに皿状に窪んだ部分に集中し、東と南方にも散在する。

出土遺物は中期中葉の阿玉台式期の深鉢の底部(127・209)、同一個体と考えられる深鉢(132・133)、浅鉢(312)、勝坂系(289)と隆帯文系土器(327)がある。

Ｊ６Ｄ（第８図）

捨て場Ａ区、Ｋ８グリットの南西に位置する。北方向に向けて標高217.60m前後の緩慢な傾斜面に検出された。形状は80cm前後の円形を呈し、深さ35cm程を測る。底面は中央部分が凹む皿状で、覆土内からは焼土の混入が目立った。出土遺物は２点の石鏃(1190・1194)がある。

Ｊ７Ｄ（第８図）

Ｉ～Ｊ５グリットに跨がり、南西方向に向けて標高217.45m前後の緩慢な傾斜面に検出された。形状は北東方向にやや突出する楕円形を呈する。規模は長軸93cm、短軸80cm、深さ20cm前後である。

出土遺物は皆無である。

１号集石（第８図）

捨て場Ｂ区、Ｌ10グリットに位置する。北西方向に向けて緩慢な傾斜面にあり、傾斜変換部に近い標

高217.20m前後に検出された。南方にはＪ６Ｈ、東方に２～４号集石が隣接する。

集石の大半が河原石の円礫で構成される。確認面の南北75cm、東西50cmの範囲に15～20cm前後を主体とする礫を配し、中央部分で深さ20cm前後に角礫を設けている。

２号集石（第８図）

捨て場Ｂ区、Ｌ11グリットに位置する。南西方向に向けて標高217.45m前後の緩慢な傾斜面にあり、Ｊ６Ｈ、北方に３・４号集石が隣接する。確認面で60cm前後の円形内に河原石を主体とする円礫を配する。南西部分には大型の深鉢片(346)が礫下に入り込んでいる。確認面下では中央部分に角礫や偏平な礫が設けられている。中央部分の角礫から推察すると掘り込みの深さは20cm前後となろう。

３号集石（第８図）

捨て場Ｂ区とＣ区の間、M11グリットに位置する。標高217.25mの緩慢な傾斜面に検出された。南方30cmに４号集石が接近する。南北80cm、東西70cmの範囲に河原石の円礫が配されている。その大半は重なりが無く、深さ10cm程の掘り込みに設けられている。

４号集石（第８図）

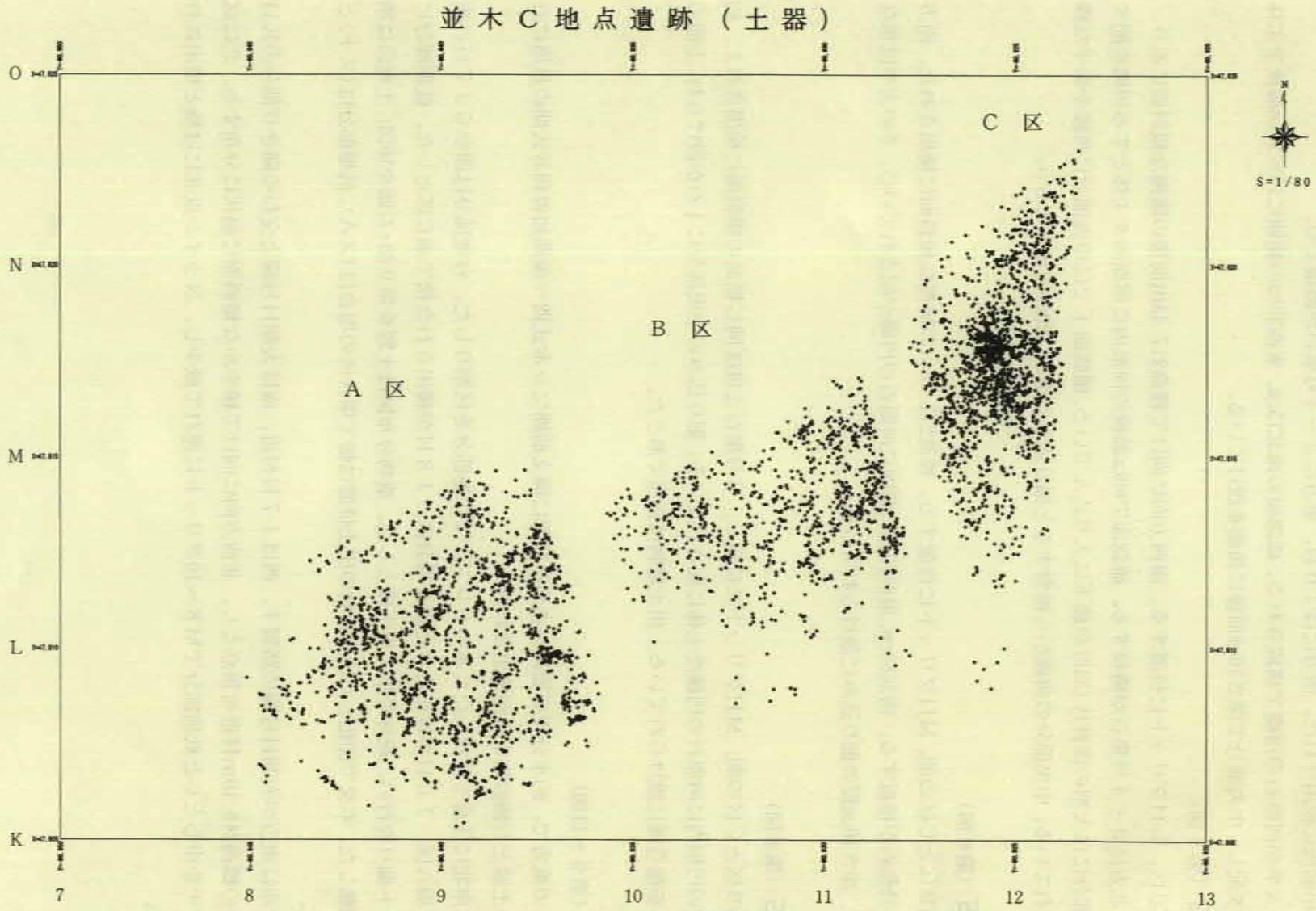
捨て場Ｂ区とＣ区の間、M11グリットに位置し、３号集石とほぼ同じ標高の傾斜面に検出された。約50cm前後の円形内に河原石の円礫を主体に配されている。掘り込みの中央部分に１石が設けられ、上面の礫がこれを覆う様に設けられている。出土遺物は皆無であった。

捨て場（第９～11図）

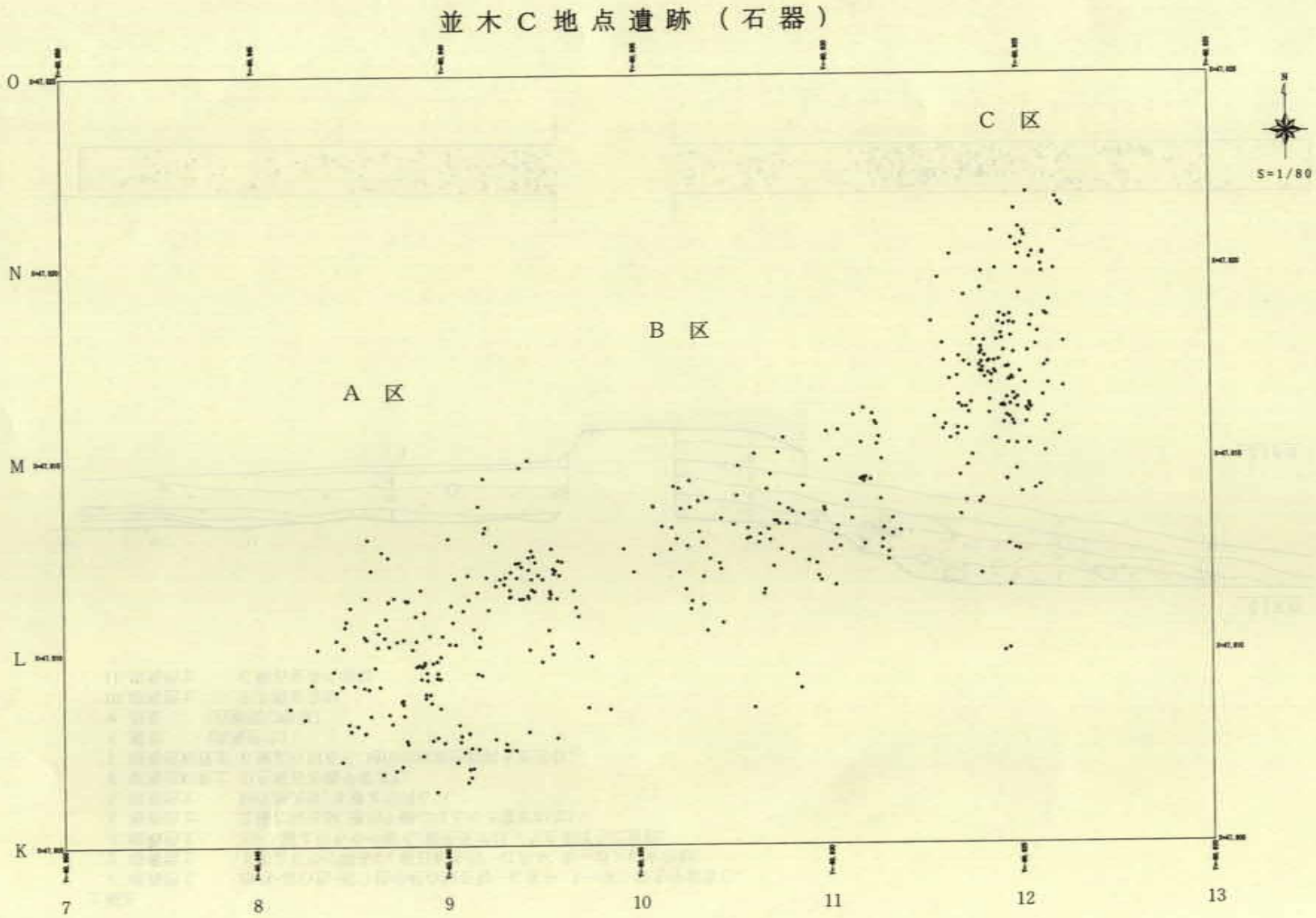
調査区の東方で、約半分程の面積を占める範囲に縄文前期二ッ木式期～後期加曽利Ｂ式期の長期に亙る大量の土器と石器の集中区が検出された。

調査は南北に任意で設定した２本のトレンチで台地部分を区割りした。台地部分は西からＪ７Ｈの東方を捨て場Ａ区、Ｊ６Ｈが検出された捨て場Ｂ区、Ｊ８Ｈが検出された捨て場Ｃ区とした。低地部分にはグリット掘りを行い、総称を捨て場下段とした。遺物分布図は土器を第９図・石器を10図、土層図は第11図に掲載した。本文で図化した出土遺物の出土位置は捨て場Ａ区の場合は(スＡ)、低地部分は(ス下)と省略した。

遺物分布は東方が大胡11号線の路肩下、西はＪ７Ｈ付近、南は大胡11号線と交わる隅きり部分のK11グリットの標高218.10m付近を頂点とし、北西方向に向けて緩やかな傾斜面に扇状に分布する。北は試掘トレンチを中心とした低地部分でＭ８～10グリットに連れて減少し、Ｎライン以北には殆ど検出されなかった。



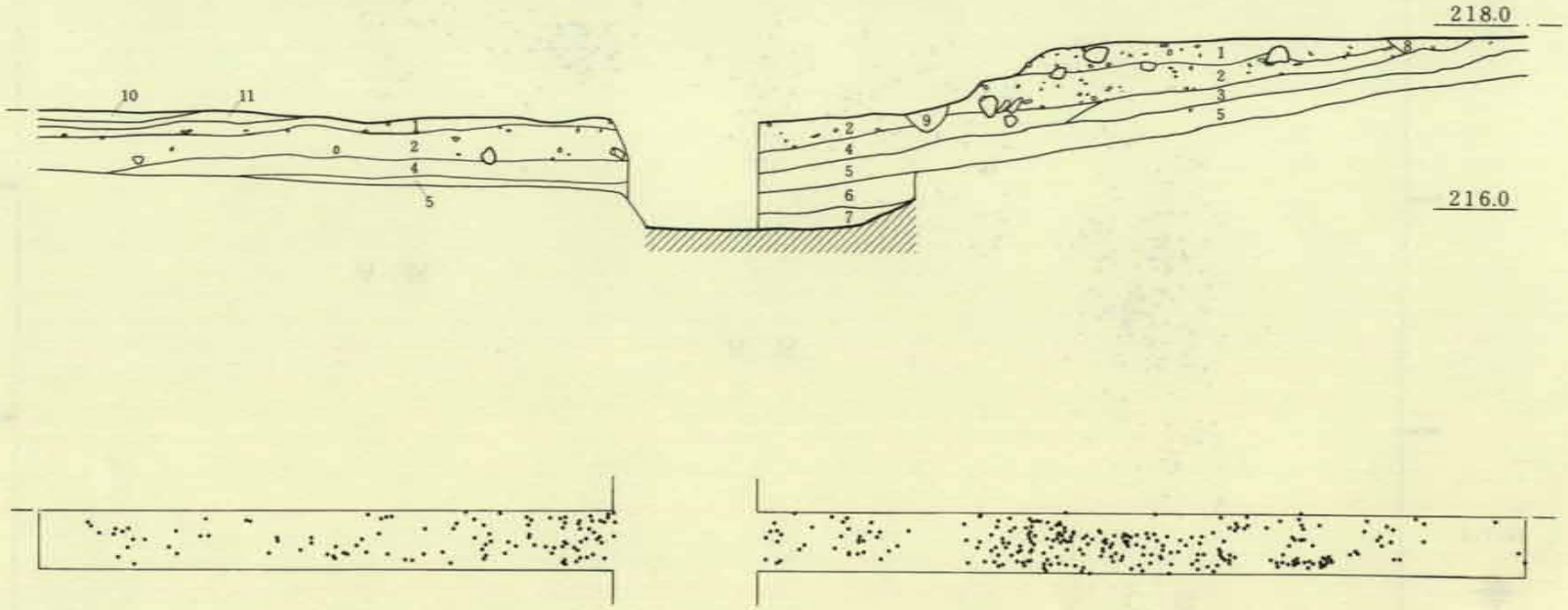
第9図　C地点捨て場土器出土分布



第10図　C地点持て場石器出土分布

土層註

1 暗褐色土　白色・黄白色・橙白色の軽石粒を均一に含み、カーボン粒を少量含む。
2 暗褐色土　1層よりやや明るい。軽石粒を均一に含み、カーボン粒を含む。
3 暗褐色土　1・2層よりもやや暗く、褐色土ブロックをまばらに含む。
4 暗褐色土　2層に似るが、遺物や礫はほとんど含まれない。
5 暗褐色土　粘性があり、4層より明るい。
6 暗褐色粘質土　白色軽石を極少量含む。
7 暗褐色粘質土　6層より明るく、地山の白黄色粘質土を含む。
8 撹乱　(黒褐色土)
9 撹乱　(近現代の暗渠)
10 暗褐色土　FP粒を含む。
11 黒褐色土　C軽石を多く含む。



第11図　C地点捨て場土器堆積状況

《A地点遺跡出土遺物》

1～19は前期に帰属する。1～14は胎土に繊維を含む。2は二ッ木式期の口縁部片。3と4は0段多状の縄文を施す。5は櫛歯状工具による波状気味の押引き。6は網目状の撚糸文を施す。

7～11は諸磯b式期に帰属する沈線文系土器。集合沈線状の平行沈線で文様を施す。12～14は諸磯c式期で12と13は集合沈線、14は棒状貼付文が施される。

15～19は前期終末の様相を呈する。15～18は縄文を地文として結節状浮線文を横走させる胴部片。19は口縁部上位に三角形の印刻文、その下位に沈線による格子目文を施す。

20～25は中期初頭の五領ヶ台式期に帰属する。20は短く外反させる口縁部で、頸部に巡る平行沈線文間に交互刺突文を施す。21は口唇部下に2列の刻目列を併走させる。

22～25は区画の内側に沿って列点文を巡らす。23は縦位の沈線文帯に三角印刻文を施す。24はヒダ状隆帯を垂下させ、平行沈線と連続爪形文が沿う。25は横位区画を交互刺突文で施すことから、拓図が曲がっている。

26は区画内に半裁竹管による刺突文を横位列で充填する。27と28は区画内を刺突文で充填するもので、小破片の為に不明瞭であるが、後期に帰属する可能性も考えられる。29と30は縦長の方形区画内に刻目を巡らす。

31～113は中期阿玉台式期に帰属する。31と32は波状口縁を呈し、波頂の頂部を大きく抉りこませて又状とする。31の口唇部には連続刺突文、外面に押引文を施す。32は口唇に刻目、内面に押引文を施す。33～42は爪形文を口縁部に施すもの。33は復元口径25.5cm、残存器高9.5cmの深鉢片。隆帯による4単位の楕円区画文内の中央に爪形文を横走させ、口端部には刻目を施す。

34は復元口径13.5cm、残存器高12.4cm。直立気味の胴部から緩やかに外反して開く深鉢。4単位の波状口縁を呈し、波頂部から隆帯を垂下させる。口縁と胴部上位に爪形文の刻目列を横走させる。

35～42は口縁部に爪形文の刻目列を1～2列横走させ、口端部や口唇部に刻目を施すものもある。口唇部は角状とするものが多く、42は尖らせる。35は隆帯により区画文を配し、区画内に刻目列を2列横走させ、頸部に沈線による鋸歯状文らしき一部が見られる。

36は幅1.5cmで抉りが深い爪形文。38は刻目を施す隆帯で口縁部文様帯を区画し、区画内に縦長の爪形文を横走させる。39は口唇部に刻目を施す。

43・44・49・51～53は区画に沿って1条の角押文を巡らし、43と44を除く区画内には波状文や重層する弧文を抽出する。52と53の口唇部には刺突文を施す。

45と46は波状口縁を呈する。45は波頂部と口端部の内面に刻目、46は口端部の外面に押圧による窪みを施し、内面に細かな刻目を連続させる。

47は直立する胴部から直線的にやや外反する口縁部に移行する。外面の頸部には交互刺突文、口唇部下と内面の口縁部に角押文を横走させる。口唇部にも浅い押引文が施されている。48は刻目を施す隆帯で楕円区画文を配する。

50・55～60は複列の角押文を口縁部文様帯の区画に沿わせ、区画内には波状文・連弧文や鋸歯状文等

を抽出する。54は波状口縁を呈し、区画内に角押文を２条併走させ、口端部に刻目を施す。56は波状口縁を呈し、区画文内に連弧文を抽出する。58～60は区画内部に複列の角押文を鋸歯状に施す。

61・64は楕円区画に沿って１条の角押文を巡らし、口唇部には刺突文や刻目を施す。62は楕円区画文に沿って複列の角押文を２条併走させる。63は環状突起？を付す。刻目を施す隆帯で文様区画し、隆帯に沿って幅狭の複列の角押文を巡らす。区画内も複列の角押文や小さい円形刺突文で加飾する。65・66は口唇部に深い刻目を施し、内面に複列の角押文を施す。

67と68は扇状把手を付す。67の把手は平口縁部より上方に突出し、この突出部分の口唇部には刻目を施し、外縁から隆帯を垂下させ、口縁部文様帯の下位を区画する横位隆帯と連結する。この連結部分の隆帯は突起させる。把手区画内の文様帯は平口縁と同部位に横位に施される角押文で上下に区分される。区画文内に沿って単列の角押文を巡らし、空間に連弧文を抽出する。この上半縁文の両端は波状沈線で連結する。連弧文は２重になる部分もある。

68は刻目を施す隆帯で扇状把手を形成するが、口縁部から上方への突出は僅かである。区画文内には爪形文を２列横走させ、区画の下位には沈線による横位波状文が施されている。

69と70は三角形突起を付し、頂部から側面が鶏冠に似る隆帯が垂下する。69の口縁部文様は区画に沿って複列の角押文を巡らし、70は区画内に爪形列を施す。

71の扇状把手は刻目を外縁に施し、頂部に角押文で文様を抽出する。72も68に似る扇状把手と思われる。73は波状を呈すると思われる口縁部片で、刻目を施す隆帯と口縁に沿って複列の角押文を巡らす。74も波状を呈すると思われる口縁部片。ヒダ状の隆帯で区画し、角押文を口縁部と隆帯に沿わせる。75は隆帯による細長い楕円区画文？を配し、区画内に沿って平行沈線を巡らし、内部を爪形文で加飾する。76の把手の頂部は楕円形を呈し、周囲に刻目を施す。

77は復元口径33.2cm、残存器高10.3cmの深鉢片。口縁部文様は隆帯による楕円区画文を４単位に配し、その接合部分から下方にＹ字状隆帯を垂下させる。押引沈線が楕円区画文内に沿い、空間を縦方向の角押文で充填する。口唇部と楕円区画を形成する隆帯上に刻み目が施されている。

78は復元口径26.5cm、残存器高30.3cmの深鉢。上方に連れて開口する胴部から内湾する口縁部に移行し、４単位の波状口縁を付す。口唇部には連続して刻目が施される。口縁部文様帯は隆帯で区画され、区画内に沿って複列の角押文（部分的には連続刺突文）が巡るが、内側は波状を呈する部分や空間内部にＶ字状に入り込む箇所がある。波頂から垂下する隆帯は波頂からフック状に垂下して口縁部文様帯の下位を区画する隆帯に接する。頸部には沈線による鋸歯状文を併走させたり、刻目列が巡る。胴部には隆帯により上位を連弧文状とし、下位に蛇行懸垂文を垂下させる。上位の連弧文状文にＸ字状文を付し、隆帯に沿い内部に単列の角押文と連弧文を配す。刻目列と沈線による併走する鋸歯状文等を巡らす。

79は内湾する胴部から「く」の字状に屈曲し、直立気味に内湾する深鉢で４単位の波状口縁を呈する。波頂部は双山とし、波頂からの刻目を施すＹ字状隆帯を垂下させる。口縁部文様帯は単列の角押文で区画する。区画内は単列か複列の角押文で連弧文を配す。頸部と胴部には爪形文の刻目列を施し、僅かに隆帯による楕円状区画文の一角が見られる。

80は「く」の字状に屈曲する口縁部片で、屈曲部に橋状把手か突起？の剥がれがある。文様帯は沈線によって区画され、区画内を３条１組の角押文を波状に施す。

81と82は刻目を施す隆帯で、81は複列の角押文を沿わせ、82は楕円区画文を配す胴部片。83は天地が逆かも知れない。高まりの無い偏平な隆帯に刻目列を併走させる。84は横位の区画隆帯に沿って鋸歯状文

を施す。85は隆帯に沿って角押文を上位に１列、下位に２列巡らす。86は刻目を施す隆帯の側面に複列の角押文を沿わせ、隆帯間を横位に連結する。87は隆帯による渦巻き文に沿って複列の角押文が巡る。

88・89は横位の区画隆帯に向けて縦位の角押文を併走させる。89は隆帯に沿って角押文と刺突文が沿う。

90～93・95～97はヒダ状圧痕や刻目列を施す胴部片。93は隆帯に沿い複列の角押文が施されている。94の頸部にはヒダ状圧痕を巡らし、その上下に押引沈線を２条横走させる。95の胴部片には、隆帯による楕円区画文が横位に連結され、連結部の下方に懸垂文を垂下させる。横走する刻目列は５cm間隔で施している。97は爪形文の刻目列を施す。

98～113は沈線文系の施文具で加飾する。98・99・103は隆帯に沿って結節平行沈線、100は垂下する隆帯に沿って角押文と沈線が施され、ヒダ状圧痕を残す。101は平行沈線により横位文や弧状文を施す。

102は隆帯による円形区画文を配し、３本１組の平行沈線を隆帯に沿って巡らす。内部には平行沈線を斜位に施す。104は平行沈線と刻目列が区画内に施される。105は蛇行して垂下する隆帯と横位の平行沈線が巡る。106は横位の隆帯に沿って平行沈線により、上位に弧文？、下位に波状文を施す。

107・109～111は併走する多条の平行沈線で横位文や弧状文を抽出する。108は隆帯を垂下させ、横位の沈線を併走させて波状文を抽出する。ヒダ状圧痕が残る。109・111は隆帯に沿う。112は平行沈線で頸部を区画したり、懸垂文や弧文を施す。113はヒダ状圧痕を残し、隆帯により文様を抽出する。隆帯に沿ったりした波状沈線文を施す。

114～126は浅鉢形土器。114は丸みのある波状を呈する。115は波頂部に又状となる刻みを施す。口縁部文様帯は隆帯による楕円区画文を配し、区画文や口縁に沿って平行沈線を施す。117は補修孔を有する。

123は内面に隆帯で横長の楕円文を配す。部分的に朱彩が残る。

127～129は底部片。127と129には網代痕が見られ、127はヒダ状圧痕が残り、128は隆帯が垂下する。

130～146は中期勝坂式期、並びに併行期の帰属である。130は口端部に刻目、頸部には爪形文を連続して施す隆帯を巡らす。131は丁寧に研磨された無文帯を鋸歯状に配する。区画に沿ってキャタピラー文を施し、内部を先端の細い半裁竹管による連続刺突文を充填する。132は波状口縁の波頂から耳たぶ状の隆帯を垂下させ、側面に円形凹文を施す。三角形の区画内は平行沈線を巡らせ、内部を爪形文で加飾する。

133は深い円形凹文を施す突起を付す口縁部片。突起と突起から派生して口縁に巡る隆帯に刻目を連続して施す。

134～142はペン先状文やキャタピラー文を区画に沿わせる。134・135はペン先状文を隆帯に沿わせる。136は隆帯に沿ってキャタピラー状文と蓮華文を施す。137は隆帯による楕円区画文内に押引文を沿わせ、内部に角押文を施す。138は区画文内にキャタピラー文で楕円文を抽出し、空間を三又文で加飾する。139は平行沈線による区画文に沿ってキャタピラー文とペン先状文が併走する。140は区画隆帯に沿ってキャタピラー文を施し、内部に半裁竹管による細かい刺突文で渦巻き文を抽出する。141は横位の平行沈線文による区画内に鋸歯状文を挟んで上下に半円文とキャタピラー状文を巡らす。142は隆帯により横位と縦位の楕円区画を配し、楕円区画にキャタピラー状文を施す。

143と144は平行沈線により文様を抽出する。143は２条の平行沈線に沿って刺突文を沿わせ、平行押引文で区画内を加飾する。144は底径6.2cm、残存器高8.6cmの小型の深鉢で菱形状の区画に沿って刺突文を施したりする。

145は円筒形の深鉢で口縁部を欠く。底径9.8cm、残存器高26.9cm。頸部には刻目を施す隆帯が巡る。胴部文様は２～３本１組の平行沈線による懸垂文で６分割され、懸垂文間は２～３本１組の横位文で２～３分割の方形区画とする。方形区画内は刻目で縁取りされた楕円文や隅丸三角形文等が配され、各々の文様には三又文や円文、連続刺突文等で加飾される。

146は直立気味の胴部から外反して「く」の字状に屈曲する口縁部とする。口縁部文様帯は隆帯により、楕円区画文を配し、区画文内は半裁竹管による平行沈線で縦位に充填する。楕円区画文の連結部分は小波状の口縁となり、片側面に８の字状に円形凹文を施す。恐らく大小６単位の波状の口縁を呈すると思われる。口縁部文様帯を区画する下位の隆帯と胴部文様帯を斜位に隆帯で連結する。連結部には環状突起を付し、そこから隆帯を垂下させる。頸部の空間も横位と斜位の平行沈線で充填し、菱形状の区画文内には三又文を配す。

147～184は中期中葉末～加曽利Ｅ式期に帰属する。147は隆帯による渦巻き文と交互刺突文を施す口縁部片で、地文は沈線文を縦位に施す。148は波状を呈する口縁部片で、背割り隆帯により渦巻き文を抽出する。149は刻目を施す隆帯で文様帯を区画する。区画に沿って刻目を施す平行沈線を巡らす。

150と151は背割り隆帯により文様を抽出する。150は平行沈線を縦位に充填し、151は撚糸文Ｌを地文とする。152は口縁部下に巡る隆帯で文様帯を区画し、区画内に横位平行沈線を多段に設け、内部に交互刺突文を挟む。153(拓図の天地が逆)は頸部に交互刺突文を巡らし、口縁部に単節ＲＬを施す。

154～156は頸部に横位に併走する沈線を巡らす。154は単節ＲＬを充填し、155は撚糸文Ｌ、156は条線文を地文とする。157は胴部文様を区画する横位沈線下に渦巻き文を挟む沈線文帯を垂下させる。

158・159は隆帯により文様を抽出する。160は撚糸文を充填した後に半裁竹管による半隆起線文で文様を抽出する。

161と162は隆帯により楕円区画文を配し、区画内を縄文で充填する。163の胴部片は沈線により横位区画を施し、下位に沈線区画による磨消帯を垂下させる。164は沈線区画の磨消帯を垂下させ、円文？を抽出する。165は沈線区画により文様を抽出し、縄文帯に単節ＲＬを施す。

166は３本１組の沈線を垂下させる。167は沈線区画による縦長の楕円文内に単節ＲＬを充填する。168は隆帯を底部まで垂下させる。169には沈線による懸垂文の先端部が残る。

170・171と173は櫛歯状工具による条線文を縦位(170・171)に充填したり、曲水文(173)を充填する。171は拓図の左側に沈線が垂下する。172は撚糸文Ｒを充填する。

174～181は口縁部無文帯を有し、下位の縄文帯との区画を沈線(174・175)や隆帯(178～180)でしたり、区画しない(176・177・181)ものがある。179の隆帯下は無文。181は口縁部を「く」の字状に屈曲させ、口縁部無文帯を直立気味とする。この無文帯は研磨されている。

182・183は隆帯区画による磨消帯と縄文帯が垂下する。縄文帯は単節ＬＲを充填する。184は器台形土器で円孔の一部が２カ所ある。

185～213は中期終末～後期初頭の称名寺式期に帰属する。185は波状を呈する口縁部片。波頂下に突起の剥がれがあり、波形に沿って沈線区画により縄文帯と磨消帯が配される。

186は円形刺突を施す隆帯が垂下し、187は沈線区画に列点文を施す。188は波頂から刻目を施す隆帯を垂下させ、沈線区画の縄文帯に円形刺突文を連続させる。

189～196は口縁部片。189は復元口径34cmで、雑な器面調整が残る。沈線による横位の区画文と懸垂文が見られる。190は内面の口唇部下に沈線を施す突帯を有し、沈線の端は円形刺突文を設ける。191は口唇直下に沈線と円形刺突文を施す。192は口唇部に沈線と円形凹文を施す。193と194は緩やかな波状口縁を呈し、波頂下に円孔を穿つ。194は波形に沿って沈線と円形刺突文が伴う。195と196は８の字状の貼付文を付し、195は２山の突起を付す口縁部片で、外面は山形に沿って弧文、内面は縦位の短沈線と円形刺突文を施す。

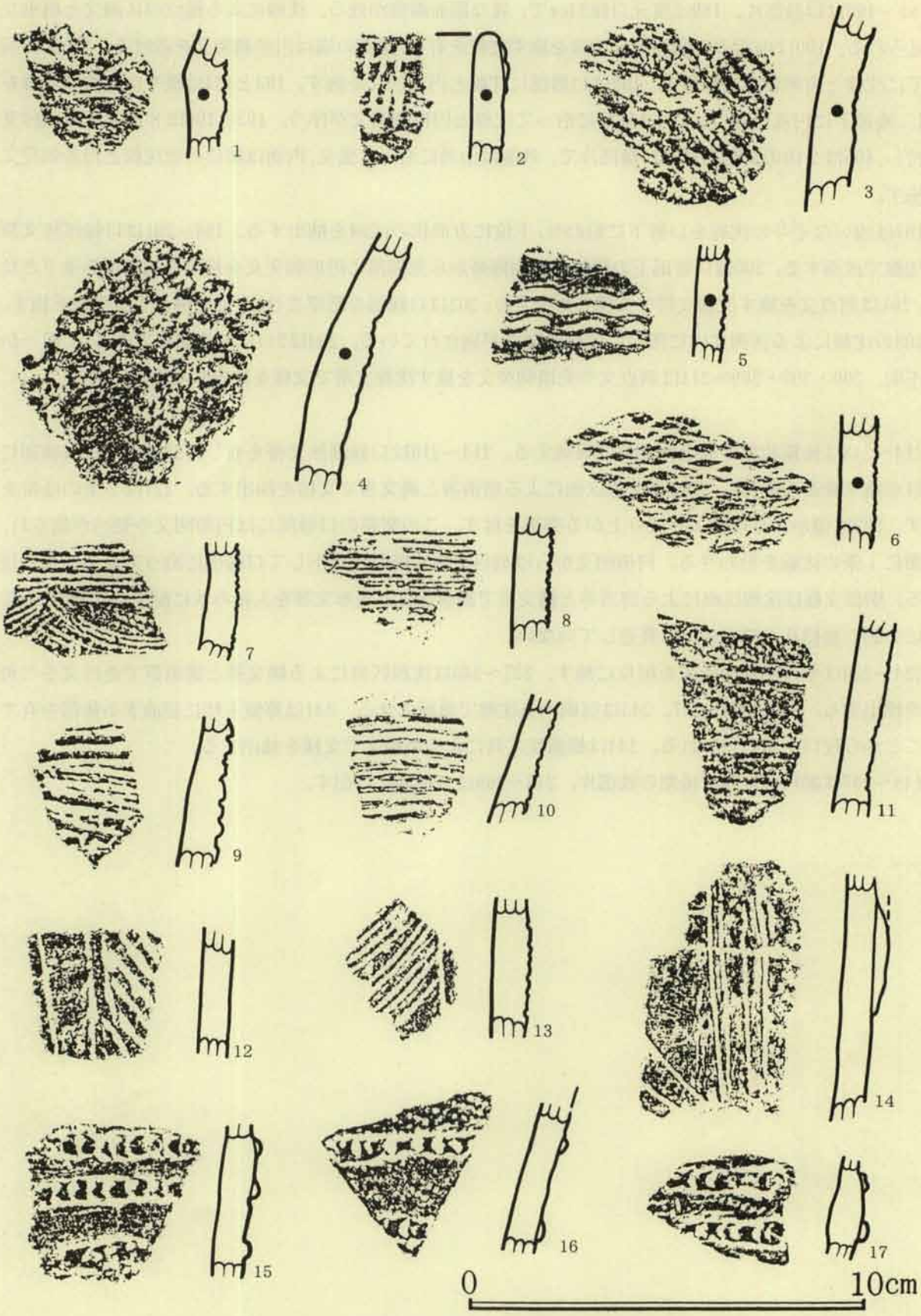
197は浅いなぞりの沈線を口唇下に沿わせ、下位に方形状の区画を抽出する。198～201は口縁部無文帯を沈線で区画する。200は口唇部下の横位の区画隆帯から先端部に円形刺突文を施す枠状隆帯を垂下させる。201は列点文を施す沈線文帯で文様を抽出する。202は口縁部を肥厚させ、下位に横走する沈線を施す。

203の沈線による区画文内に僅かに無節の縄文が施されている。204は244に似る個体であるが、同一かは不明。206・207・209～211は列点文や充填刺突文を施す沈線文帯で文様を抽出する胴部片。

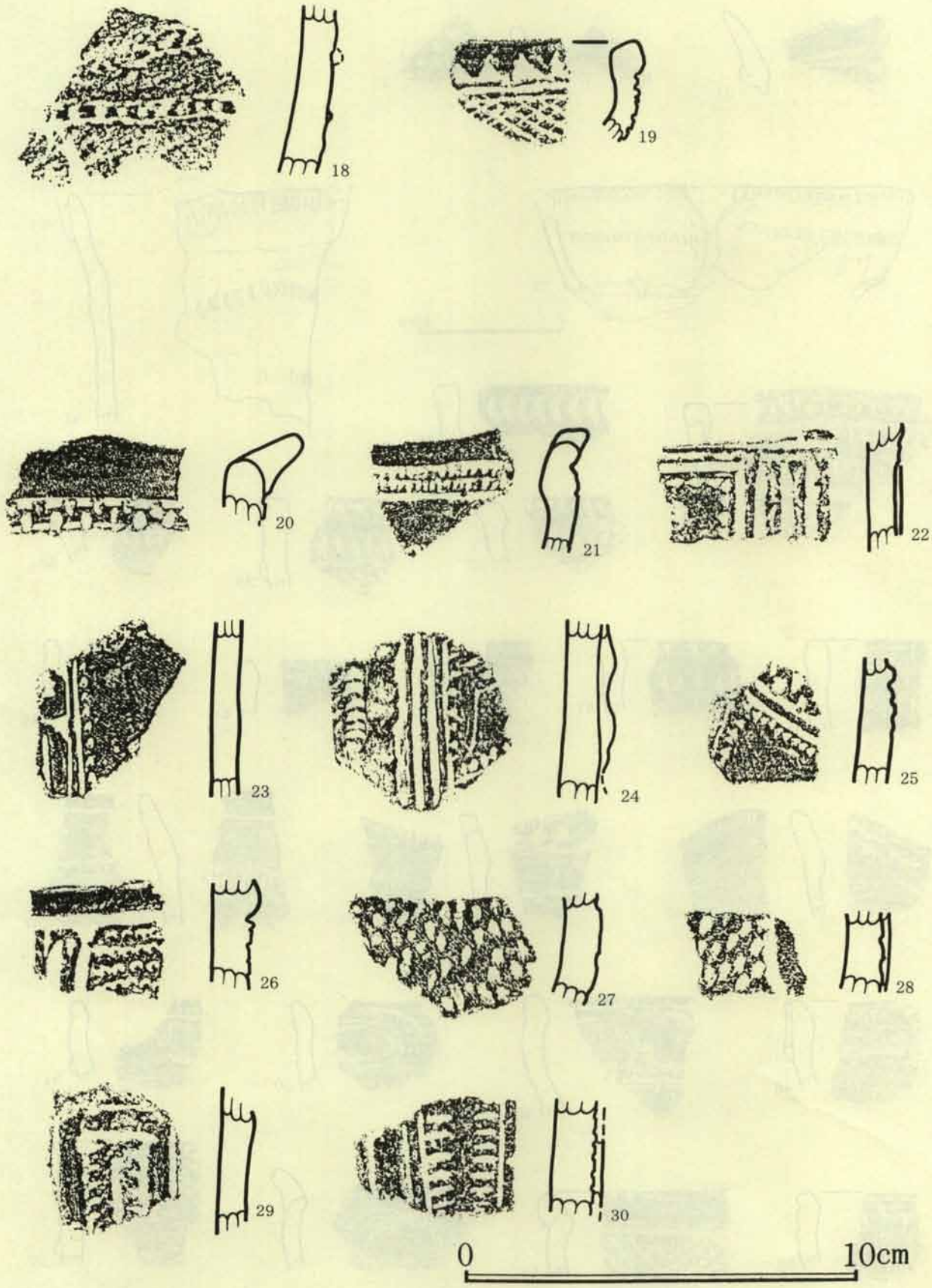
214～243は後期初葉の堀之内式期に帰属する。214～216は口縁部無文帯を有し、217～223は口縁部に刻目を施す隆帯を貼付し、下位に沈線区画による磨消帯と縄文帯で文様を抽出する。221は２条の隆帯を付す。222は僅かに平口縁より競り上がる突帯を付す。この突帯の口唇部には円形凹文や刻目が施され、内面に１条の沈線を沿わせる。円形凹文からは刻目を施す隆帯が垂下して口縁部に沿って巡る隆帯と接する。胴部文様は沈線区画による磨消帯と縄文帯で渦巻き文と菱形文等を入組み状に配する。223は隆帯下に２個の補修孔を穿つが上は貫通していない。

224～226は平行沈線や条線を縦位に施す。227～243は沈線区画による縄文帯と磨消帯で菱形文や三角文を抽出する。227～231・237。243は区画内を沈線で重層させる。241は算盤玉状に屈曲する体部を有することから注口土器と思われる。244は櫛歯状工具による条線文で文様を抽出する。

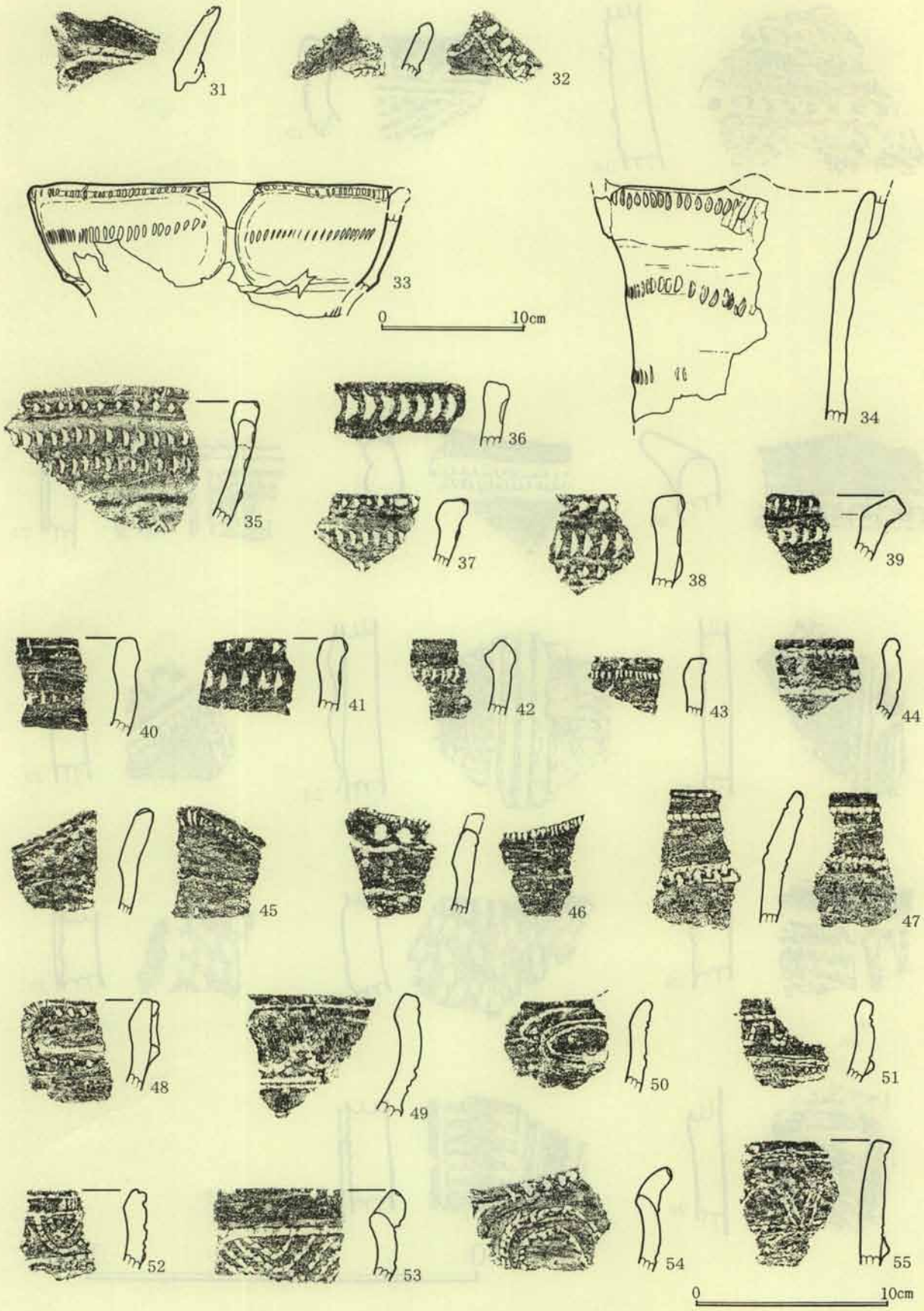
245～247は網代痕を残す後期の底部片。248～269は《付表》に記す。



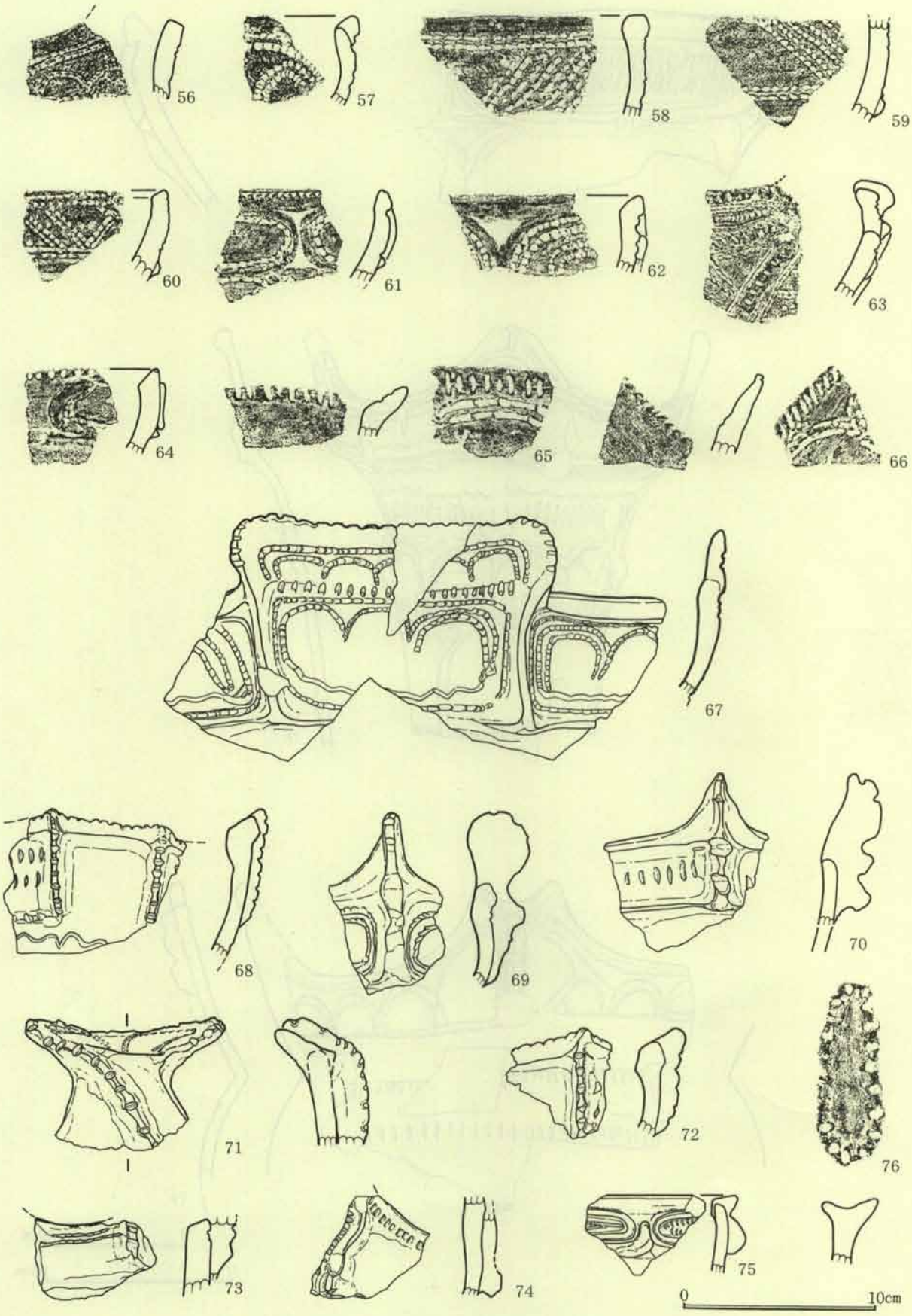
第12図　A地点遺物(1)　前期



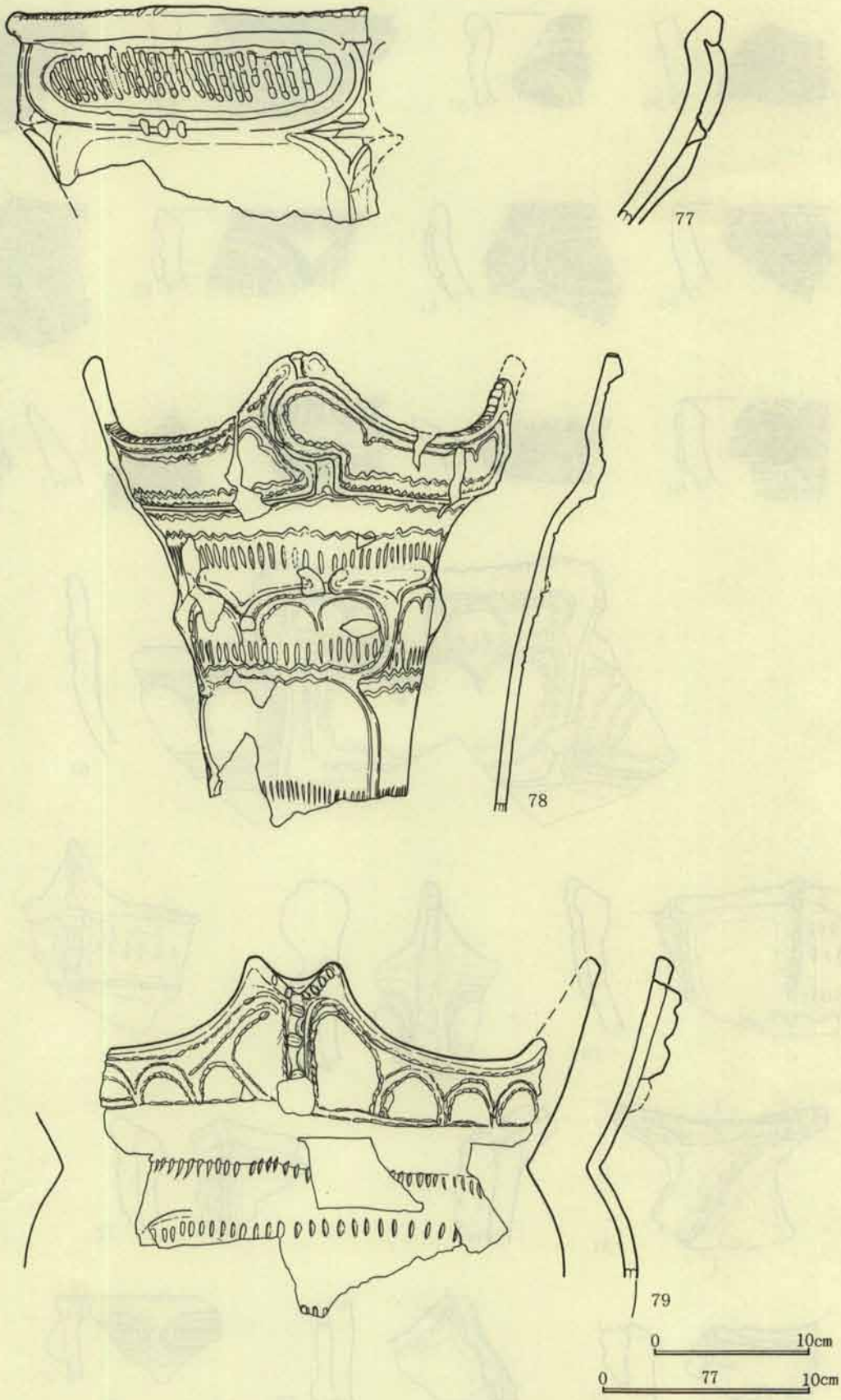
第13図　A地点遺物(2)　前期～中期



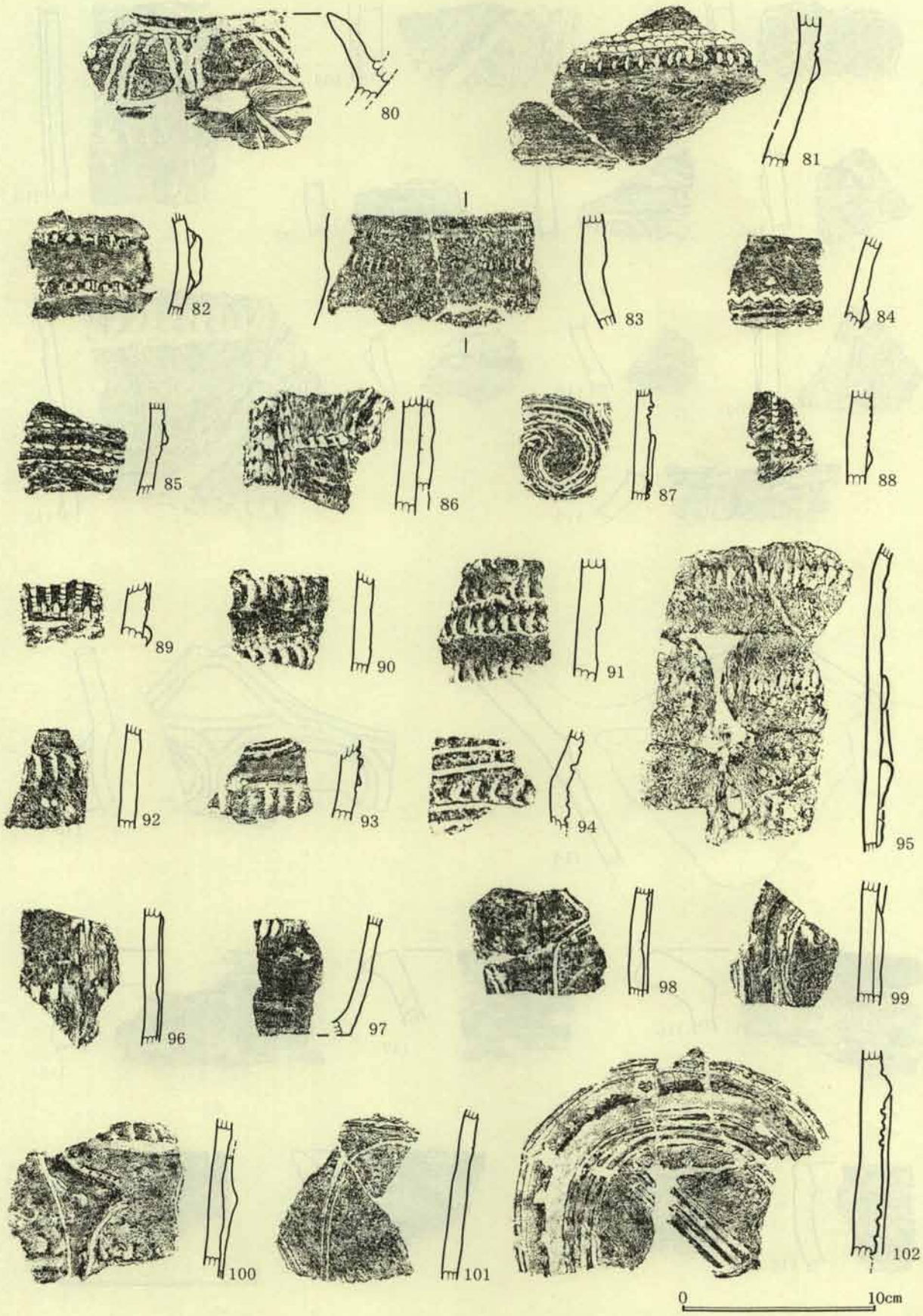
第14図　A地点遺物(3)　中期（阿玉台式）



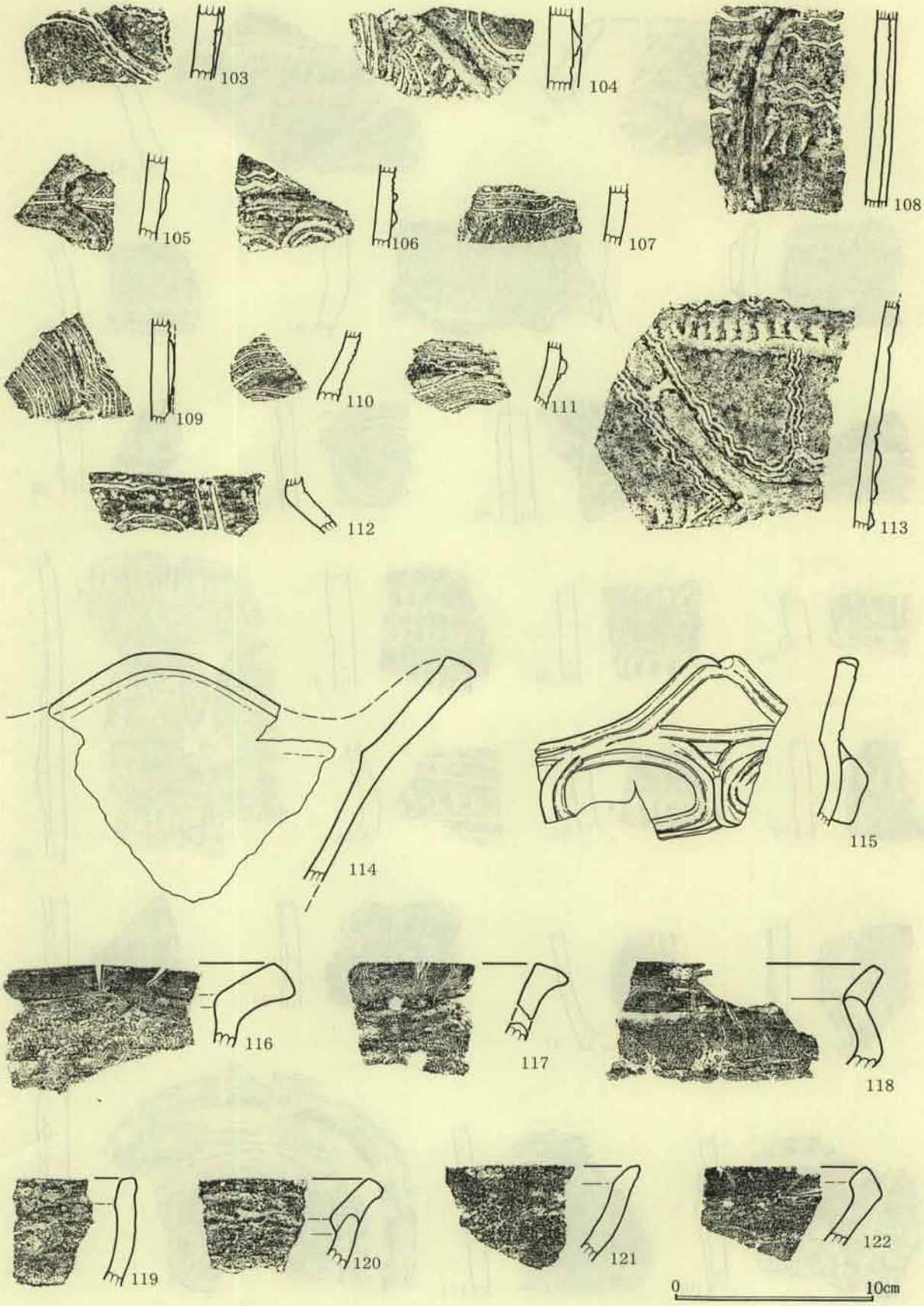
第15図　A地点遺物(4)　中期（阿玉台式）



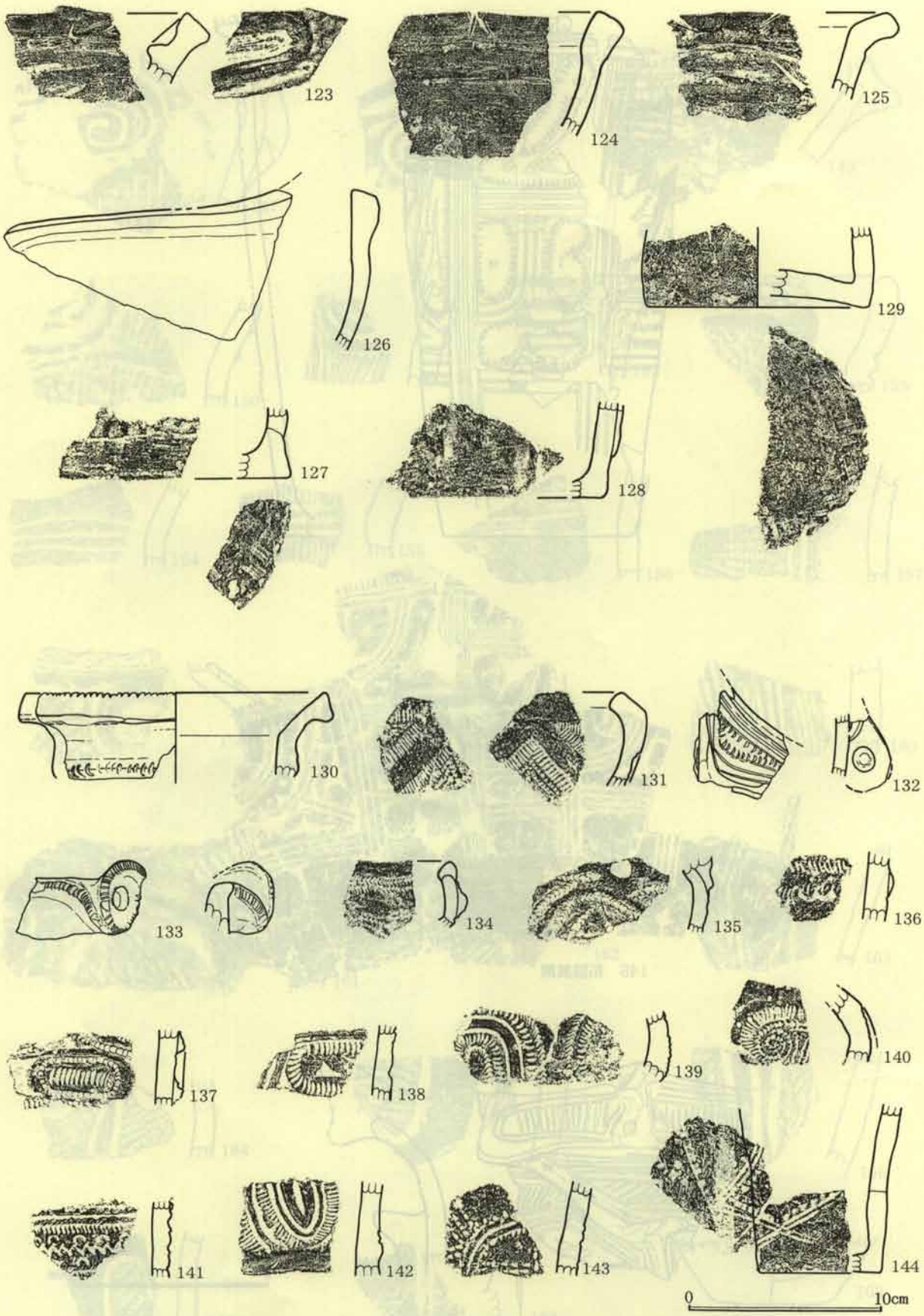
第16図　A地点遺物(5)　中期（阿玉台式）



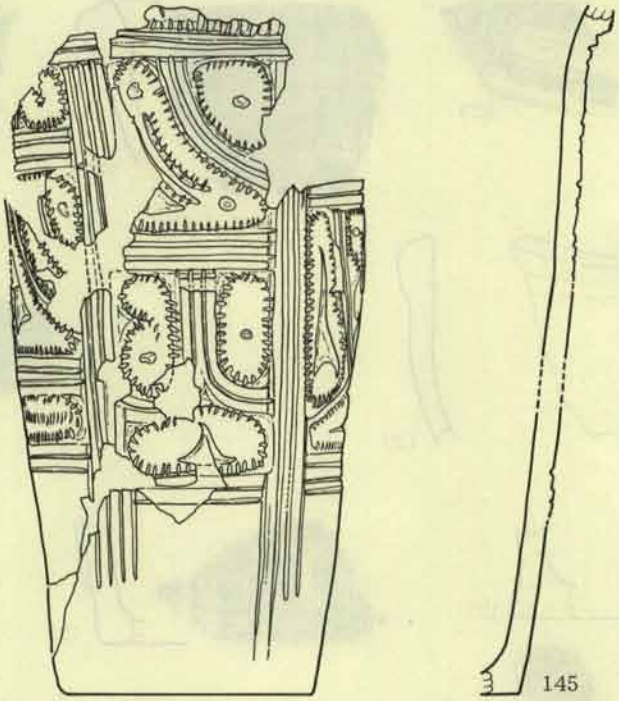
第17図　A地点遺物(6)　中期（阿玉台式）



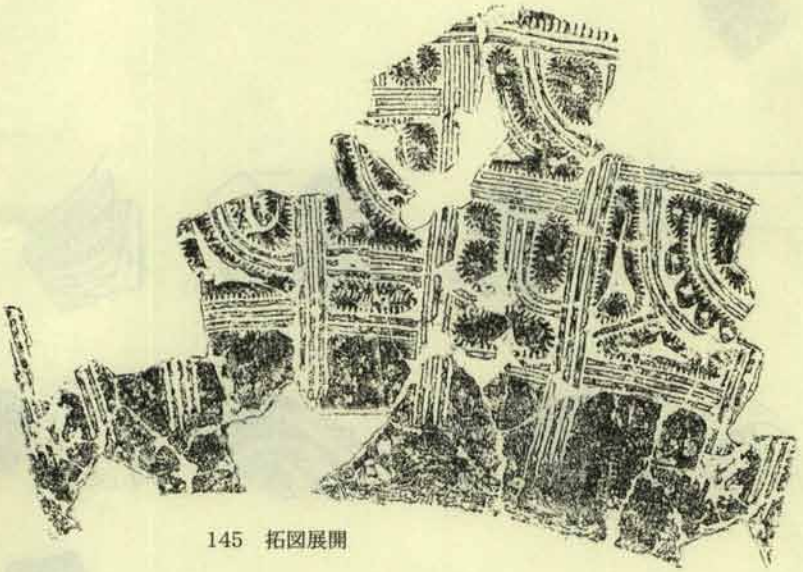
第18図　A地点遺物(7)　中期（阿玉台式）・浅鉢形土器



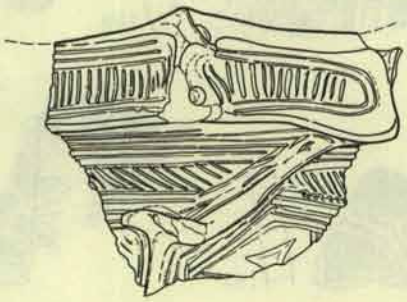
第19図　A地点遺物(8)　中期　浅鉢形土器・底部片・勝坂式系

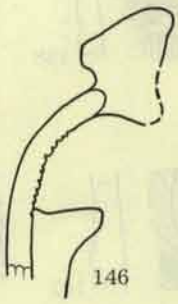


145



145　拓図展開

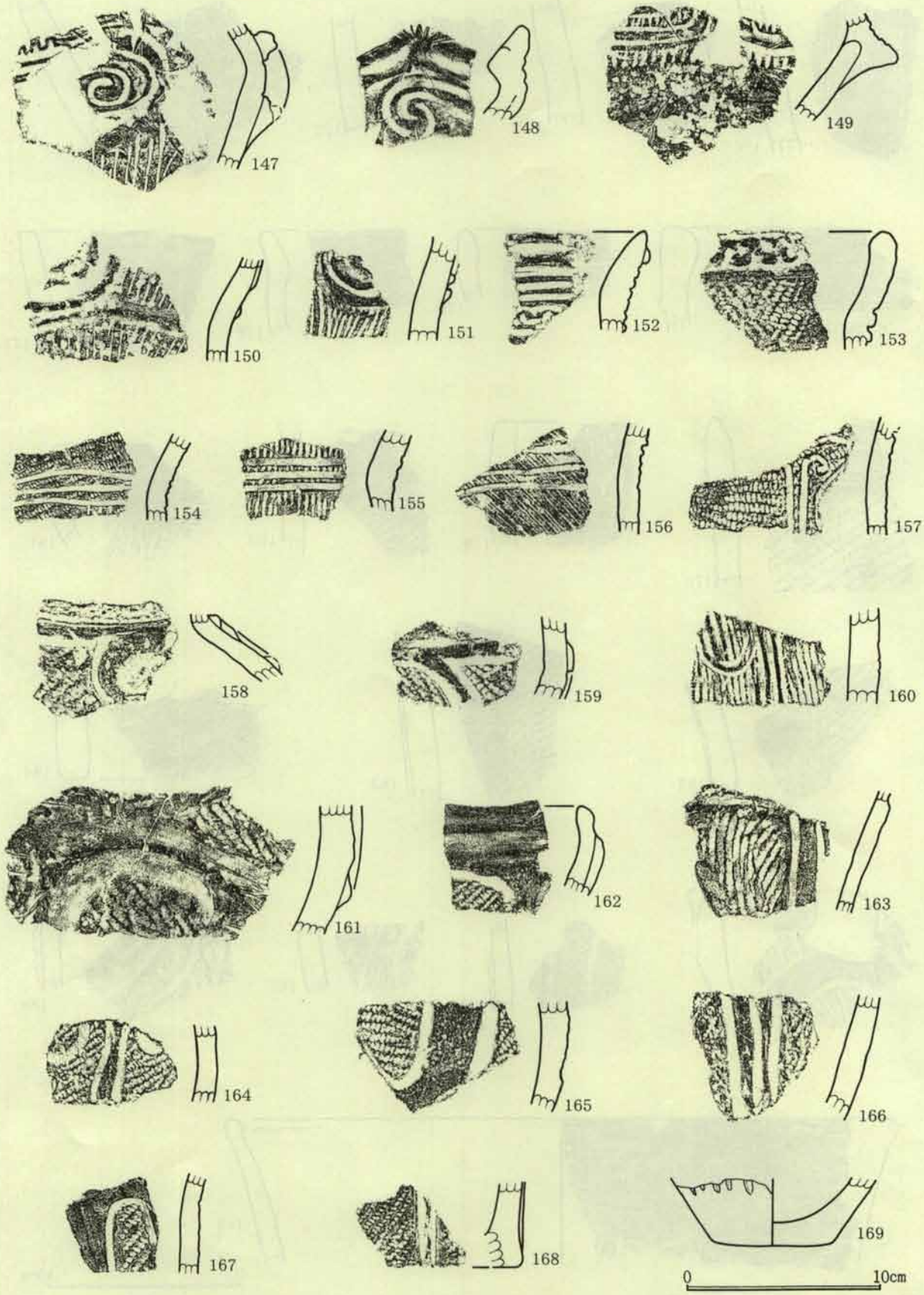




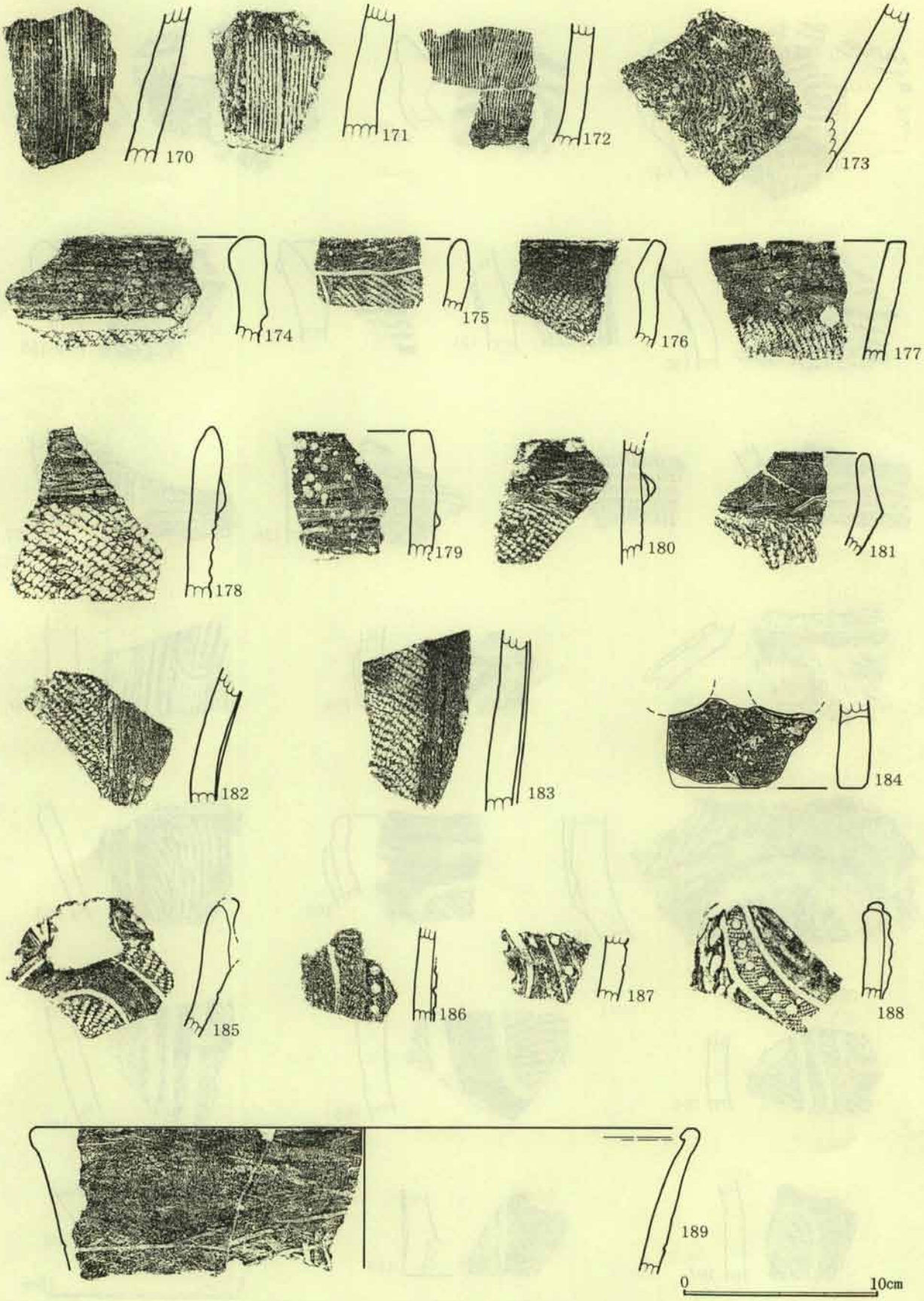
146

0　10cm

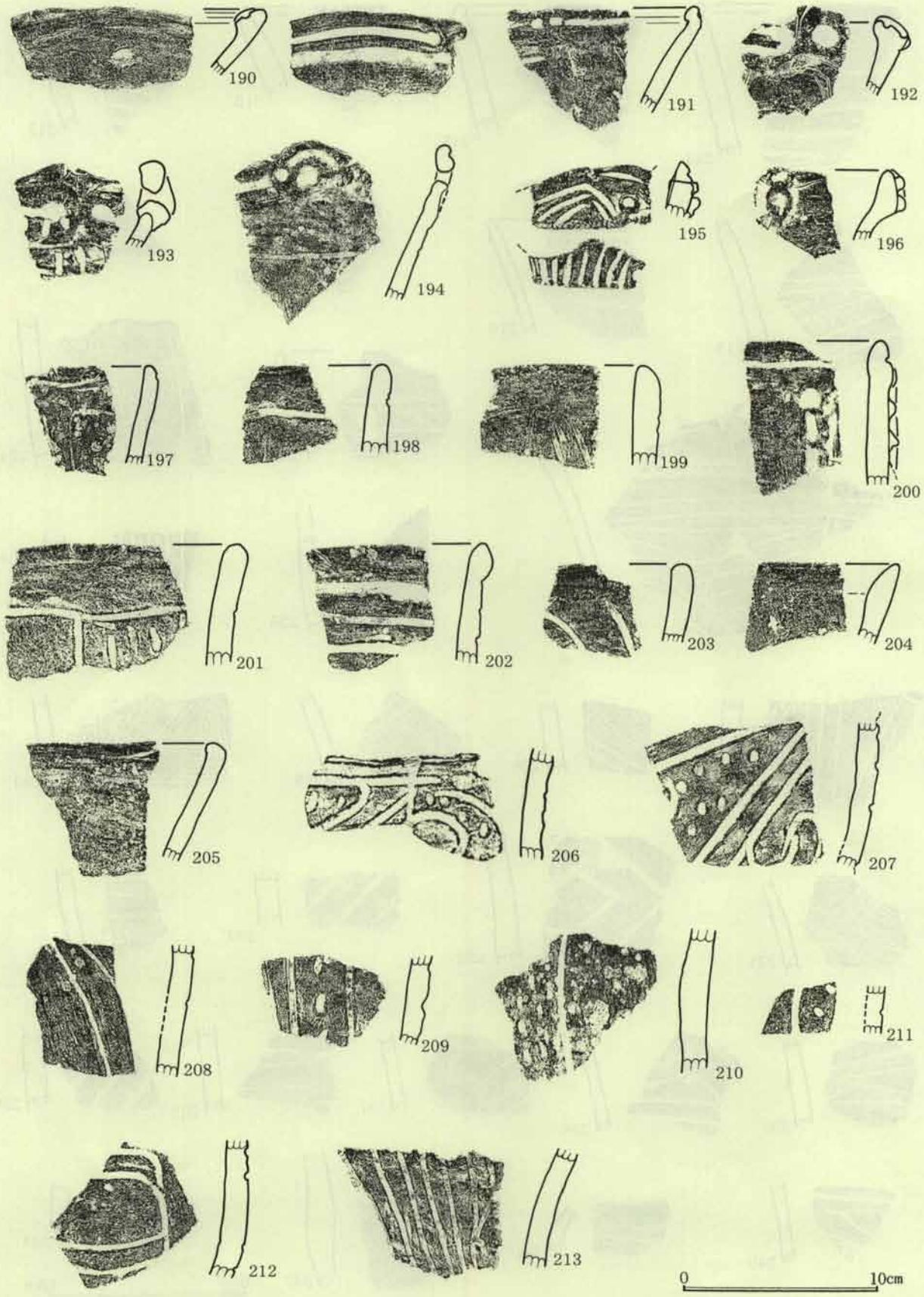
第20図　A地点遺物(9)　中期　(勝坂式系)



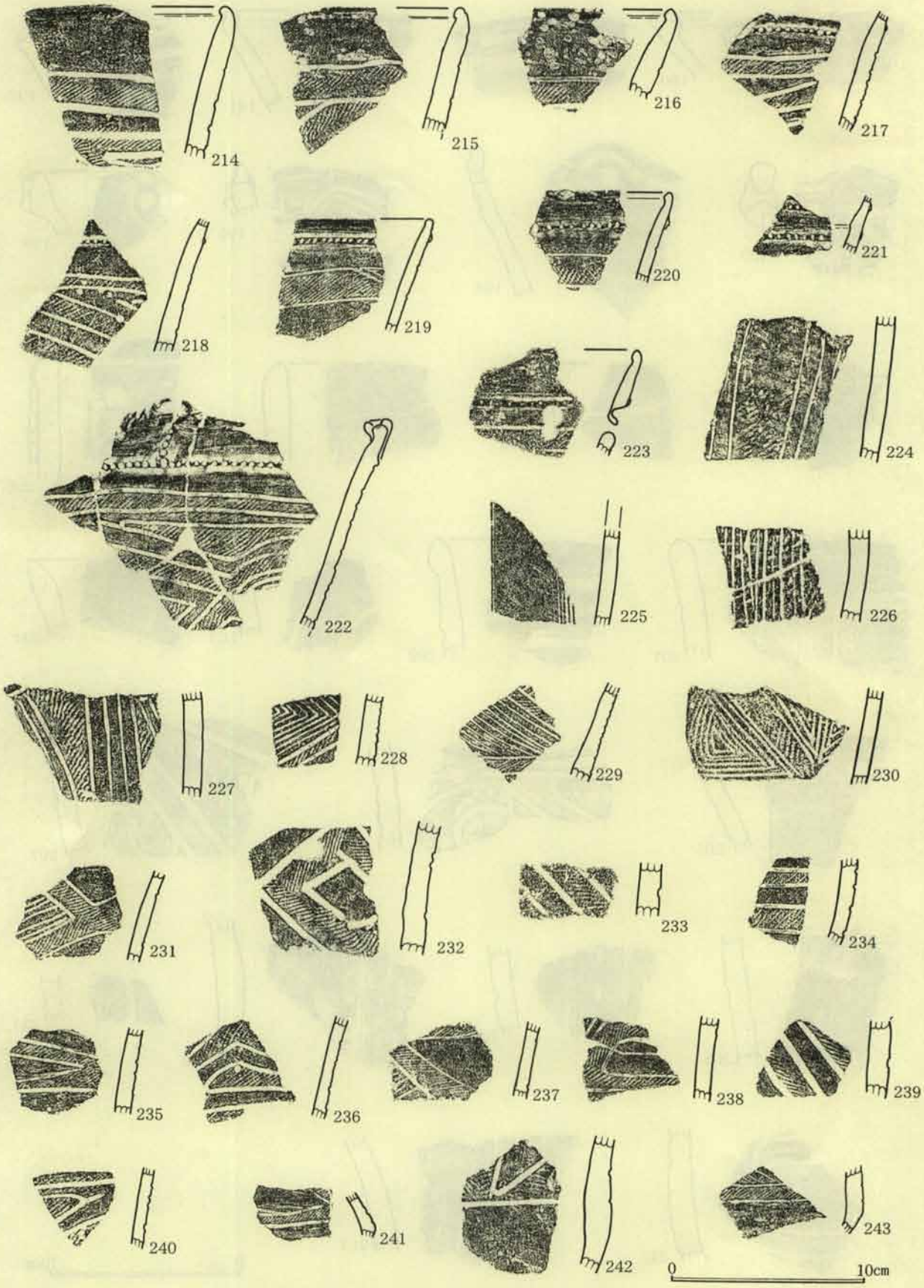
第21図　A地点遺物(10)　中期　中葉～後葉（加曽利E式）



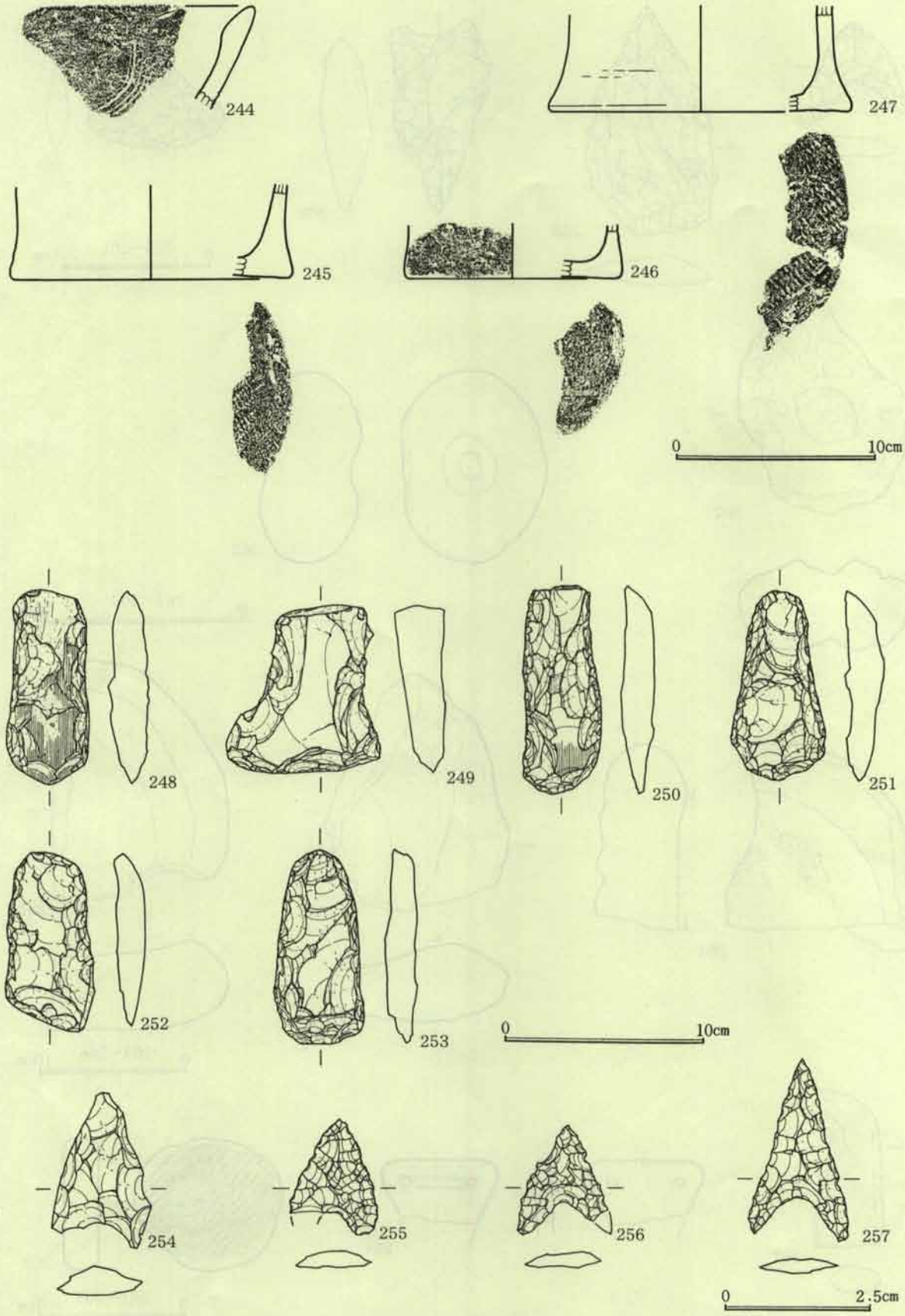
第22図　A地点遺物(1)　中期（加曽利E式）～後期（称名寺式）



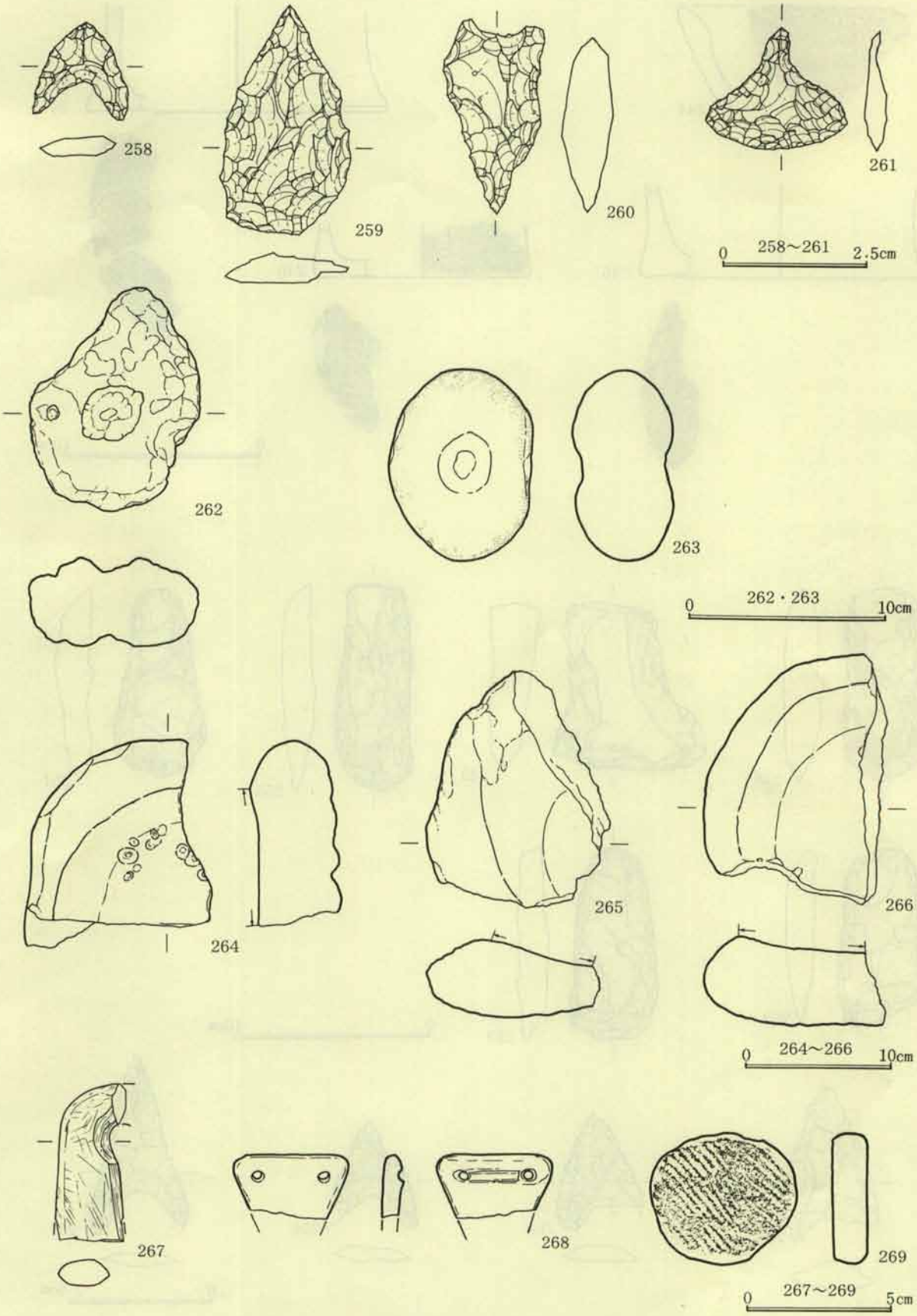
第23図　A地点遺物(2)　後期（称名寺式）



第24図　A地点遺物(13)　後期（堀之内式）



第25図　A地点遺物(4)　後期土器片・石斧・石鏃



第26図　A地点遺物(5)　石鏃・凹石・石皿・玦状耳飾り等

《C地点遺跡出土遺物》

1～42は前期に帰属し、1～28は胎土に繊維を含む。1～24は前期前半の二ッ木式期に帰属すると考えられる。1は口唇部下に撚糸側面圧痕が見られる。2からは刻目を施す隆帯で区画される。区画内は撚糸側面圧痕で渦巻き文を配したり、空間を刺切りと円形刺突文で加飾する。2は波状口縁を呈し、3～5の口端部には刻目を連続させる。8の横位区画隆帯の刻目は矢羽状とする。14は鋸歯状の口唇部を呈し、瘤を貼付する。二ッ木式期～関山式期に多く見られ、二ッ木式期の文様帯に施される円形刺突文が瘤に置換されたと解釈される。15・20～24は0段多条の縄文を施す。18と19は撚糸側面圧痕を施す。

25～28は前期中葉の黒浜式期に帰属する。25と26は櫛歯状工具による横位の押引きを施す。27は格子目状に沈線を施す。28は爪形文を施す。

29～41は前期後半の諸磯式b式期に帰属する沈線文系土器。集合沈線状の平行沈線で文様を施す。36は後期の可能性がある。

42は貝殻腹縁を連続し、3本1組の工具による連続刺突文と刺突文を施す興津式。

43～73は前期終末の十三菩提式併行期の様相を呈する。43と44は斜位の浮線文を連続させ、一部を連続の押引きによる結節状浮線文とする。45～54は結節状浮線文が付される。45は横位文とその下位に2本1組で鋸歯状文を配す。46～48には1～3条が横位に巡り、49は上位に波状？が見られる。50は縦位、54は鋸歯状に付される。51は口縁部に2条が併走し、その下位に縦位の一部が残る。52はやや薄い器肉で、堅緻な焼成である。結節状浮線文の上位は縄文、下位は無文地である。上位には刺突文が1ケ所ある。53は無文地に横位の3本が併走する。胎土内に片岩や金雲母が混入する。54は2本1組で鋸歯状を施す。

55は無文地で、縦位に垂下する結節沈線文を施す。胎土に片岩が混入する。56はソーメン状隆帯を付す。

57～59は半裁竹管による半隆起線文を集合させるもの。57は鋸歯状的に多段に配し、三角形の印刻を施す。58は弧状、59は区画内を斜位に充填する。

60～73も半隆起線で区画や文様を抽出する。60・63・67～72は半隆起線で区画する。区画内も半隆起線で充填した後にヘラ切沈線で格子状文にする。60は口唇部内面を突出させ、2条の半隆起線により口縁部無文帯と区画する。下位の区画内は右斜位を半隆起線、左斜位をヘラ切沈線で格子状文とする。横位区画に沿って深い印刻が施されている。63・70・71は細かい格子状文とし、63にも印刻が施されている。67は横位区画内に鋸歯状文とその下位に格子状文を施している。

61・62・64～66は細い半隆起線で区画したり、区画内を縦位の集合沈線で充填する。61の口唇部は平坦に調整されているが、60と同様に内面に突出させた剥がれがある。文様帯の区画内に深い印刻が施されている。62・64～66は区画内を縦位の集合沈線で充填した後に鋸歯状文を連続して施す。62の口縁の無文帯には縦位に深い切り込みがある。67は横位区画内に鋸歯状文を施す。72と73は鋸歯状に沈線を集合させる。

74～97は中期初頭の五領ヶ台式期に帰属する。74と75は同一個体と思われる。スリットを施す小波状の口縁を呈する。口縁部下に無文帯を挟んで隆帯を巡らし、単節RLを施す。77と79は結節縄文を施し、77は口縁部に縦位の刻目を施す粘土紐を付す。80は半裁竹管による平行沈線を多段に施し、刺突文を沿わ

せる。

81～84は口端部に縦位に短沈線による沈線文帯(条線文帯)を施し、口縁に沿って沈線を施す。81は沈線文帯下に小突起を付す。82は波状口縁を呈し、84は波状口縁を呈し、頂部をV字形に突出させる。波頂下には刻目を施す突起を付す。85は頂部に刻目を施し、中央にスリットを施す山形突起で、垂下する沈線文間に交互刺突文を施す。

86は単節RLの地文とし、隆帯により区画し、半裁竹管の外側による押引沈線を添わせる。同工具による2列1組の弧文を配し、内部に印刻による三又文を施す。

87～92は沈線による区画内に沿って刺突文を連続し、所謂「列点文」を巡らす。87は平行沈線文で横位区画し、刺突文を伴う平行沈線を垂下させて縦位区画とする。区画内に沿って刺突文が巡り、空間にY字状文を施す。区画隅とY字の上部のV部分は印刻されている。88と89は3本1組の沈線で方形区画を配し、90と91は区画沈線文の間に交互刺突文、92は刺突文を挟む。

95は無文地の口縁部片で、波状口縁を呈する。波頂部に刻目、波底に向かう口唇部には刺突文が施されている。口縁に沿って1条の沈線が巡り、波頂下部分には交互刺突文がある。96と97の波状を呈する口縁部片は隆帯により区画文様を配し、口端部に縦位に短沈線による沈線文帯(条線文帯)を施す。96は隆帯に沿って押引沈線を施す。97は刻目を施す隆帯で三角形文を配す。区画内に沿って沈線が巡り、細い竹管による刺突文を沈線に直角に連続させ、中央部分に三又文を印刻する。

98～209は中期阿玉台式期か同系統に帰属する。98と99は波状口縁を呈し、深い抉りを施して又状とする。98は小さい竹管を使用して連続する刺突文を内外面に施す。同工具の施文は、区画に対して直角や斜方向からの連続刺突である。口唇部には連続刺突文を施す。99は口唇に刻目を施し、その直下に角押文が沿う。口縁部文様帯は隆帯で楕円区画され、区画内に沿って角押文が沿う。文様帯の下位には波状沈線を施す。100は口唇部に連続刺突文を施し、口縁部文様帯は併走する2本の沈線で区画され、中側の一部を鋸歯状文とする。101は区画文内には有節沈線で波状文が抽出され、波底からは短かい垂下文が施されている。102は単列の角押文が区画文内に沿い、内部に波状文を抽出する。103と104は単列の角押文が区画文内に沿い、内部を斜位の角押文で充填する。105は波状口縁を呈し、隆帯に沿って角押文を巡らす。

106～108は口縁部文様帯を隆帯による楕円区画文を配し、区画内に単列の角押文が巡る。106の区画内の中央部には浅い刻目が横位に施されている。108の区画内の中央部には横走する角押文を施す。109は波状口縁を呈し、隆帯による区画を配する。区画内に沿って2条の押引文が巡り、中側の角押文の一部に波状の部分がある。110は把手の頂部片。縁に刻目を施し、内部に角押文を巡らす。横から見ると足形にも似る。

111は区画に沿って単列の角押文が巡り、内部に縦位に対称となる弧文を施す。112と113は口縁部文様帯の区画内に沿って単列の角押文を巡らし、112は口唇部直下に刻目を施す。114は隆帯による口縁部区画文内に沿って1条のペン先状押引文、空間に波状文を施す。115は波状口縁を呈し、区画文内を角押文による弧文を重層させる。

116は口径34.7cm、残存器高35.2cmで、4単位の又状の波状口縁を呈する深鉢。波頂部と口端部に刻み目を施す。口縁部と胴部文様は、隆帯による楕円区画文を基本とし、区画文の周囲と内部にも刻み目を施す。口縁部文様帯は8単位で楕円区画文を配し、波状下で楕円区画文が接する部分には刻み目を施すY字状の隆帯を貼付する。胴部中位には大き目の楕円区画文は4単位で配されている。その上方に接し

て上部が開口する楕円区画文が８単位、下方に刻み目を施すＹ字状の隆帯を垂下させる。117は116の底部と思われる。

118は復元口径32.6cm、底径11cm。上方でやや広がる円筒形の胴部から内湾して開く４単位の波状口縁を呈する深鉢。口端部には刻目が連続し、波頂下から垂下する刻目を施す隆帯で口縁部文様帯を横長の方形区画にする。この区画隆帯の片側には角押文が２条併走する。区画に沿っても角押文（４区画の内、１区画が２条併走）が巡り、区画内を斜位で充填する。部分的に波状文にしようかとの戸惑いが見られる箇所がある。胴部には刻目を施す４本の垂下隆帯と２列１組で横位に併走する刻目列があり、垂下隆帯の上位先端は瘤状に突出する。

119は口径31cm、残存器高30cmで、平口縁を呈する深鉢。直線的で胴部上半からやや外反し、キャリパー形に内湾する口縁に移行し、口唇部は尖り気味とする。口縁部文様は隆帯による下方が無い楕円区画文で、区画文の接合部分の下方の両端でＹ字状に隆帯が連結する。楕円区間文の周囲とＹ字状隆帯の両側に角押文が沿い、楕円区間文とＹ字状隆帯が連結する空間にも角押文が施されている。

120は復元口径28cm。残存器高32cmで、円筒形の胴部から頸部で外反し、口縁部は直立気味に内湾する深鉢。口縁部文様は隆帯により区画され、区画隆帯に沿って複列の角押文が巡り、空間には平行沈線による波状文を施す。頸部にも平行沈線による波状沈線が巡る。残存する胴部文様は２段から成る。隆帯による楕円文を横位に連結せさ、区画内に沿って複列の角押文が巡る。空間は平行沈線による波状沈線で加飾する。

121は小波状を呈する口縁部片。波頂から垂下する隆帯の先端部を突起させる。口縁部下に４段に爪形文が横位に連続する。

122は復元口径33cm、残存器高12.5cmの深鉢。口縁部文様帯は口唇部から垂下する隆帯で区画され、区画内を２列の刻目列を横走させる。

123は復元口径30cm、残存器高18.3cmで、４単位の波状口縁を呈すると考えられる深鉢。口唇部に細かい刻目を連続させる。口縁部文様は波頂から垂下する隆帯により楕円区画文を４単位で設けると考えられ、区画文の接合部分には突起を付すと思われる。胴部にはＹ字状の隆帯が垂下する。

124は口径25.5cm、残存器高29.3cmの無文の深鉢。直線的に外反する胴部から緩やかに内湾して口縁に移行する。４単位の波状口縁を呈し、波状部は細長く突出する。

125は復元口径27.2cm、残存器高26cmの深鉢。口縁部に刻目を施す立体的な突起を貼付する。この突起の先端部分は小さい波状を呈する可能性が考えられる。

126の残存する胴部片には横位に巡る刻目列があり、刻み隆帯を垂下させる。隆帯の上位は２本１組、下位が１本の蛇行隆帯を施す。

127は指頭圧痕を施す隆帯を４本垂下させ、隆帯の両側には角押文が沿う。隆帯間には１条の有節沈線が垂下する。128は網代痕の底部。

129と136は隆帯による楕円区画文に沿って単列の角押文を巡らし、129は内部に２条１組の角押文を斜位に施し、136は沈線で横位に波状文を施す。130は口縁に沿って単列、下位の区画隆帯に複列？の角押文が巡り、区画内は連弧文を施す。

131・132・134・135は区画文内に沿って複列の角押文が巡り、空間の中央に横位の波状沈線を施す。132と133は同一個体であり、寸胴形の胴部から頸部で屈曲し、緩やかに内湾する口縁とする。口縁は４単位の波状口縁を呈すると思われる。口縁部文様帯の縦位と下位を区画する隆帯には刻目を施す。頸部は

無文帯とする。胴部文様も隆帯で区画され、それに沿って複列の角押文が巡る。区画文の連結部分には波状の粘土紐が貼付されている。

134は４単位の扇状把手を付す口縁部片で、復元口径29.2cm。刻目を施す隆帯で冂形の扇状把手を付し、内部に二重の連弧文を配す。把手間の口縁部文様は複列の角押文を区画内に巡らし、内部に連弧文を施す。頸部には爪形文の刻み列を巡らし、下位に複列の角押文と連続刺突文を巡らす。

137と138の口縁部片は隆帯(剥がれている)による区画文内に沿って連続刺突文(押引による細かい連続刺突)を２～３条沿わせ、空間部にも隙間が無い位の密度で刺突文を充填する。口唇部は幅1.5cm程の平坦面とし、137は併走する結節沈線、138は縦位に短沈線による沈線文帯(条線文帯)を施す。139もこの一群と考えられる。このは３点は、五領ヶ台式～阿玉台式の範疇として考えたい。

140～148・150は隆帯による楕円区画文を配する口縁部片。140は区画文内のカーブ部分から口縁に沿って複列、下方で単列、内部には縦位の角押文が施される。141は隆帯により楕円区画文を配する口縁部片で、区画文内に沿って複列の角押文を巡らす。142は口縁部文様帯の下位を区画する隆帯に斜位の刻目が連続して施される。区画文内に沿って複列の角押文が巡り、中央に横位の波状平行沈線文を施す。143は区画文に沿って複列の角押文を巡らす。144～148は楕円区画文内の中央部分に横位の波状文や渦巻き文が複列の角押文で施されている。144の口端部には刻目を施す。145は147の口縁部片の可能性があり、口唇部に刻目が連続する。147と148には複列の角押文による連弧文等が抽出される。149の波状口縁部片と150の縦位区画文にも複列の角押文を施す。

151の波状口縁部片は隆帯による細長い楕円区画文内を複列の角押文、下位の区画内は斜位の連続刺突文を密に充填する。152は隆帯による細長い楕円区画文や隆帯に沿って複列の角押文を２条併走させる。

153は口端部に刻目を施し、隆帯による楕円区画文に沿って沈線が巡り、内部を斜位の沈線で充填する。154は口端部に刻目を施し、区画内に沿って複列の角押文を２条併走させる。155も口端部に刻目を施し、複列の角押文を区画内に巡らせ、内部を複列の角押文を斜位に重層させる。156の口縁部片は複列の角押文で文様を区画し、区画内に平行沈線による波状文を抽出する。157は波状口縁を呈し、角押文を区画内に沿って２条巡らし、区画内を鋸歯状に充填する。

158と159は口縁部文様帯を隆帯で区画し、区画内に沿って複列の角押文を沿わる。内部空間は158が平行沈線で波状文、159は複列の角押文で横位文を施す。160は隆帯に沿って複列の角押文を沿わせる。

161は口端部に刻目を施す波状口縁の深鉢。波頂下からは渦巻き文、胴部には楕円区画文を配すと思われる。複列の角押文が隆帯上やそれに沿ったり、横位に巡ったりする。

162も波状口縁を呈し、口端部に刻目を施す。文様帯は刻目を施す隆帯で区画され、複列の角押文が隆帯に沿う。区画内の一部には細かい刺突文が施される。184と同一個体の可能性がある。

163は屈曲部に隆帯が付され、区画内に爪形文が沿う。164は斜位の刻目を施す隆帯で楕円区画を配し、区画内に沿って細かく角押文を連続して施す。

165は波状口縁を呈すると思われ、粘土紐を波状に貼付し、縦長の爪形文が区画文内と頸部に２列横位に巡る。166は波状口縁を呈し、波頂から高まりのある１本の隆帯が垂下し、下位で分岐する。隆帯上には刻目が施されている。隆帯で区画された右側には爪形文を挟む単列の角押文で楕円状区画を配し、左にも単列の角押文で楕円状区画を配する。

167は波状口縁を呈し、波頂から垂下する刻目を施す２本の隆帯が下位の区画隆帯として左右に分岐して横位に巡る。分岐部分の隅は庇状に突出し、円形凹文を施す。区画内に２列の爪形文が沿う。頸部に

は平行沈線が巡る。

168と169は爪形文を横位に連続する口縁部片。170の山形突起の頂部には刻目、裾部に刺突文を連続して施す。頂下には隆帯をX字状に付す。171は押引文を隆帯に沿わせ、区画内の中央にも横位に施される。172は隆帯による口縁部文様の区画文内に複列の角押文を沿わせる。頸部に巡る隆帯の両側にも複列の角押文を施す。173はヒダ状圧痕を残し、有節沈線で文様を抽出する。174は隆帯に沿って沈線による波状文を施す。175は隆帯下に単列の角押文を併走させ、上位に沈線による波状文を併走させる。

176は隆帯に沿って波状に沈線を施す。177は口縁部文様帯の区画隆帯に沿って複列の角押文を巡らし、頸部に平行沈線を波状に施す。178・179は隆帯の両側に沿って複列の角押文、180～182は隆帯で施された区画内に沿って複列の角押文が巡り、180と183は区画文内に爪形の刻目列を施す。

184は波状口縁を呈する口縁部片。波頂下から刻目を施す歪んだY字状隆帯を垂下させる。複列の角押文が隆帯に沿ったり、横位に施されている。区画内には細かい刺突文が充填される箇所が見られる。

185は垂下する隆帯に沿って複列の角押文を併走させる。186は隆帯による横位区画文と蛇行懸垂文を垂下させ、横位の区画隆帯に沿って上位に複列の角押文、下位に爪形文を連続させる。187は隆帯による区画がなされ、楕円状区画内に沿って長い爪形文が連続して施される。188は隆帯に２列の爪形文が横位に連続する。189は爪形文による横位の刻目列が２段施され、上位の刻目列の下に沿って浅い幅狭の刻目列が併走する。190の胴部片には２列の爪形文による刻目列。191は刻目を施す隆帯が２本併走し、器面には刻目列が２列巡る。192は押圧を施す隆帯を垂下させ、刻目列を横位に巡らす。193の胴部片にはヒダ状圧痕。

194～205・208は複列の角押文か平行沈線が施される。194は隆帯に複列の角押文が沿い、爪形文による刻目列が横位に巡る胴部片。195は横位区画の隆帯と上位に施された弧状の隆帯が接する部分を押圧隆帯とし、隆帯に沿う複列の角押文の一部が空間内部に入り込んで渦巻き状とする。196も横位区画の隆帯上に指頭による押圧を施している。197は隆帯間に粘土紐による波状文を貼付し、隆帯に沿って平行沈線による波状文を沿わせる。器面の一部にヒダ状圧痕が残る。198は平行沈線による波状文と横位文が施される。199の胴部片には横位沈線とヒダ状圧痕。200は刻目を施す隆帯と櫛歯状工具による条線で文様を抽出する。201と202は隆帯に沈線が沿わなく、平行沈線による横位文や波状文を施す。203は隆帯に平行沈線が沿う。204と205は同一個体であり、接合が判明した。隆帯により横位区画と楕円区画文を配し、２本１組の平行沈線を楕円区画内に沿って巡らせ、空間に半円文等を抽出する。208はU字状に垂下する隆帯内に沿って複列の角押文が施され、ヒダ状圧痕も見られる。

206は蛇行懸垂文が併走して垂下する。207は刻目を施す隆帯を垂下させる。角押文が隆帯に沿ったり、文様を抽出する。209は垂下する隆帯に沿って２本１組の平行沈線が沿う。

210～227は中期初頭に帰属する。210～217は区画文内の文様空間を刺突文で充填し、210～213・215は区画内に三角印文を施す。212と213は平行沈線により方形区画を施し、区画の隅に三角印文を有する。214と220は同一個体で接合する。横位の平行沈線により区画し、爪形文を区画内に沿わせたりし、空間を刺突文で充填する。216は平行沈線により区画を施し、区画内を押引沈線で文様を抽出し、空間を先端の細い円形竹管で充填する。

218～223は半裁竹管による平行沈線で区画を施す。218は方形区画内に沿って連続の押引文を巡らす。219は区画内を刺突文で充填する。220は区画内に爪形文を沿わせ、空間に刺突文を充填する。221は細い

円形竹管による刺突文、222は半裁竹管により区画内を充填する。223は刺突文を横位に併走させる。

224は区画する垂下隆帯に平行沈線を沿わる。空間は横位の平行沈線を多段にし、両方の先端部を半裁竹管で丸める。225～227は平行沈線による区画文様内に刻目帯を施し、内部に三又文を配す。

228～309は中期中葉の勝坂式期に帰属する。228～234は蓮華文で加飾する。228は波頂からＳ字状の隆帯を垂下させ、隆帯と口唇部に刻目を連続して施す。蓮華文がＳ字状の隆帯に沿い、空間を半隆起線文と円形刺突文で加飾する。229の波条突起は複合突起となり、２段で構成する。頂部は外縁部が斜め上方、内縁部が横方向に突出し、縁端に刻目が施されている。蓮華文は半隆起線文で区画された内部に連続する。230は平行沈線で口縁部無文帯と区画する。平行沈線に沿って蓮華文が沿い、ペン先状文が隆帯に沿うのであろうか。区画内には半裁竹管を器面に垂直に刺突した半円文をコンパス文状に施す。

231は蓮華文を施す横位に巡る隆帯で文様帯を区画する。区画内を爪形文を連続する隆帯で文様を抽出し、平行沈線や蓮華文、刺突文で加飾する。232は隆帯による楕円区画文に蓮華文が沿う。233は隆帯に沿って蓮華文と爪形文が施される。234は沈線に蓮華文が沿う。

235と238は同一個体と思われる。平行沈線によるコンパス状文を挟んで上下に横走沈線が巡り、235の残存する胴部の先端には刻目を施す隆帯が僅かに残る。236もコンパス状文を挟んで上下に横走沈線が巡り、下位に連続爪形文を施す。237は平行沈線文を横位と縦位に施す。

239と240は刻目を施す隆帯で区画し、区画内に沈線で渦巻き文等を抽出する。地文は239は撚糸文Ｌ、240は撚糸文Ｒである。

241は区画内をキャタピラー状文や爪形文で加飾する。242は区画内に沿って爪形文を巡らせ、内部に花弁状の文様を抽出する。243は区画内に沿ってキャタピラー状文を巡らせ、内部にペン先状文で渦巻き文等を抽出する。244は連続爪形文を施す隆帯で文様帯を区画し、区画内にも爪形文で加飾している。

245は平行沈線により逆Ｕ字状文を垂下させ、区画内にスリット状に三又文を施す。246は隆帯による横位区画に刻目を施す円文や楕円文を配す。上位は半裁竹管による半隆起線文を縦位に充填する。

247は隆帯による横８の字文と四方に伸びる結節状浮線文を表現すればリボン状、怖く見れば悪魔の形相にも見れる。隆帯に沿って半隆起線文が沿い、一部の空間にはキャタピラー状文が施されている。

248(拓図の向きが違うかも知れない)は刻目を施す隆帯で縦位の木葉形文を連鎖させ、外形に沿って平行沈線を施す。その沈線に沿って蓮華文やキャタピラー状文で加飾されている。

249と253は区画内部に三又文を配し、周囲をペン先状文やキャタピラー状文で囲う。250は刻目を施す隆帯で文様帯を区画し、隆帯に沿って平行沈線やキャタピラー状文を巡らす。251は刻目を施す隆帯で区画されたらっきょう形の内部に沿って２条の平行沈線とキャタピラー状文が巡る。空間にはペン先状文で渦巻き文を抽出し、三又文を施す。252も刻目を施す隆帯で文様を区画し、隆帯に沿って平行沈線と連続刺突文が施されている。254は区画内に沿ってキャタピラー状文が巡り、内部に花文様を抽出する。255は横位区画内に刻目を施す隆帯とそれに沿う平行沈線を波状に連続させる。三角形の空間部には三又文を中央に配し、周囲をペン先状文で加飾したりしている。

256は復元口径21cm、復元器高32cmの深鉢。上方につれて開く円筒形で口縁部は短く外反する。口縁部は無文とし、頸部に刻目を施す隆帯と半隆起線文を巡らす。胴部文様は刻目を施す隆帯をＶ字形やクランク状に垂下させる。その先端部やコーナー部分は突出させ、円形凹文や三又文を施す。空間部分は平行沈線により渦巻き文や方形区画文、幾何学文を配する。その文様の内部に沿ってキャタピラー文やペ

ン先状文が併走して巡り、三又文等で加飾する。

257は口径14.5cm、残存器高18cm。筒形の胴部から外反して緩やかに開く口縁部に移行する小型の深鉢で底部を欠く。無文の口縁部は口唇部を尖らせ、やや肥厚する。胴部文様は頸部に巡る隆帯から耳たぶ状の隆帯を垂下させ、隆帯の両側にキャタピラー状に連続刺突文を巡らせる。

258は胴部上半で直立気味に内湾し、頸部からやや外反して開く口縁部に移行し、１つの突起を有すると思われる深鉢。頸部に巡る隆帯で口縁部と胴部を区画する。口縁部文様帯は無文帯を挟んで口縁部と隆帯に沿って平行沈線が巡る。胴部文様は頸部に巡る隆帯から垂下する隆帯で区画され、その隆帯に沿って平行沈線が巡り、さらに連続刺突文も併走する。

259は緩やかな波状口縁を呈し、波頂部から円文や三角形文を施す隆帯が垂下する。口縁部文様は押引文による波状文を重ねる。波頂部から垂下する隆帯の下方には幅２cm程の断面方形の箱状隆帯が垂下する。この隆帯の中央部分にはキャタピラー状に連続刺突文を施す。この隆帯を幹として枝状に横位の隆帯が巡り、方形区画を配す。この隆帯には刻目が連続して施され、区画内には鋸歯状文や沈線が沿う。

260は２cm前後の円孔を有する山形突起で、頂部は上方に突出せずに平坦状にする。頂部から右側の裾部分と外面の円孔を縁取る隆帯に刻目を施す。口縁や隆帯に沿って平行沈線が巡り、区画内に刺突文を追随させる。円孔の内面周囲は刻目で加飾されている。

261は隆帯により口縁部文様帯を区画し、一部に耳たぶ状の突出部を設ける。隆帯と口縁に沿ってキャタピラー状に連続刺突文を巡らせ、空間に三又文や刺突文を施す。

262は波頂部に滑車状の環状把手を付し、隆帯を垂下させる。隆帯と口縁に沿って連続刺突文を施す。

263は口縁部に刻目を施す隆帯で楕円区画文を配し、区画内に沿って連続刺突を巡らし、内部を波状に充填する。264は隆帯を縁に施す方形の突起。上方の角を突出させ、側面形が三角形とする。突起下に押引沈線が巡り、内部に三又文を施すのであろう。265は隆帯による区画文に沿ってペン先状押引文を巡らす。

266～270はキャタピラー文が区画文に沿って施される。266は隆帯による鋸歯状の区画文にキャタピラー文が沿い、口唇部下で鋸歯の先端部が接する部分を突起させる。267は空間にペン先状押引文を挟む。

268は隆帯による楕円文にキャタピラー文が沿い、 内部に横位の連続爪形文を施す。269は先端部を櫛歯状とする工具による鋸歯状文を挟む。270は波状口縁を呈し、口端部に刻目を施す。

271は立体的な隆帯が巡る口縁部片で、隆帯上に粘土紐を付し、刻目状とする。 隆帯に沿ってキャタピラー状に連続刺突文を巡らせ、内部には半裁竹管による連続刺突文を施す。

272は中空の波状突起で、上部に円孔を付す。文様帯は隆帯で区画された内部を左右対称とする。中央に円文を２個配し、その周囲をキャタピラー文等が三重に巡る。

273は口縁部を無文帯とし、口端部を斜め上方に突出させる。コイル状の半円筒形突起の左右に沈線による区画文が配され、内部に三又文を囲んでキャタピラー文を施す。274は口唇部の両端を突出させる。口縁部無文帯下に隆帯により渦巻き状の文様を抽出し、刺突文や沈線で空間を埋める。

275は外反する無文の口縁部を刺突文を連続する横位の沈線で区画する。区画内には隆帯が施され、撚糸文を充填する。276は口縁部無文帯を平行沈線で区画し、口唇部の内面は突出させる。277は短かく外反する無文の口縁部片で、頸部に横走する平行沈線と押引文を併走させる。278は刻目を施す隆帯を頸部に巡らし、口端部にも刻目を施す。地文は単節ＲＬである。

279は刺突を施す隆帯で区画し、隆帯に沿ってキャタピラー文が巡る。 区画文内は横位の平行沈線とペ

ン先状押引文で文様を抽出する。280は併走する２条の押引文で上方に向く矢印状文を施す。
281と282はペン先状押引文で文様を抽出する。282は横位の区画隆帯の両側に沿わせ、区画内に波状文を抽出する。

283～288は隆帯に沿ってキャタピラー文を施す。283と284は渦巻き状の隆帯、286と288の区画文内にはペン先状押引文が沿う。287は隆帯の両側にキャタピラー文が沿う。 288は横位に併走する区画隆帯には斜位の刻目を施す。

289・294・296は平行沈線に沿ってキャタピラー文が巡る。289は空間に三又文とペン先状押引文を施す。294はキャタピラー文間に円形刺突文を数珠状に連結する。290は刻目を施す隆帯で文様を区画し、交互刺突文等を施す。291は沈線により文様を抽出し、区画の一部に沿って刺突文を施す。292は幅広の隆帯で横位区画をする。上位には沈線区画内を爪形文で充填し、下位を単節ＲＬを施す。293は区画隆帯に刻目を施し、区画内を平行沈線を密に充填する。295と299は背割り隆帯に刻目を連続させる。295は上位を沈線で文様を抽出し、下位は無文とする。297は連続刺突を施す隆帯で文様を区画し、区画内に沿って平行沈線で波状文、横位に爪形文を施す。298は隆帯により横位区画をし、下位に平行沈線による方形区画を配する。区画内に沿って爪形文を施す。

300は併走する２条の有節沈線により渦巻き文を抽出し、空間に細沈線を斜位に充填する。301はペン先状押引文で縁取られた隆帯の渦巻き文が口唇部から垂下する。それに沿ってキャタピラー文を加飾する。

302は平行沈線に沿うキャタピラー文にペン先状押引文や半円の刺突文で加飾する。304～307は縦位の沈線を充填する。308は無文の屈曲底で横位にキャタピラー文とペン先状押引文を併走させる。309は刻目を施す隆帯と平行沈線を垂下させて縦位区画する。平行沈線には刺突文が併走し、同沈線間には横位の刺突文列が３段残る。

310～314は浅鉢形土器。310は環状把手を付し、沈線による弧文等を施す。311は緩やかで頂部が広い波状口縁を呈し、頂部に３波にくねる波状文を付す。312は復元口径38cm、残存器高15cm。頂部に幅広の抉りを施し２山とする緩やかな波状口縁を呈する。313はなぞりの器面調整を施す。314と315は五領ヶ台式期に帰属すると考えられる。316は内面の突出する稜と口唇部間に複列の角押文を沿わせる阿玉台式。317は併走する連続押引文による楕円形区画内に斜位の押引文を充填する。318は外反する胴部から口縁部を「く」の字状に屈曲させる。口縁部に沿わて半裁竹管による刺突文で区画し、同工具で空間を斜位に充填する。319は貫通する円孔か半円を有する浅鉢と思われ、内面に隆帯により区画を施す。320は口縁部を欠く無文の浅鉢。321～323は口縁部下に連続爪形文を挟んで横走する半隆起線文を多段に巡らせる。北陸系の所産であろう。

324～332は「隆帯系」土器。324は残存器高27.2cm、底径9.4cmの深鉢。３単位の緩やかな波状口縁を呈すると思われ、又状に深い抉りがあり、波底の口唇部には交互刻目文を施す。文様帯は頸部に巡る隆帯で口縁部と胴部を区画する。口縁部文様は波頂から派生する隆帯と頸部に巡る隆帯が渦巻き状文や弧文等の隆帯で連結し、渦巻き状の先端部は双環突起や三又文状の突起とする。隆帯には連続刺突文や沈線が沿い、隆帯上には交互刻目文が施される。隆帯区画による空間には波状文や刺突文等で加飾される。胴部文様は隆帯による渦巻き状の懸垂文や環状突起を付し、沈線で懸垂文・蛇行懸垂文等が配され、空間に三又文・円形刺突文、短沈線による横位文で充填する。

325は隆帯による区画内に刺突文を施す円文等を配し、空間を短沈線で充填する。所謂「焼町土器」であ

る。326は頸部に付された立体的な隆帯の両側に円形凹文を有し、区画文内に沈線を沿わせ、一部に交互刺突を施す。327は波状口縁を呈する。隆帯により文様帯を区画し、その先端部は環状突起や渦巻き文を施す突起とする。隆帯には沈線が沿い、空間は三又文を配す箇所が見られる。328は垂下沈線間にスリット状に三角印刻を施す。329～331は隆帯による区画文に沿って半隆起線文を巡らし、空間を玉抱き三又文を配する。329には連続刺突文を施す部分がある。332は隆帯による区画文内を渦巻き文と三又文を配す。

333は隆帯に沈線と波状文を沿わせたり、三角形文等を配する。

334は口径28.8cm、残存器高8.1cmの深鉢であるが、492と接合することが判明した。２本の横走する沈線により口縁部無文帯と区画する。下位の区画沈線からは先端を渦巻き文とし、縦位の短沈線を挟んで対称に区画内に４単位で配される。この単位間に渦巻き文を施す４単位の突起を配し、突起間を背割り隆帯で連結する。口縁部文様帯と胴部にはＲＬ縄文を施す。

335の山形突起は頂部を幅広とし、両方の裾部に円形刺突文を施す隆帯の円文を付す。外面頂部下には隆帯の一部を頂部に向けて突出させる。口縁部文様は隆帯による楕円区画文と思われ、連結部分には横位の刻目を施す。

336と337は同一個体で、337は把手部分が取れている。山形突起の頂部から把手が連結する。突起の左右の側面に渦巻き文を施し、橋状把手との連結部分に背割り隆帯が分水嶺の如く分かれ、口縁に沿う隆帯に結ばれる。把手の関門を４本１組の横位沈線、その下位には波状文が施されている。

338は波状を呈する口縁部片で、波頂から刻目を施す隆帯を垂下させる。さらにこの隆帯の先端から口縁に沿って交互刺突文と隆帯が併走する。区画内には平行沈線で鋸歯状文?を抽出する。

339の文様帯は刻目を施す隆帯で区画される。下位を区画する隆帯に口唇部から垂下する２本の隆帯が接する。この空間に半円文を３つ重ね、中央の隆帯に刻目を施す。

340は外反する頸部から屈曲し、直立する口縁部に移行する深鉢。交互刺突文を挟む横位沈線と屈曲部に２本の沈線を施す偏平な隆帯を波状に配す。341は刻目を施す隆帯、342は背割り隆帯により渦巻き文を抽出する。343は交互刺突文を挟む横位沈線で無文の口縁部と区画する。口縁は波状を呈すると思われ、波頂下に小突起を付す。胴部施文の縄文は単節ＲＬ。

344と345は同一個体の口縁部片と胴部片である。口縁部は頸部から大きく外反して開く。頸部には隆帯により端部を蕨手状とする偏平な横Ｃ字文を抽出し、その中央に橋状把手を付す。大木系の所産であろうか。

346は残存器高51.5cm、底径11cmの大型の深鉢で口縁部を欠く。胴部下半を無文とし、上半を文様帯とする。胴部文様は頸部と胴部中央部分の屈曲部に巡る隆帯で区画される。文様は隆帯による主文様とその間に施された沈線による副文様がある。残存する主文様は半円形に２本の脚を付けたワイングラス形のものと接合部分に縦位の短沈線を施す相対Ｕ字文がある。この主文様を構成する隆帯の両側には２本の沈線が併走する。副文様は渦巻き文等が抽出されている。隆帯を貼付した後に撚糸文Ｌを充填し、最後に沈線を施す。

347は復元口径32cm、残存器高36.5cm。口縁部と頸部に横位の沈線を多段に巡らせ、口縁部に施された沈線の下端から「つ」の字状文を垂下させる。口縁部沈線文帯の内部には横位沈線が途切れる箇所があり、頸部沈線文の最上部には沈線が山なりに競り合う箇所がある。縄文は単節ＬＲを充填する。

348は口唇部に沈線を沿わせ、口縁部文様は２本の隆帯で抽象化された渦巻き文を施す。349は幅の狭い口縁部文様帯で、下端を隆帯で区画し、区画内に太沈線で簡略化された渦巻き文を施す。

350は直立する無文の口縁部下に沈線を沿わせる隆帯により楕円区画文を配する。区画内は撚糸文Ｌを充填する。351は沈線により文様帯を区画し、352は波状口縁を呈し、沈線により無文の口縁部を区画する。

353～355は横位区画文に特徴がある。353の頸部は平行沈線により横位区画され、交互刺突文を挟んで上下に刻目列を施す。下位に有節沈線で文様を抽出する。354は口縁部無文帯を刻目を施す平行沈線を横走させて区画し、下位に平行沈線で連弧文を施す。355の頸部区画は交互刺突文と半載竹管の内皮による連続刺突文による。文様は３本１組の沈線で連弧文を施す。

356～358・360・361は背割り隆帯か２本１組の隆帯で口縁部文様を抽出する。356は復元口径16.8cm。背割り隆帯により渦巻き文と楕円区画文を配する口縁部文様帯であるが、隆帯の剥がれが著しい。地文は撚糸文Ｌを充填する。

359は併走する２本の隆帯を波状に配し、頂部で下位の隆帯を渦巻き状突起とする。隆帯貼付後に単節ＲＬを施す。362は波状を呈する口縁部片で上面に縦位の短沈線を施す橋状把手を付す。口縁部と把手の両端の連結部にも円孔を施す。孔の周囲は隆帯で同心円状に加飾される。

363の突起部は左右対称の渦巻き文を施す。364は波状口縁を呈し、波頂部に４本の短沈線、口唇部に２本の沈線を沿わせる。口端部には刻目を施し、波頂下に弧文を重ねる。地文は櫛歯状工具による条線文を縦位に充填する。

365と366は撚糸文Ｌを地文とする。366は波状口縁を呈し、波頂から垂下する隆帯で文様帯を区画する。 367・369・372・375・377・378は口縁部文様帯の区画文内を沈線で充填するもの。367と369は楕円区画文を配し、結合部分に渦巻き文を施す。区画文内は縦位の沈線で充填する。372は波状口縁を呈する口縁部片で斜位、377は縦位の短沈線、378は鋸歯状とする。

368・370・371・374は隆帯による楕円区画文内を単節の縄文で充填するもの。370は頸部を無文帯とする。371の口縁部文様帯は隆帯による楕円文を連結し、連結部にＳ字状文を施す。

376の口縁部片は隆帯により区画され、上方の隆帯は庇状とする。下方の隆帯には単列の角押文が沿い、区画内を斜位の有節沈線で充填する。阿玉台Ｉ式に帰属する。379は３本単位の沈線で区画文を抽出し、撚糸文Ｌを充填する。

380と381は同一個体で、隆帯により文様帯を区画する。383は波状口縁を呈する口縁部片で、頂部と波頂下に渦巻き文を施す。

384の口縁部文様は隆帯により区画され、隆帯による渦巻き文と沈線で方形区画を配す。この方形区画内は無文である。385も隆帯により渦巻き文が抽出される。386は頸部文様帯に偏平な隆帯で波状文を付す。387と388は押圧を連続した隆帯を横走させる。387は撚糸文Ｌ、388は櫛歯状工具による縦位の条線文を充填する。

389～398は平行沈線を多段に横走させるもの。389は短く外反する口縁部無文帯を有する。文様帯の上下に刻目を施す立体的な隆帯を貼付し、隆帯の上位は沈線で渦巻き文を施す。区画文内は横位の平行沈線で充填され、上中下に平行沈線を挟んで連続爪形文を施す。390は直立気味の口縁部では口端部内面は突出する。口縁部文様帯を隆帯で区画し、下位の区画隆帯に刻目を施す。区画内には２段の交互刺突文を設ける。391～397には１～２段の交互刺突文を設ける。398は隆帯により口縁文様帯を区画し、区画内に横位沈線等を施す。399は渦巻き状突起を交互刺突文を施す沈線で三角形に囲む。400は刻目を施す渦巻き状突起を付す。

401は復元口径16.5cm、残存器高13.5cmの深鉢。内湾する屈曲部から直立し、口縁を僅かに外反させる。口縁部の無文帯は３本の横位沈線で区画し、その下位には縦位の沈線を充填する。屈曲部には蛸の吸盤に似る同心円文を施す円形の貼付文を横位に連結させる。大木系の所産と考えられる。

402は復元口径19cm、残存器高10.7cmの深鉢。外反する頸部分から「く」の字状に内傾する口縁部に移行する。口縁部文様帯は端部に渦巻き文をもつ隆帯で区画される。隆帯の上面には１条の沈線があり、渦巻き文のある隆帯は沈線間、左側に連結する隆帯には沈線の両側に連続する細かい刻目を施す。区画文内は交互刺突文を挟む横位沈線文で充填する。頸部は撚糸文Ｌを施す。

403～421(408を除く)は連弧文土器とその関連土器群である。403・406・407・409(天地逆)は口縁部文様帯を区画する３本の横走沈線の上２本に円形刺突文を交互に施す。区画内は４本１組の沈線で波状文を抽出する。地文は櫛歯状工具による縦位の条線文を充填する。407と409は同一個体であり、接合した。404と405は２本の横走沈線に交互刺突文を施す。区画内文様は沈線により抽出する。408は口唇部直下に沿う隆帯に円形刺突による交互刺突文を施す。

410と412は同一個体と思われる。頸部から胴部上半の個体で、頸部に交互刺突文を巡らし、途中に隆帯による渦巻き文が設けられる。区画内に３本１組の沈線で大きな弧文を抽出し、沈線間に刺突を加えて、渦巻き文に似せる。

411・413～419は横位区画文内を１～３本の沈線で連弧文や波状文を施す。413と415には縦位の区画文が見られる。416は下位の沈線を連弧文と考えたが、可能性は低い。

420は胴部を区画する横位に巡る沈線帯に４本１組の沈線で連弧文を連続させ、連結部分からは単沈線による渦巻き文を垂下させる。連弧文の下端から沈線が派生することから、鱗状に連弧文が配される可能性がある。地文は単節ＲＬを充填する。421は５本１組の沈線で連弧文を施す。地文は撚糸文Ｌを充填する。

422～444は渦巻き文や弧文等を抽出する。422～424は背割り隆帯で渦巻き文等を抽出する。425～443は沈線による渦巻き文を配したり、アクセントとして加飾する。429は弧文の連結部分、430は区画文から垂下させ、431は交差部分、438はカーブ内部に渦巻き文が見られる。

445～451は横走する２～６本の沈線で区画を施す。449は天地が逆で横走沈線の下位に波状文が抽出される可能性がある。451は頸部に２本の横走沈線を巡らし、下位に波状沈線文を沿わせる。

452と453は交互刺突文を挟む沈線文、454は背割り隆帯、455は３本１組の沈線で文様帯を区画する。457は平行沈線により蛇行懸垂文を垂下させ、458は３本１組の沈線により方形区画を配し、交差部分に中央の沈線の先端を蕨手状とする。両方とも地文は撚糸文Ｌを充填する。

459～461は２本隆帯により胴部文様を区画し、上位を無文帯とする。459と461には懸垂文が垂下する。460と463は単節ＲＬとＬＲを交互で縦位に施文する。461の交差部分には渦巻き文が派生する。

462と463は２本１組の隆帯を垂下させ、462は撚糸文Ｌ、464と465は口縁部文様帯を３本の横走沈線で区画し、464は２本、465は３本の沈線で縦位区画する。466は隆帯による区画文内に縦位の沈線を充填させ、途中に渦巻き状文を挟む。

467～483は浅鉢形土器。467は復元口径48cmの浅鉢。大きく外反する胴部から直立気味に内湾する。口縁部は短く外反し、内面の口端部はやや突出する。文様帯は隆帯で区画され、上位を交互刺突文、下位に刻み目を施す。上下を結ぶ弧状の区画隆帯には矢羽状の刻み目を施す。区画内は沈線による渦巻き文や弧文で充填する。

468は復元口径41cmの浅鉢。大きく外反する胴部から「く」の字状に屈曲し、短く外反する無文の口縁部とする。文様帯は隆帯に刻み目を施す横長の方形区画を設ける。区画内に沈線を沿わせ、中央に交互刺突文を施す。

469と470は同一個体であり、469が470の右側で接合した。直線的に開く胴部から「つ」の字状に屈曲する口縁に移行する。口縁部に隆帯による文様の一部が残る。471と472は背割り隆帯により渦巻き文を配す。473は隆帯による楕円区画文に沿って刻み目を施す。区画内に沈線による細長い楕円文を配し、内部に刺突文を横位に連続させる。474と476は同一個体と思われる。刻み目を施す隆帯で文様帯を区画し、区画内を縦位の沈線で充填する。475は区画文内を沈線により渦巻き文と横走文を施し、渦巻き文を除く空間部に刻目を施す。477の文様帯は屈曲部と頸部に巡る刻目を施す隆帯で区画する。区画内を矢羽状の刻目を施す隆帯で連結し、沈線で渦巻き文や弧文、横走文で充填する。478は大きく外反させる無文の口縁部片。交互刺突文を施す隆帯で文様帯を区画する。

479～482は平行沈線か単沈線で渦巻き文を抽出する。479は頸部に円形刺突文を横走させて口縁部と区画する。頸部に朱彩が残る。480は渦巻き文に円形刺突文が添えられ、朱彩が施されている。483は屈曲部を鍔状に突出させ、楕円区画文内を単節ＲＬで充填する。

484は有孔鍔付土器で、断面三角形の鍔に６cm前後の間隔で円孔が貫通。内外面は丁寧に研磨されている。485の浅鉢形土器には円形貼付文を付す。内面に僅かではあるが朱彩が施されている。

486～490は側面に円孔を設ける器台形土器。487は雑な器面調整痕を残し、488は円孔に沿って沈線で加飾し、489は丁寧に器面を調整し、490の内面には指頭による調整痕を残す。

491～494は単節ＲＬの縄文を充填する深鉢。491は胴部中位で「く」の字状に屈曲する。492と493は同一個体と思われ、492は334と接合した。

495～506は沈線による懸垂文を１～３本垂下させる。496と497は先端の鋭い工具により細沈線で蛇行懸垂文を垂下させる。503と506は３本１組の懸垂文が見られる。

507～523は波状口縁を呈する深鉢である。波頂部が直立するものと外反するものがある。口縁部文様帯には隆帯により渦巻き文と楕円区画文が配され、波頂下に渦巻き文を置く。518には渦巻き文が見られない。

507は復元口径34.5cm、残存器高26.2cm。緩やかな４単位の波状口縁を呈する深鉢。口縁部文様帯は隆帯による渦巻き文と楕円区画文を入組み状に配する。胴部は２本１組の沈線区画による磨消帯と縄文帯が交互に垂下する。縄文は単節ＲＬを充填する。

508は復元口径29.6cm、残存器高11.5cm。４単位の波状口縁を呈し、大きく外反して開く胴部から内湾する口縁部に移行する深鉢。口縁部文様帯は深いなぞりの沈線で、波頂下の渦巻き文から派生した沈線が楕円区画文を区画し、その先端部分が渦巻き文として波頂下の渦巻き文に寄り添う。縄文は単節ＲＬを充填する。

509は渦巻き文に縄文帯を巻き込まない。521は波頂下の渦巻き文を作り出す隆帯上に２個１組で２カ所に円形刺突文を施す。522は波頂部を欠く深鉢。沈線により波頂下に渦巻き文を配すると思われ、胴部は３本１組の懸垂文を垂下させる。縄文は単節ＲＬを施す。523は区画内の一部の空間を円形刺突文で充填する。

524～544は平口縁を呈する深鉢で、口縁部文様帯を隆帯で渦巻き文と区画文を配するのが大半である。530は口縁部無文帯と楕円状区画文を断面三角形の隆帯で区画する。531は沈線部分を削り込む手法で区

画文を隆帯状に似せている。

534は復元口径30cm。残存器高12.8cmの深鉢。隆帯で区画された口縁部文様帯には渦巻き文と楕円区画文が配される。胴部は沈線で区画された磨消帯と縄文帯が交互に配され、蛇行懸垂文が垂下する。

543は隆帯による横長の方形区画文を配している。545は沈線により区画文等を抽出する。

〈ここで訂正〉527の渦巻き文下の沈線区画(空白部分)は縄文帯、538は拓図が天地逆である。545は沈線により文様帯を区画する。施文は単節ＬＲを充填する。

546～561は口縁部文様帯の一部と胴部が残る個体である。沈線や隆帯により口縁部文様帯を区画し、その下方に沈線により懸垂文間を磨消帯と縄文帯を交互に配するもの。546・547・549は口縁部文様帯の区画文内に円形刺突文等を充填する。548は隆帯上に円形刺突文を連続させる。557は縄文帯に僅かであるが蛇行懸垂文が見られる。

562～586・588～590は沈線により懸垂文間を磨消帯と縄文帯を交互に配する胴部片。587は２本の隆帯を併走させて垂下させる。

591～593は沈線で矢羽状文を施すもの。593は隆帯により口縁部文様帯を区画する。区画内に渦巻き文と斜位の沈線を充填する楕円区画文を配す。胴部は２本の垂下する隆帯で区画し、空間を沈線で矢羽状に充填する曽利式。

594は掲載場所が違う。沈線による区画文内に弧文を重ねる破片で、後期の所産と考えられる。

595は櫛歯状工具による条線を縦位に充填し、沈線で渦巻き文等を施す胴部片。596は区画内を縦位の曲水文で充填する口縁部片。597は区画文内と頸部に雨垂れ状に刺突文を充填する。598は口縁部文様帯を隆帯で区画する。

599は隆帯で区画された幅狭の口縁部文様帯に沈線で爪形状文を連続させる。胴部は細かい条線文等で充填し、区画隆帯から沈線を垂下させて文様を抽出する。中期の所産と思われるが類例の増加が望まれる一点である。

600～607は口縁部の区画文内を沈線で充填する。600と601は同一個体で、600が601の右側で接合した。隆帯による細長い楕円区画文内に沈線を沿わせ、内部を沈線で矢羽状に充填する。区画文の連結部分から沈線３本を垂下させる。602～604・606・607は区画文内を縦位の沈線で充填する。602と607には区画文の下位に条線文が施される。605は短沈線で充填し、区画の連結部から１条の沈線を垂下させる。

608は上位２列、下位を１列の円形刺突文を挟む平行沈線で文様帯を区画する。609は偏平な隆帯で口縁部文様帯を区画し、610は区画文内を刺突文で充填する。611は波状口縁を呈し、単節ＲＬの縄文を充填する区画文を配し、その下位になぞりの沈線で渦巻き文を抽出する。612は１列の円形刺突文を挟む平行沈線で文様帯を区画する。

613は細長いねじれの突起を付し、その突起下に円文を配し、その左右に口縁に沿って円形刺突文を巡らす。614は角状の突起を付し、その突起の頂部から口縁に沿って太沈線を施す。突起下には沈線で区画された磨消帯を垂下させる。615は楕円区画文を沈線で区画し、先端部を蕨手状とする懸垂文の一部が見られる。616は舌状の突起を呈する。渦巻き状の深い抉りを施し、その下位に沈線による文様を抽出する。

617は波状口縁を呈し、沈線により渦巻き文と懸垂文を施す。

618は沈線により楕円区画文と懸垂文を施す。619と620は交互刺突文を挟む平行沈線で文様帯を区画する。621は復元口径12.5cm。幅の狭い口縁部文様帯は隆帯による２つの円文を挟んで左右に渦巻き文を配す。下位には沈線による懸垂文を垂下させる。

622は高まりのある隆帯により楕円区画文を配し、区画内を刺突文で充填する。口縁に沿う隆帯に突起部がある。大木系の所産と考えられる。

623は方形の突起で、外面は口縁に沿って沈線を巡らし、内部を単節ＲＬの縄文で充填する。内面には隆帯で渦巻き文を付す。624は口縁部文様帯の下位を隆帯で区画し、区画内に深みのある沈線で渦巻き文等を施す。625は隆帯による楕円区画文内に円形刺突文を充填し、３本１組の平行沈線による蛇行文等を抽出する。

626は山形を呈する口縁部片。地文は櫛歯状工具による条線で縦や斜位に充填する。文様は幅の一定しない雑な粘土紐を使用している。頂部に細長い楕円文を付し、そこから歪んだ円文や垂下文と横位の区画文を施し、粘土紐には沈線を沿わせる。内面には沈線に沿って上方に突出する部位が残る。帰属不明な土器片であり、今後の資料増加に期待したい。

627は口唇部を尖らせ、内面に稜をもつ。文様の楕円区画文部分は隆起し、縄文ＲＬを施す。628は丸みを呈する波状口縁で、口縁に沿って無文帯を設け、その下位を単節ＲＬで充填する。629は２本１組の沈線による区画文を施す。630は斜位の条線文を地文とし、幅の狭い口縁部文様帯に沈線で円文と刺突文を施す。円文の下方に沈線文を垂下させる。この円文の上方は突起付されたと思われる剥がれがあり、円文は渦巻き文の可能性がある。

631は口縁部無文帯の下位に３本１組の沈線を横走させて文様帯を区画する。区画文内には沈線を蛇行させて垂下させる。632は小さい舌状突起を付し、沈線を雑に横走させる口縁部片。633は器面が荒れているので詳細は不明であるが、口唇直下に隆帯を巡らせ、口縁に沿って２条の横位線文、胴部に懸垂文を垂下させる。

634～636・643・647・648は沈線文間に円形刺突文を連続させる。634の刺突文は径が1.3cm前後を測る大きい刺突文で、凹は円錐形とする。635は波状口縁を呈する口縁部片で沈線文間に円形竹管文を挟む。636・647・648は先端が丸い工具による刺突文。636は山形を呈する口縁部片で区画の下位に縦位の条線を施す。

637は口縁部無文帯の下位に３本１組の沈線を横走させる。638は２本１組の沈線を口唇部下に巡らせ、下位には波状文を抽出すると思われる。639は口縁部下に刺突文を横走させ、下位に３本１組？の沈線で文様を抽出する。640は櫛歯状工具による縦位の条線文を地文とし、沈線により鋸歯状文を施す。641は丸みを呈する波状口縁と考えられ、渦巻き文等を沈線で抽出する。642は口縁部下の沈線文間に円形竹管による交互刺突文を施す。643は横走する沈線文間に円形刺突文を連続させ、重層させる。

644～646の口縁部片は三列で円形刺突文を横走させる。644～646は同一個体と思われ、下位に櫛歯状工具による条線を縦位に充填する。

649は復元口径16cm、残存器高16cmの深鉢。口縁部を短く外反する無文帯とし、隆帯により文様帯を区画し、胴部下半は無文とする。文様帯は隆帯により方形区画を配し、上位区画を押圧によるヒダ状隆帯とする。単節ＲＬの縄文の施文は隆帯の貼付後（隆帯上にも縄文が見られる）に行われている。

650は復元口径24.5cm、残存器高24.5cmの深鉢。直線的にやや外反し、緩やかに内湾する口縁に移行する寸胴の深鉢。調整痕を残す無文の口縁部は雑な横位の沈線で区画される。この沈線には円形凹文が間隔を開けて施されている。胴部下半には単節ＲＬの縄文が施され、櫛歯状工具による不揃いな条線文が縦位に充填されている。後に雑な沈線による逆Ｕ字状懸垂文を垂下させる。

651は口径28.8cm、残存器高23.7cmの深鉢。細く括れ気味の胴部下半から上方に向けて外反し、口縁部を

直立とする。櫛歯状工具による条線を縦位に充填する。

652～656の口縁部片は横位の沈線で区画され、上位を無文帯とし、下位を縄文で充填する。652と654は磨消帯を挟んで区画文が配されている。655は朱彩が部分的に残る。

657～686は櫛歯状工具による条線を施す。657～662・665の口縁部は横位の沈線で区画され、上位を無文帯とし、下位を櫛歯状工具による条線で充填する。657～661は太沈線で区画し、661には部分的に沈線に併走して条線が施されている。662は口縁部に突起が付された様な剥がれが残る。663はなぞりの浅い沈線により区画文が配され、区画内を縦位の条線で充填する。

664・666～668の口縁部片は無文帯と条線間に区画を施さない。669・670・674は頸部に巡る横位の隆帯により区画され、下位に櫛歯状工具による縦位の条線、669と670は波状に充填する。

671～673・675は口縁部文様の区画内を縄文で充填し、下位を櫛歯状工具による条線を充填する。675・676・678～680には曲水文等が施文され、676は曲水文を施文後に２本１組の沈線文を垂下させる。677の胴部下半片に単節縄文ＲＬを充填し、下位に条線を施す。678と682は沈線区画による条線文帯と磨消帯を垂下させる。681は間隔をもって条線を施す。685は縦位に充填された条線に沈線で蛇行懸垂文を垂下させる。

687～714は胴部の縄文帯に蛇行沈線を垂下させている。687は４単位の波状口縁を呈する深鉢であるが、波頂部を欠く。口縁部文様帯は抉りの深い沈線で抽出する。胴部は沈線による懸垂文間を磨消と縄文を交互に配し、縄文帯に蛇行沈線を垂下させる。地文は単節ＲＬを充填する。

688は復元口径28.8cm、残存器高21.3cm。４単位の波状口縁を呈する深鉢で、口縁部文様帯は隆帯による渦巻き文と楕円区画文が入組む。胴部は沈線による先端部を蕨手状とする蛇行懸垂文と縄文帯を垂下させる。地文は単節ＲＬを充填する。

689は寸胴形の深鉢で、口縁部の上方と底部を欠く。口縁部と胴部文様帯の区画は、円形刺突文を挟む横走沈線で施される。口縁部文様帯は沈線により渦巻き状の幾何学文を抽出し、胴部文様も沈線により懸垂文間を縄文帯と磨消帯を交互に配し、縄文帯に蛇行懸垂文を垂下させる。縄文は単節ＬＲを充填する。

690は底径6.5cm、残存器高11.1cmの深鉢。沈線による懸垂文間を磨消と縄文を交互に８分割で配し、縄文帯に蛇行沈線を垂下させる。地文は単節ＲＬを充填する。

691～708・711～714は沈線区画による磨消帯と縄文帯を交互に垂下させ、縄文帯に蛇行懸垂文を施す胴部片で、692や702・704の様に軽いナゾリのものもある。699・704・705・707の磨消帯は３本１組の沈線を垂下させる。709と710の磨消帯には円形刺突文を連続させる。

715～718は口唇部やその直下に単列で刺突文を巡らせる。715は直立気味に内湾する口縁部に４単位の小波状突起を付す。口縁部下に巡る円形刺突文で口縁部無文帯を区画し、２本１組の逆Ｕ字形の沈線区画を磨消帯と先端部を蕨手状とする懸垂文を垂下させる。716～718も２本の沈線により区画された磨消帯で文様を抽出する。

719～728は磨消帯に沈線によるＳ字状文や蕨手状文等を垂下させる。720は沈線区画による磨消帯と縄文帯を交互に垂下させる。磨消帯には上下に蕨手状文が抽出され、上位でＵ字状区画内に施されている。

721は縄文帯に先端を蕨手状とする蛇行懸垂文、磨消帯に渦巻状文を施す。722と726は同一個体かも知れない。縄文帯は単節ＲＬを充填する。

729～740は平口縁を呈する深鉢。737を除いて口縁から胴部上位にかけて太沈線で波状文を描き、縦Ｓ字状文(730・731)や先端部を蕨手状とする懸垂文を垂下させる。

729は復元口径27.8cm、残存器高16cmの深鉢。738と同様に沈線による幅広のＹ字状の磨消帯を垂下させ、区画内に先端部が蕨手状とする懸垂文を加飾する。縄文は単節ＲＬを充填する。

738は復元口径24cm、器高31.2cm、底径5.7cmの深鉢。729に似るが口唇直下に１条の沈線が巡る。沈線による幅広のＹ字状の磨消帯を６単位で垂下させ、Ｙの上部を構成するＶの下位から先端部を蕨手状とする懸垂文を垂下させる。縄文帯には先端部が蕨手状として下方を蛇行させる懸垂文が垂下する。縄文は単節ＲＬを充填する。740は復元口径23cm。口唇直下には沈線が巡る。

741～744は両耳壷と考えられる。741は口縁部を無文帯とし、隆帯により渦巻き文と楕円区画文を抽出する。742と743は内湾する胴部上位に沈線により区画文を配す。

745～753は中期終末～後期初頭に比定される加曽利Ｅ式の影響を継続する土器群である。高まりの弱い隆帯による磨消帯と縄文帯を区画する。745と746は同一個体と思われ、745には横位の区画隆帯から逆Ｕ字文を区画すると思われる隆帯が垂下する。地文は無節の縄文を施す。747～749は同一個体。747に見られる逆Ｕ字文と幅広の磨消帯に垂下するＵ字状文がある。地文は単節ＲＬを施す。

752はＪ１Ｈの埋設土器。底径11cm、残存器高37.3cm。長く垂下する隆帯で幅広の縄文帯と磨消帯を区画する。縄文は単節ＬＲを施す。

754と755は壷形を呈すると思われ、755は橋状把手を付し、隆帯による渦巻き文を抽出する。756は復元口径20cm、器高33.5cm、胴部最大径29.5cmの両耳壷。２本１組の微隆帯により渦巻き文を区画し、区画内を磨消し、縄文は単節ＬＲを施す。称名寺式期の所産。

757は沈線による細長い楕円区画文を対称的に配し、区画内は磨消しを施す。地文は単節ＬＲを充填する。758は口唇部下に円形刺突文を沿わせ、沈線による楕円区画文？を抽出する。759も沈線による楕円区画文？を抽出し、区画内を単節ＬＲを充填する。器面は丁寧に研磨され、小突起を付すと考えられる。

760は円形刺突文を挟む横走沈線で文様を区画し、沈線に沿って１～３段の円形刺突文と単節ＬＲの縄文を施す。761は４単位の小波状を呈する口縁部片。波頂下を突起させ、口唇部直下に刺突文を連続させる。沈線区画による磨消帯で文様を抽出する。地文は単節ＬＲを充填する。

762と765は同一個体であり、762が765の左側で接合。４単位の小波状を呈し、隆帯により区画された磨消帯で逆Ｕ字形文を配す。地文は単節ＲＬを充填する。763は緩やかな波状を呈する口縁片で、口縁部無文帯を隆帯で区画したり、楕円区画文を抽出する。

766は小波状を呈する口縁部片で、隆帯により口縁部無文帯を区画する。波頂下で隆帯を突起させ、沈線区画による磨消帯と縄文帯で文様を抽出する。地文は単節ＲＬを充填する。767と768は口縁部無文帯を横位に巡る隆帯で区画する。

769は口縁部無文帯を断面三角形の隆帯で区画し、下位を無節の縄文で充填する。

770～774は「関沢型称名寺類型」と呼称されているものである。770は筒状突起を付し、頂部から内面にＬ字形に孔が貫通する。突起外面には頂部からＪ字形に隆帯を垂下させ、口縁部無文帯を区画する隆帯と接する。Ｊ字形の下にも隆帯による区画文が派生する。771～774は沈線を中央に施す幅広の隆帯でＣ字状貼付文を付す波状口縁部片。771と775はＣ字状貼付文の先端部に円形刺突文を施す。口縁に沿って円形刺突文を１列～２列挟む区画帯が巡る。775と776はＣ字状貼付文を付すと考えられる波状口縁で円形刺突文を挟む区画帯で口縁部無文帯を区画する。

777と779は波状口縁を呈し、777は隆帯、779は沈線で文様帯を区画する。778は波状を呈する口縁部片か

も知れない。沈線区画による楕円文に刺突文を配し、区画内を縄文で充填する。780は口縁部下に屈曲部を有する。上方を無文帯とし、下位に無節の縄文を充填する。

781は括れ部の無文帯を挟んで上下の二段に無文でＪ字文連結する。782も781に似て無文帯下に無文で文様を抽出する。783は微隆帯により口縁部無文帯を区画し、下位に単節ＬＲを充填する。784は隆帯による区画文内に沈線を沿わせ、内部を単節ＬＲで充填する。785は刺突を施す隆帯を垂下させる。器面には櫛歯状工具による縦位の条線文を施す。

786～809は２本１組の沈線間に縄文を充填する縄文帯や無文帯でＪ字文等の文様を抽出する。

786と788は口縁上位に無文帯があり、その下位に縄文帯が巡り、そこからＪ字文が垂下する。788は復元口径28cm、残存器高13.2cmの深鉢。外反して開く胴部から直立気味に内湾する口縁部に移行する。

791は上下二段でＪ字文を連結し、下段では同文様が横位に連続することが看取される。797は縄文帯によるスペード鉤Ｊ字文が抽出される。

810は円形刺突文を施す隆帯を波頂から垂下させる。波頂の内面にも円形刺突文を施す。811～813は沈線による区画を縄文帯と磨消帯とする。811と812は同一個体と思われ、縄文帯に円形刺突文を連続し、813には列点文を施す。

814は口径26.8cm、残存器高15.2cmの深鉢。やや幅広の口縁部無文帯下に４単位の橋状把手を付す。把手下端は区画隆帯と連結し、橋状のアーチ部間には沈線が横走する。この沈線と区画隆帯の空間には円形刺突文を２段に施している。隆帯下位の胴部には沈線区画による磨消帯で逆Ｕ字文（波状文）が４単位配されている。地文は無節Ｌを充填する。

815～822・828～839・841・849～866は２本１組の沈線で文様を抽出し、その多くは列点文を施すが、833や841の様に充填気味のものもある。835は列点文を挟まない。837には先端部がやや丸みのあるスペード文、838には円形刺突文を施す隆帯が貼付されている。839にはＪ字文の先端らしき部位が見られる。

815～822は口縁に併走する沈線で文様を区画するものや区画文の無い口縁部片。815は横走する２本の沈線間に列点文を挟む。816は横走する１本の沈線で区画され、817は列点文を挟む沈線が２列併走する。818は幅広の無文帯の下位に列点文を挟まない２本の沈線が横走する。

819～822・824は口縁部文様帯を区画する横位沈線が巡らないもの。819と820は挿図より直立すると思われる。822は口縁部を肥厚させる。824は直立気味に内湾する口縁部で口唇部を平坦とする。

823は円孔を穿つ半円筒形の突起。頂部の半月状平坦面には両端に円形刺突文をもつ沈線が巡る。外面の下位には円孔が斜め上方に穿たれ、その両脇に円形刺突文を配し、そこから口縁に沿って沈線が巡る。円孔の上位には２本沈線と中央に円形刺突文を施す円文を貼付する。

825は小波状を呈し、波頂下に２つの円形刺突文を施し、その片方の脇から口縁に沿って沈線が巡る。826は竹管による小さい円形刺突文を連続させる。827は突起部に大小の円孔を設け、大きい円孔から沈線を口縁に沿わせる。

828～838は沈線文間に列点文や刺突文を充填する。833は雨垂れ状に刺突文を充填する。

840は底径５cm、残存器高３cm。注口土器の体部下半であろうか。沈線により区画された磨消帯と縄文帯で文様を抽出する。841は復元口径13.4cm、残存器高8.7cmの小型の深鉢。直立気味の胴部から口縁部を短く外反させる。沈線区画により文様を抽出し、区画内に刺突文を施す。

842は口径28.8cm、残存器高38cm。底部から胴部下半はやや外反し、中位から直線的に口縁部に移行する深鉢で口唇部を尖らせる。文様帯は横走する沈線で区画される。その下位に先端部に文様を抽出し、下

端を開放する懸垂文を垂下させる。先端部の文様はスペード文やＪ字文等が抽象化されたものであり、称名寺式期の終末～堀之内式初頭と考えられる。

843は円孔を穿つ突起部で、円孔の両側に抉れの深い円形刺突文がある。波頂から孔の周囲を巡り平口縁に向けて「つ」の字状に沈線を施す。844は沈線を横走させ、口唇部下位の２本間には斜位の刻目を充填する。845は口縁部に横走する２本の沈線が連結し、円形刺突文を施す。846の突起部には円孔と円形刺突文が施され、口唇下に沈線が巡る。847は口唇先端部を尖らせ、沈線を挟んで「く」の字状に屈曲する口縁部。848は口唇下に円形凹文を沿わせ、併走する２本の沈線を垂下させる。

849～851は沈線間に列点文や刺突を施す。852は尾の長い刺突を施す。853・854・856はＪ字文を垂下させると思われる。856と860は同一個体と思われる。858はスペード文？を抽出すると思われる。

867～973は堀之内式期に帰属する。871は円形刺突文を基点として渦巻き文を左右対称となる様に配す。874は頸部に刻み目を施す隆帯を２条巡らし、８の字状貼付文を付す。下位に沈線による渦巻き文等を抽出する。876は頸部に平行沈線を巡らせ、下位に弧文を重層させたりしている。879は平行沈線により渦巻き文を抽出する。880には方形区画を配す。

883・884は垂下する蛇行沈線文を施す。885は隆帯を垂下させ、区画文内を沈線で充填する。886～888は１～３本の沈線を縦位に施し、区画文内を２分したり、区画文とする。

889～893は磨消縄文を用いて沈線文で菱形区画文の内部を重層するもの。894は朝顔形深鉢の口縁部片。口唇部に指頭による内部への押し込みがあり突出する。内面の突出部両側に刺突文があり、１条の突帯が巡る。

895～919・927・928は刻み目隆帯が１～２条巡る口縁部片でその大半に８の字状貼付文が付くと考えられる。文様は帯縄文により文様を抽出するが、詳細は不明な破片が多い。

895は波状口縁を呈する。波頂下に円孔を設け、孔の回りを隆帯が巡る。898は口唇部内面を方形状に肥厚させ、円形刺突文を施す。

905は内面に突帯があり、外面の隆帯には縄文原体を斜位に押して刻目に似せる。911は内面に弧文と３条の横走沈線を施す。915は口唇部内面を突帯状とする。

918は併走する２本の刻み目隆帯が口縁部に巡る。隆帯間には８の字状貼付文が付され、小突起下では楕円文が配される。隆帯と楕円文との結合部分の四方には円形刺突文が施される。楕円文からは連続する刺突文を施す縦位隆帯が垂下する。その左右には方形区画文が配され、一部に渦巻き文状のモチーフが看取される。小突起の内面は横Ｓ字状文が円形刺突文を抱いたり、先端部に施している。

927と928は同一個体で復元口径37.5cm、残存器高28.5cmの深鉢。口縁は緩やかな波状気味とする部分と凹む部分がある。波状部分は円文、凹み部分には刻み目隆帯が舌状に垂れている。文様帯は縄文帯と磨消帯で入り組渦巻き文を抽出する。縄文は単節ＬＲを施す。

931～934・938は２条の沈線で区画する縄文帯と磨消帯で三角形文を抽出すると考えられる口縁部片。935・937は同一個体。外反して開く胴部から口唇部を嘴状に屈曲させる。２条の沈線で区画する縄文帯と磨消帯で入り組渦巻き文を抽出する。

936の胴部片938は三角形区画文内を縄文帯と磨消帯の三角形文で充填する。

940は緩やかな波状口縁を呈し、内面に円形刺突を２箇所に施す。

941・942・944は８の字状貼付文を付す。944は932と同一個体の可能性がある。945は突起を付す口縁部

片。

943は平口縁を呈し、口唇直下の内面に浅い窪みを巡らす。単節ＬＲ縄文を充填した後、２本沈線により横位の区画文とその空間を鋸歯状に施して底辺が交互する三角形文を抽出する。

946・947・950・951は一条の沈線を巡らせ、沈線でおそらく三角形の文様を抽出すると考えられる。948の口唇部には指圧により内傾させ、内部に円形刺突文をその両側は刻目を施す。

949は口唇に沿って１条の沈線を巡らせ、瘤状の貼付文から２本１組の弧文を派生させる。内面には雑に３本の沈線が巡る。

952は斜位の沈線、953は沈線文間に三角形文を配す。

954は復元口径28.3cm。球状気味の胴部から緩やかに外反し、口唇部を内傾させる。頸部に巡る半裁竹管による平行沈線で文様帯を区画し、平行沈線文上に８の字状貼付文や連続刺突文を施す隆帯を付す。胴部文様は平行沈線により、貼付文下に半円文、その下位に縦位に弧状文を垂下させたりする。地文は単節ＲＬを施す。

955～973は三角形区画文や菱形区画文、渦状文を入組とするもの。

974～1005は加曽利Ｂ式期に帰属する。974は口縁部に隆帯による小突起を付す。強く内湾する尖り気味の口唇とし、内面の口唇直下に突帯が巡り、その下方に４条の横線を巡らせ、３段の幅狭の縄文帯を作り出す。外面の口唇直下の屈曲部に沿い沈線が巡り、口唇部と屈曲部に斜位の刻目を施す。外面も４条の横線を巡らせ、３段の縄文帯を作り出し、外面に縦位の沈線で区切る。975は口唇部は刻目を施して鋸歯状とする。内面の突帯の間に列点文を巡らす。その下位に４条の沈線が併走する。外面は沈線区画による縄文帯と沈線文帯を２段に繰り返し、沈線文帯には雨垂れ状の刺突文を段違いで垂直に施す。976の突起は上部を鍔状に突出させ、下位に貫通孔を設ける。鍔状の突出部と裾部に円形刺突文を施し、区画上部を連続刺突文と横位沈線が巡り、その下位に対弧文を配す。977は沈線区画による縄文帯をやや斜位の沈線で区切る。978は縄文帯を縦位の沈線で区切る。

981～988・990・991は外反する頸部から屈曲部を設けて無文の口縁部を直立気味や内湾させる深鉢で屈曲部には２条の沈線で区画され、連続する刺突文が施されている。屈曲部の内面には１～２条の沈線が巡る。

982は対弧文、987は円形の凹みを施す突起と対弧文が見られる。989は鉢形土器。先端部が丸い工具で円形文を凹ませ（内面に窪みを整形する時に押された突出部分がある）、それを円形の沈線で囲む。995の外面は無文で、内面に文様がある。口唇部は尖り気味とし、口唇部の内面に斜位の刻目を施し、その下位に断面が蒲鉾状の突帯が巡る。さらに下位には密に平行沈線を多段に併走させ、交互に細かい斜位の刻目を施す。996は浅鉢形土器と考えられる。口縁部は「く」の字に屈曲し、口唇部は鋸歯状となる様に刻目を施す。口唇部直下の内面に列点文、そして断面三角形の突帯が巡る。その下位は、995と同様に平行沈線多段に併走させ、交互に細かい斜位の刻目を施し、下位はやや幅広の縄文帯とする。

1002は算盤玉状に張り出した屈曲部。下位を無文とし、屈曲部に縄文帯を巡らせ、弧状の磨消縄文とその連結部に円形凹文を配す。1003は頸部上位に未調整部分がある。

1005は研磨された胴部は直立気味に内湾し、頸部で「く」の字形に屈曲する。口縁部は緩やかに外反して開く深鉢である。胴部最大径は25.7cm。頸部に太沈線が巡り文様帯を区画し、縦に連なる対弧文を配する。地文は単節ＬＲを施す。

1006～1025は後期の粗製土器等である。1006～1012は縄文施文が見られ、1011は口唇部を尖らせる。その他は口唇直下の内部に沈線が巡る。

1013～1019は縦位や斜位に条線文や沈線を施す。1013はナゾリの痕跡を残し、1014は口唇部を丸くする。1016は1.2cm幅の平行沈線を下～上位方向に施す。1017は１本描きの沈線、1018は櫛歯状工具？による多条細沈線で格子目文を抽出する。1019は雑に条線文を施す。

1020～1022は多条細沈線で曲水文等を抽出する。1023は横位にナゾリの痕跡を残す。1025はミニチュア土器で、器面は研磨されている。

1026～1038は網代痕を有する後期の底部片。

1039～1057は後期の注口土器。1039は算盤玉の器形を呈する。下位を無文とし上位を文様帯とする。口縁に沿い把手下に縄文を施文する幅１cm前後の偏平な隆帯を付す。把手下はX字状とし、交点に円形刺突文を施す。この隆帯下から屈曲部は沈線区画による縄文帯と磨消帯で三角形や円形の入り組み文を抽出する。把手は1052に似るものであり、注口は把手下に付される。

1040は沈線区画による頸部に連続する刺突文を挟む沈線が巡り、沈線区画内を縦位の短沈線で充填する胴部文様が残る。口縁部と胴部を繋ぎ三角形の橋状把手を付す。側面と縁に沿って沈線が施され、接合部分の両端には円形刺突文を設ける。口縁部との接合部分に施された円形刺突文は８の字状貼付文の端となり、隆帯が文様を区画する。隆帯上には単節ＬＲを施す。

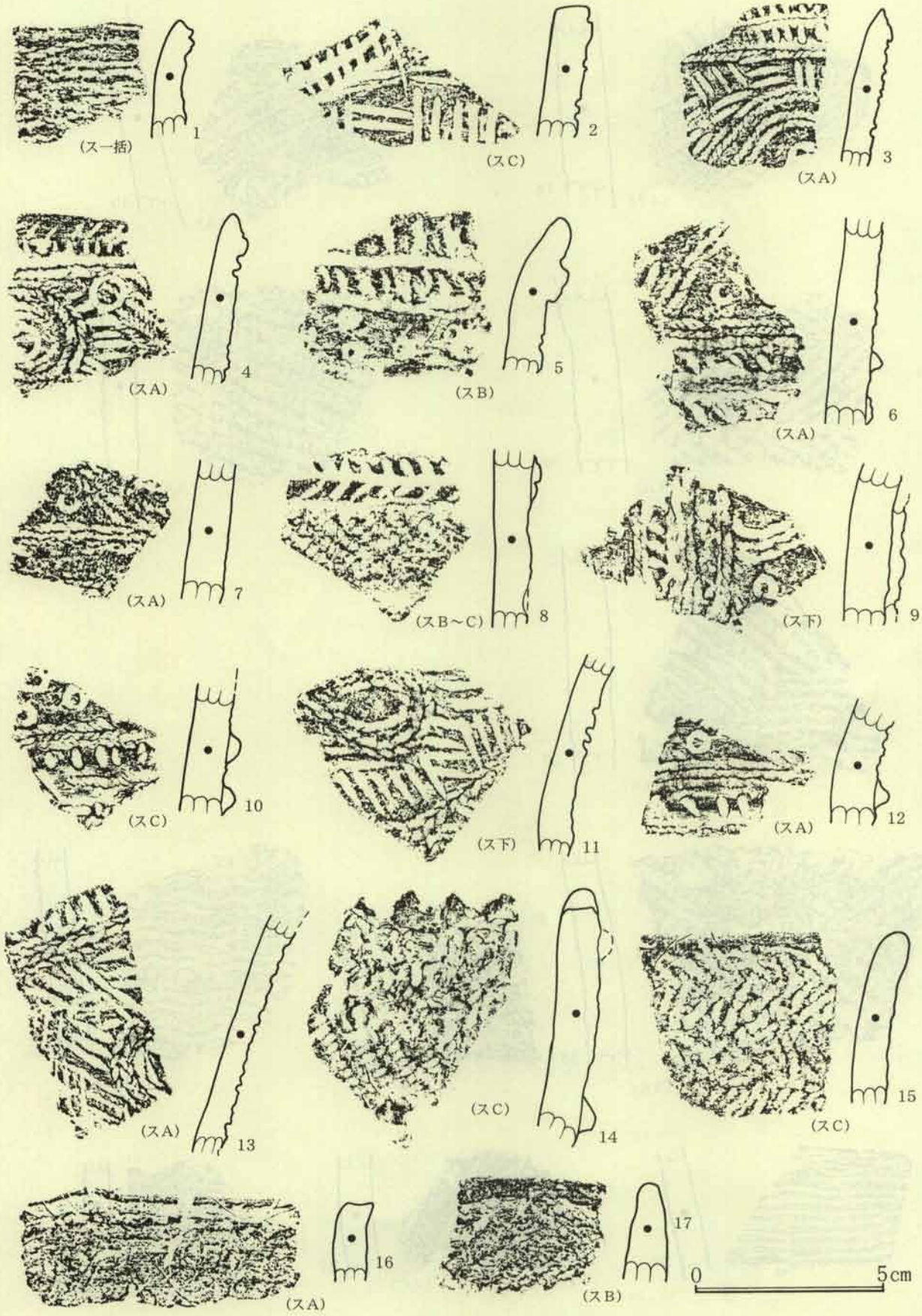
1041・1042と1047は算盤玉の器形を呈する屈曲部分で、縄文帯で文様帯を区画する。1041と1047は区画文内を沈線で重層的に充填する。1042は沈線で同心円文か渦巻き文を配す。1043は上げ底状の底部から緩やかに内湾する体部へ移行する注口土器と思われる。外面は研磨されて黒色の光沢を放ち、横位に沈線が巡る。1044は注口土器かミニチュア土器か不明である。隆帯により文様帯を区画し、渦巻き文を配す。

1045は沈線による渦巻き文と重層する区画文を抽出し、幅狭の縄文帯も見られる。1046は注口と体部の接合部分。体部には沈線区画内を縄文で施したり、平行沈線を集合させて文様を抽出する。1048と1049は注口片。1049は丁寧に研磨されて、光沢がある。体部と接合部に隆帯を巡らし、下方の付け根部分に８の字状貼付文を付す。1050と1051は三本一組の沈線で文様を抽出する。

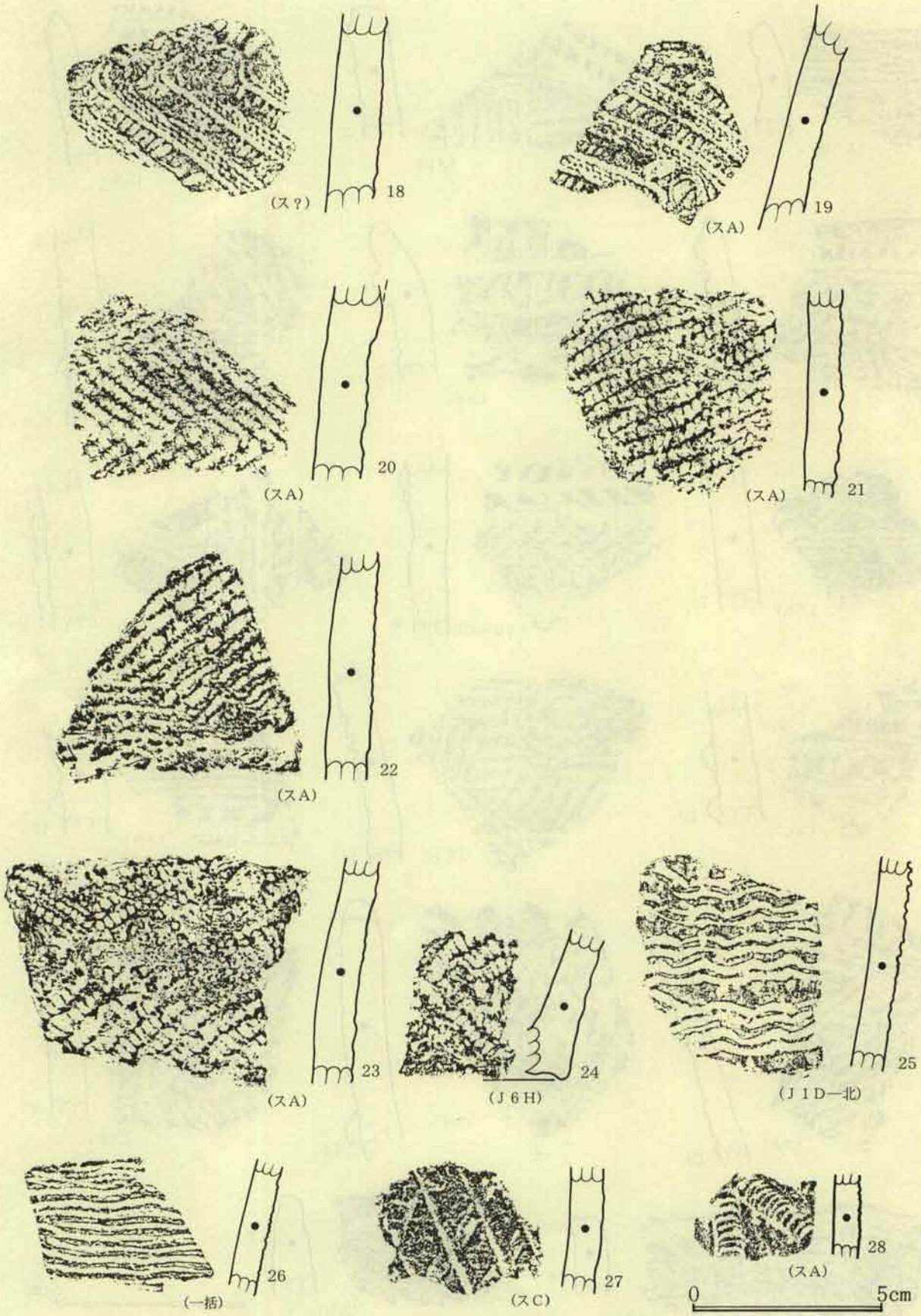
1052の把手は偏平な板状を呈し、先端部を杓文字状に丸くする。1053は体部上半を文様帯、下半を無文とし、注口の接合部分が見られる。文様帯は２本１組の沈線間に縄文を施す鋸歯状文を横位に巡らし、その空間に三角形文を配す。1054は平行沈線による弧文を重層させたり、Ｓ字状入り組文を施す。

1055は注口の接合部分にＳ字状入り組文を巡らす。1056は細沈線で文様を抽出する。1057は円形の穴のあく吊り手を有し、その頂部下には横８の字状貼付文がある。幅１cm前後の条線文帯で文様帯を抽出し、部分的に細沈線で蛇行懸垂文やＳ字状入り組文を加飾する。

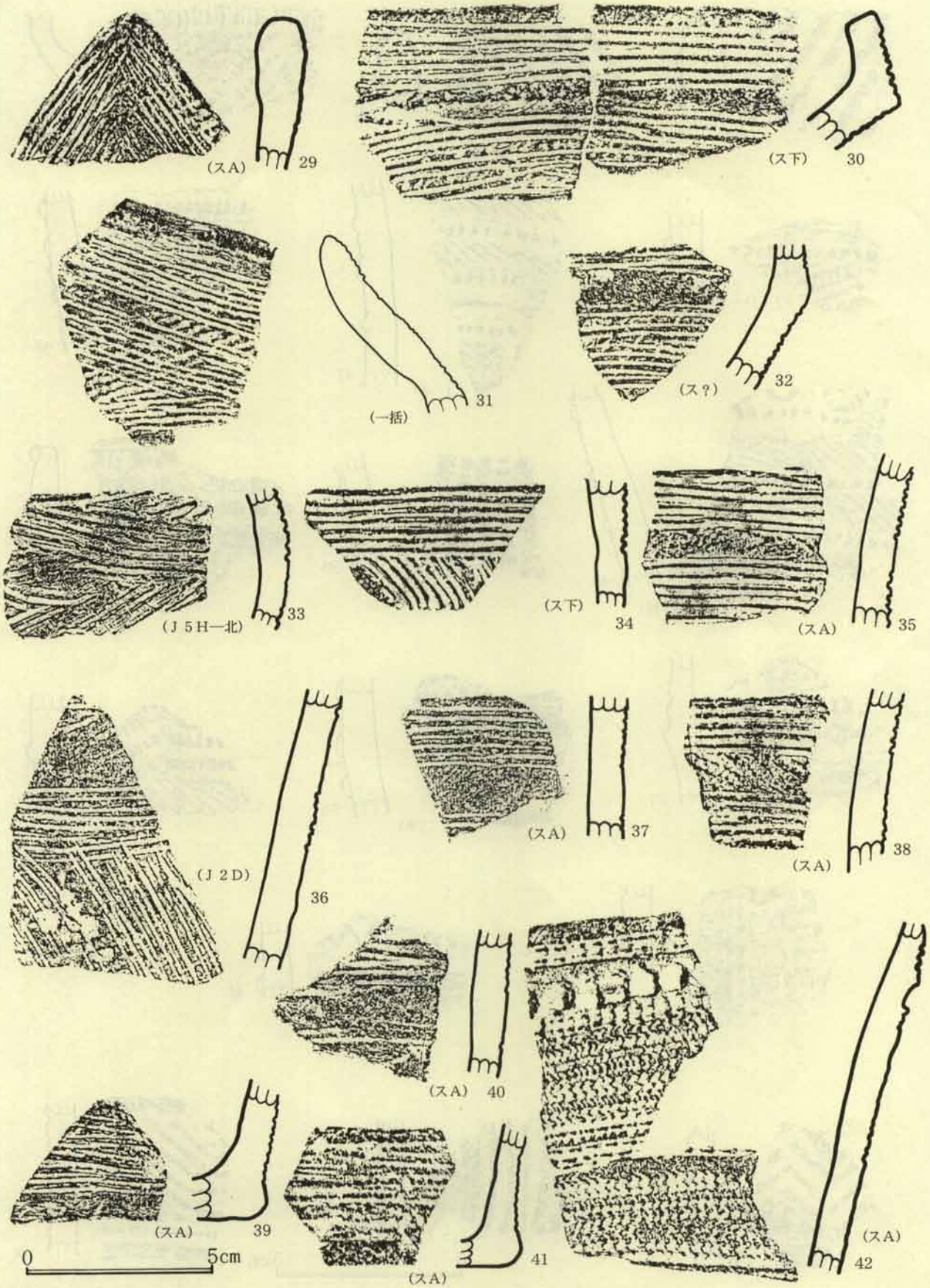
1058～1324は《付表》に記す。



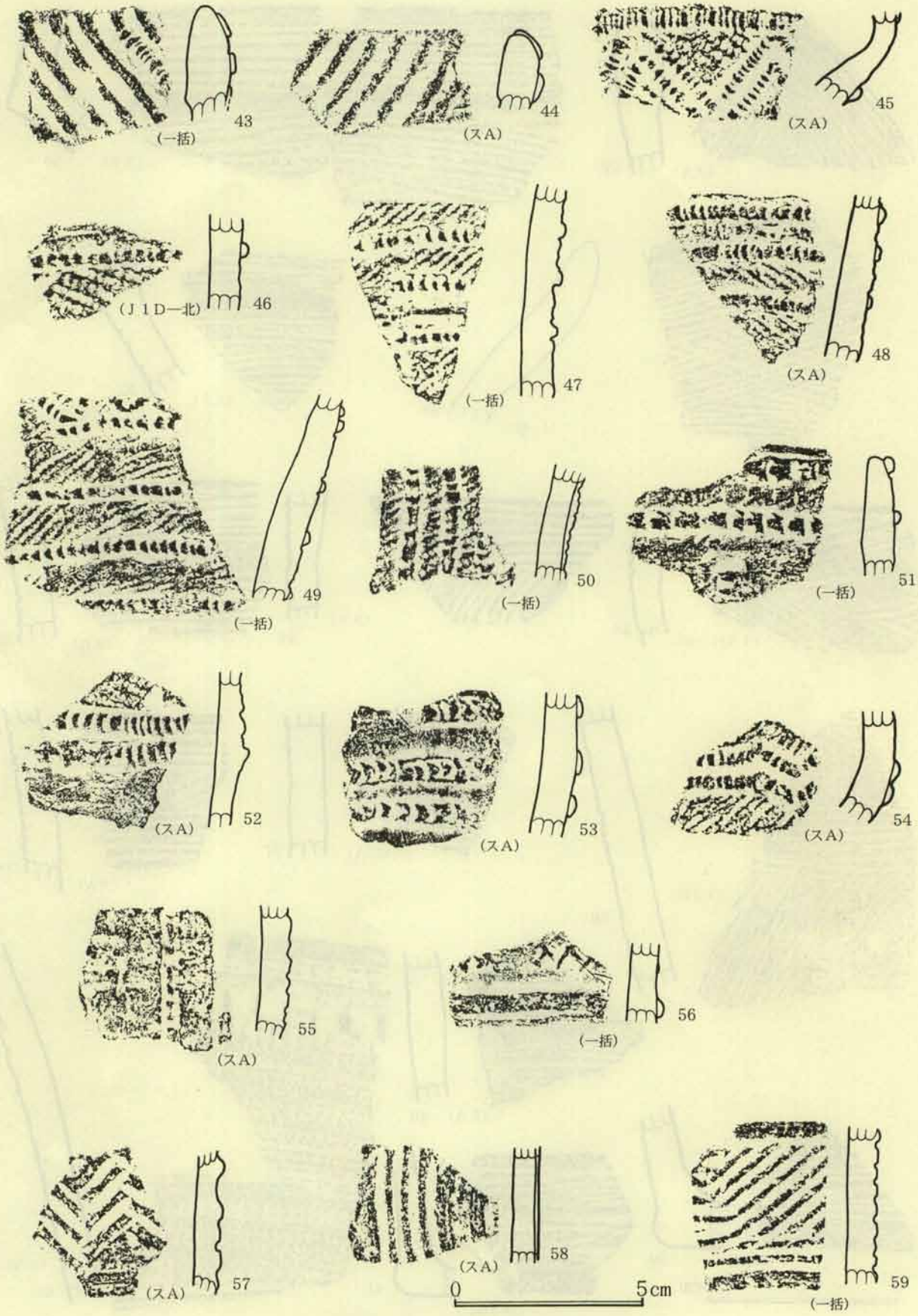
第27図　C地点遺物(1)　前期　(二ッ木式・関山式等)



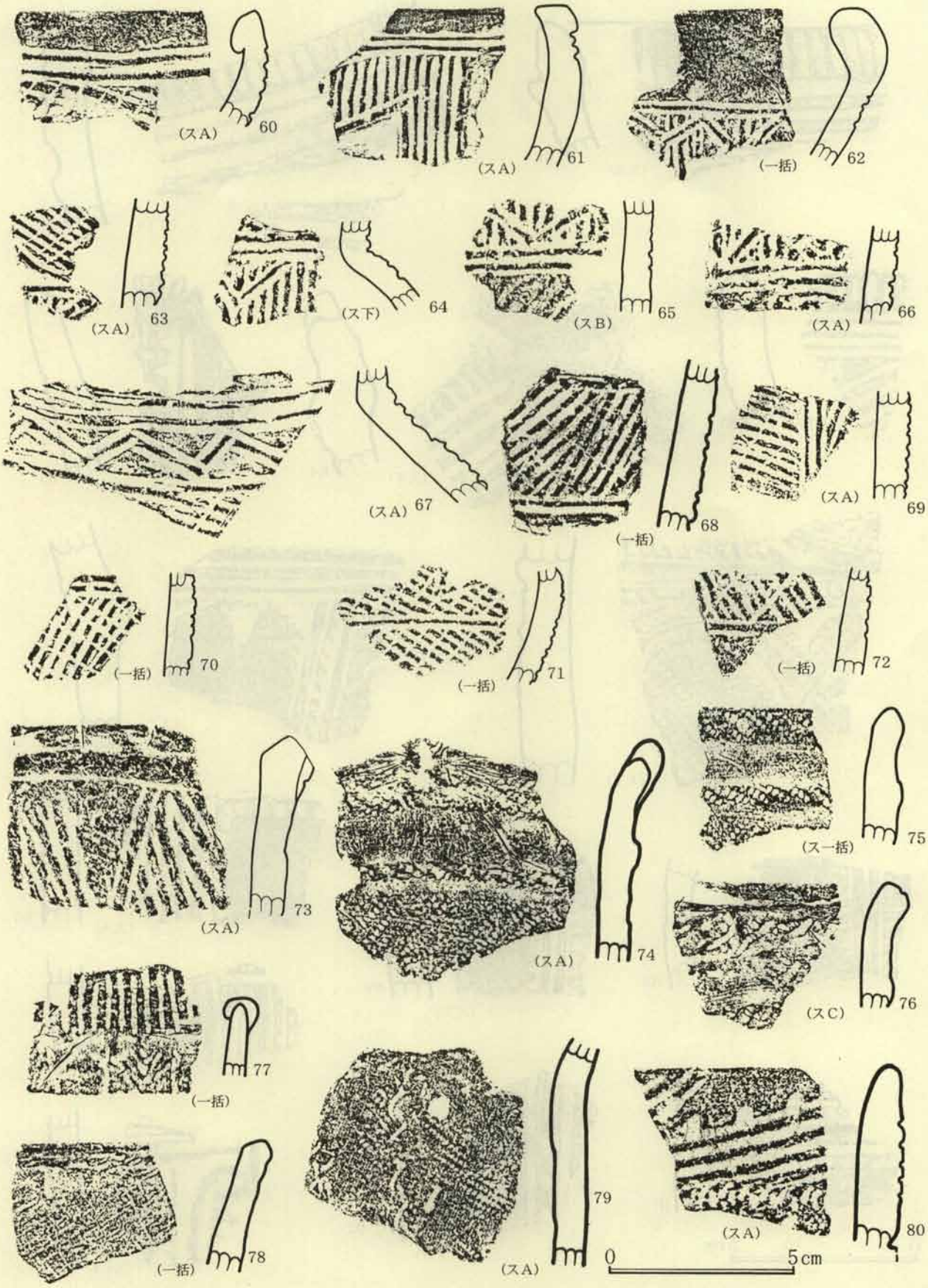
第28図　C地点遺物(2)　前期（黒浜式等）



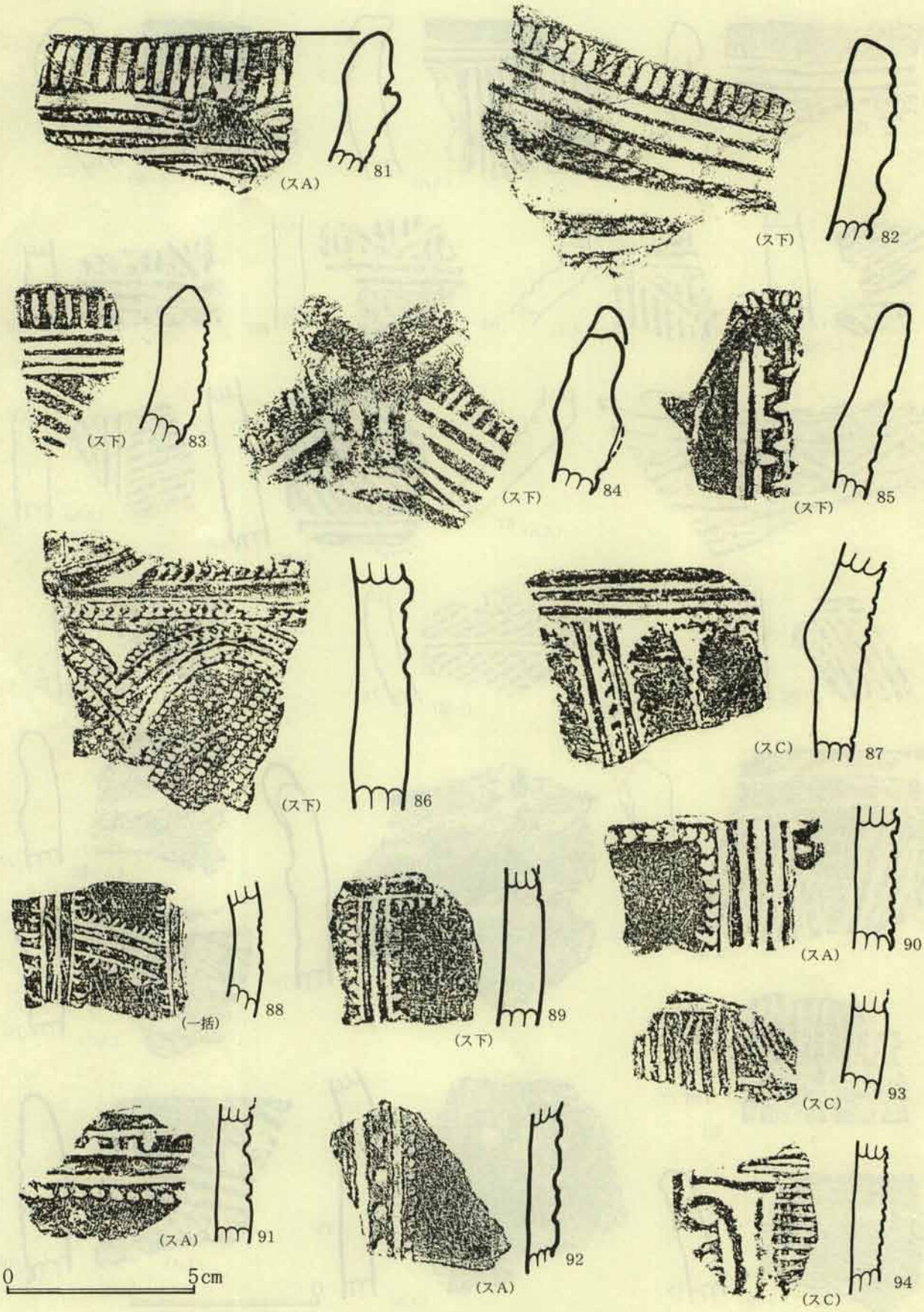
第29図　C地点遺物(3)　前期（諸磯式・興津式）



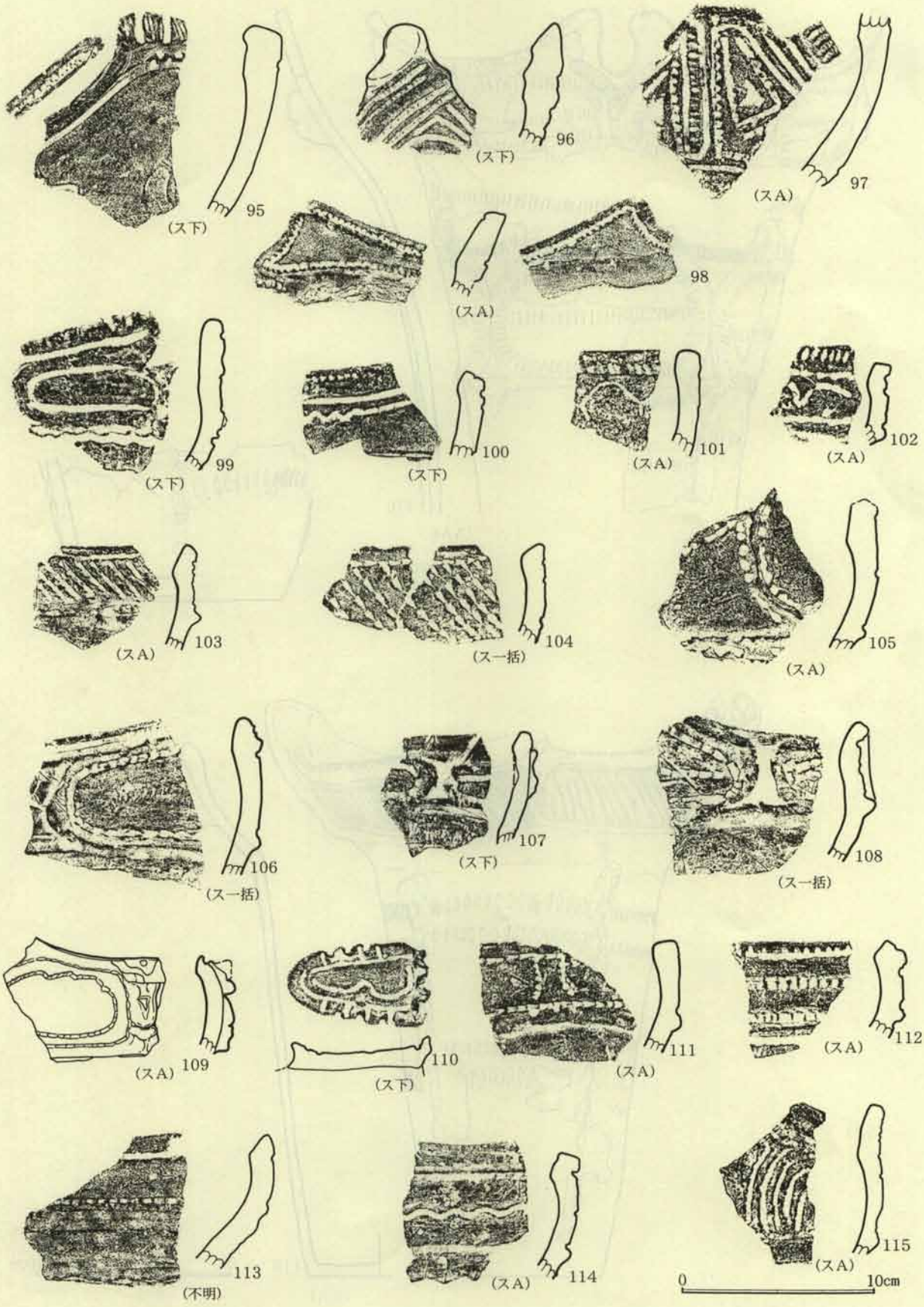
第30図　C地点遺物(4)　前期終末



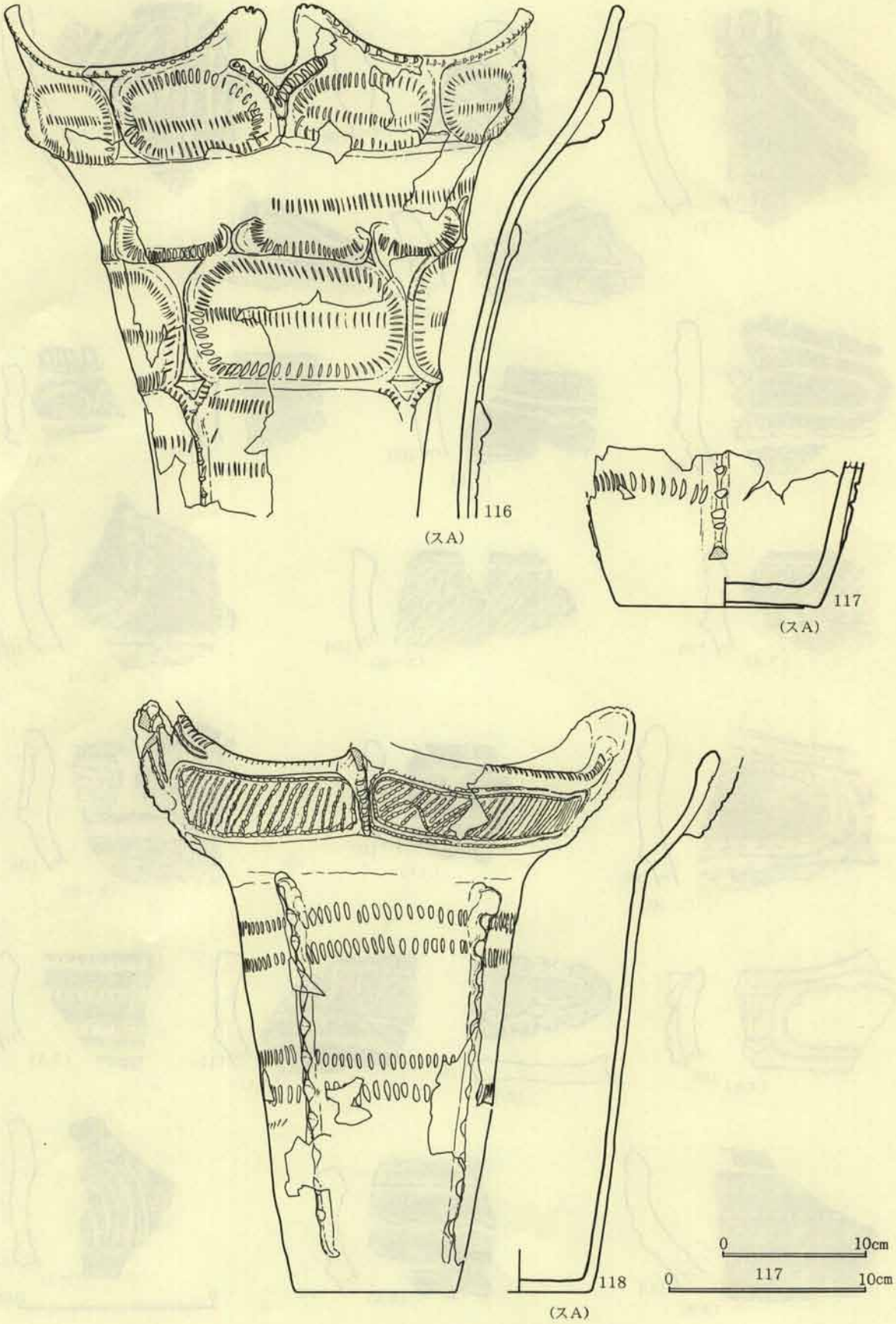
第31図　C地点遺物(5)　前期終末～中期初頭



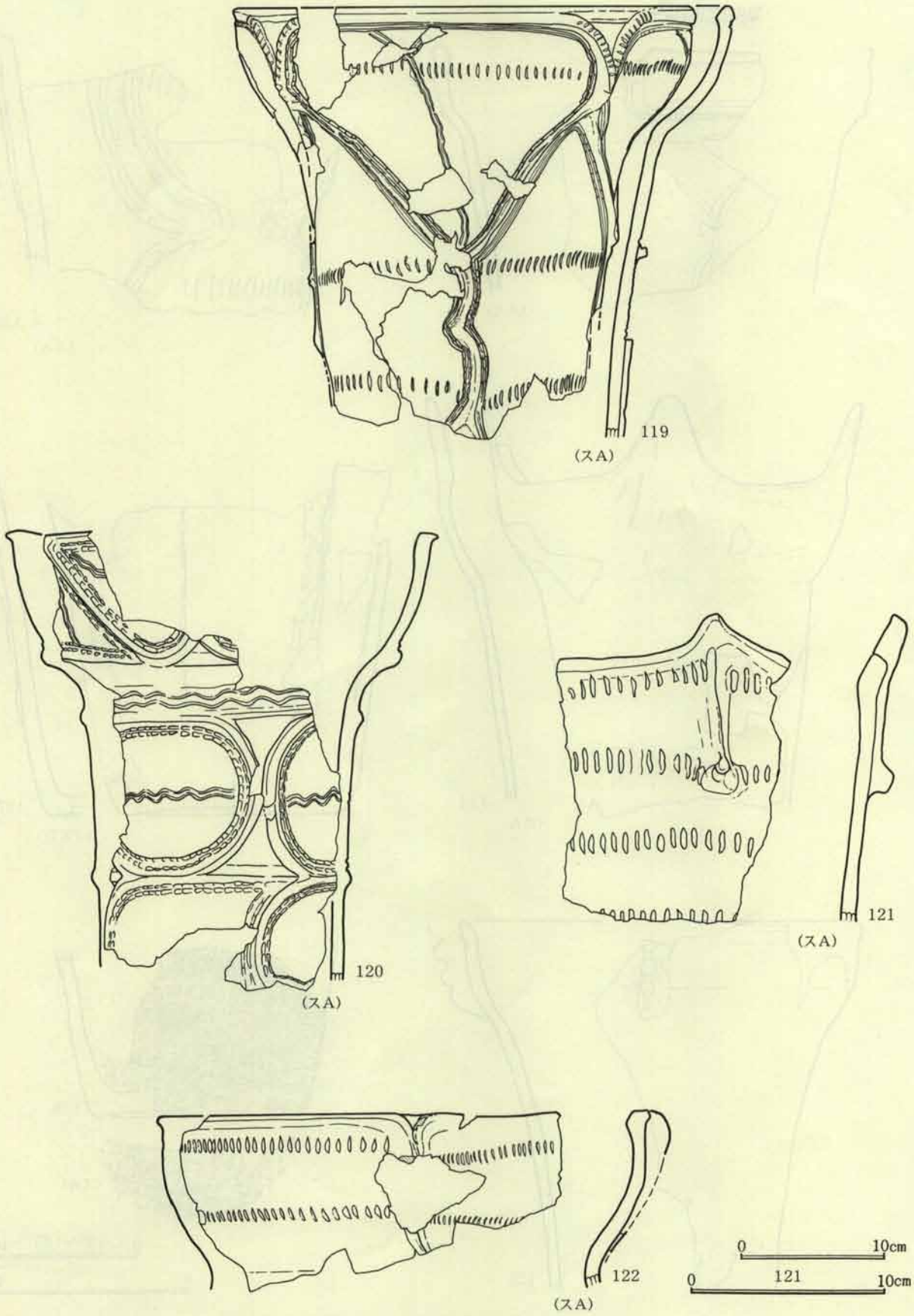
第32図　C地点遺物(6)　中期初頭（五領ヶ台式）



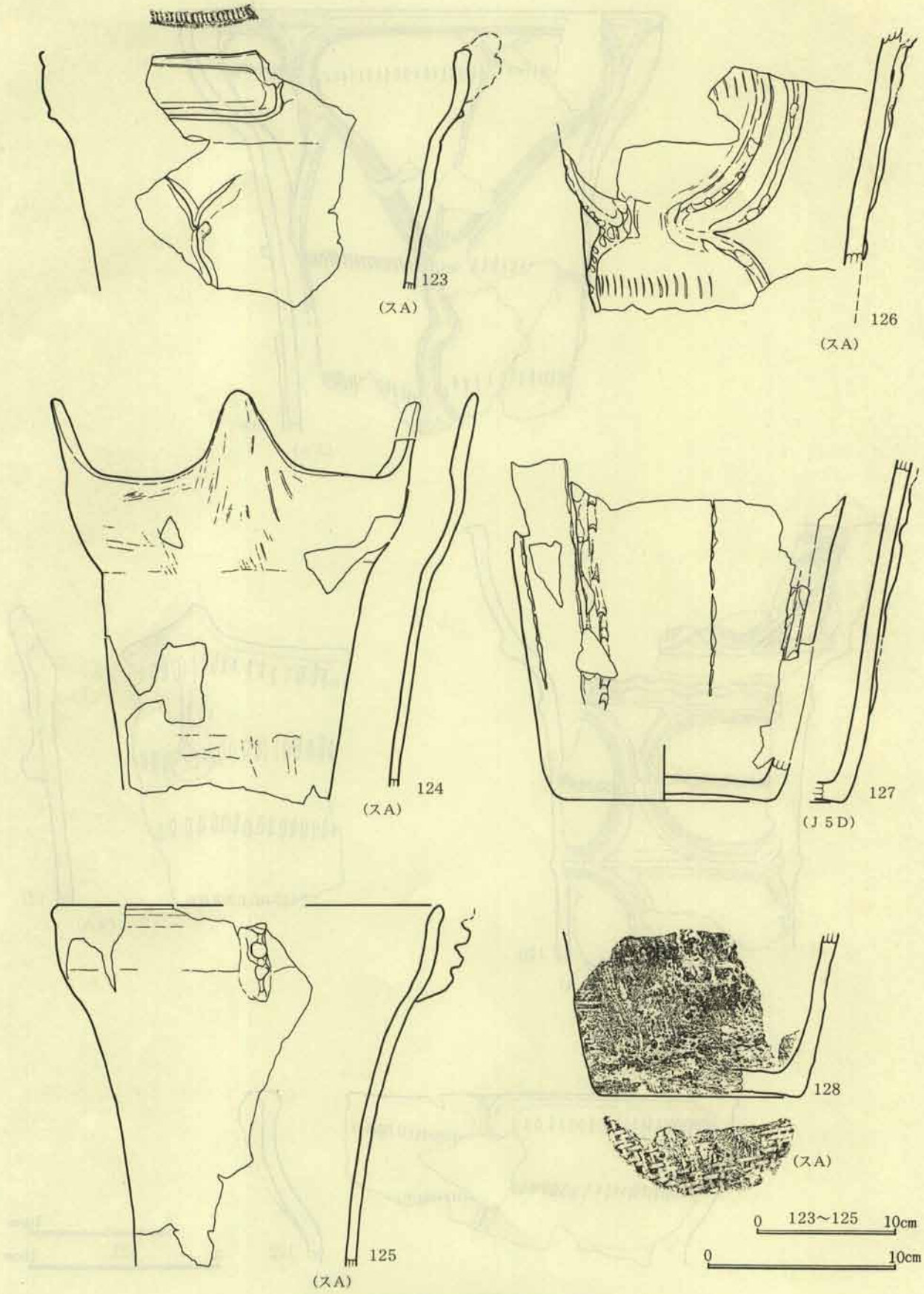
第33図　C地点遺物(7)　中期初頭（五領ヶ台式）～（阿玉台式）



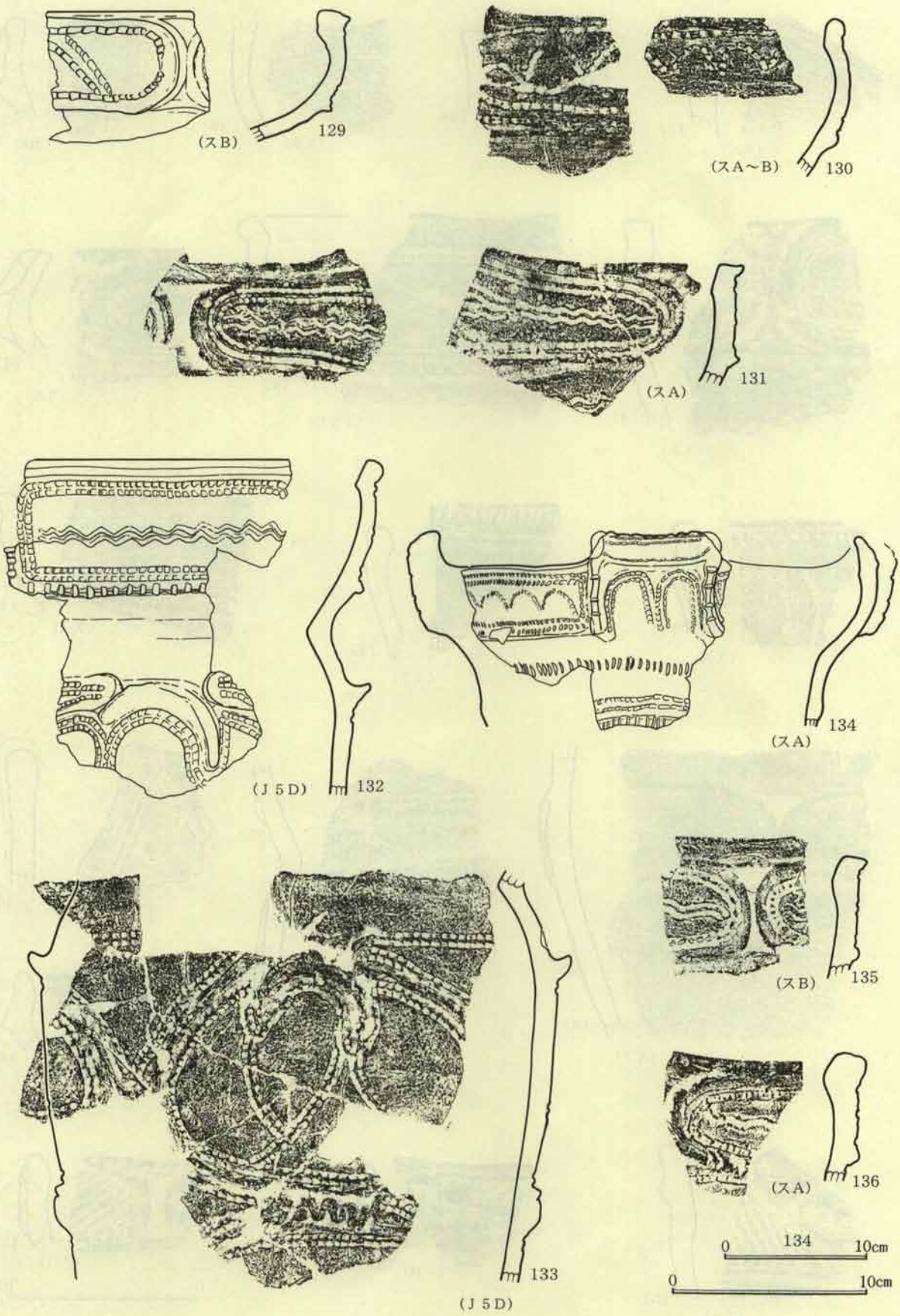
第34図　C地点遺物(8)　中期（阿玉台式）



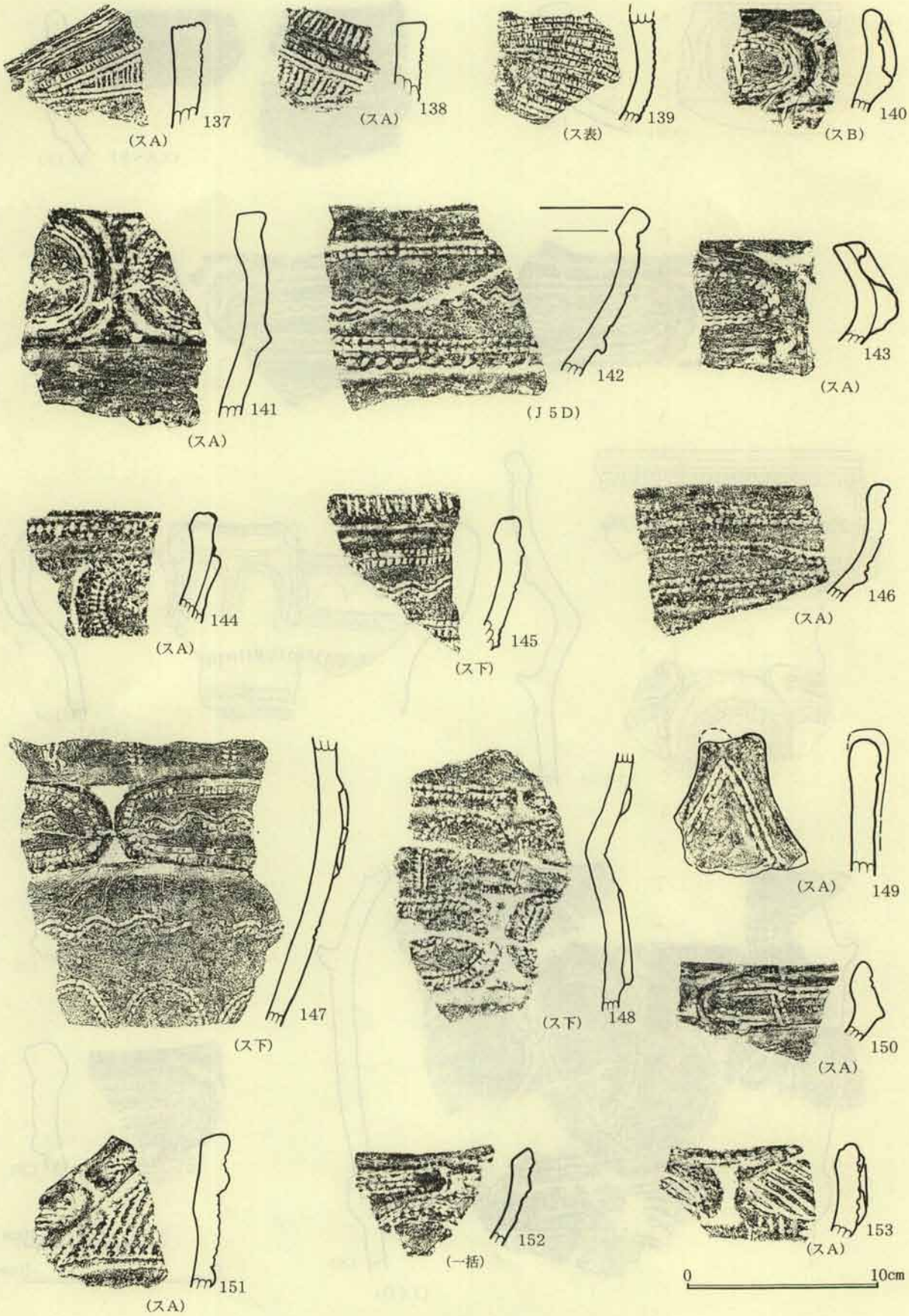
第35図　C地点遺物(9)　中期（阿玉台式）



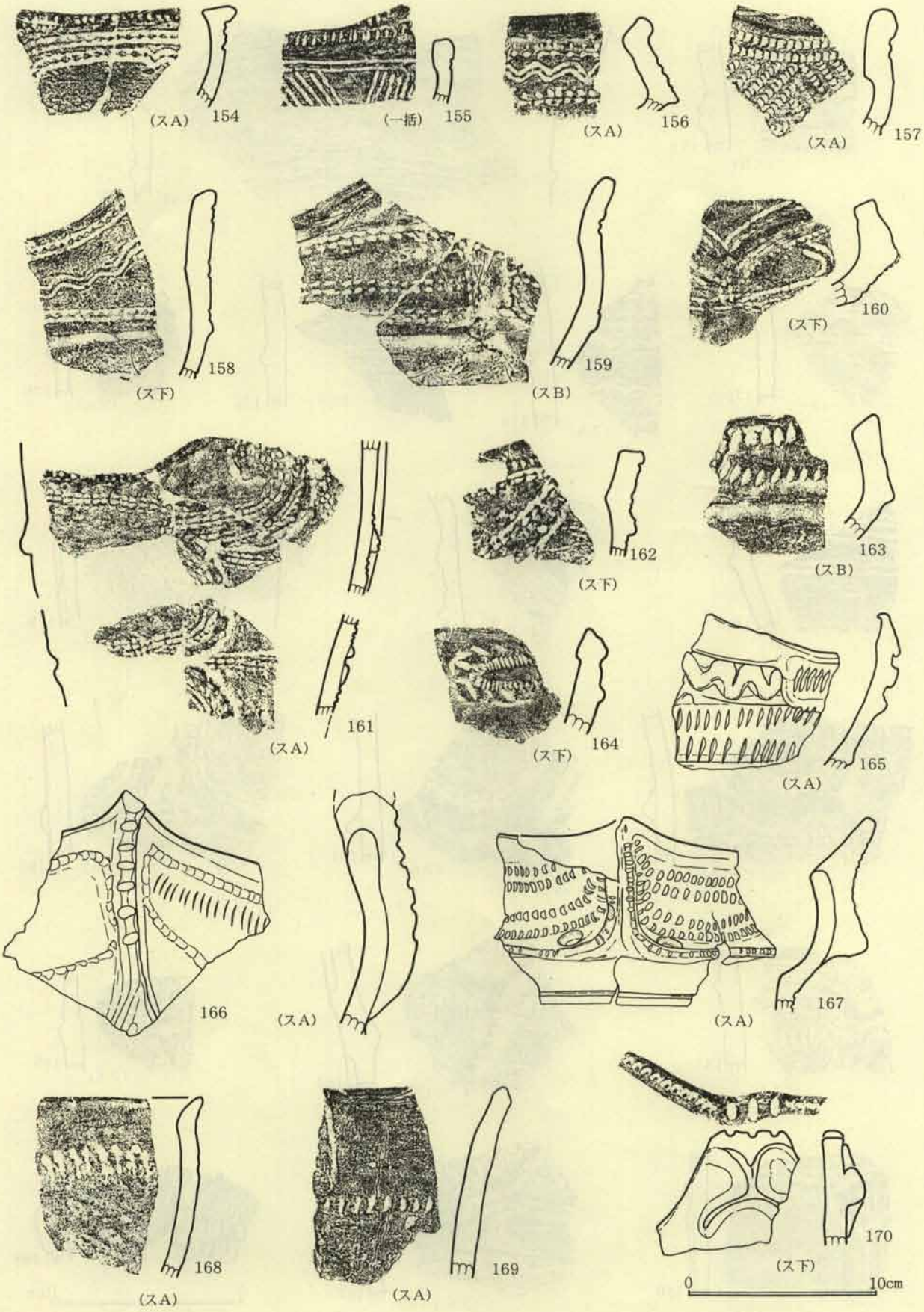
第36図　C地点遺物(10)　中期（阿玉台式）



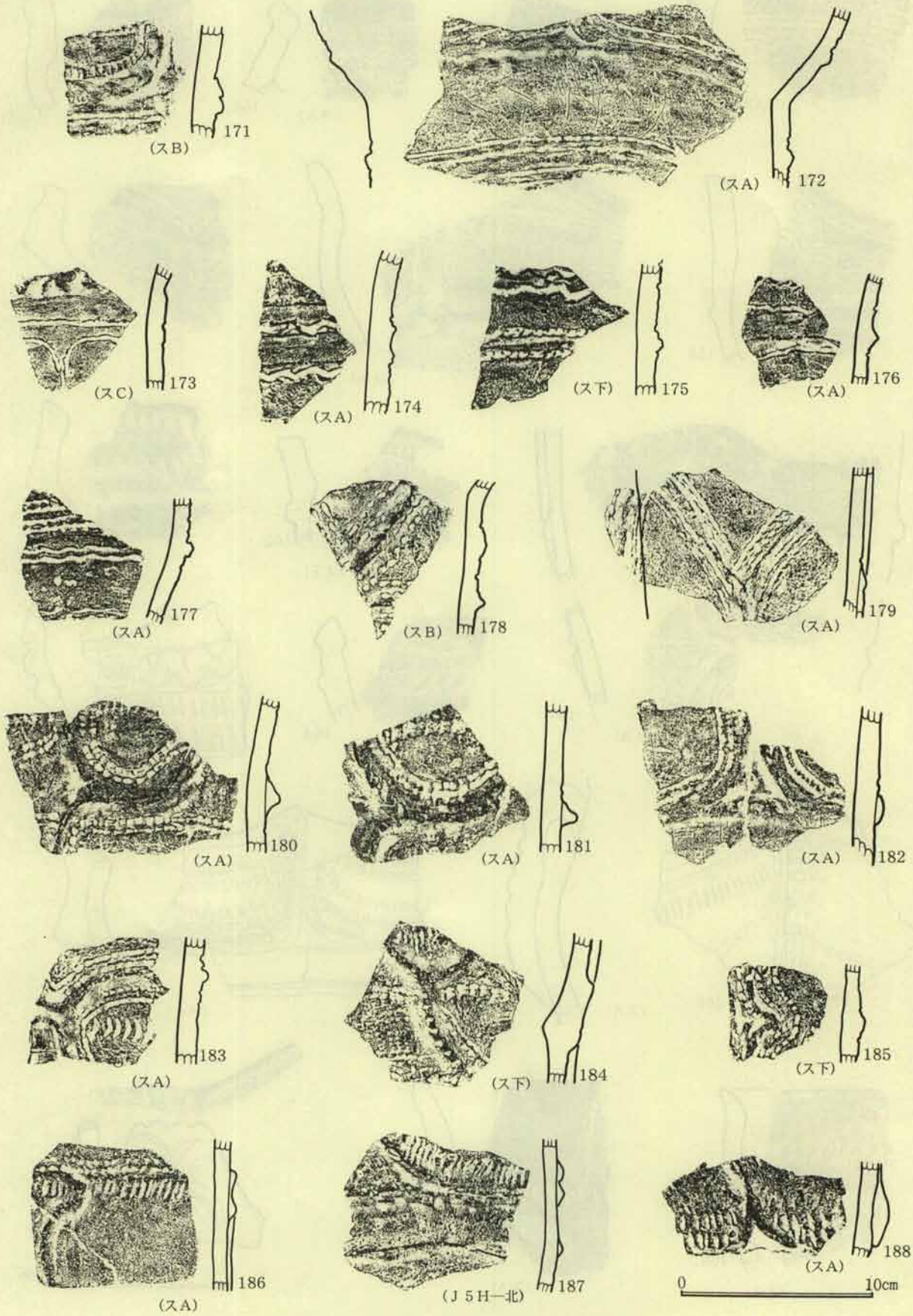
第37図　C地点遺物(1)　中期（阿玉台式）



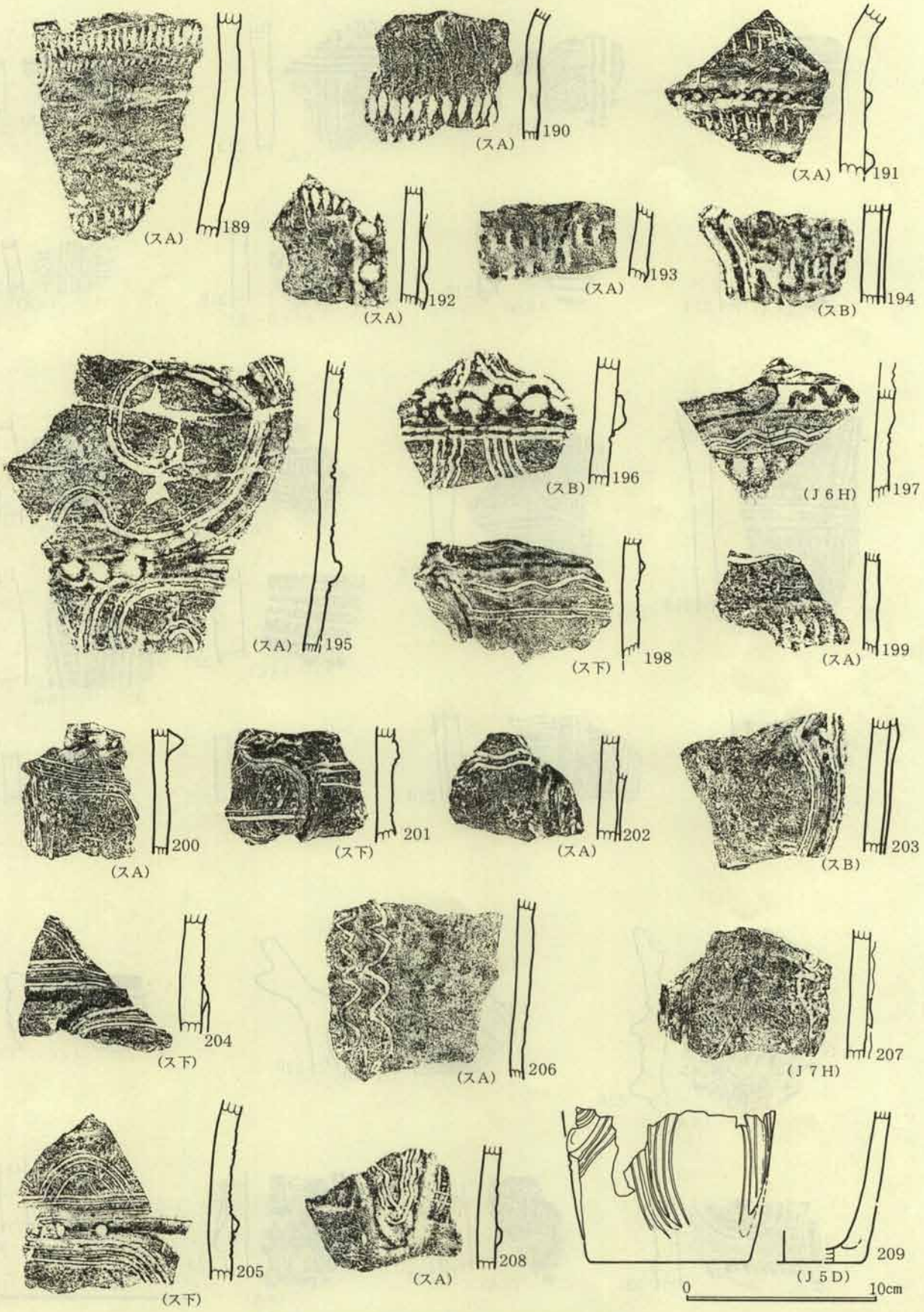
第38図　C地点遺物(12)　中期（阿玉台式等）



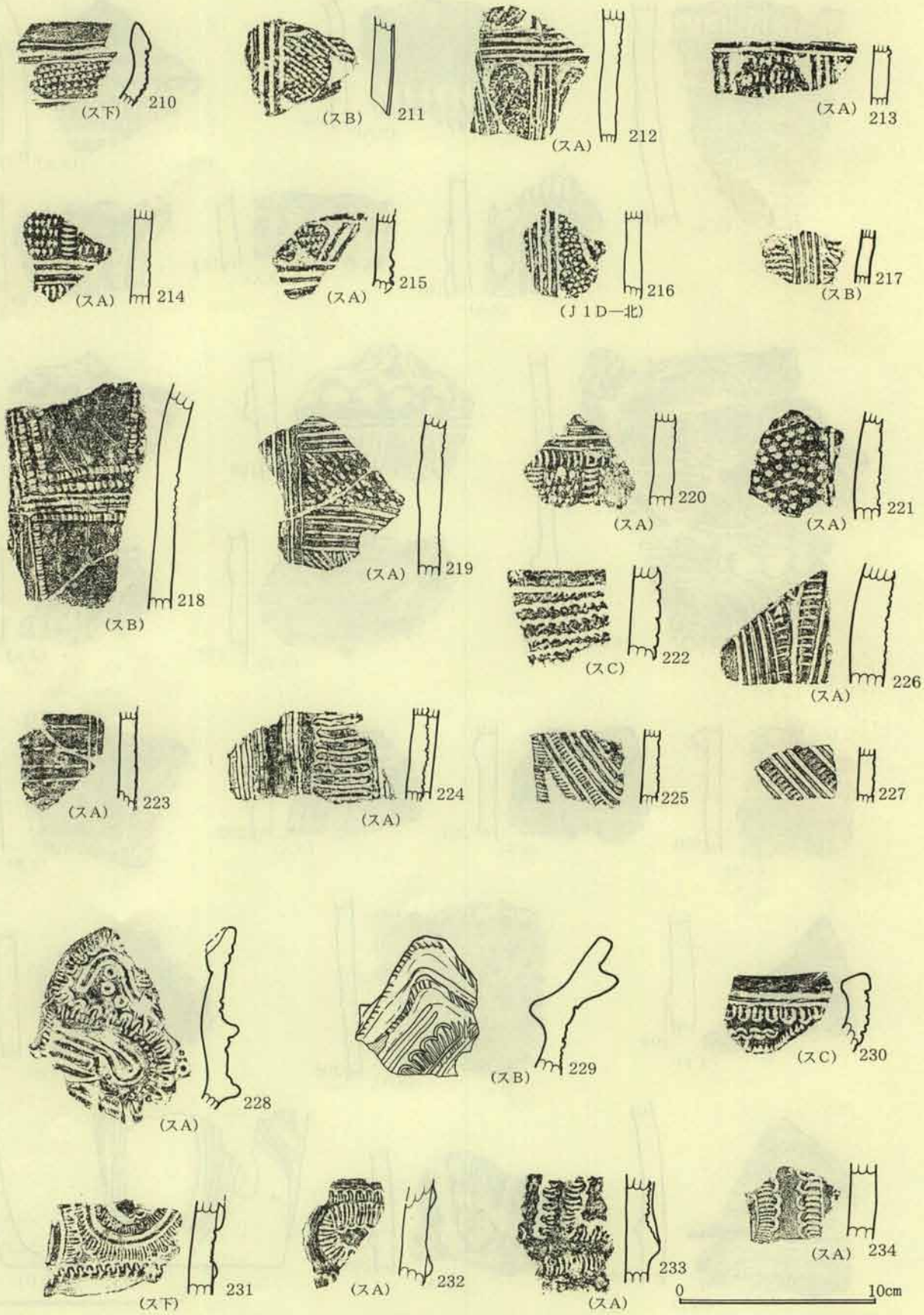
第39図　C地点遺物(3)　中期（阿玉台式等）



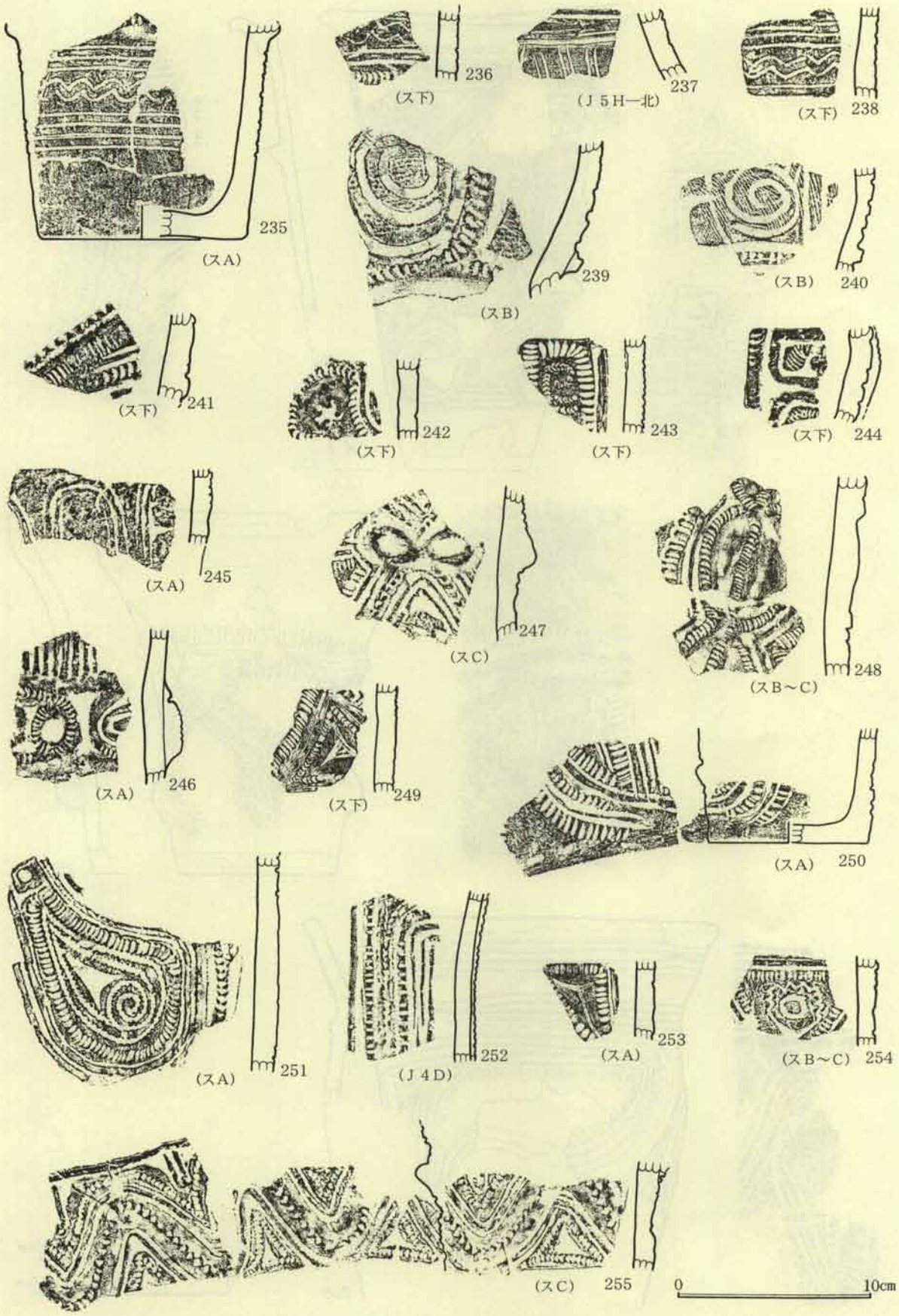
第40図　C地点遺物(14)　中期（阿玉台式等）



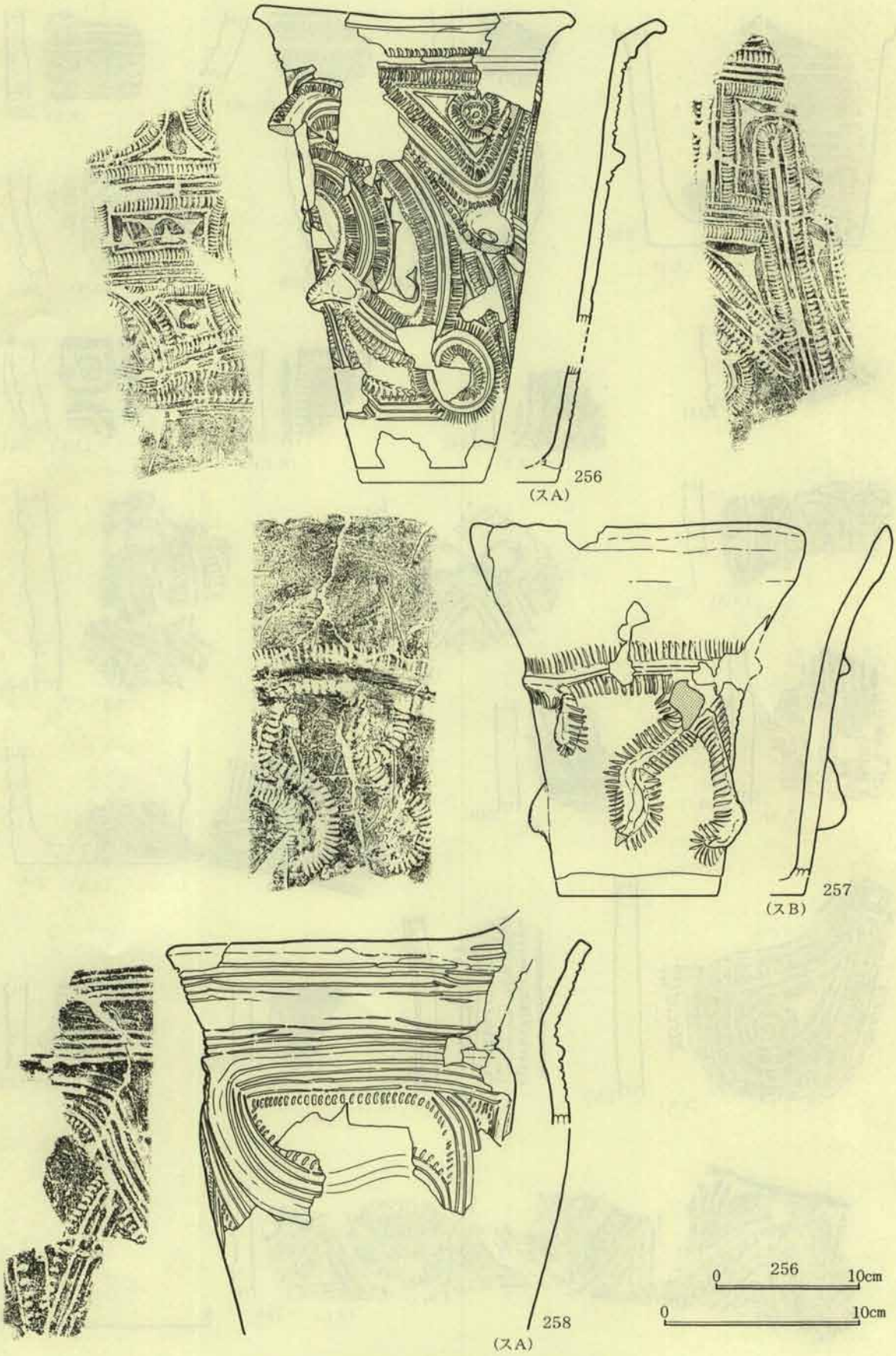
第41図　C地点遺物(5)　中期（阿玉台式等）



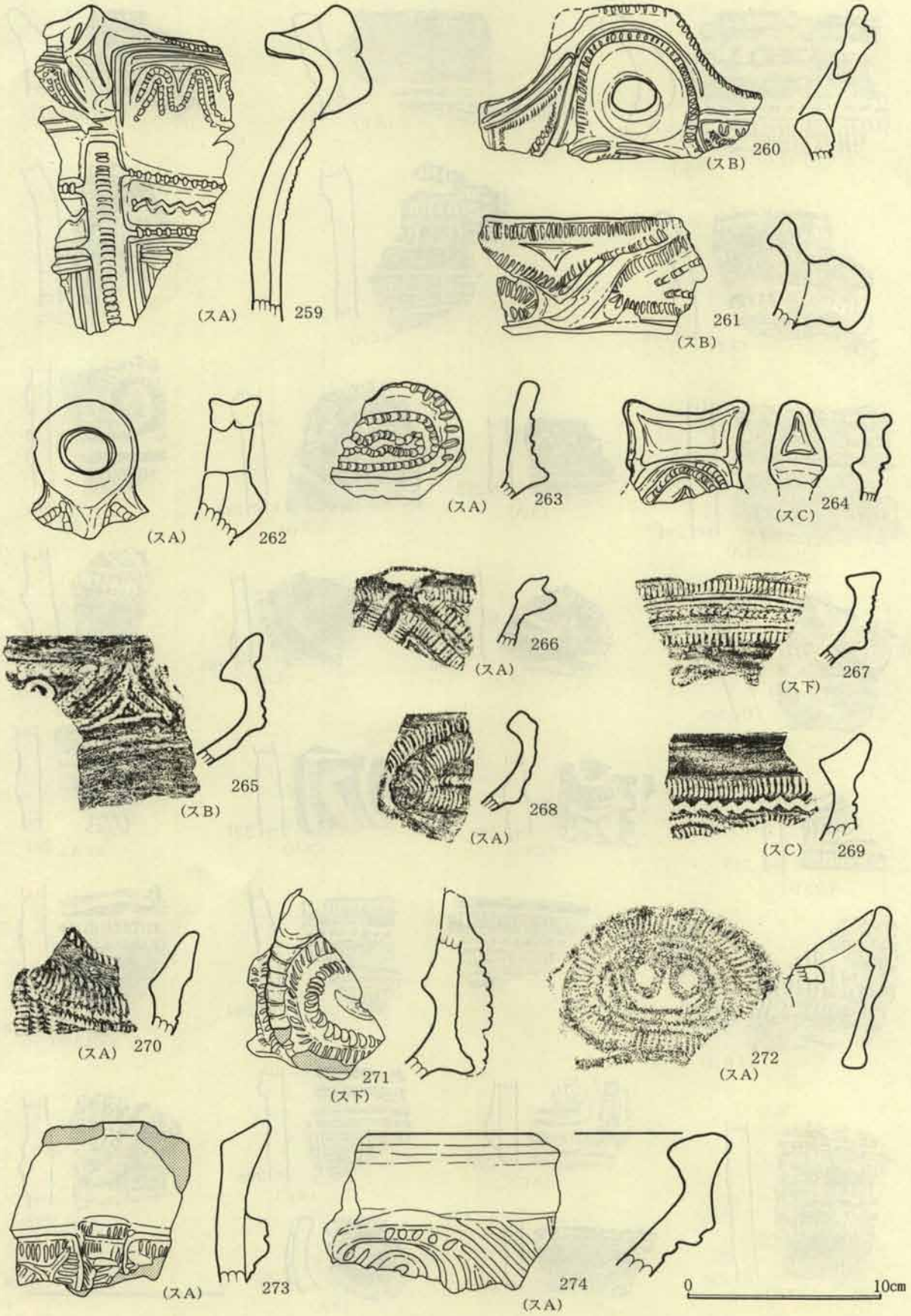
第42図　C地点遺物⑯　中期初頭～（勝坂式系）



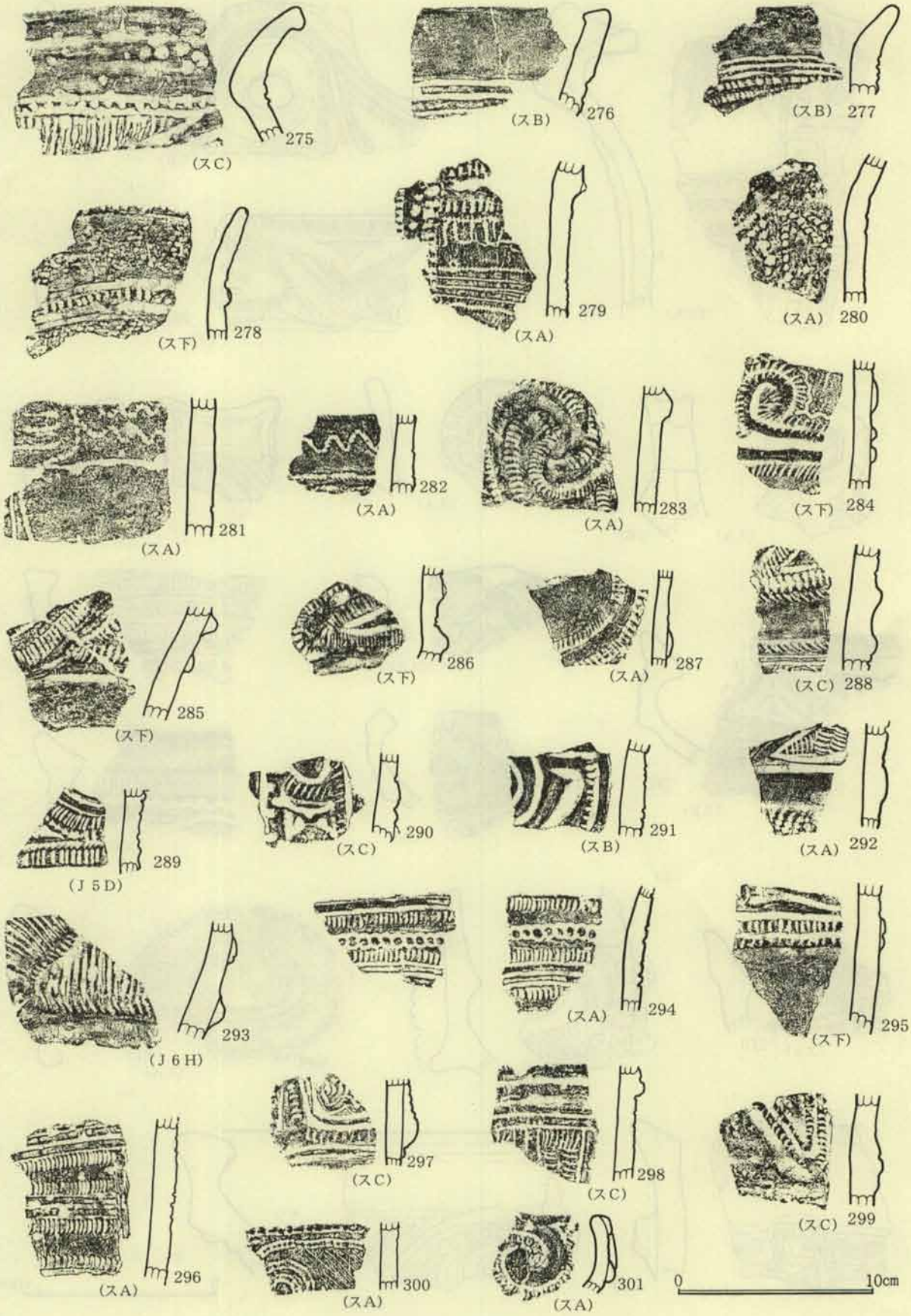
第43図　C地点遺物(7)　中期（勝坂式系）



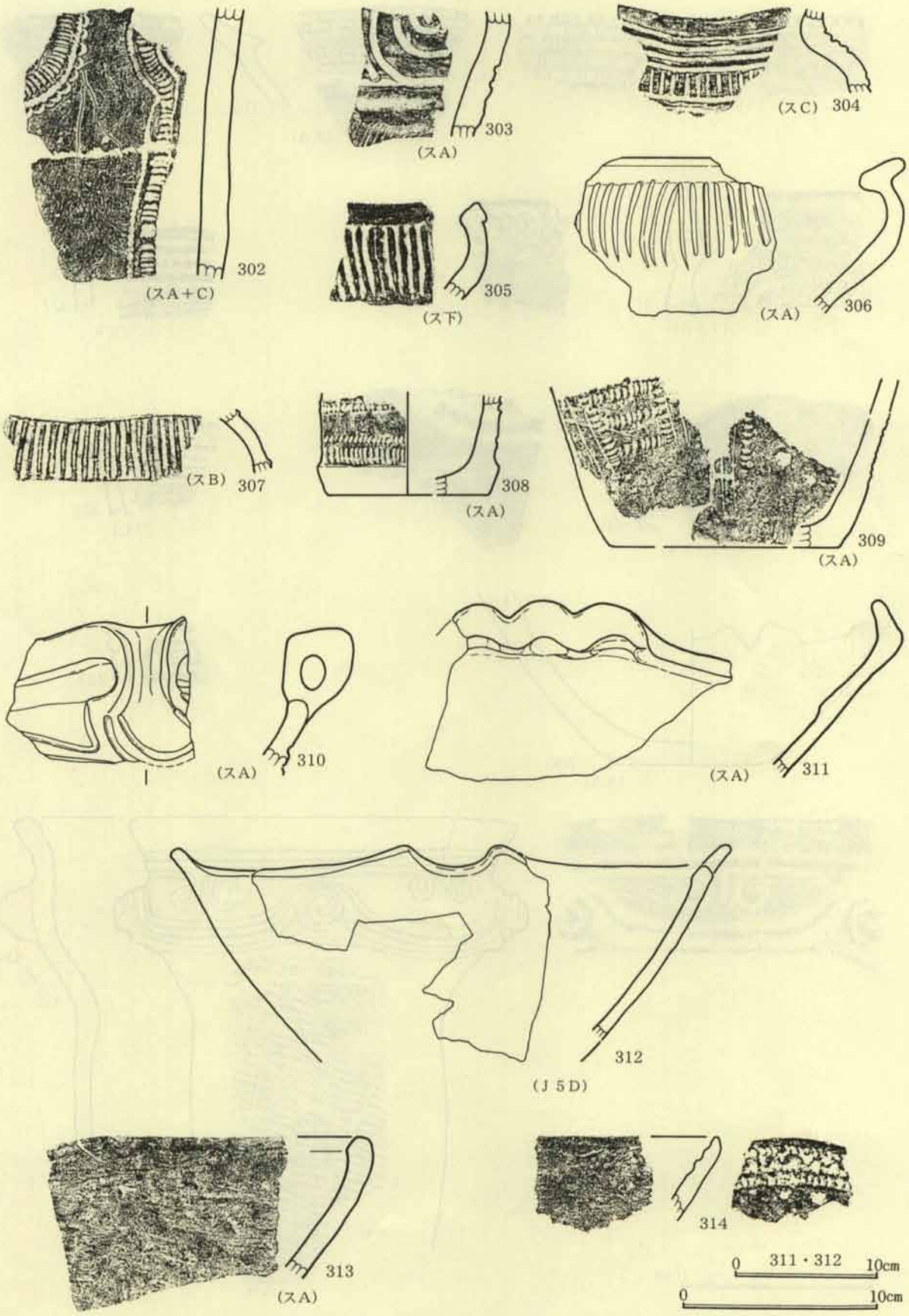
第44図　C地点遺物(8)　中期（勝坂式系）



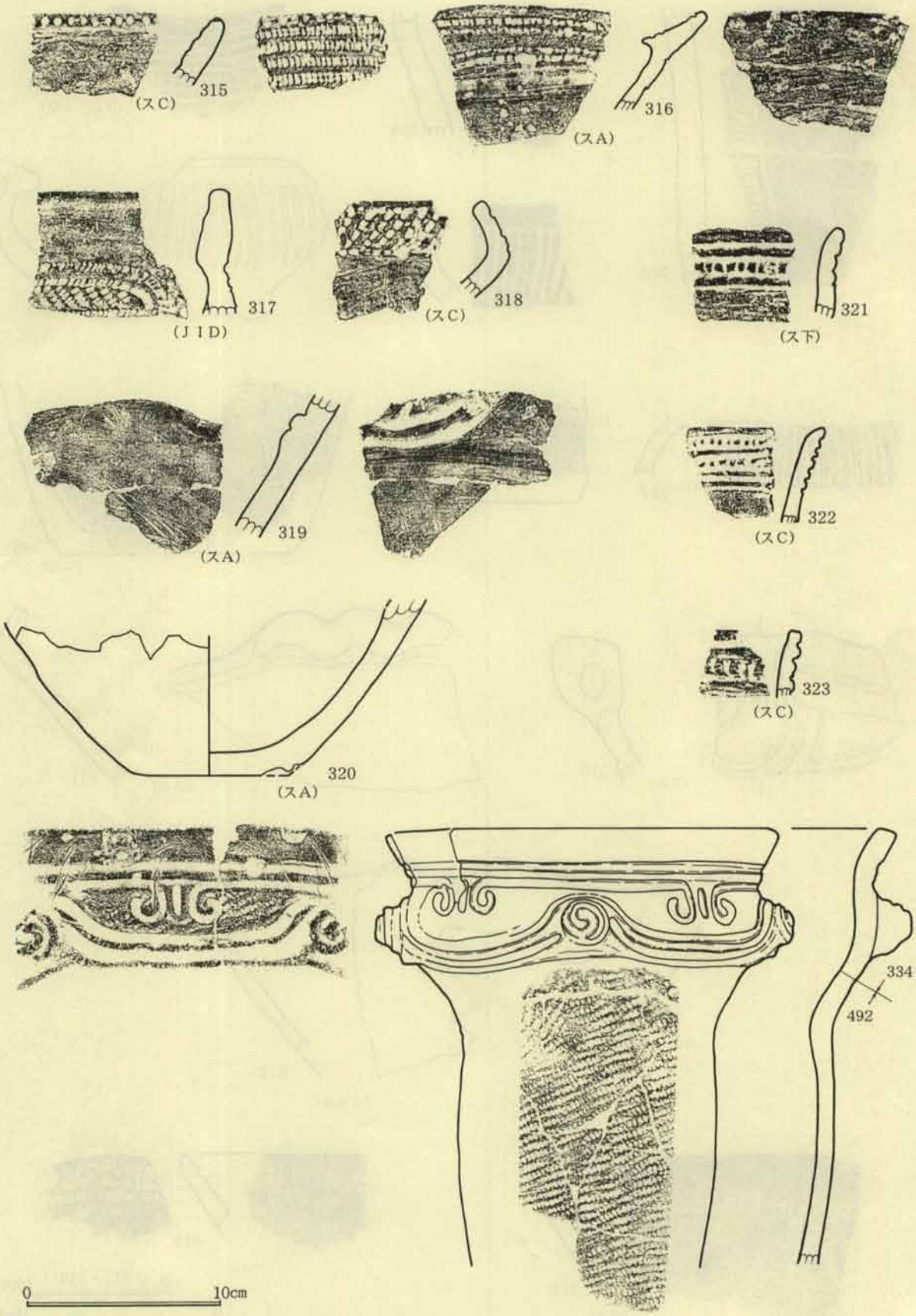
第45図　C地点遺物(9)　中期（勝坂式系）



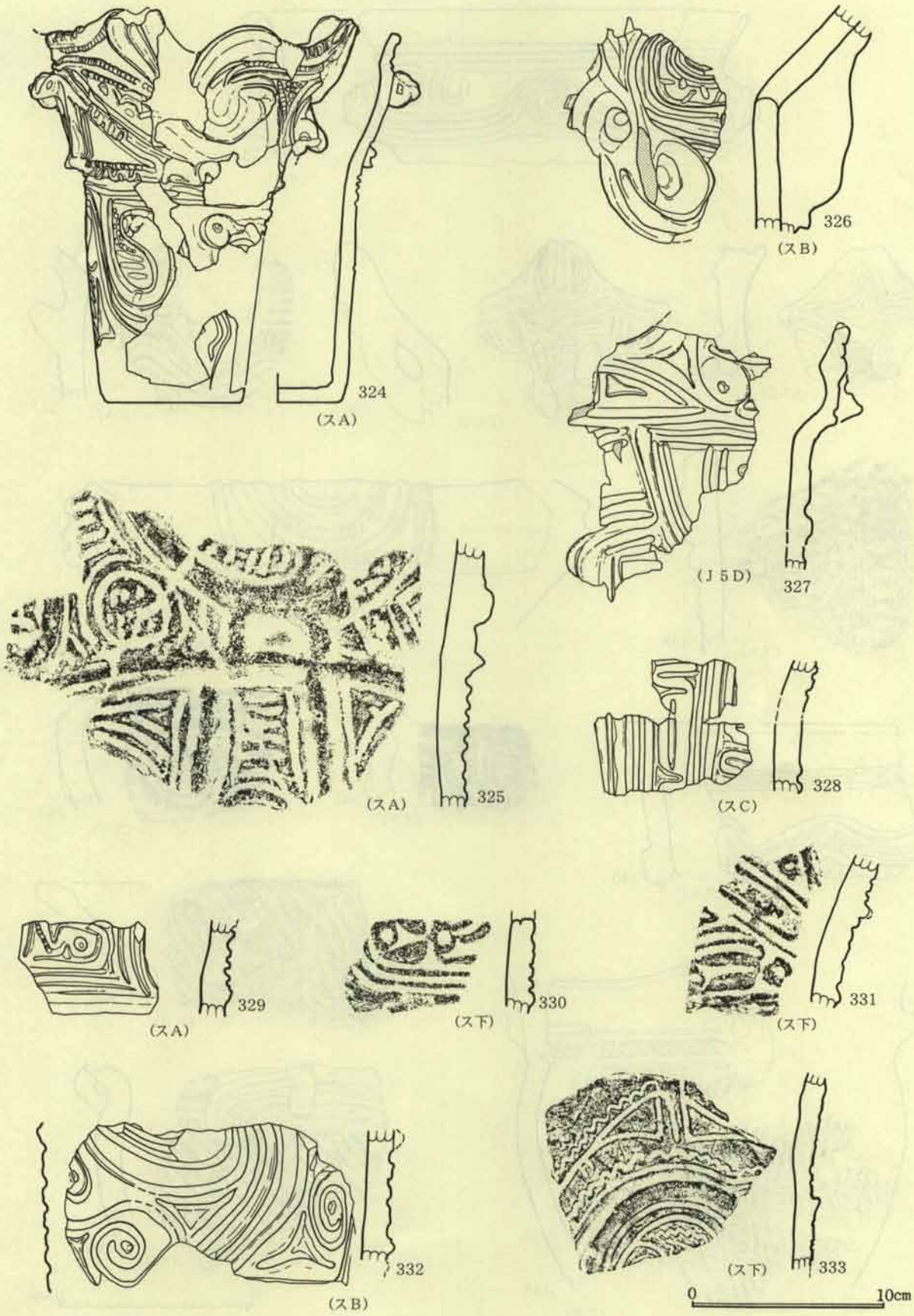
第46図　C地点遺物⑳　中期（勝坂式系）



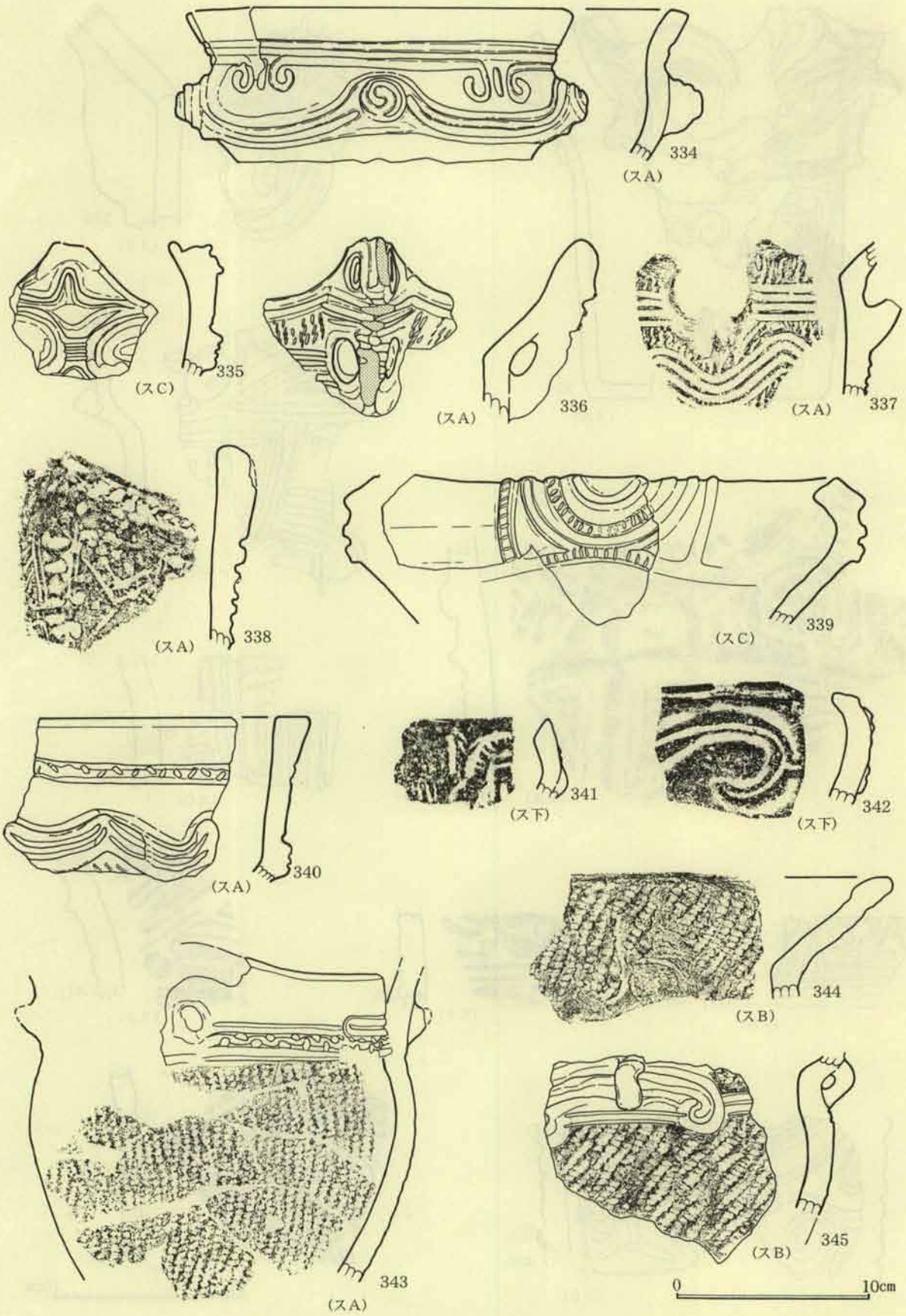
第47図　C地点遺物(20)　中期（勝坂式系・浅鉢形土器等）



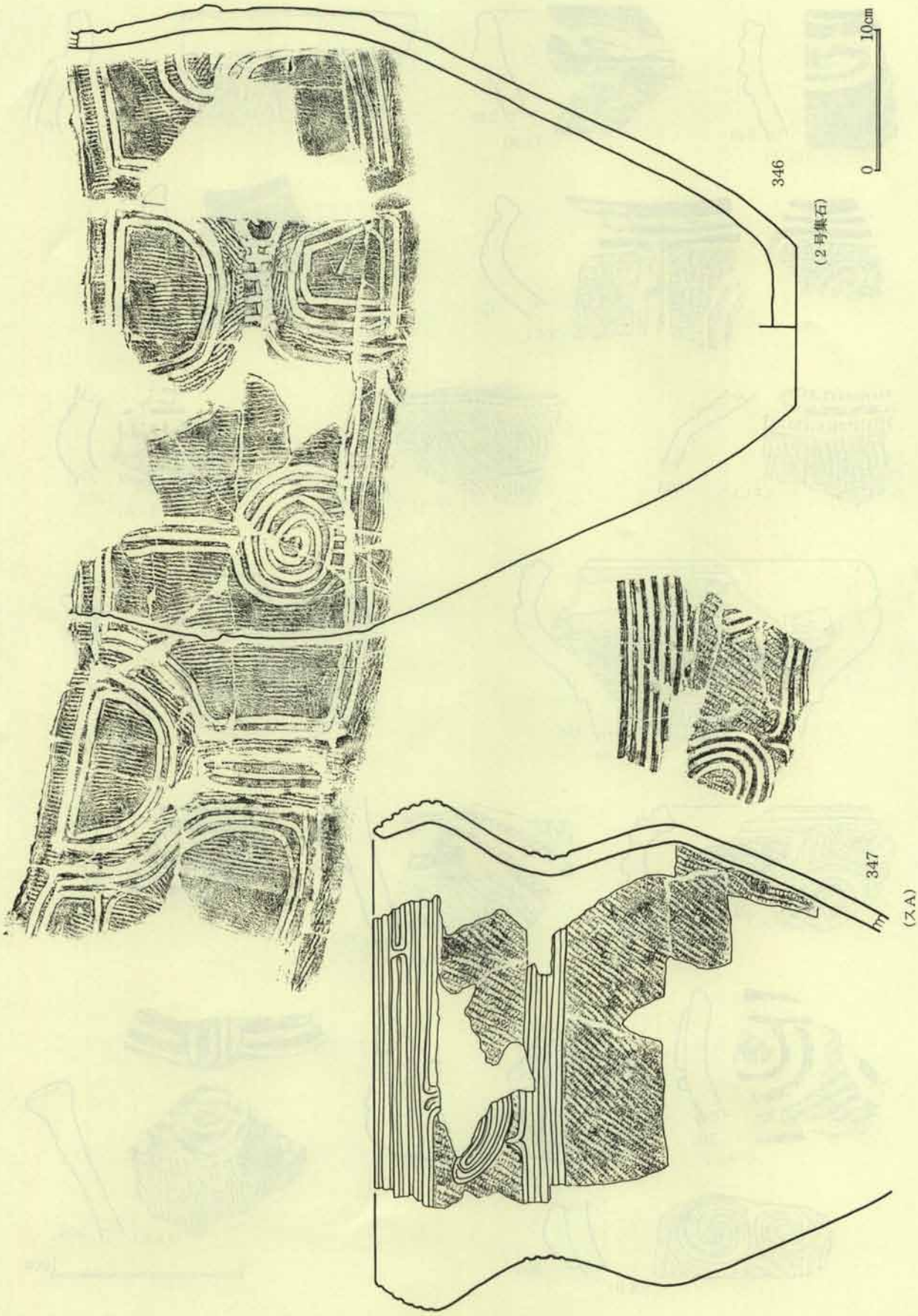
第48図　C地点遺物㉒　中期（浅鉢型土器等）



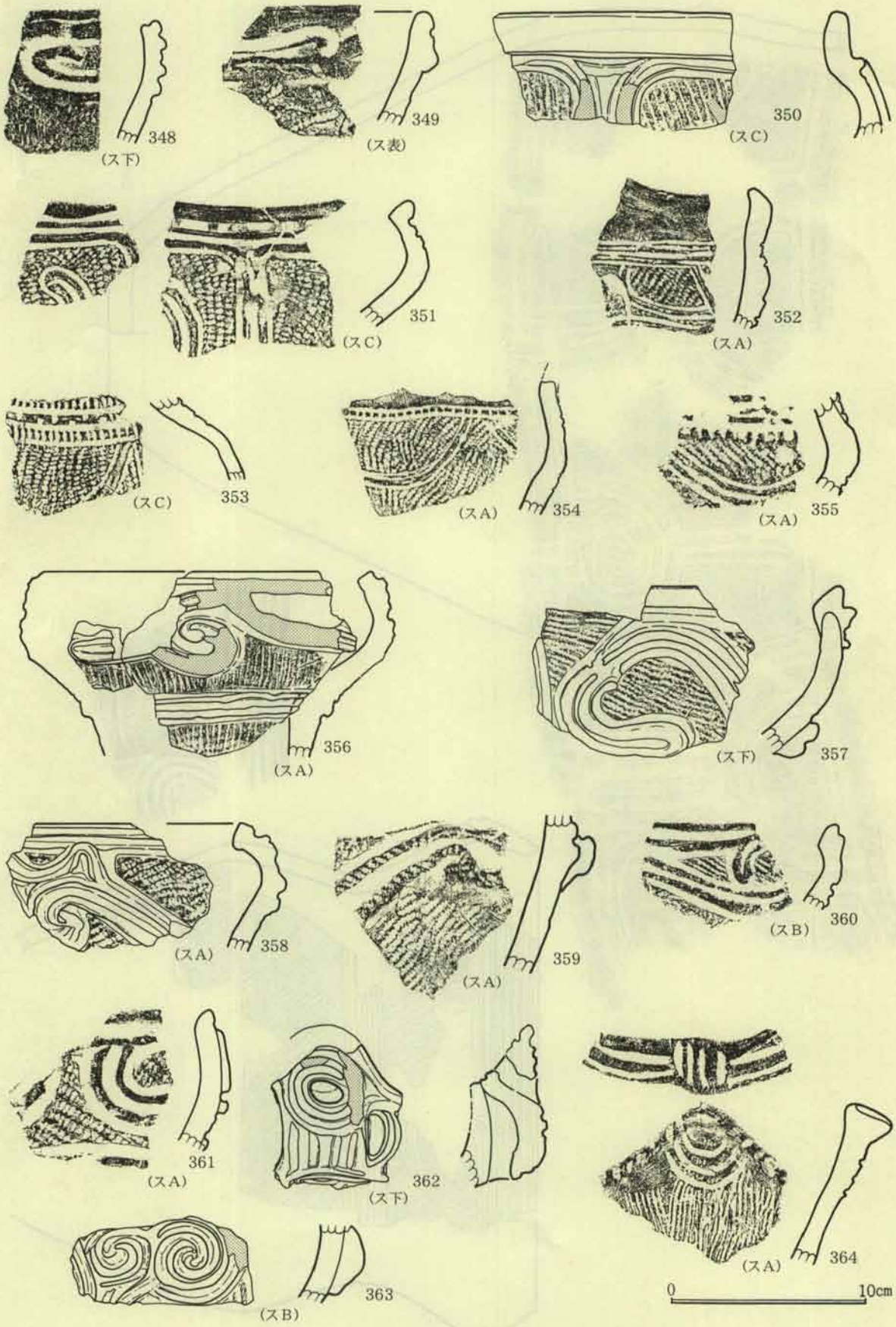
第49図　C地点遺物㉓　中期（隆線文系土器等）



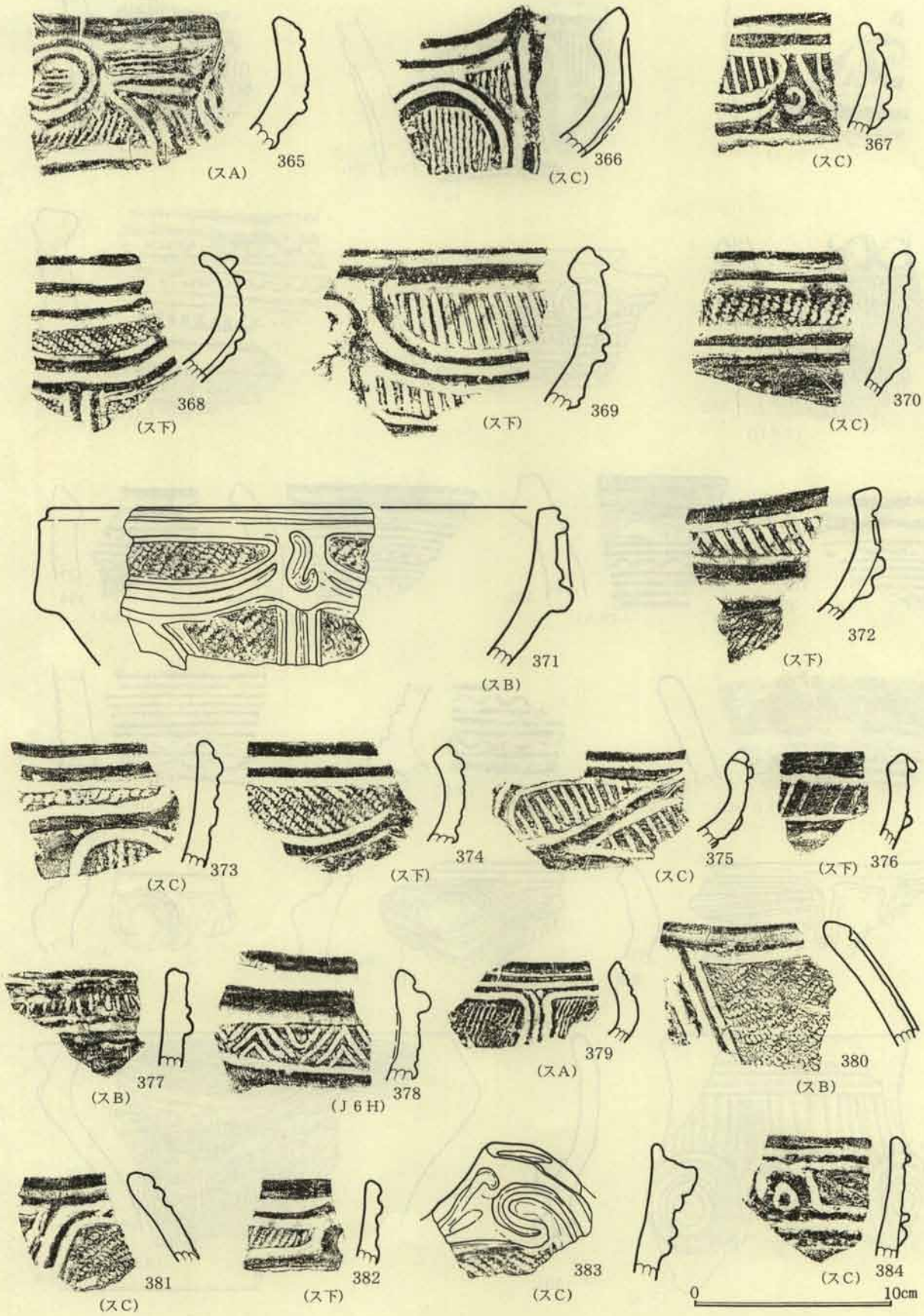
第50図　C地点遺物㉔　中期中葉末



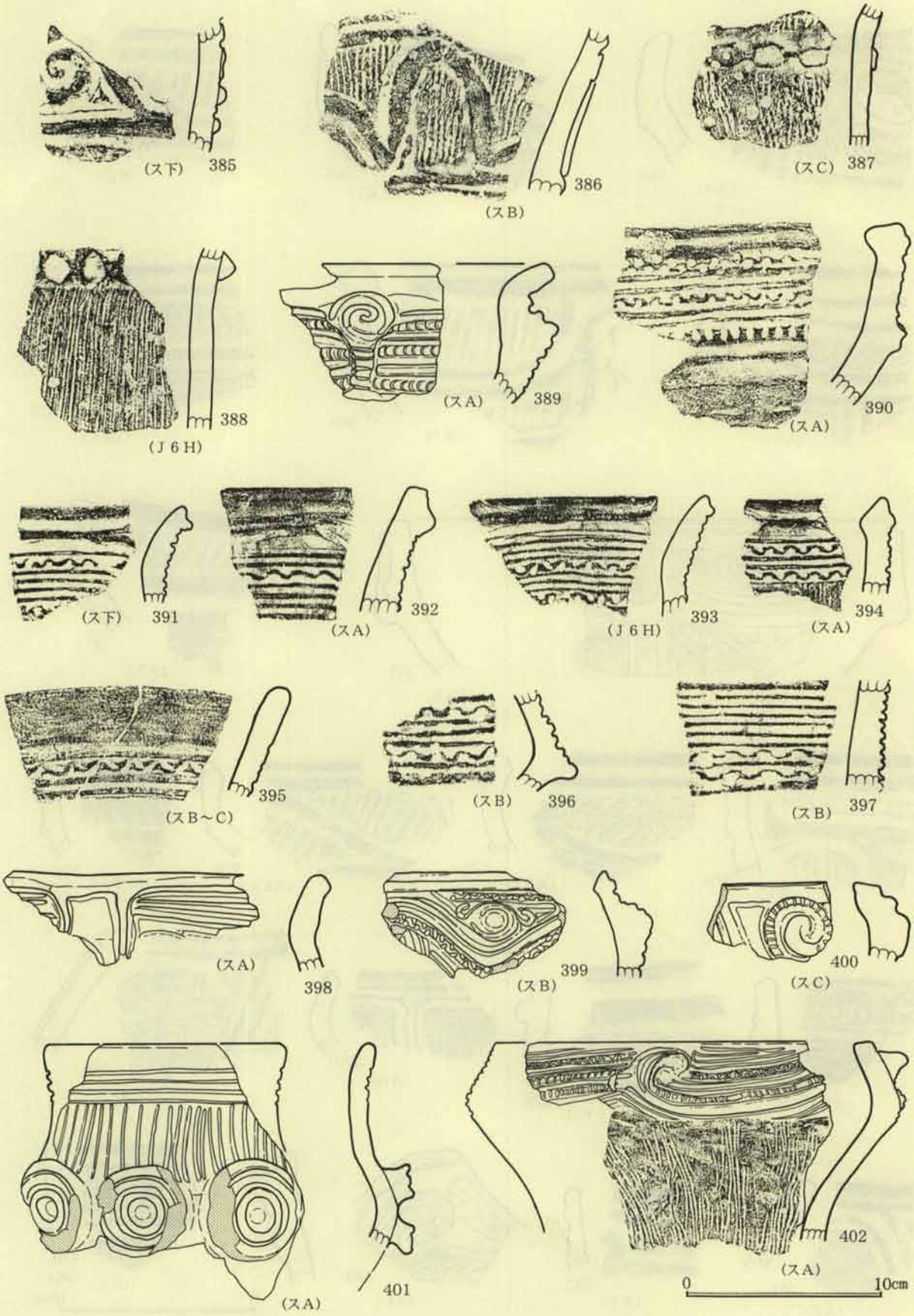
第51図　C地点遺物㉕　中期中葉末



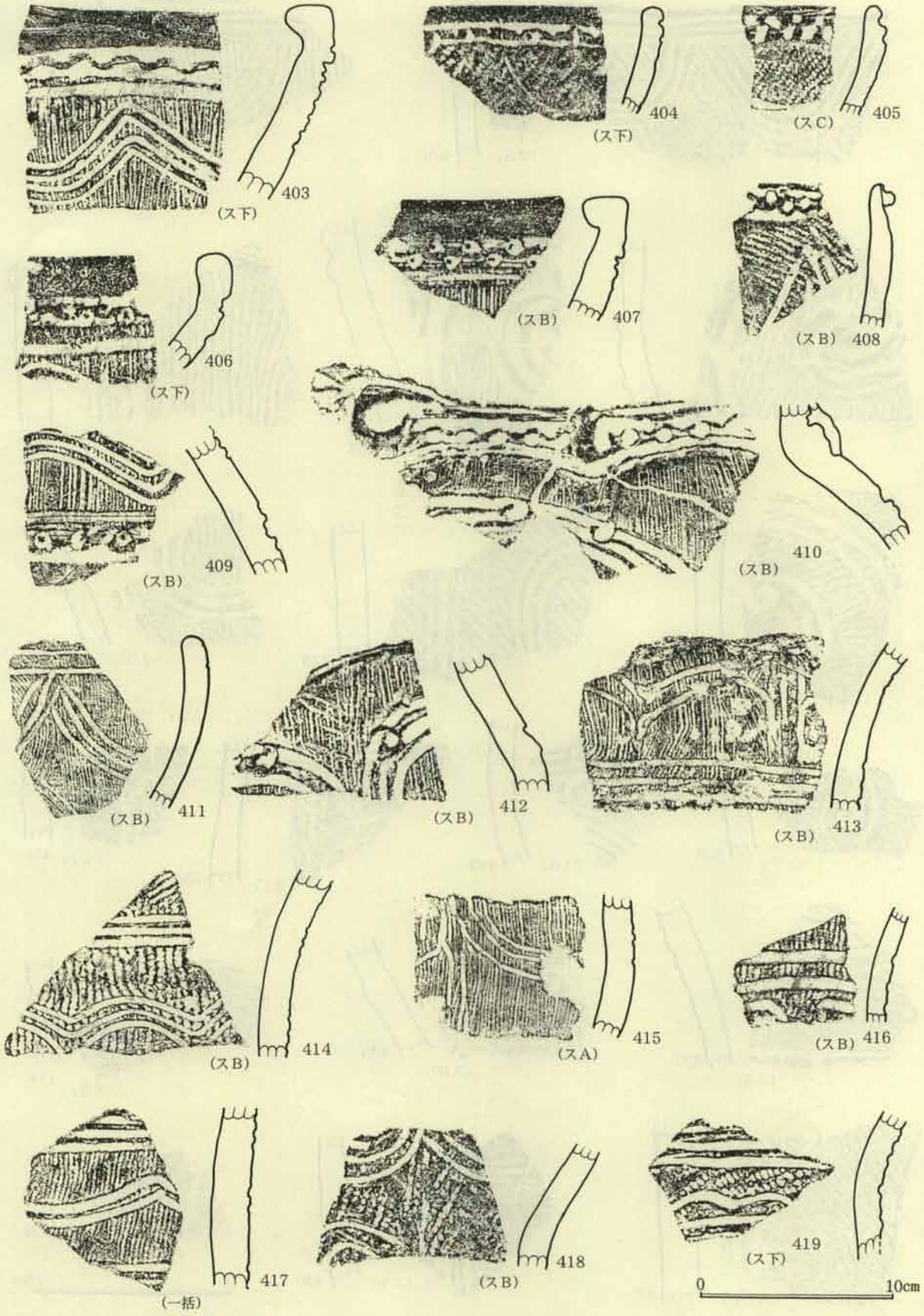
第52図　C地点遺物㉖　中期中葉末～(加曽利E式)



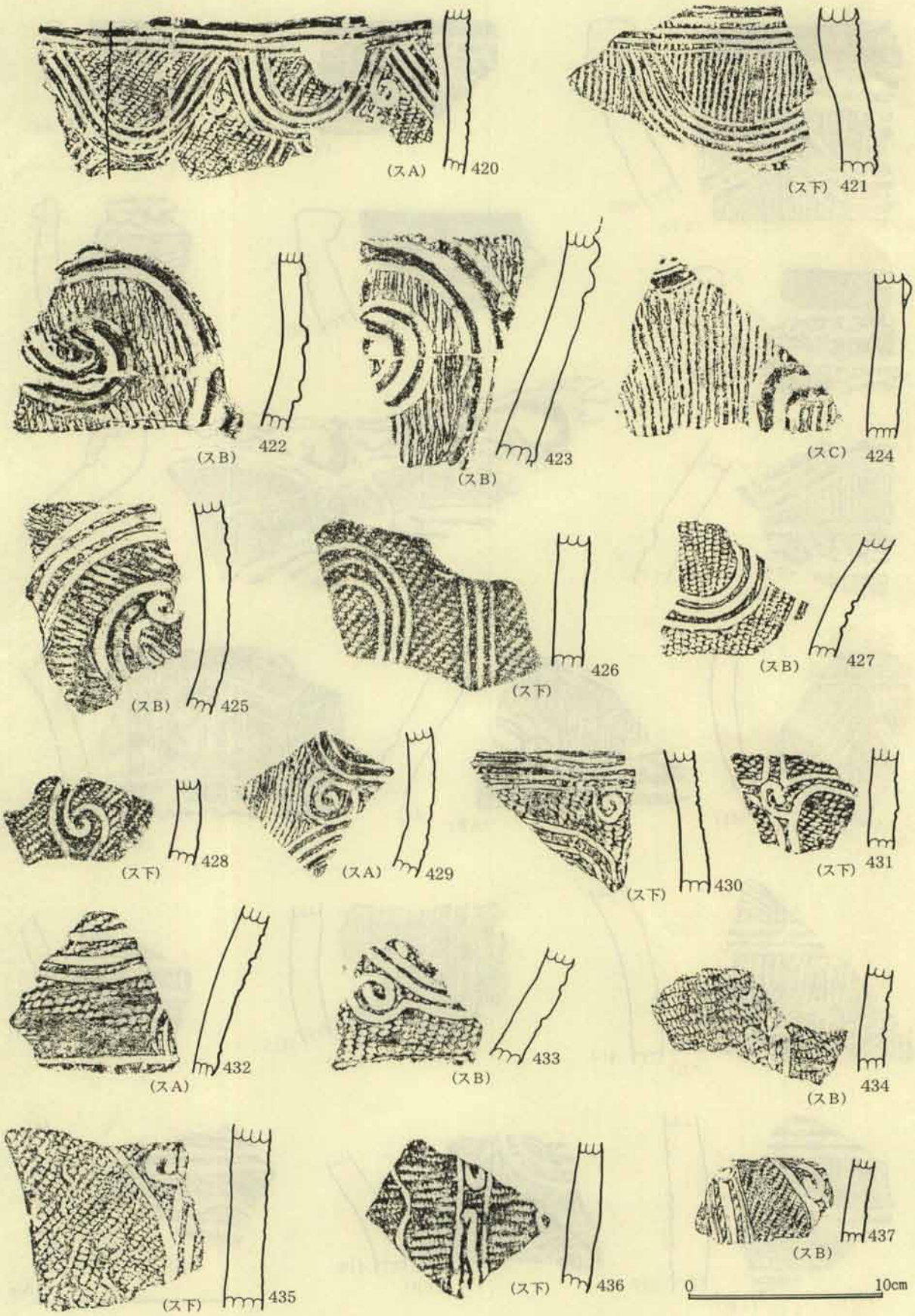
第53図　C地点遺物(27)　中期（加曽利E式）



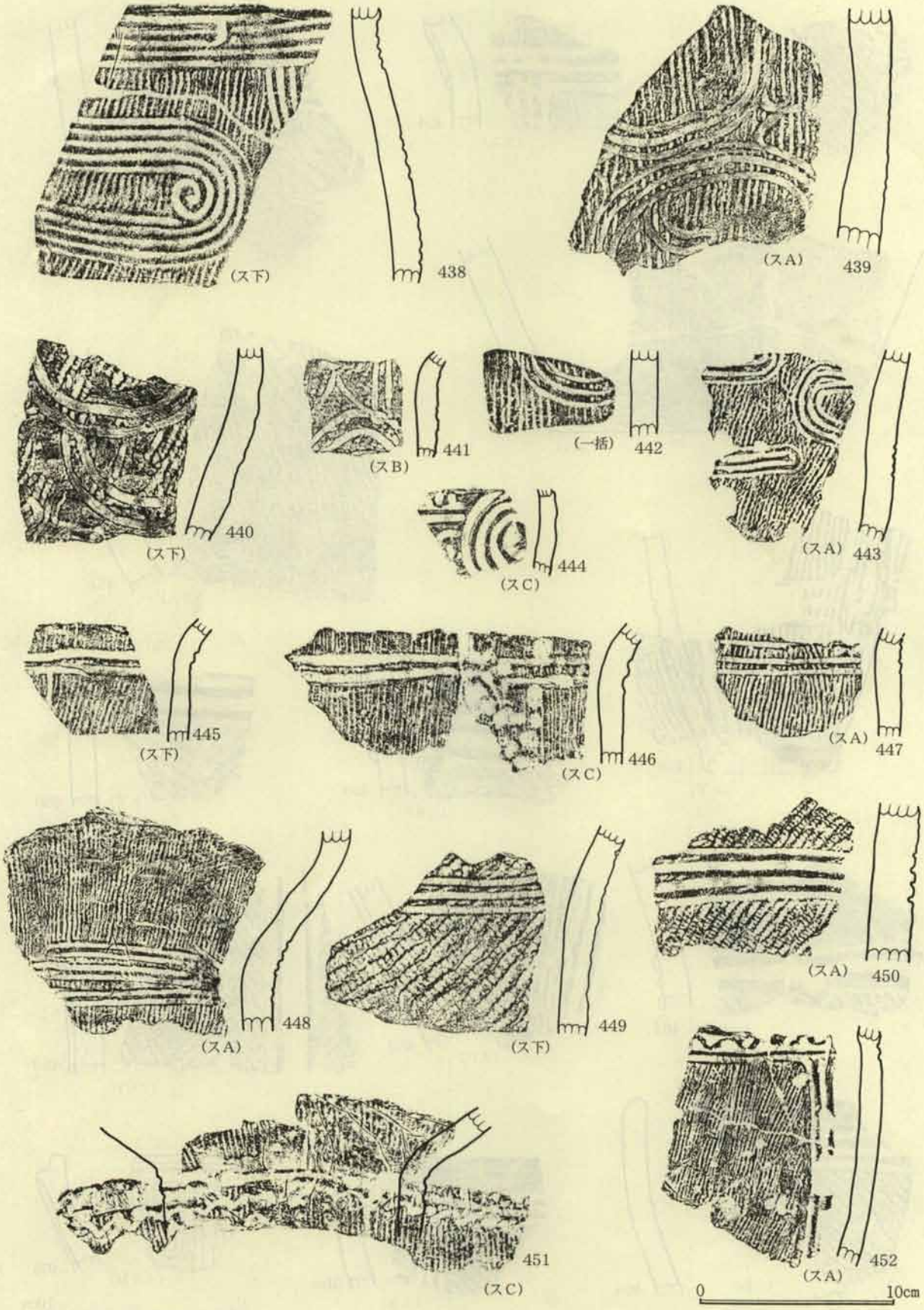
第54図　C地点遺物㉘　中期中葉末



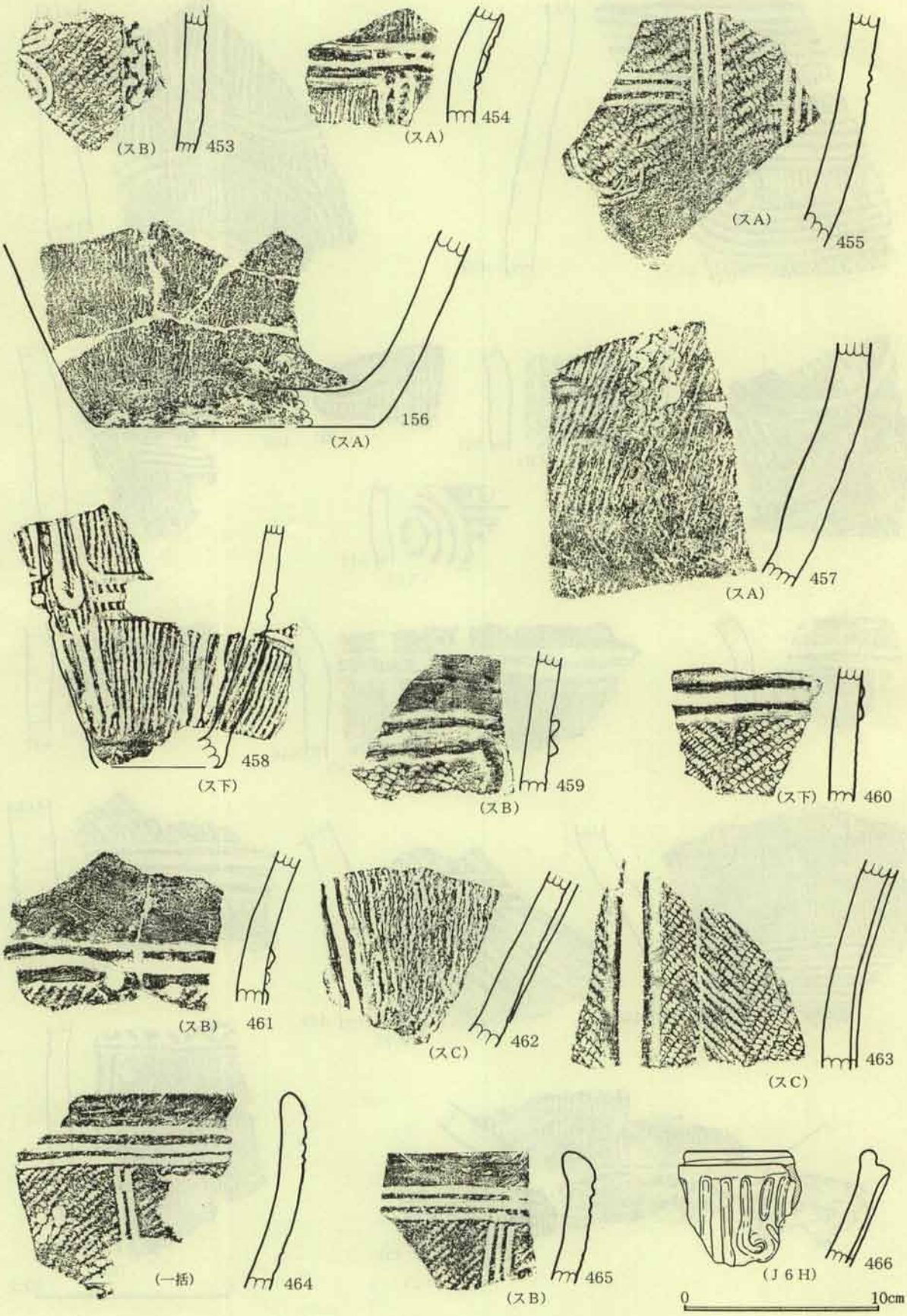
第55図　C地点遺物㉙　中期（加曽利E式）



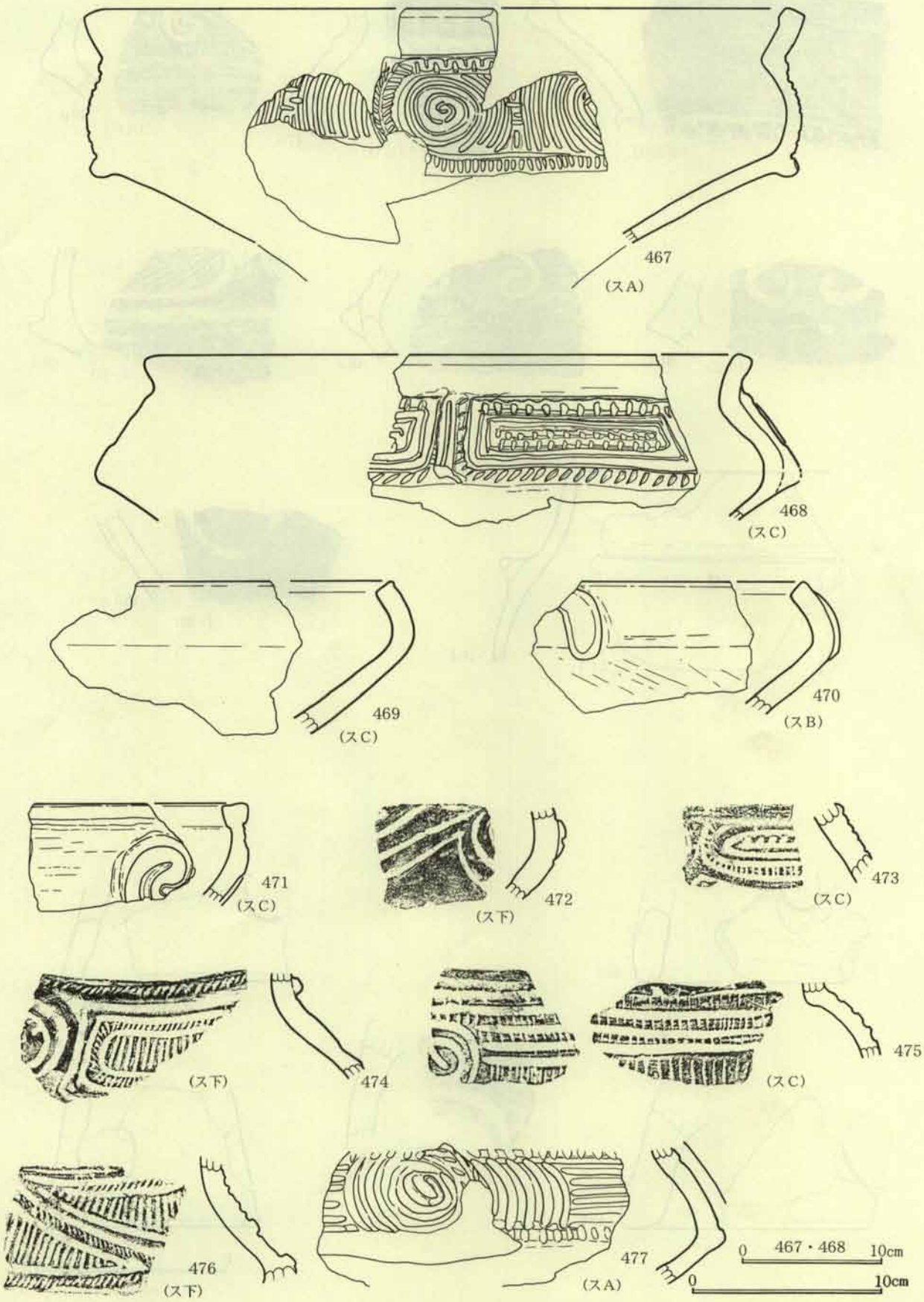
第56図　C地点遺物⑩　中期



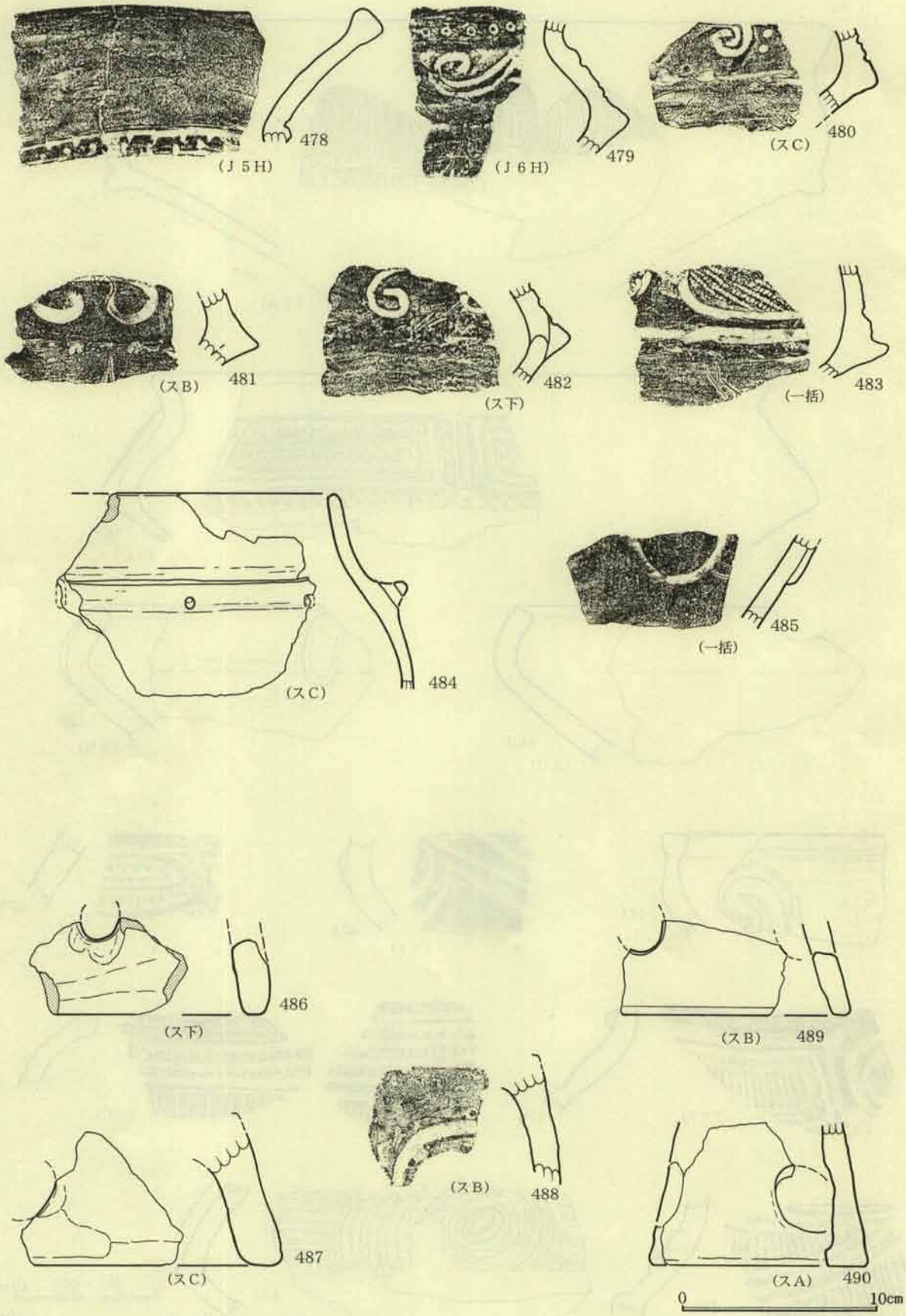
第57図　C地点遺物30　中期



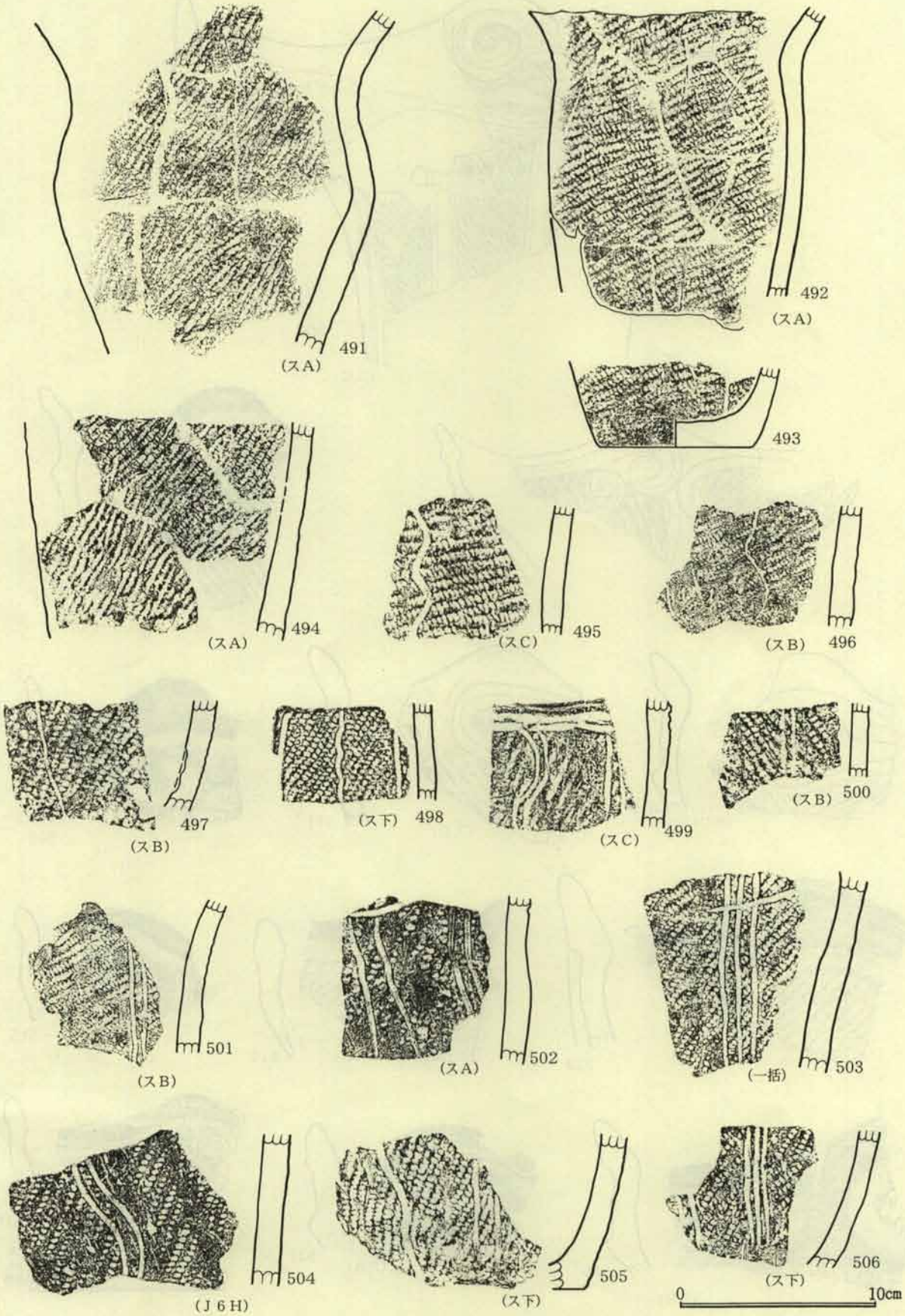
第58図　C地点遺物(32)　中期



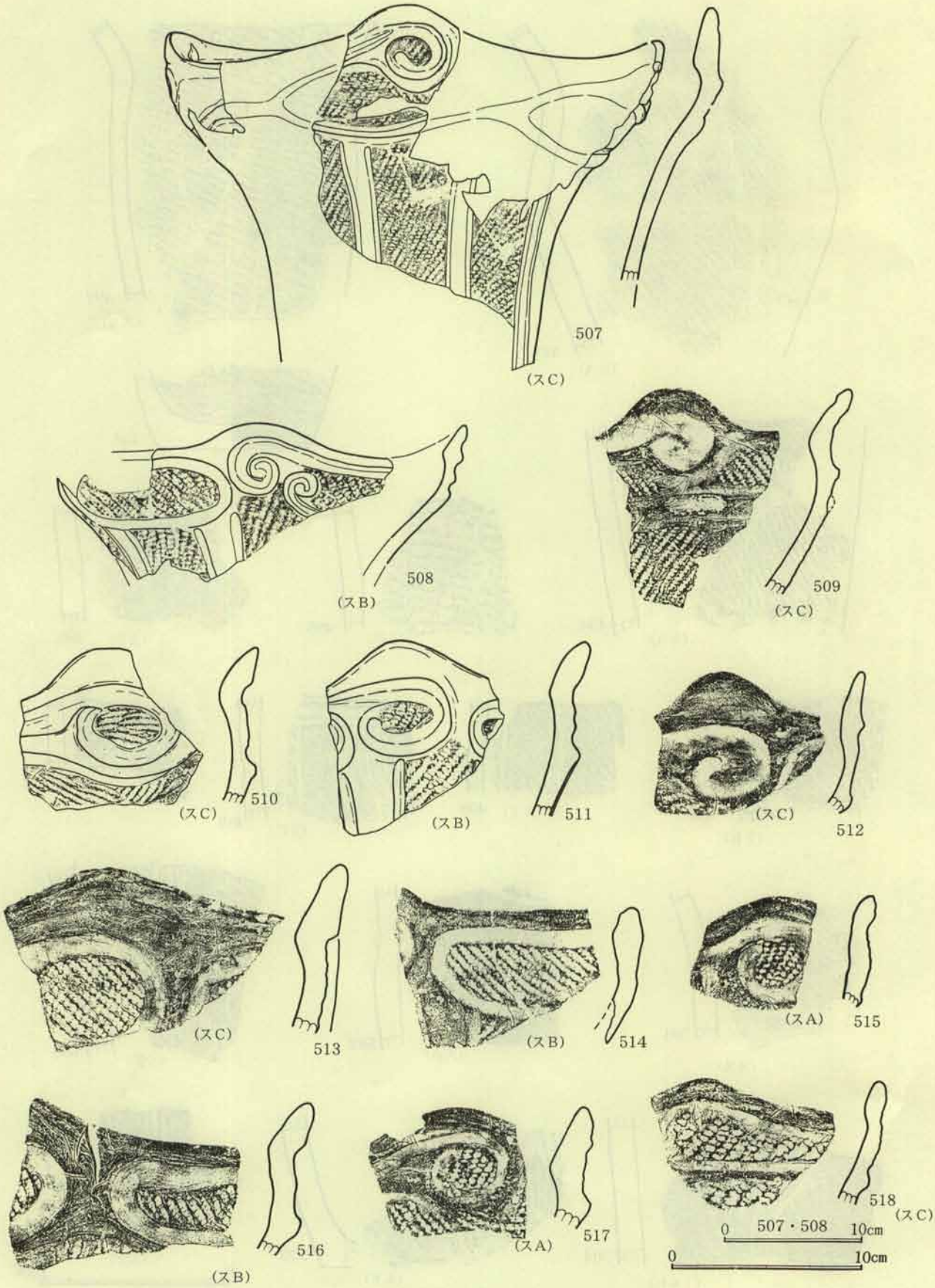
第59図　C地点遺物(3)　中期　(浅鉢形土器)



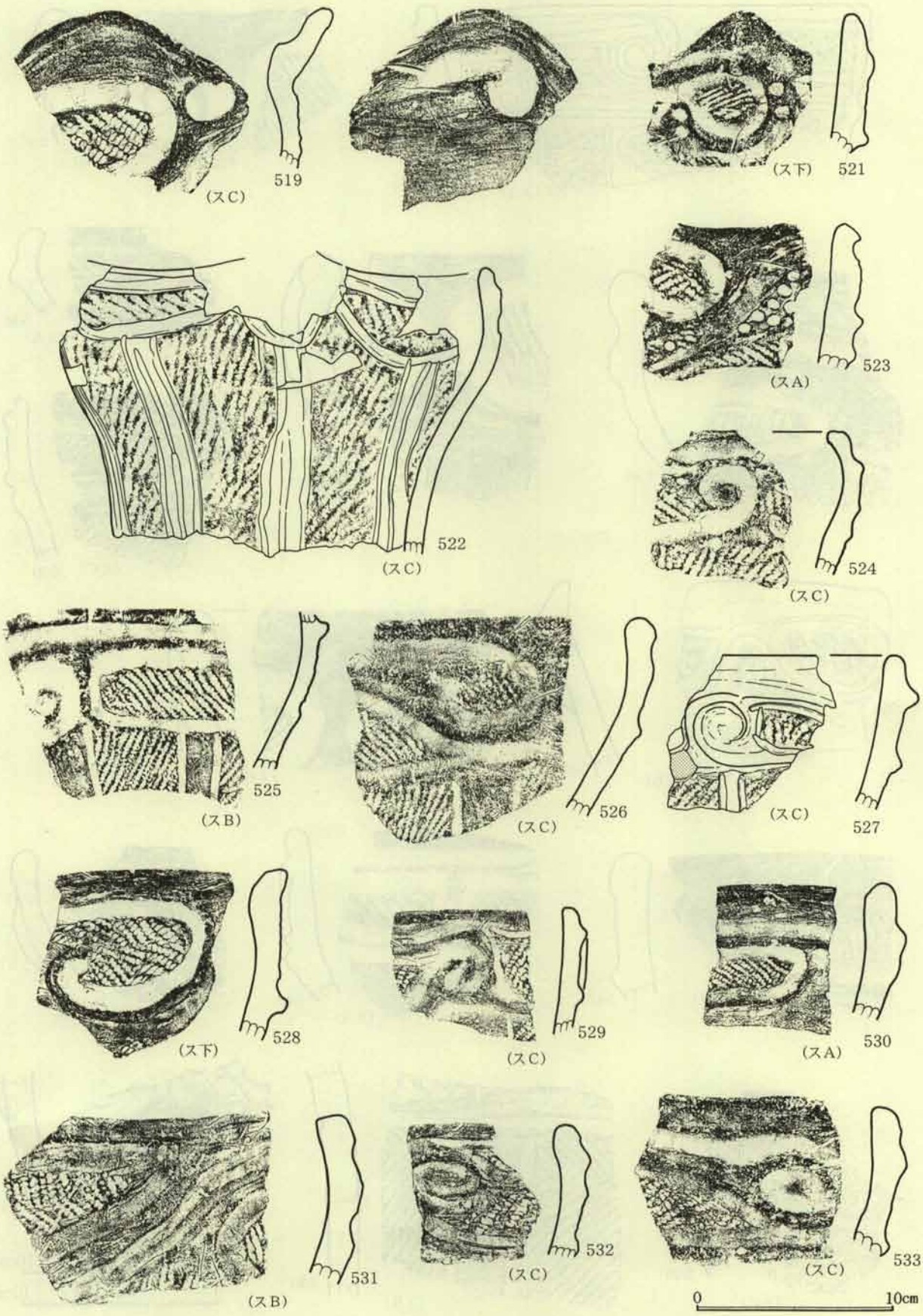
第60図　C地点遺物(34)　中期（器台形土器等）



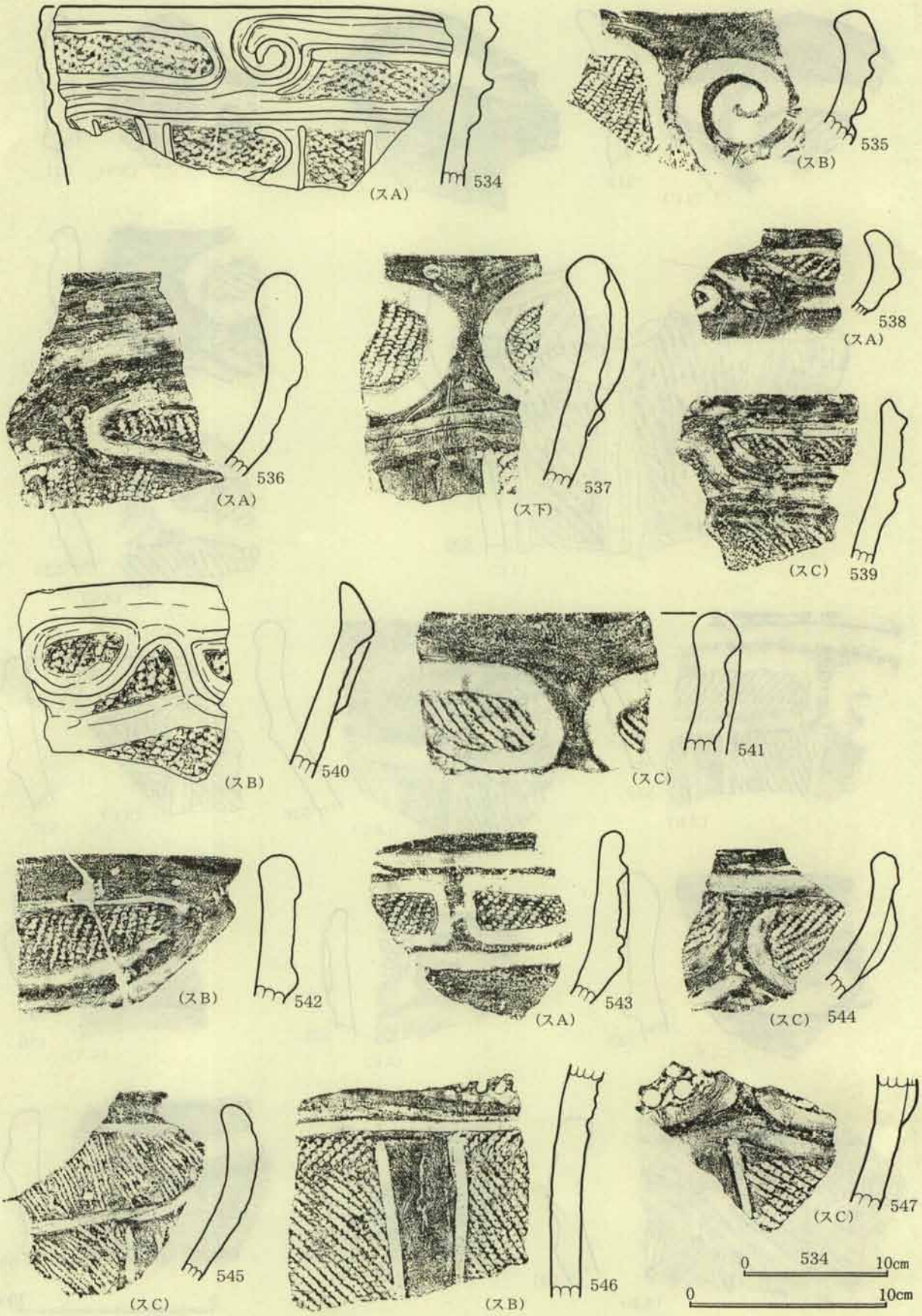
第61図　C地点遺物㊺　中期（加曽利E式）



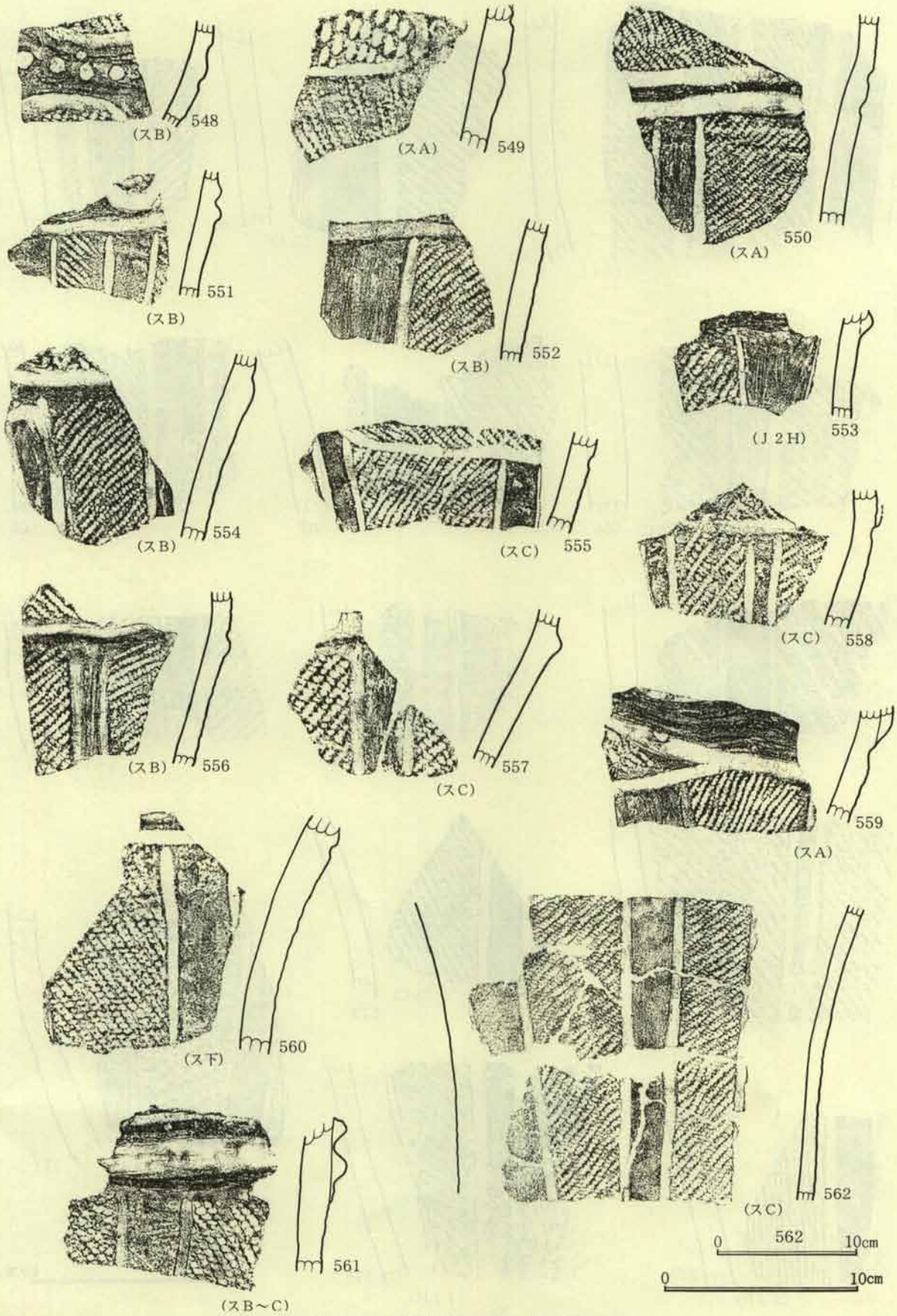
第62図　C地点遺物㊱　中期（加曽利E式）



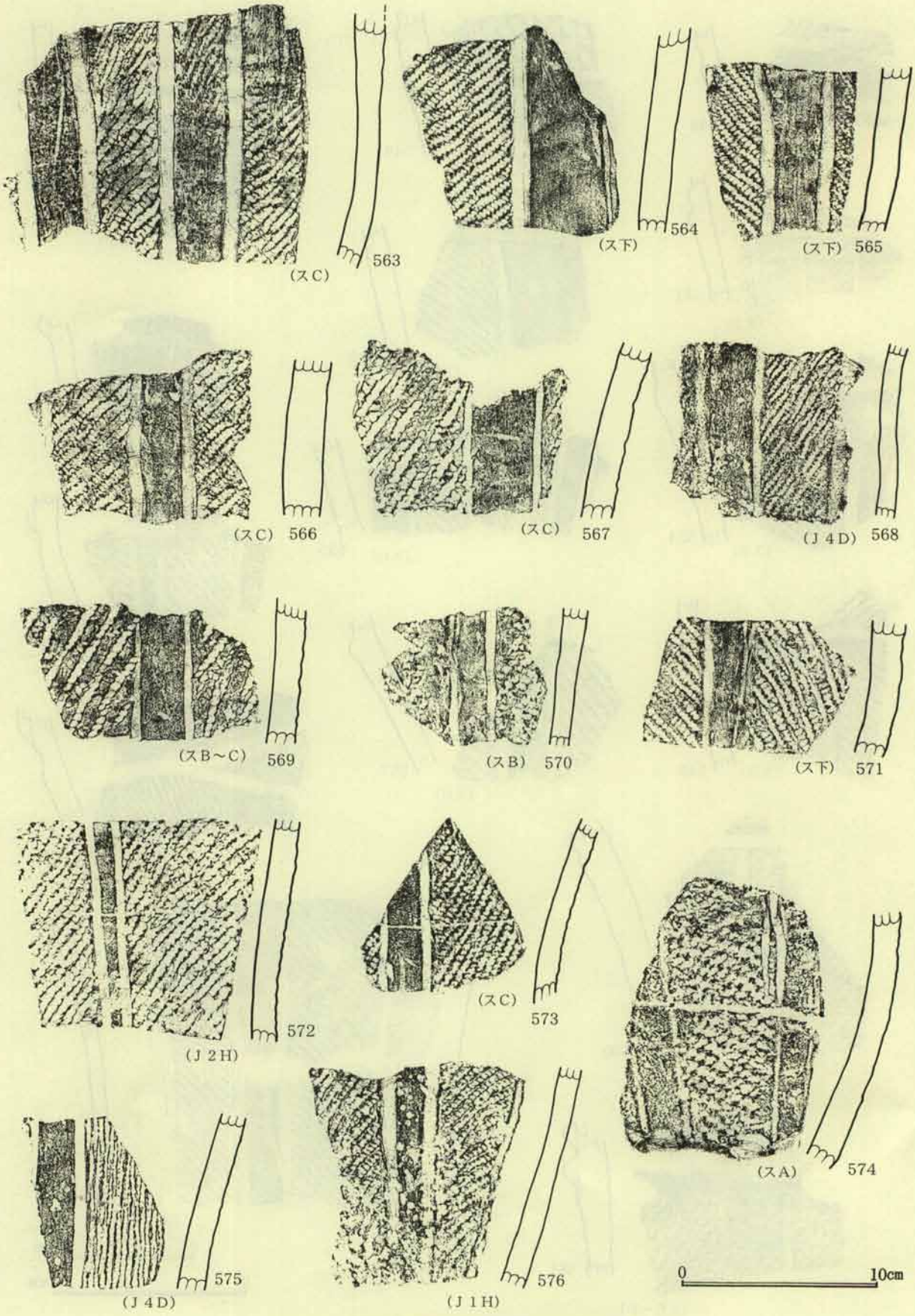
第63図　C地点遺物(37)　中期（加曽利E式）



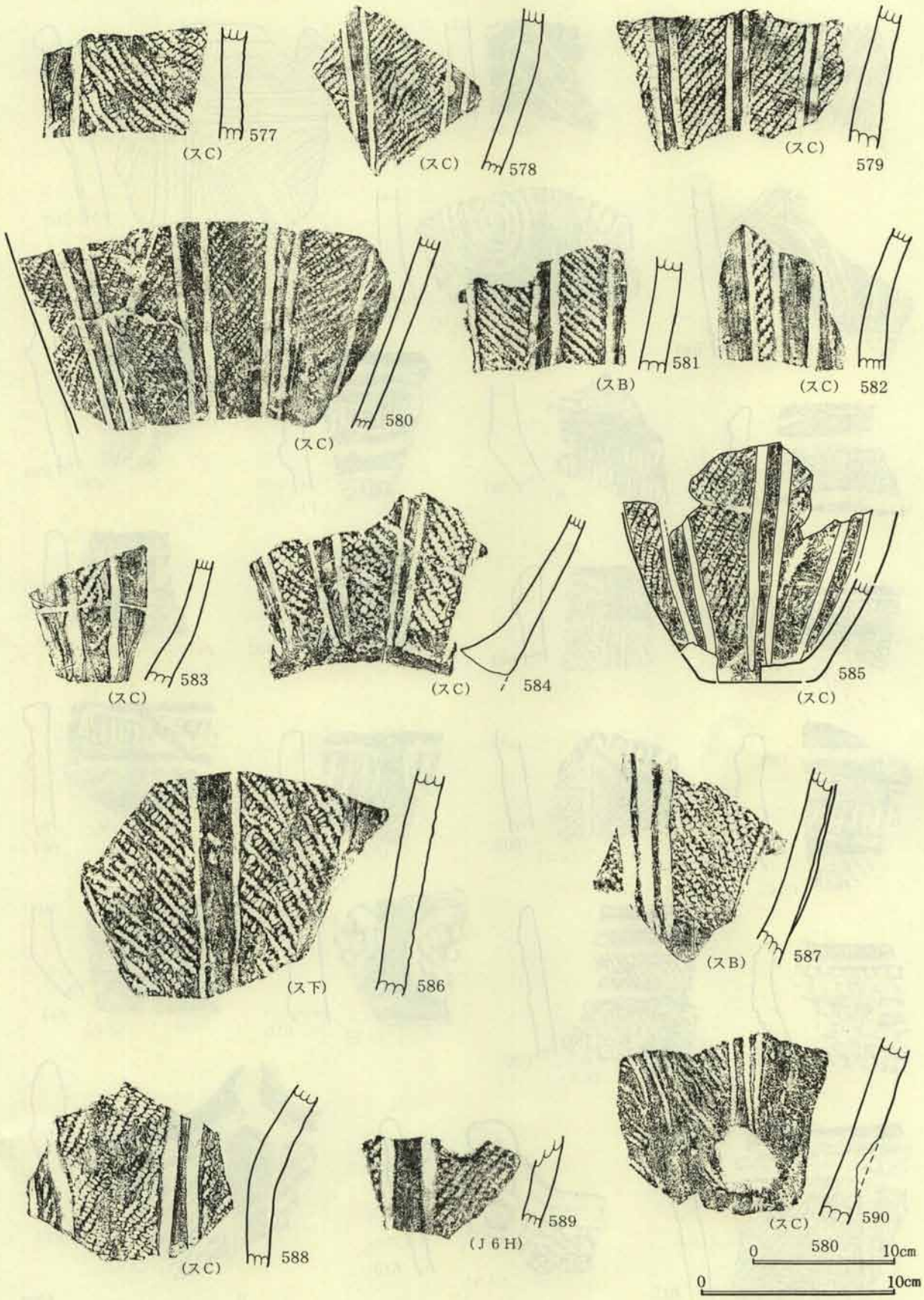
第64図　C地点遺物(38)　中期（加曽利E式）



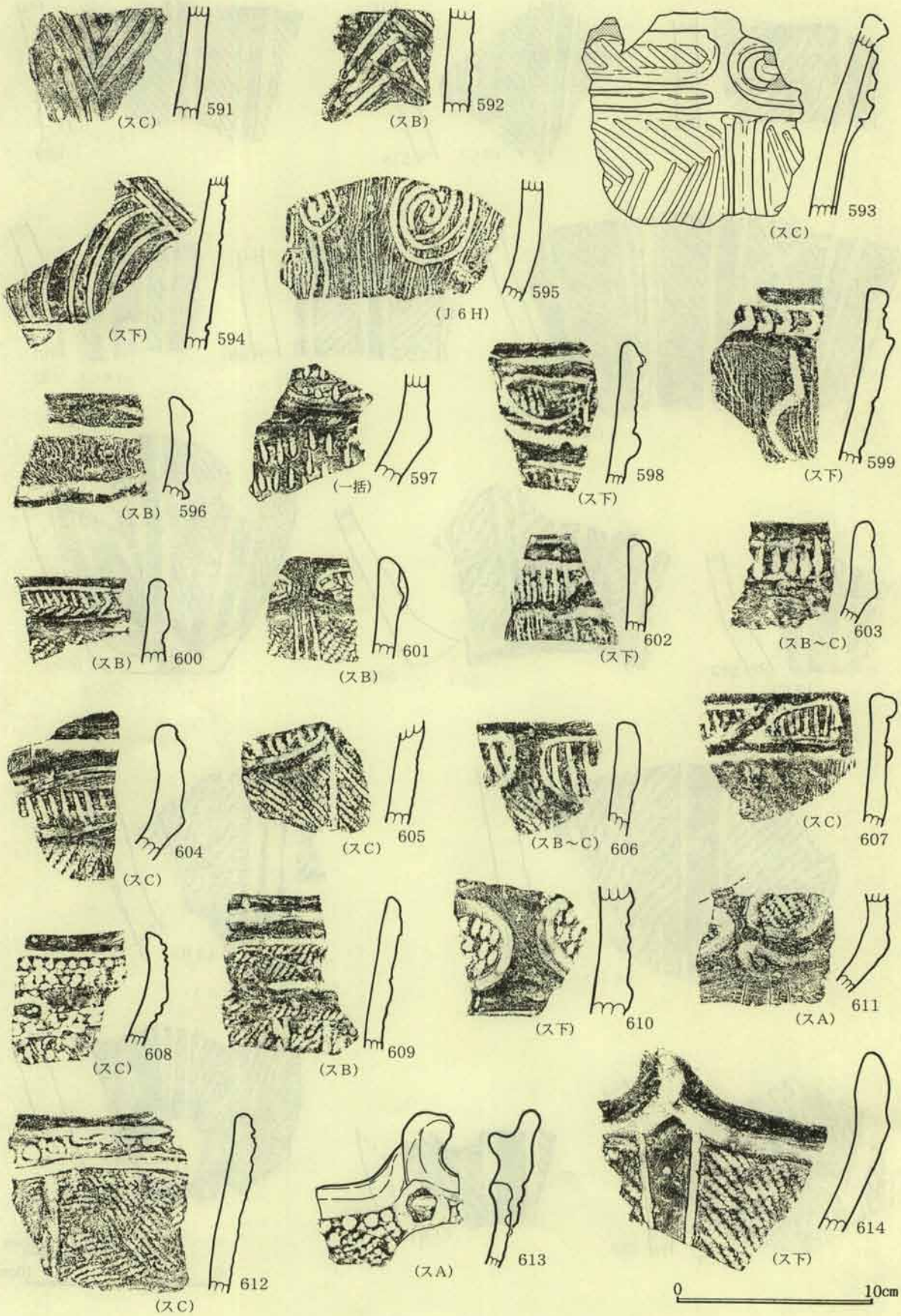
第65図　C地点遺物㊴　中期（加曽利E式）



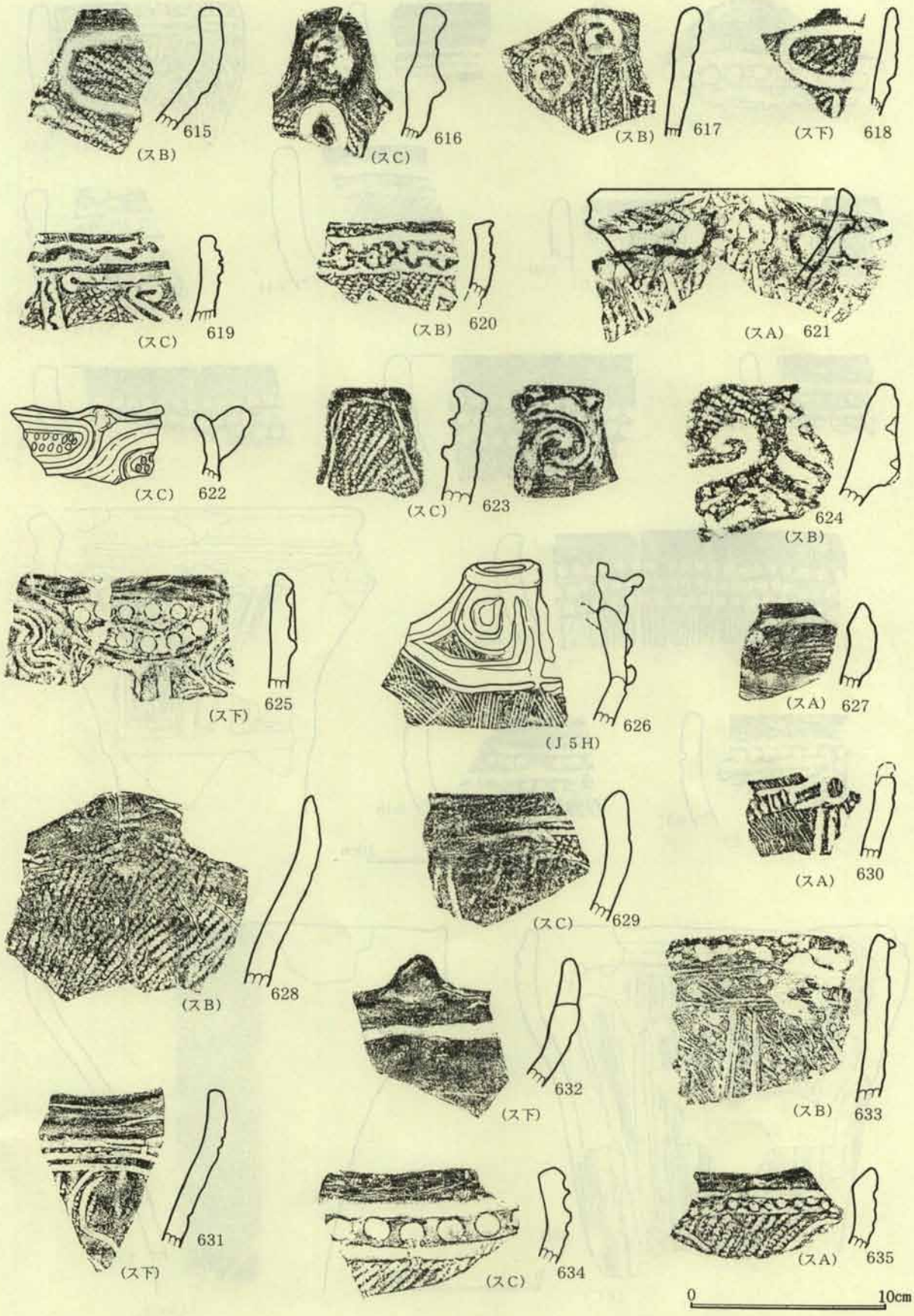
第66図　C地点遺物(40)　中期（加曽利E式）



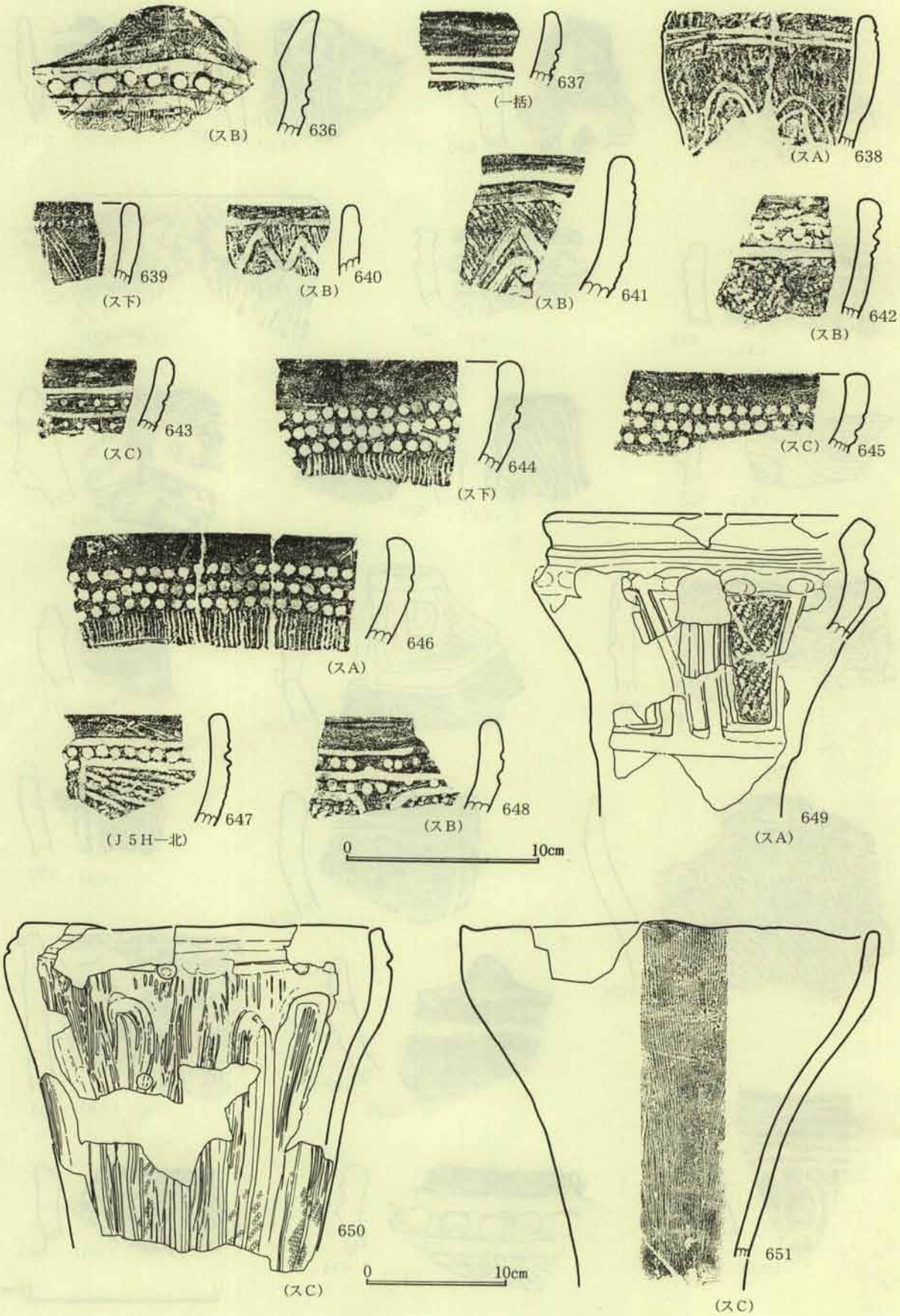
第67図　C地点遺物(4)　中期（加曽利E式）



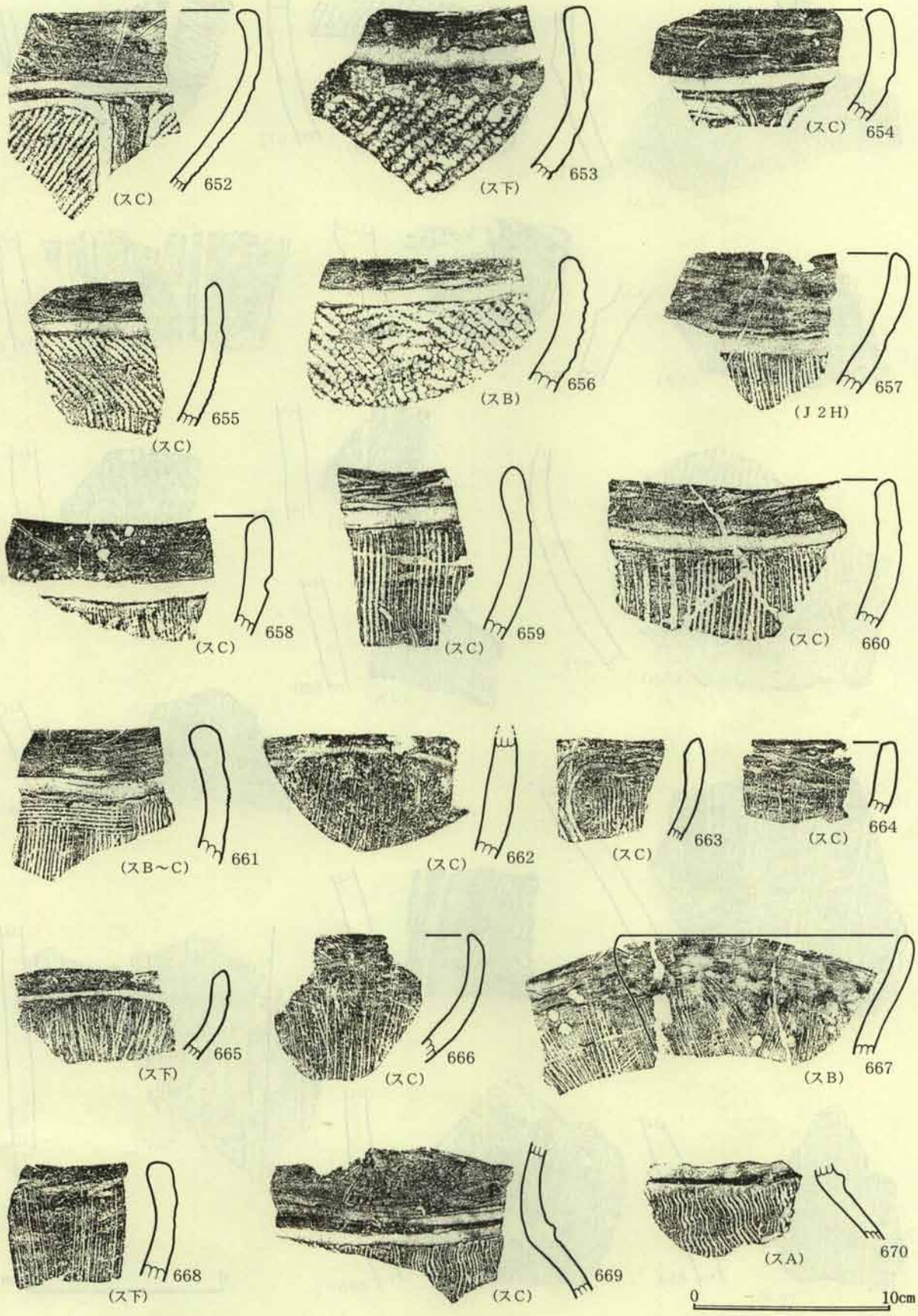
第68図　C地点遺物(42)　中期（加曽利E式・曽利式）



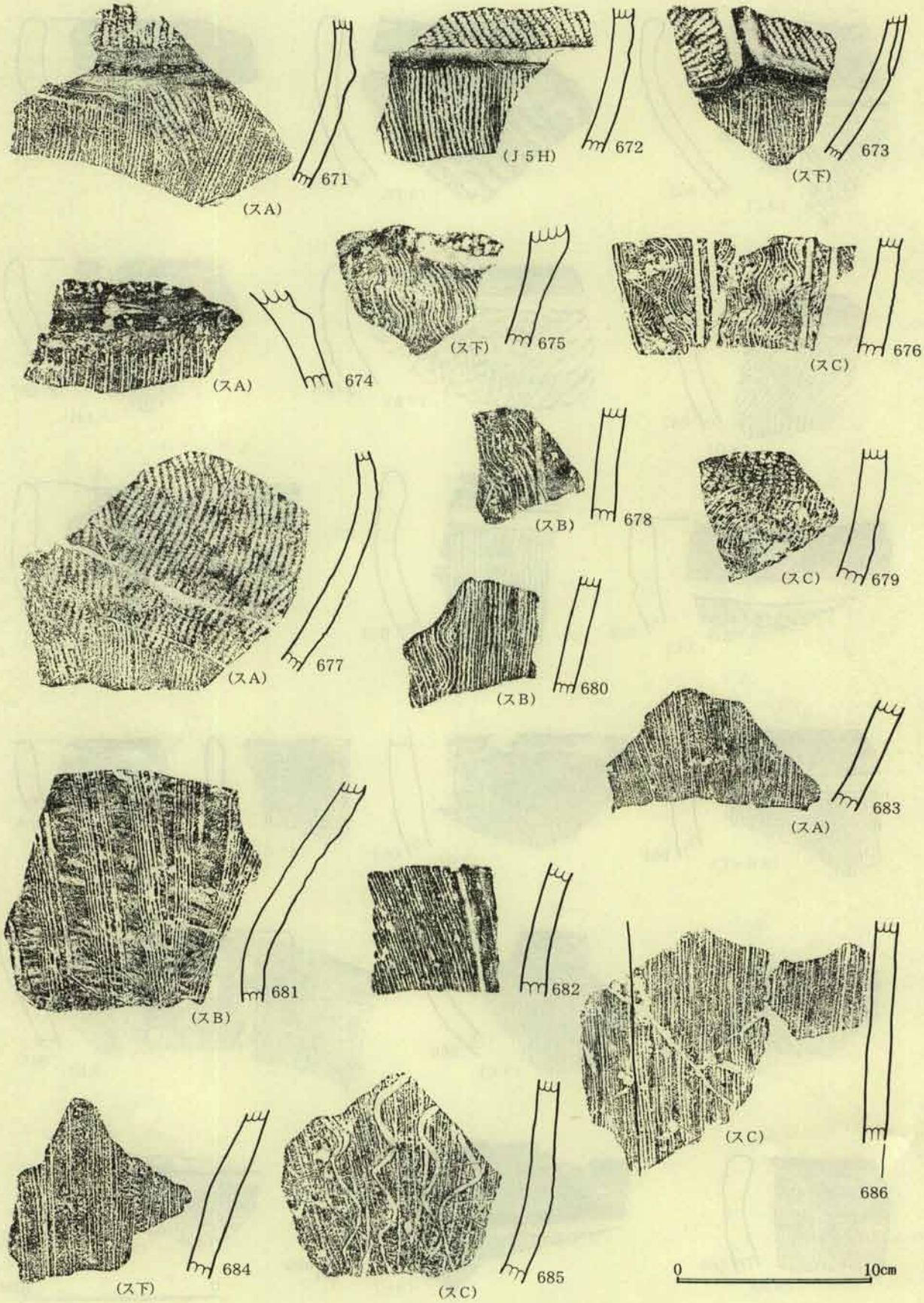
第69図　C地点遺物㊸　中期（加曽利E式・大木式等）



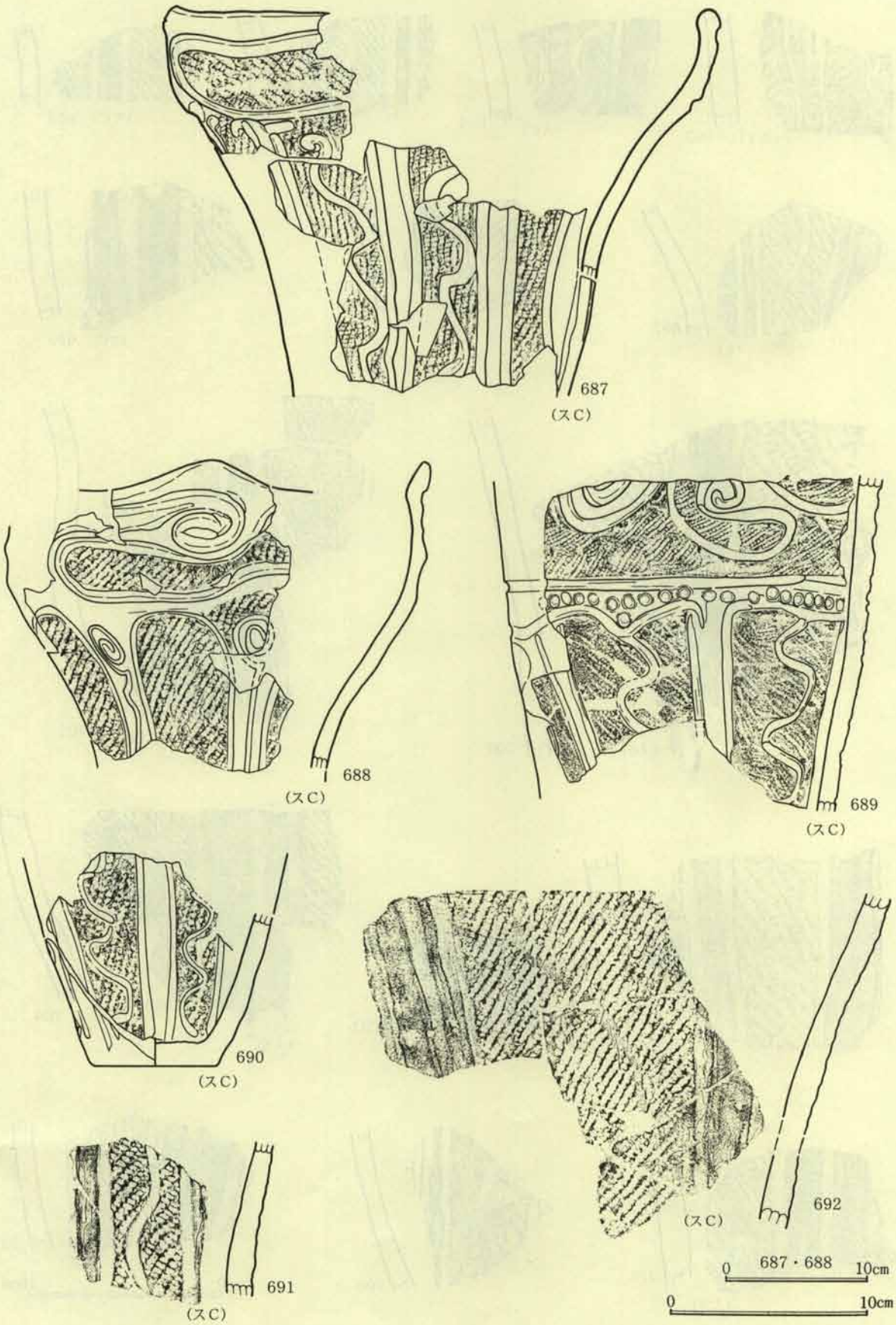
第70図　C地点遺物(44)　中期（加曽利E式）



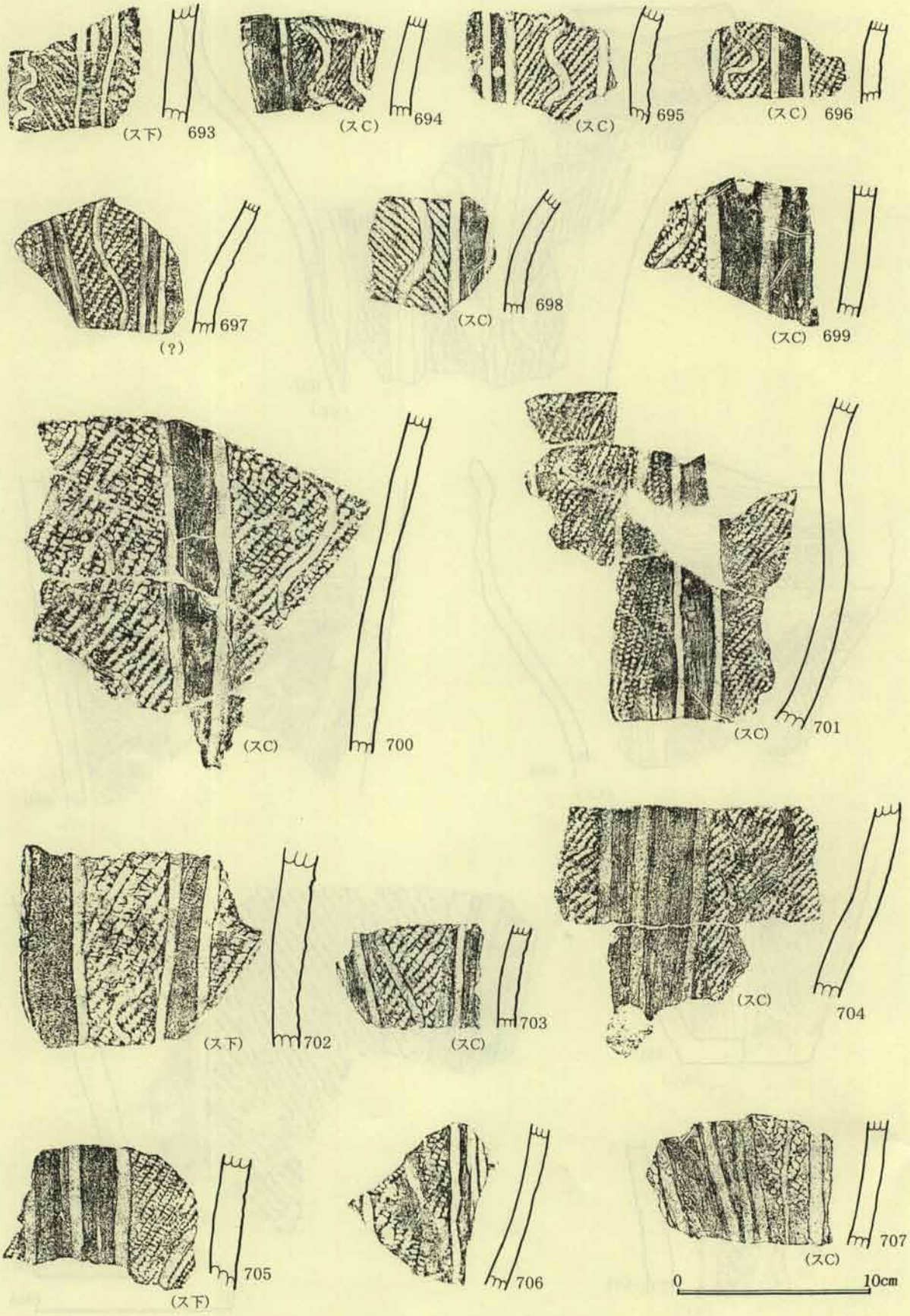
第71図　C地点遺物(45)　中期（加曽利E式）



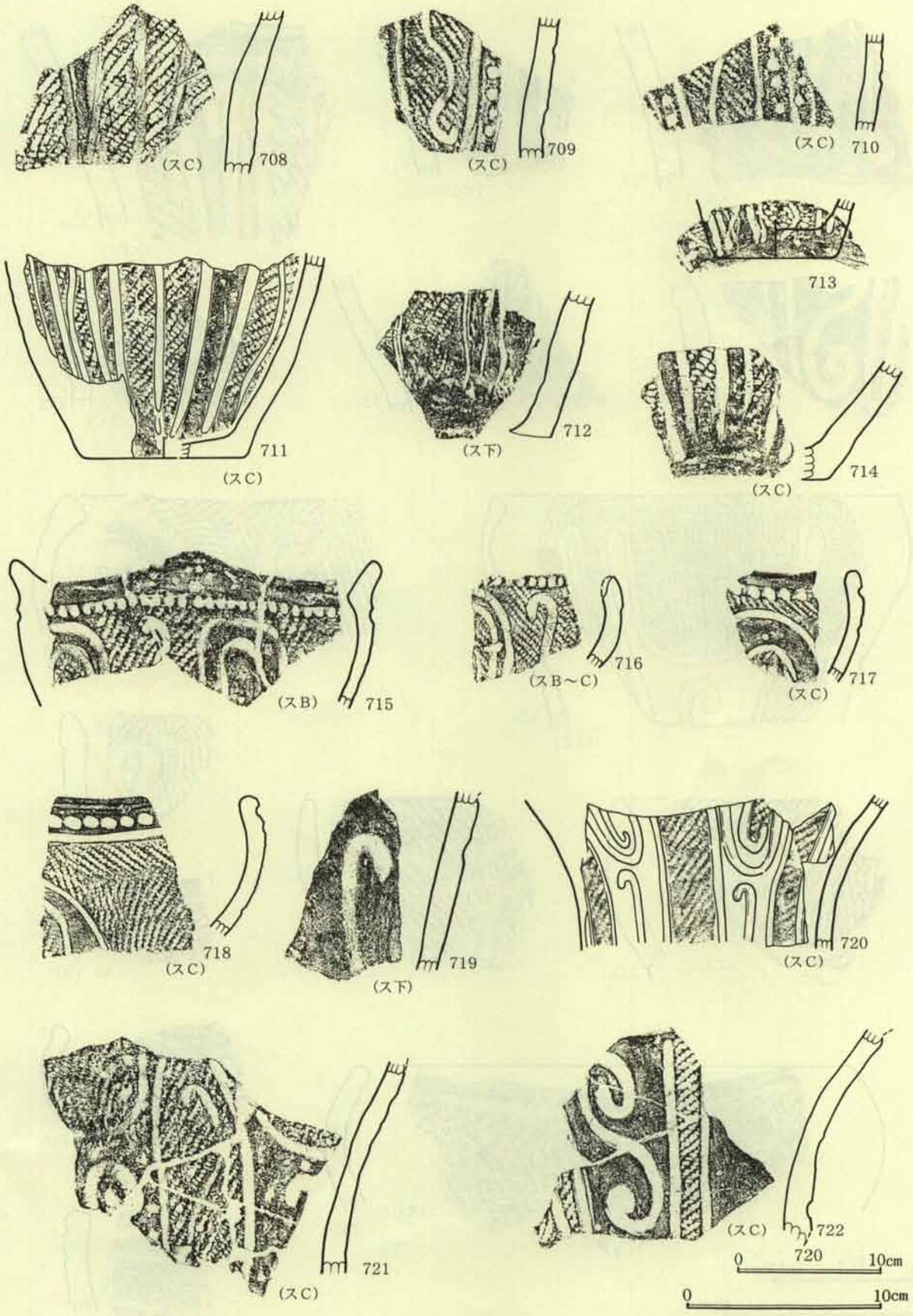
第72図　C地点遺物㊻　中期（加曽利E式）



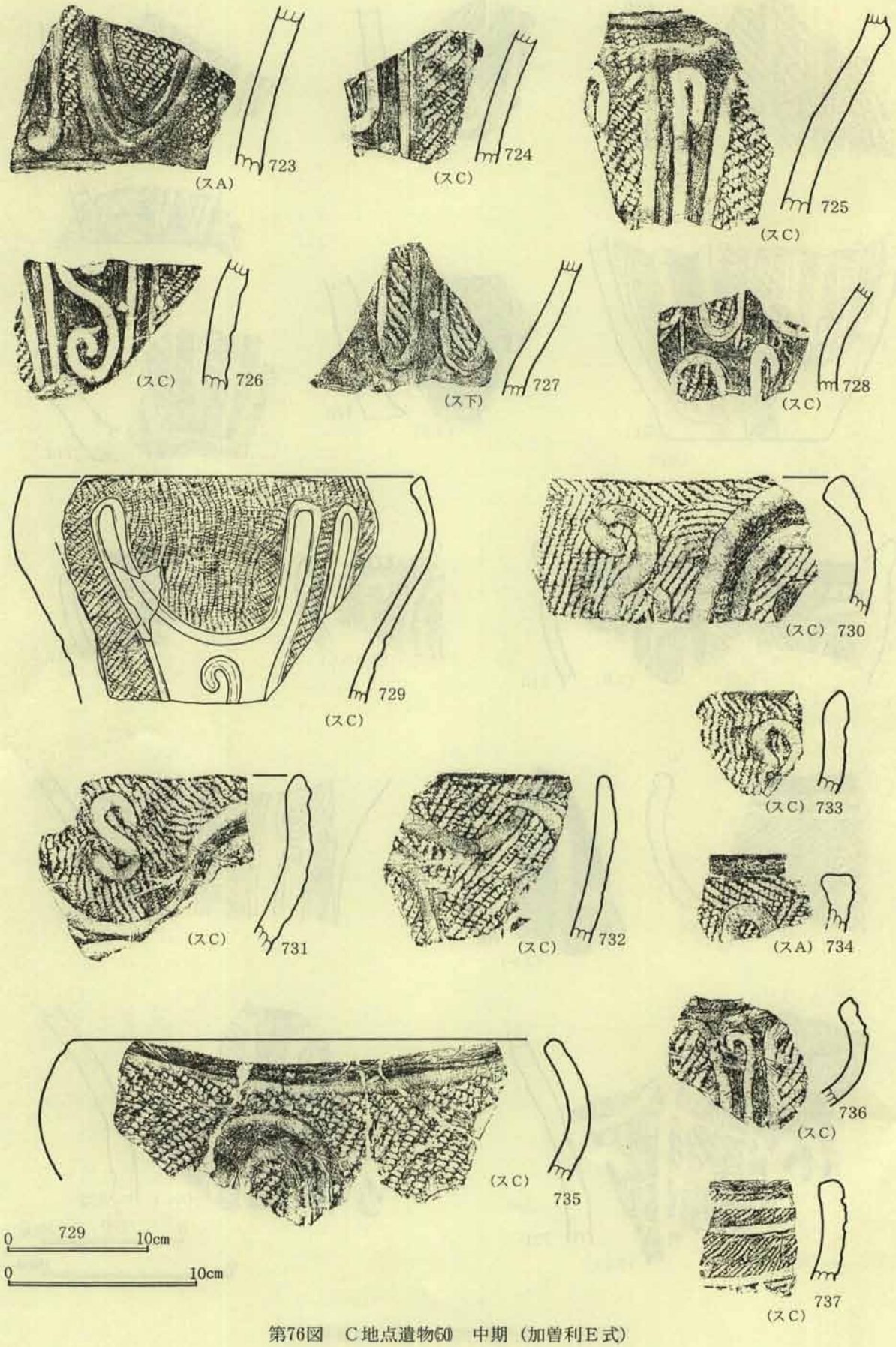
第73図　C地点遺物(47)　中期（加曽利E式）



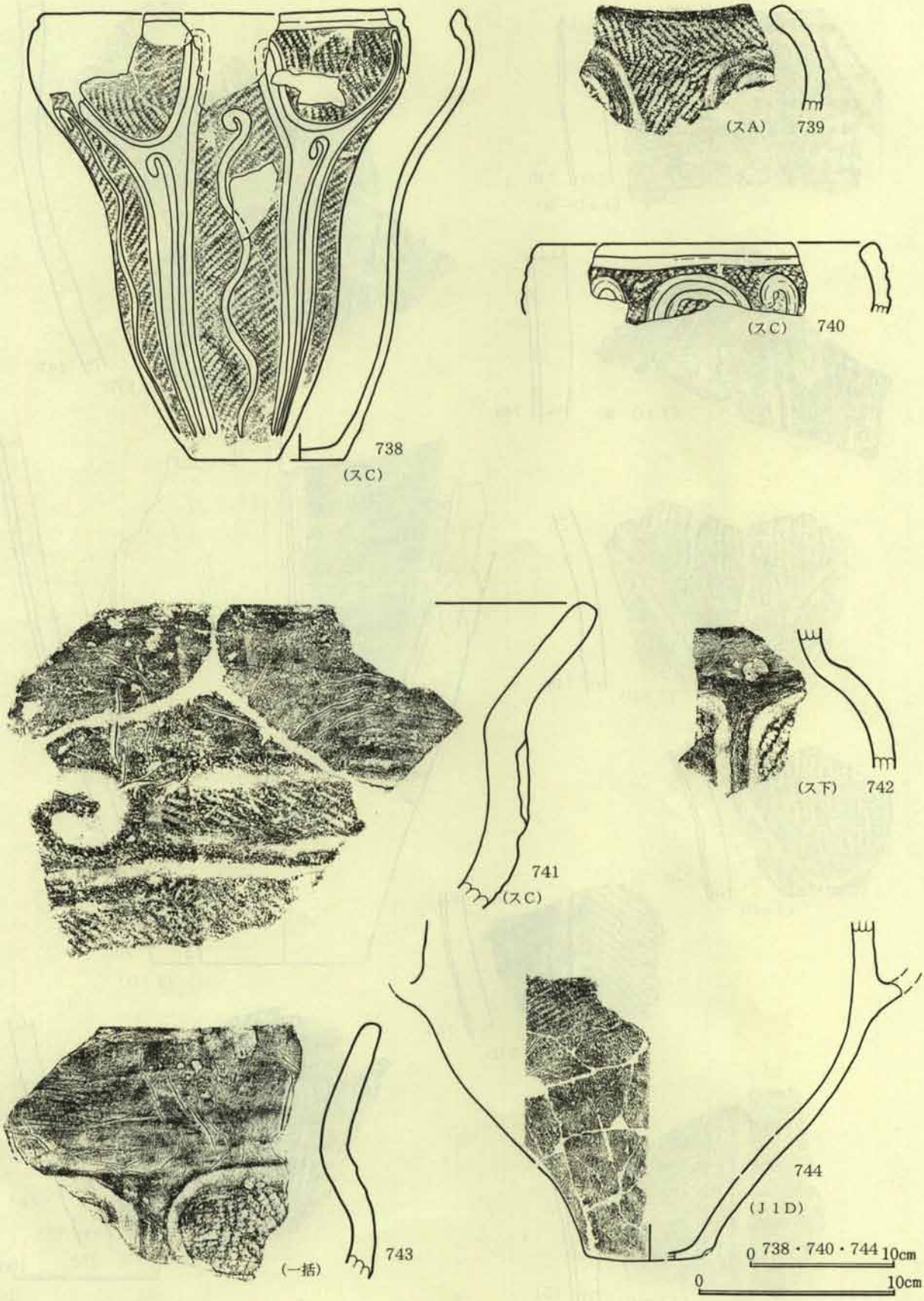
第74図　C地点遺物(48)　中期（加曽利E式）



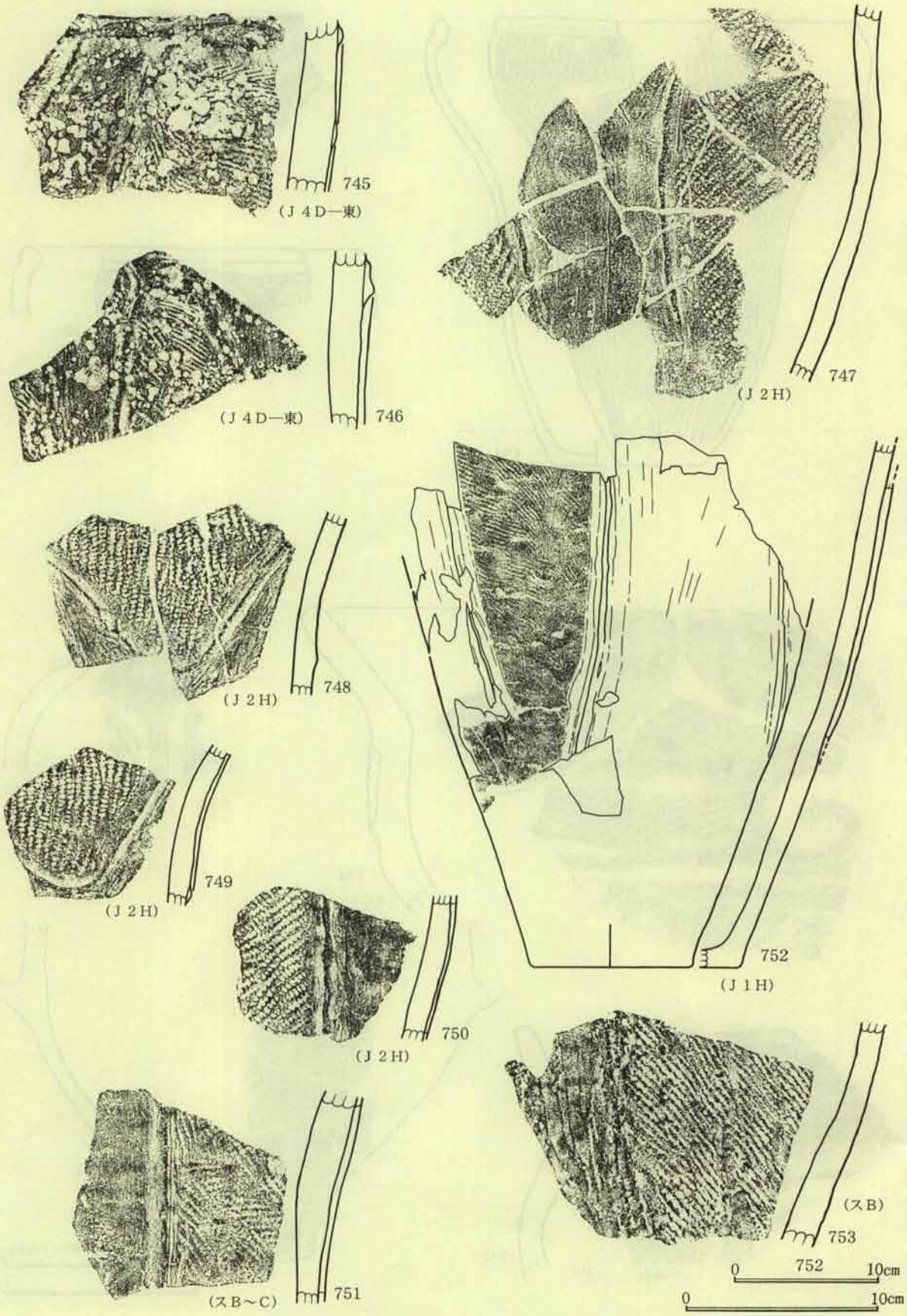
第75図　C地点遺物㊾　中期（加曽利E式）



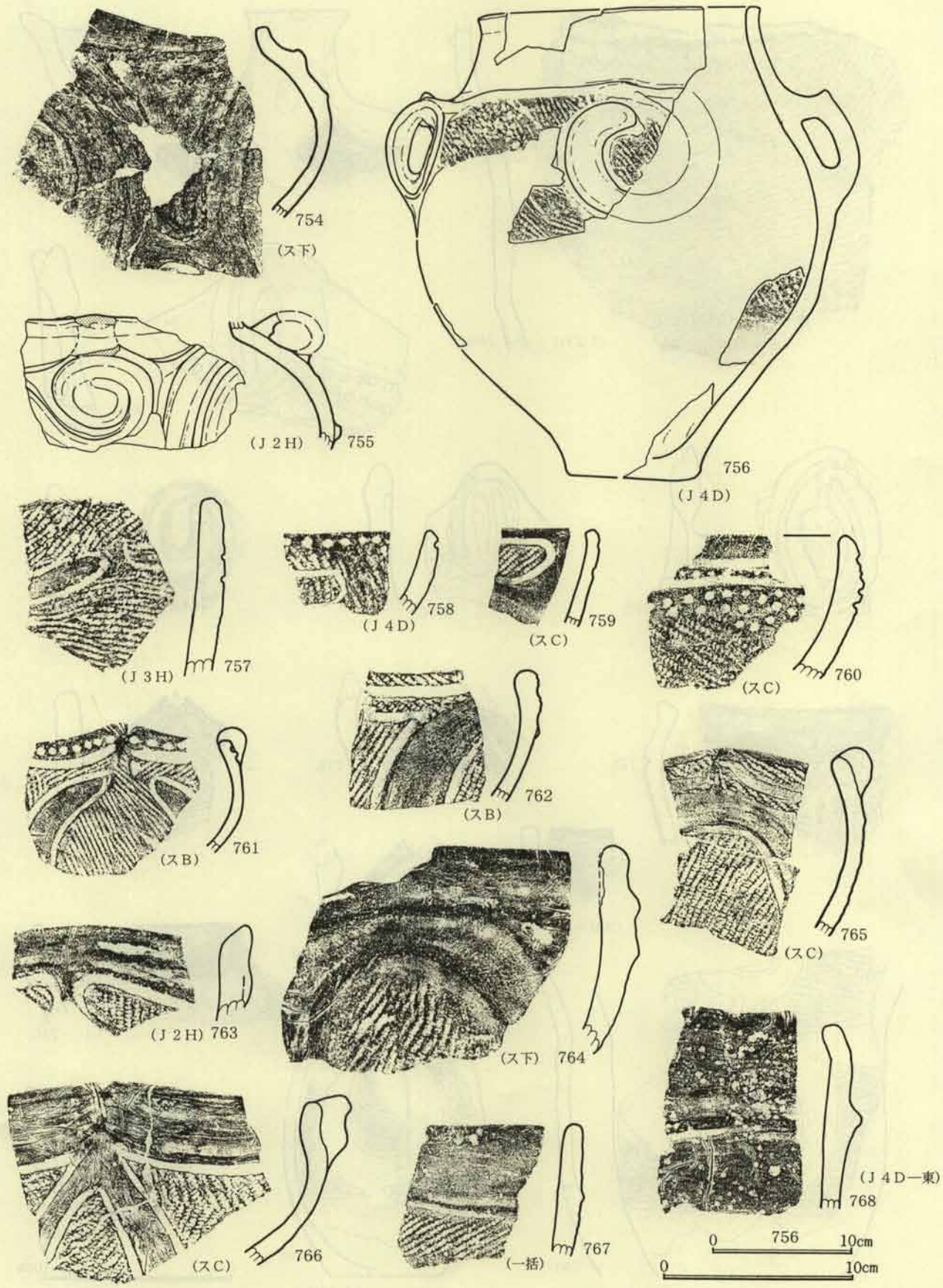
第76図　C地点遺物60　中期（加曽利E式）



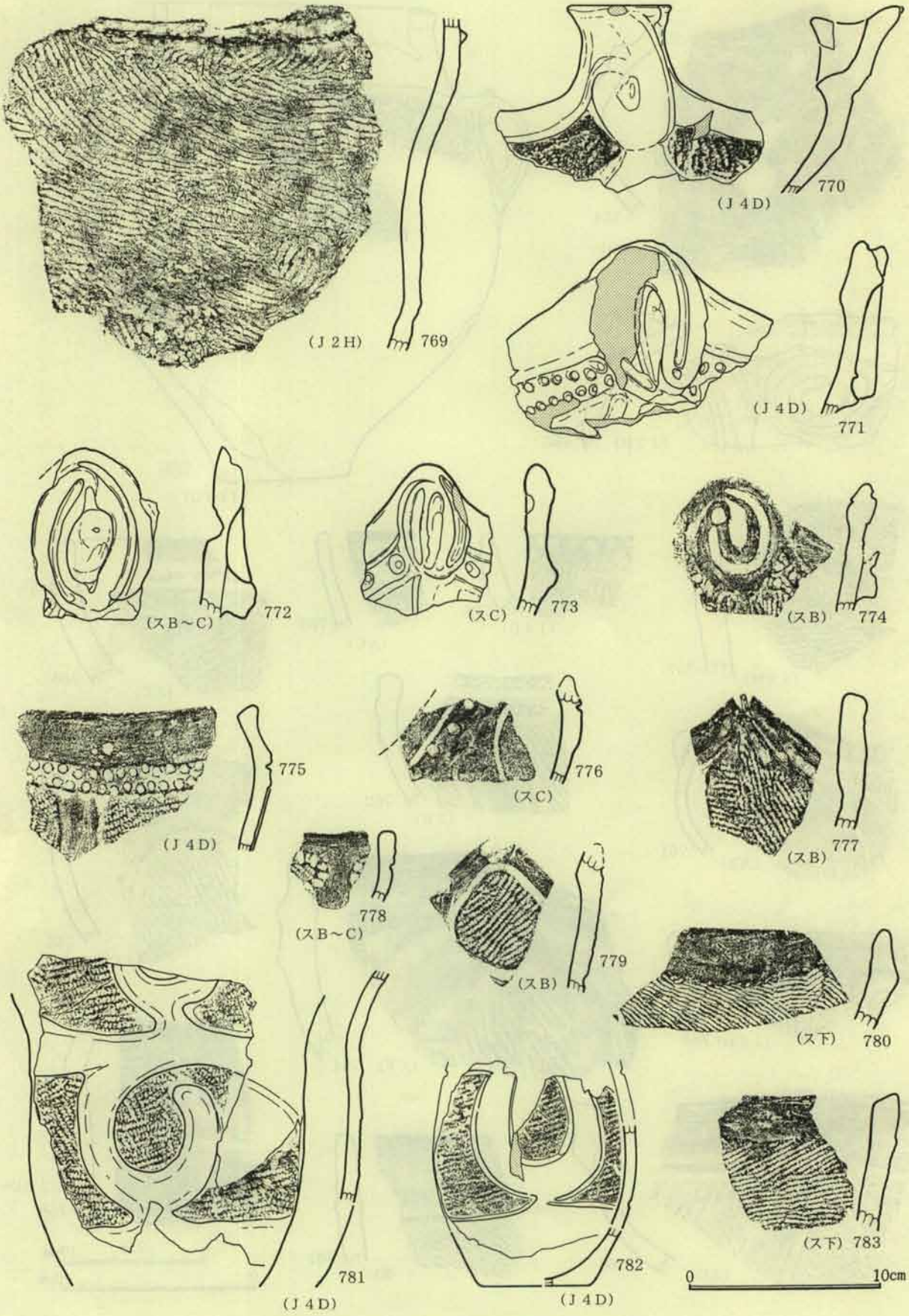
第77図　C地点遺物⑤　中期（加曽利E式）



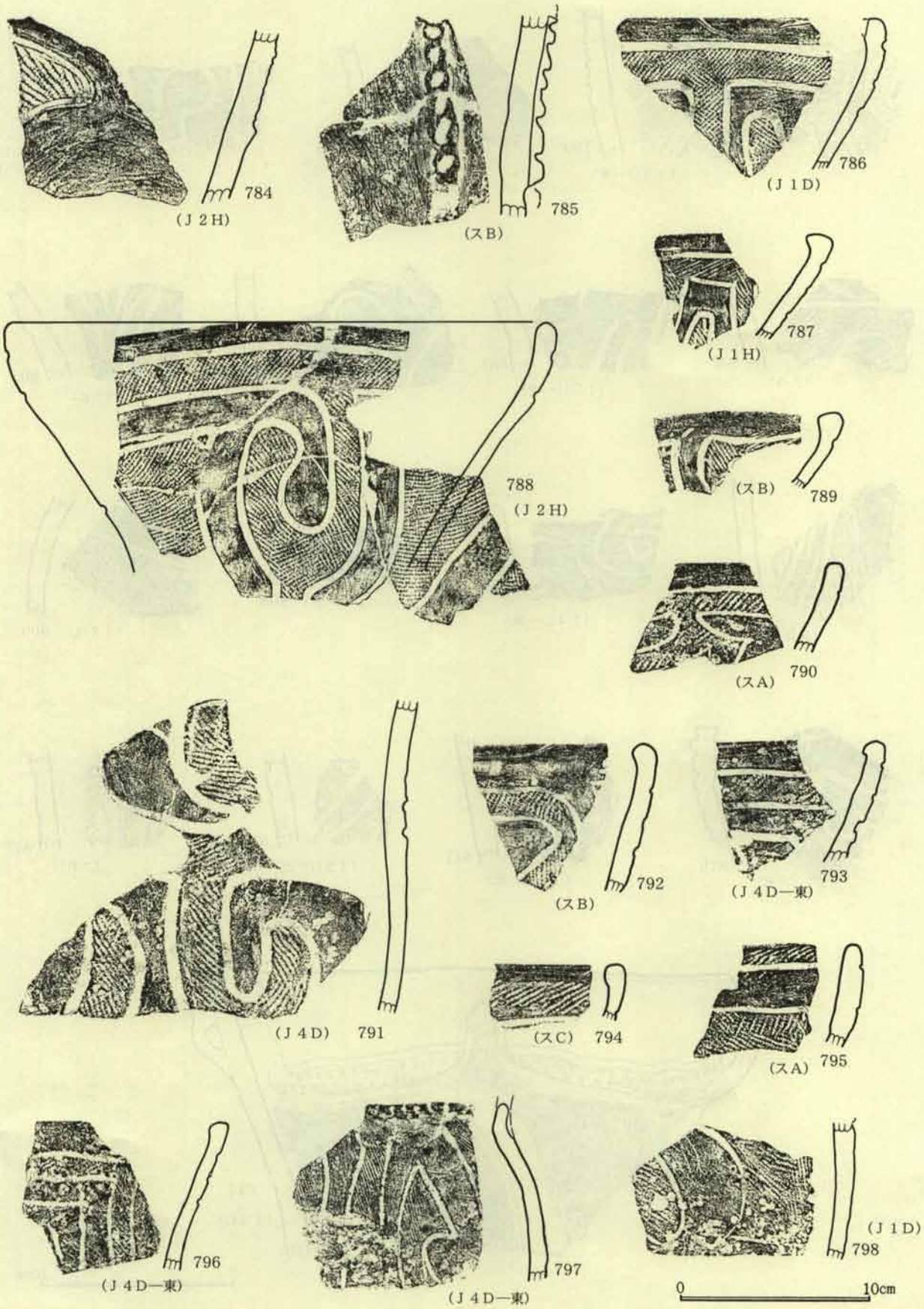
第78図　C地点遺物52　中期（加曽利E式）



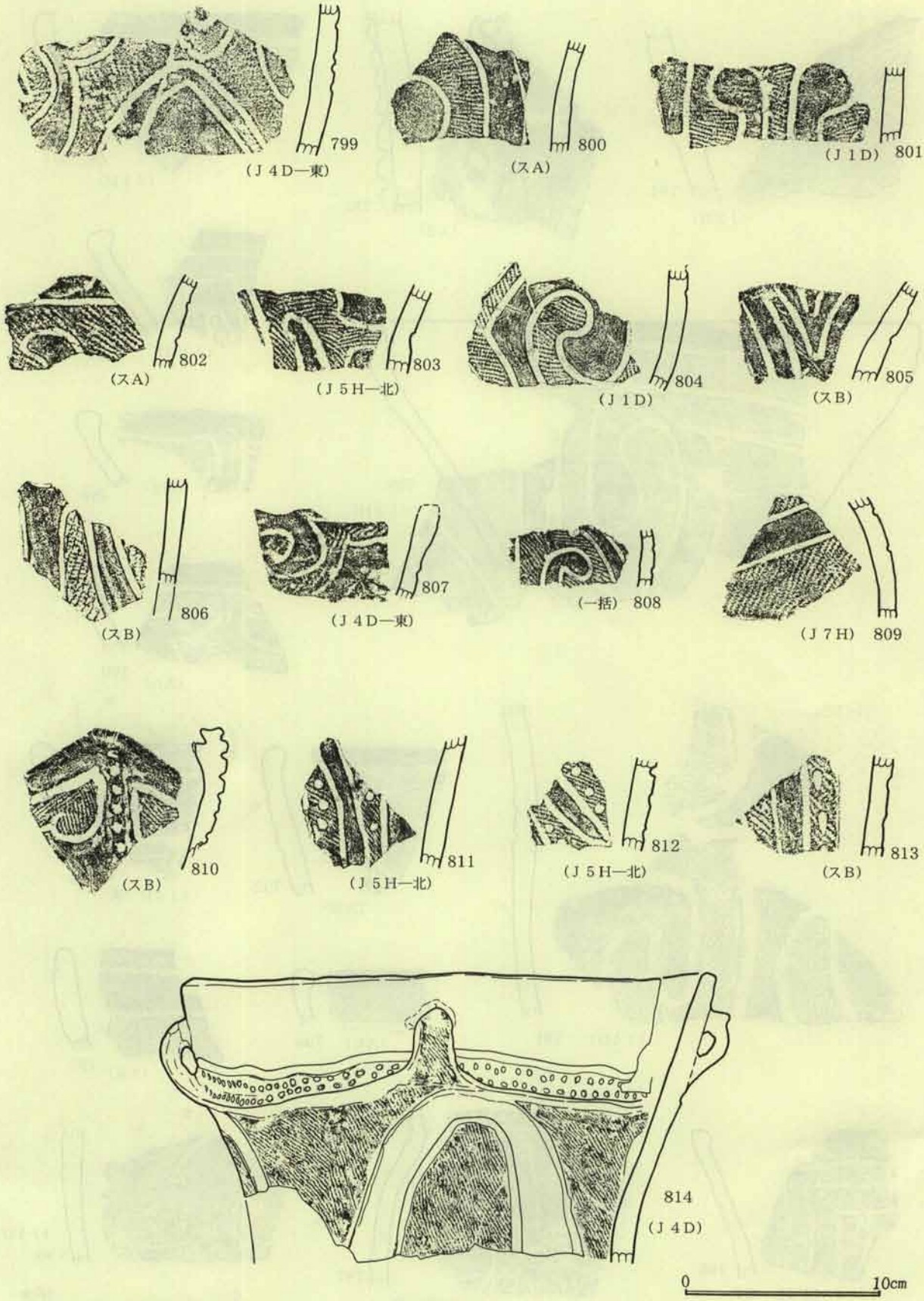
第79図　C地点遺物㊸　中期後葉～後期初頭



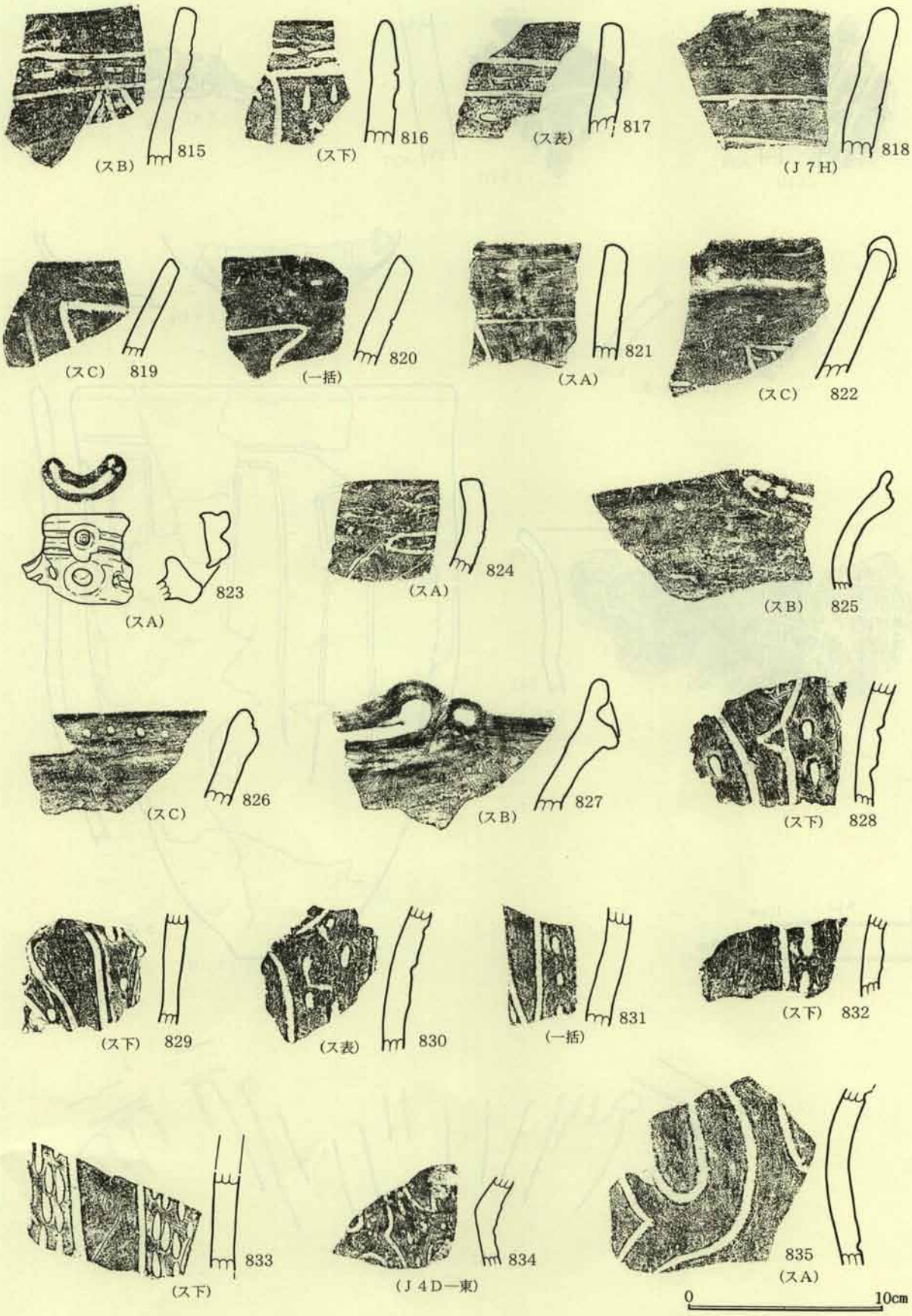
第80図　C地点遺物54　後期初頭（称名寺式等）



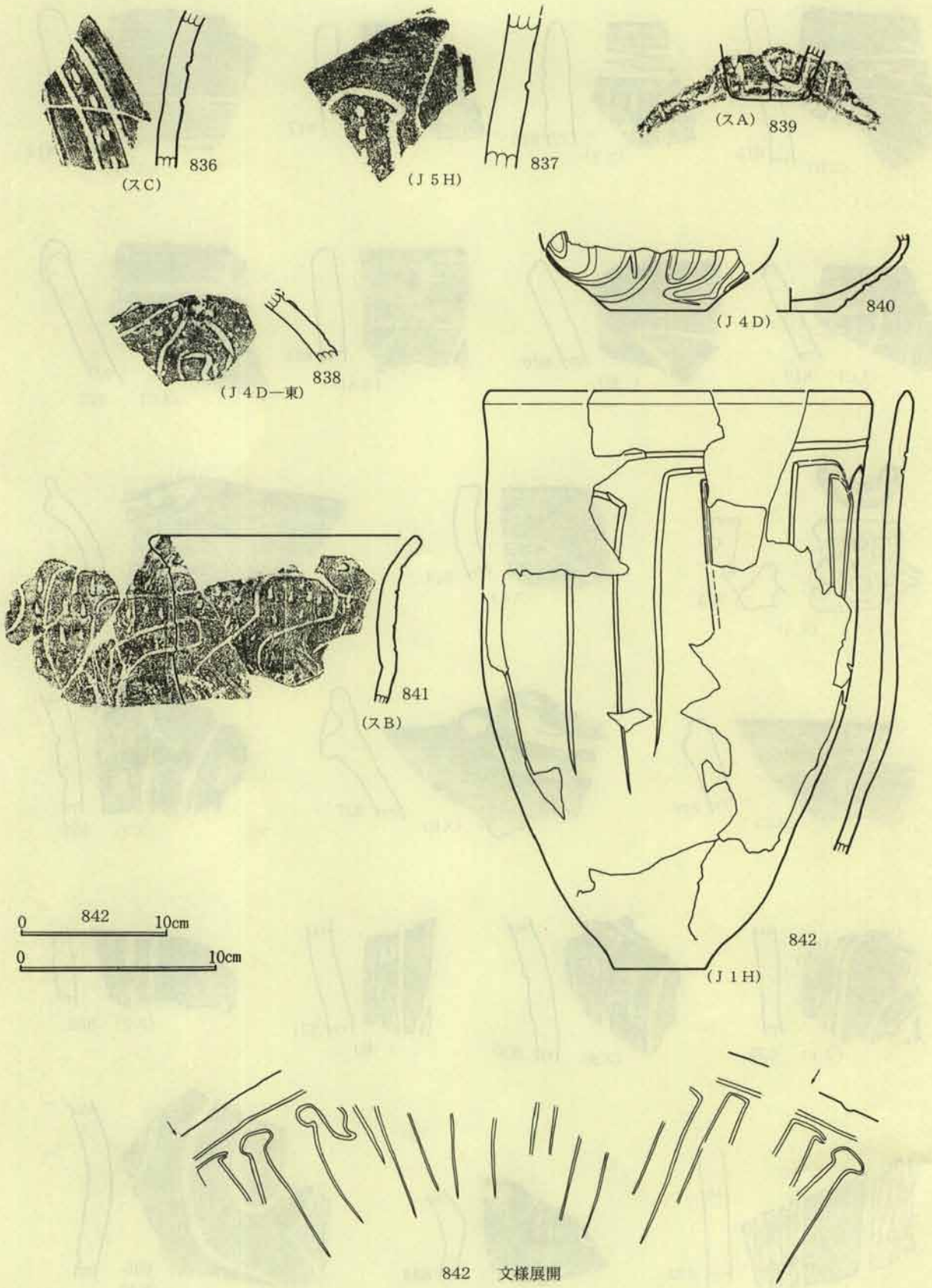
第81図　C地点遺物(55)　後期初頭（称名寺式）



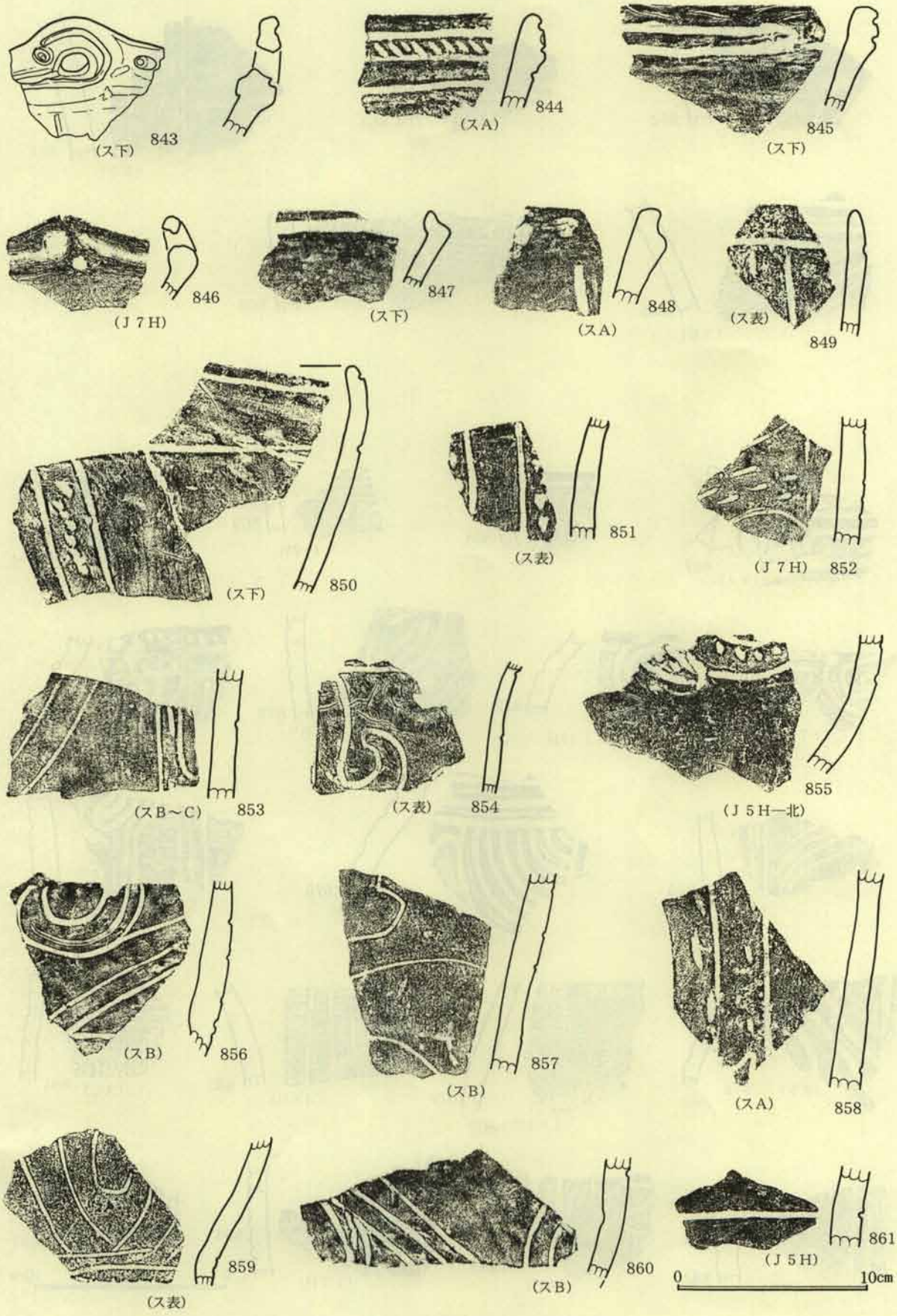
第82図　C地点遺物66　後期初頭（称名寺式）



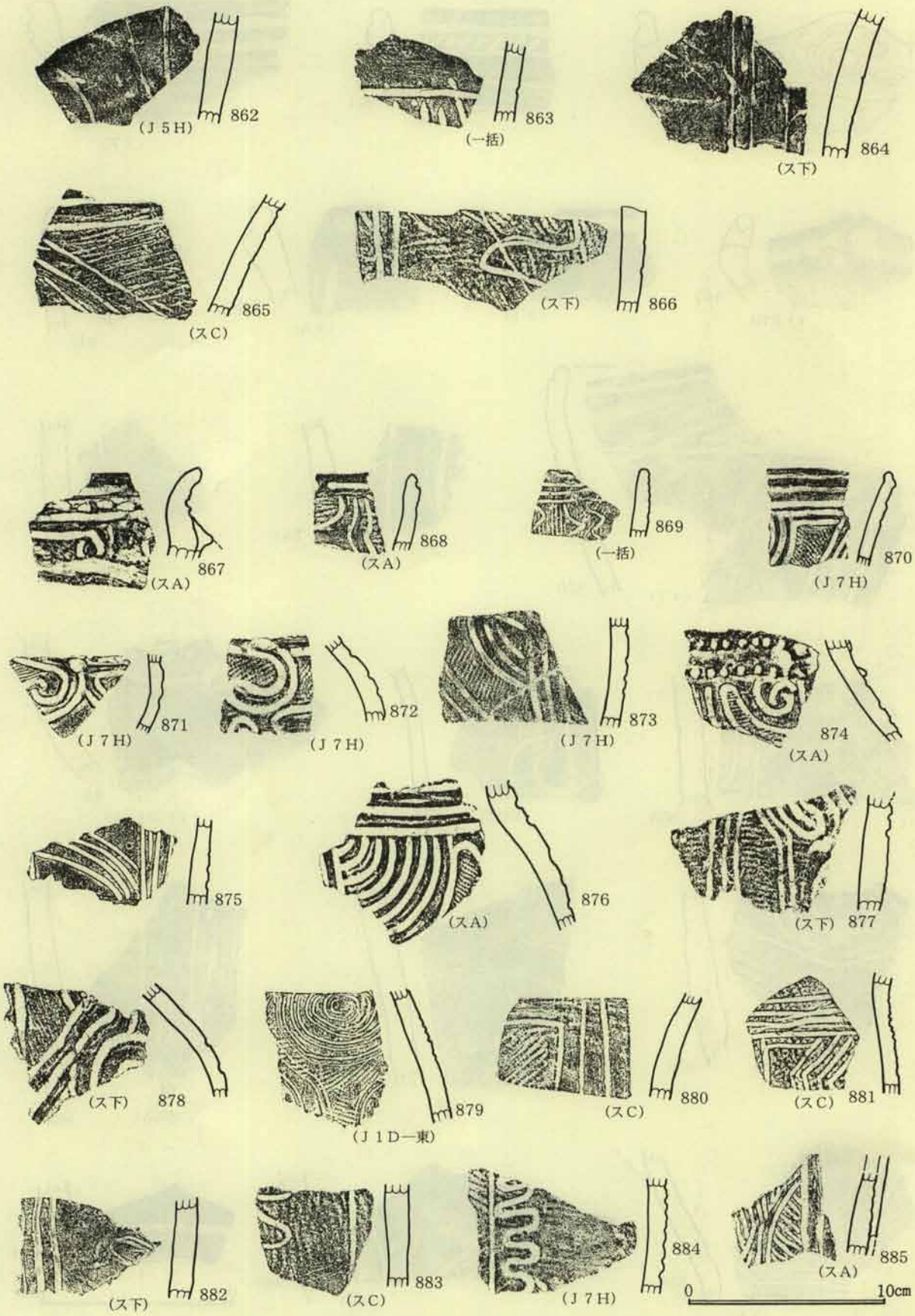
第83図　C地点遺物(67)　後期初頭（称名寺式）



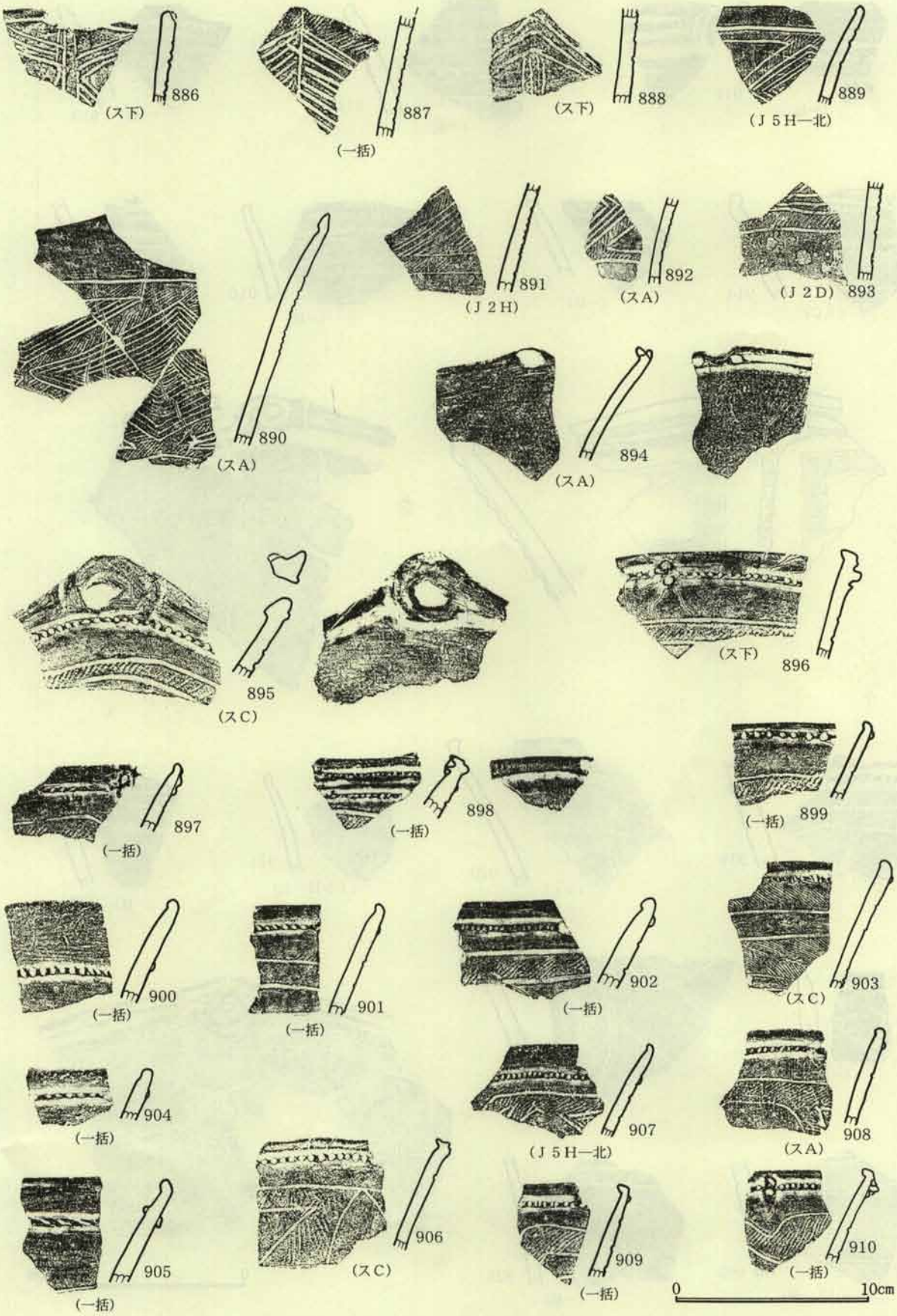
第84図 C地点遺物⑱ 後期初頭（称名寺式）



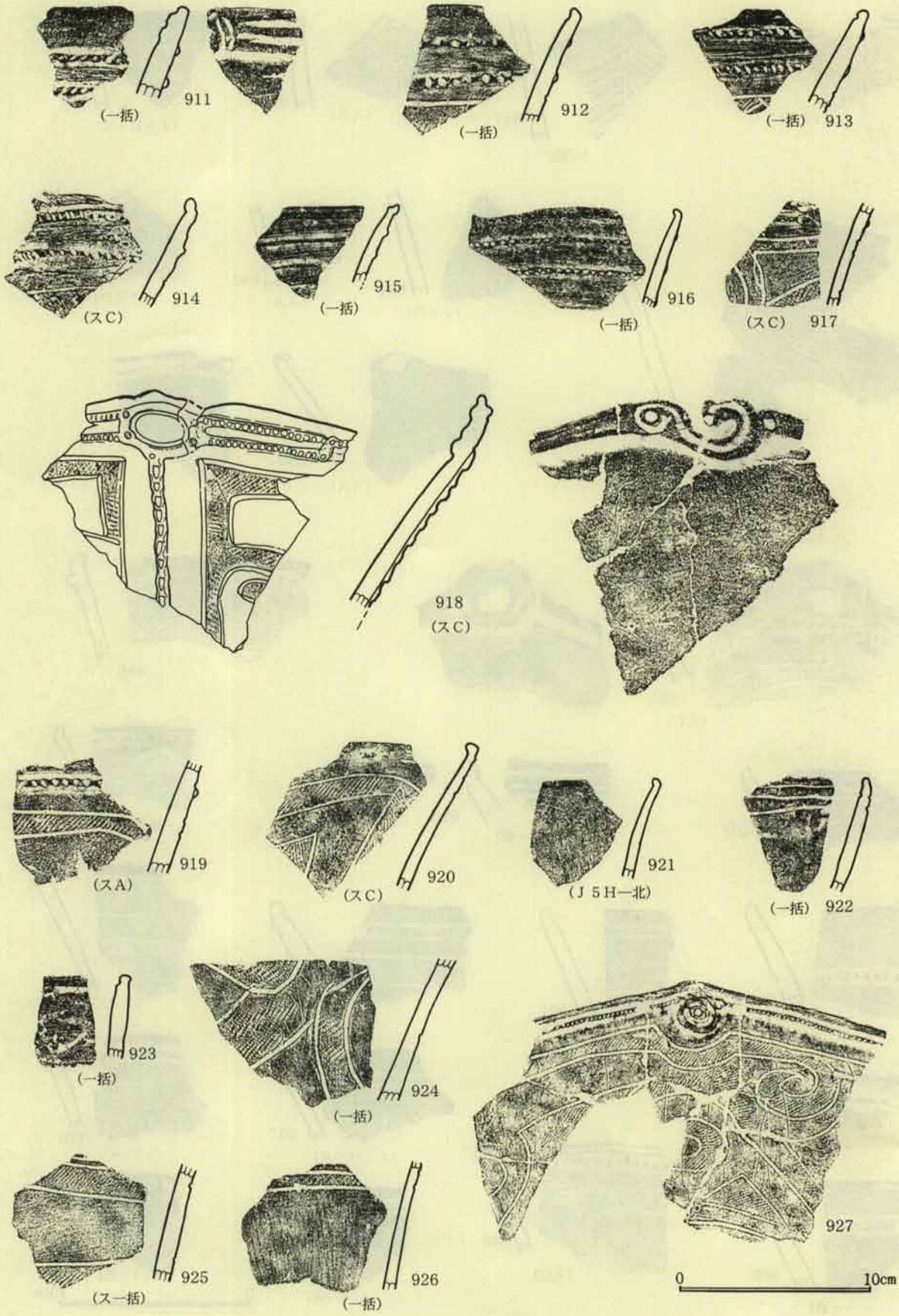
第85図　C地点遺物59　後期初頭（称名寺式）



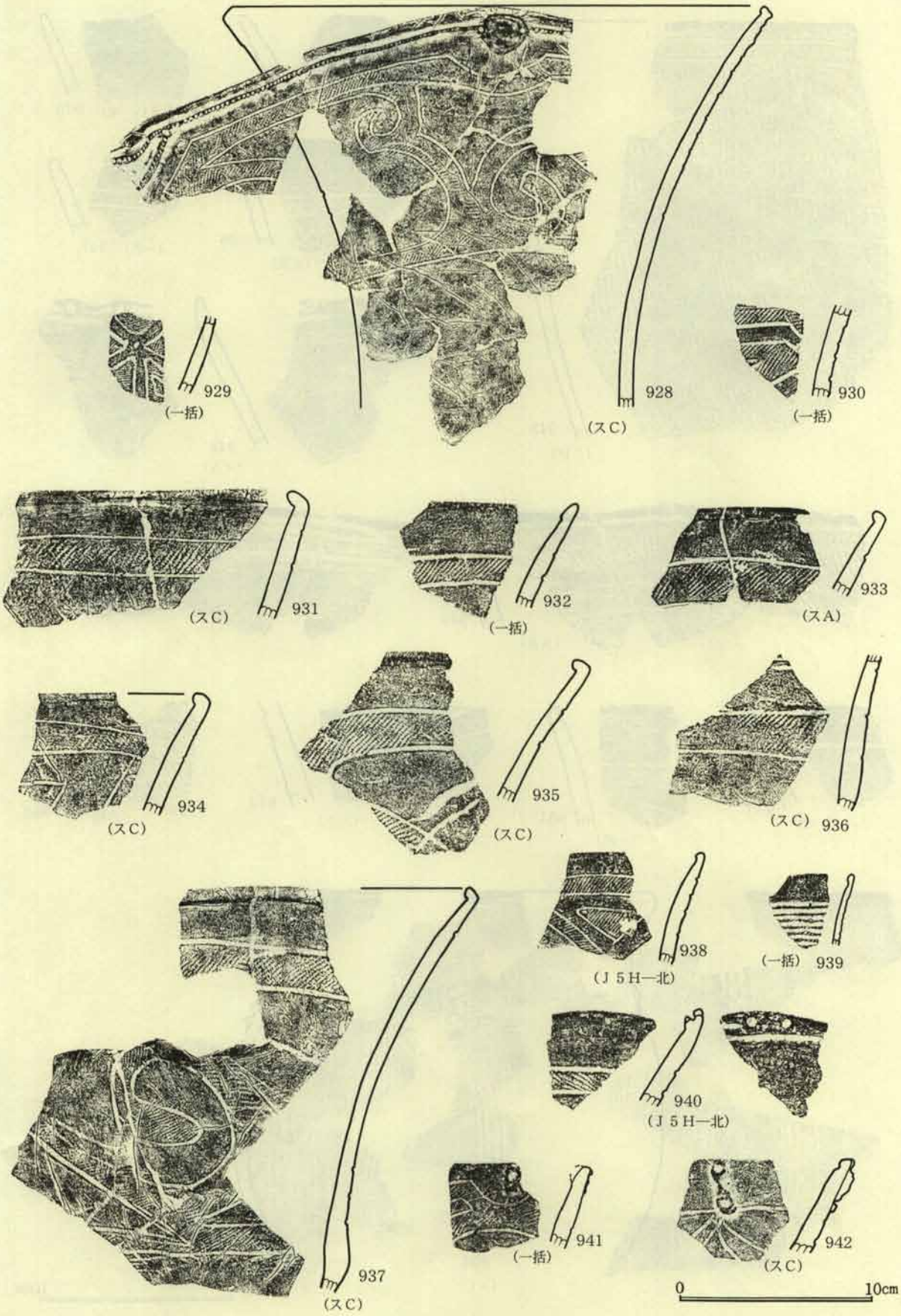
第86図　C地点遺物60　後期初頭（称名寺式）～後期（堀之内式）



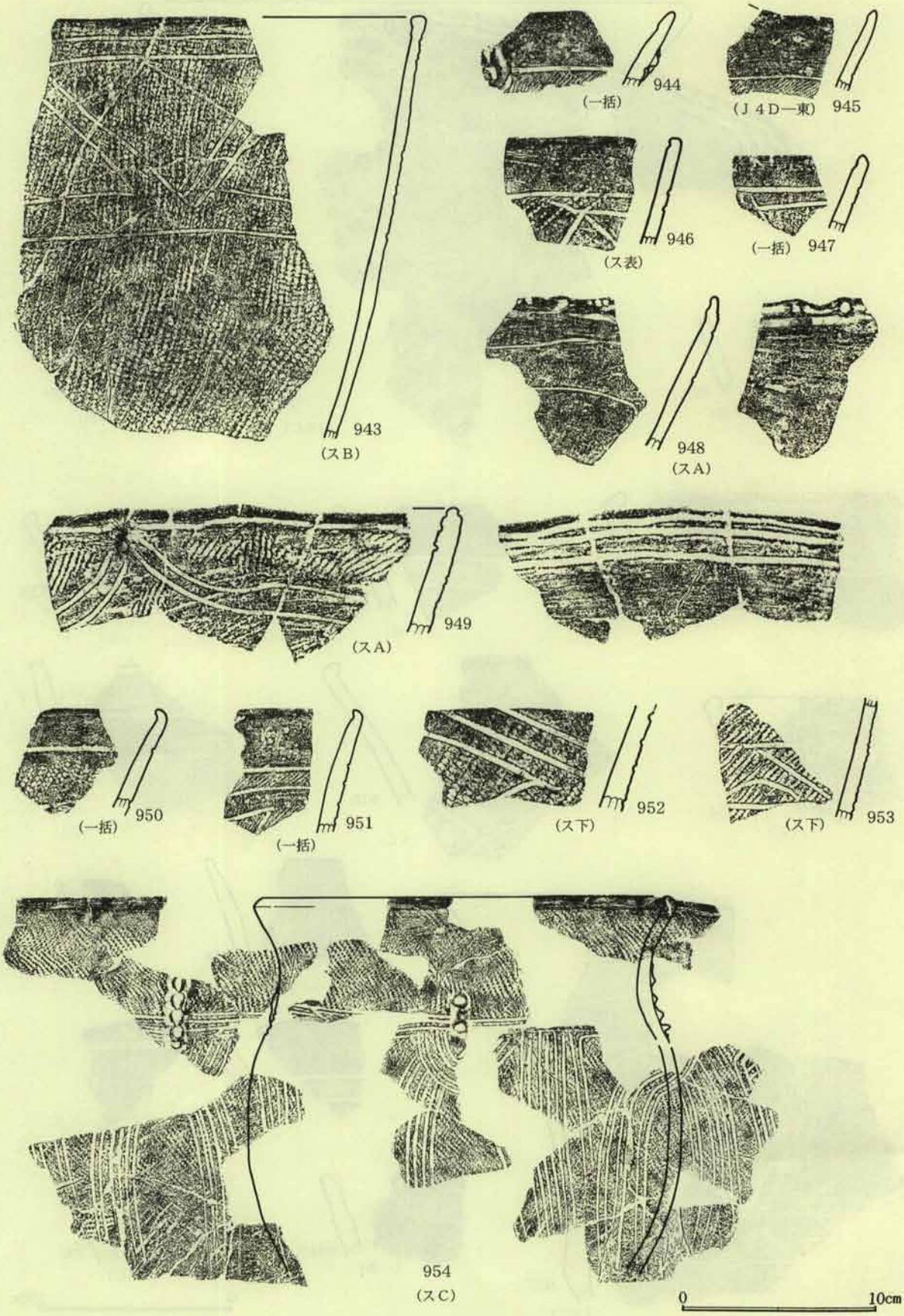
第87図　C地点遺物(61)　後期（堀之内式）



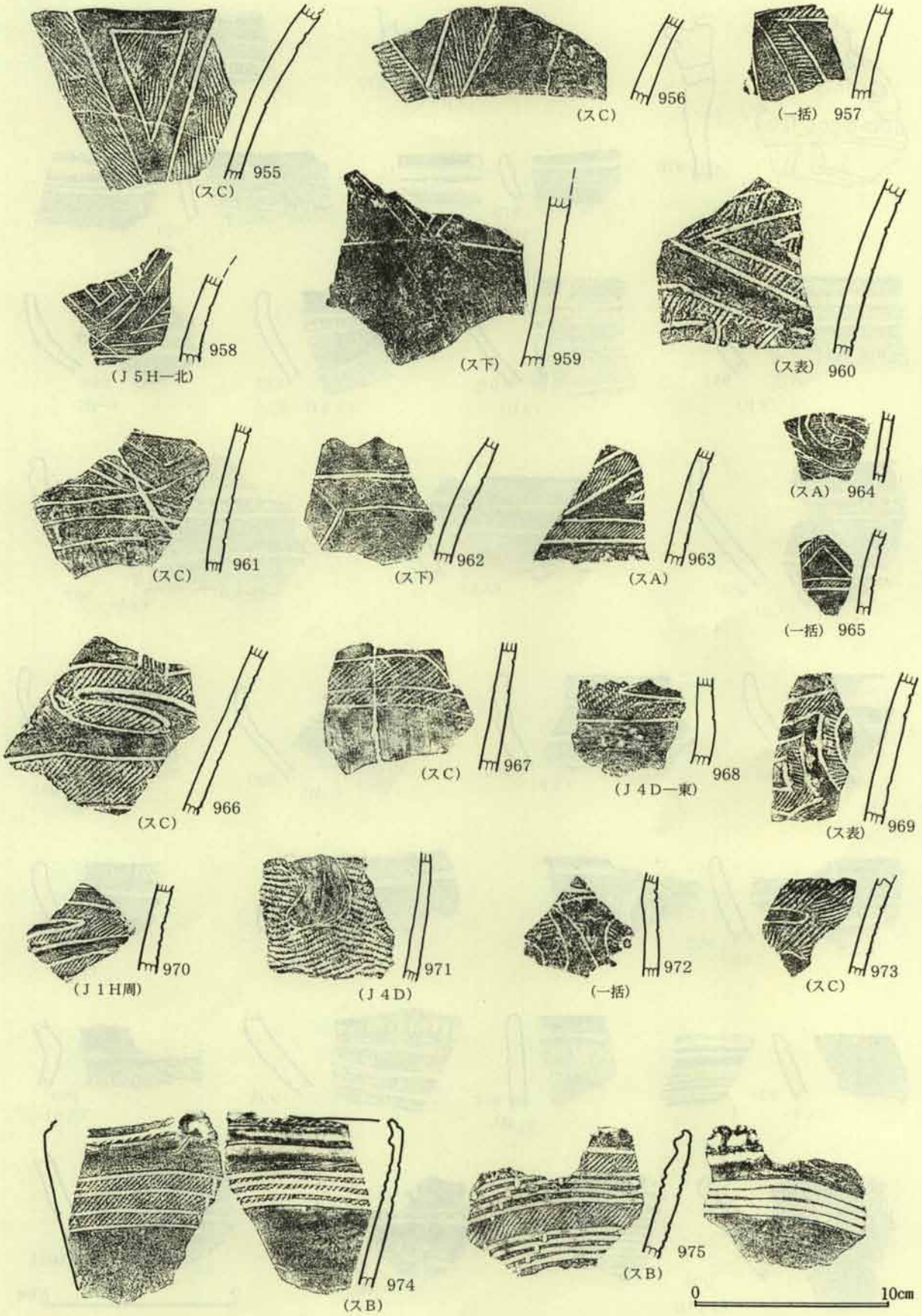
第88図　C地点遺物⑫　後期（堀之内式）



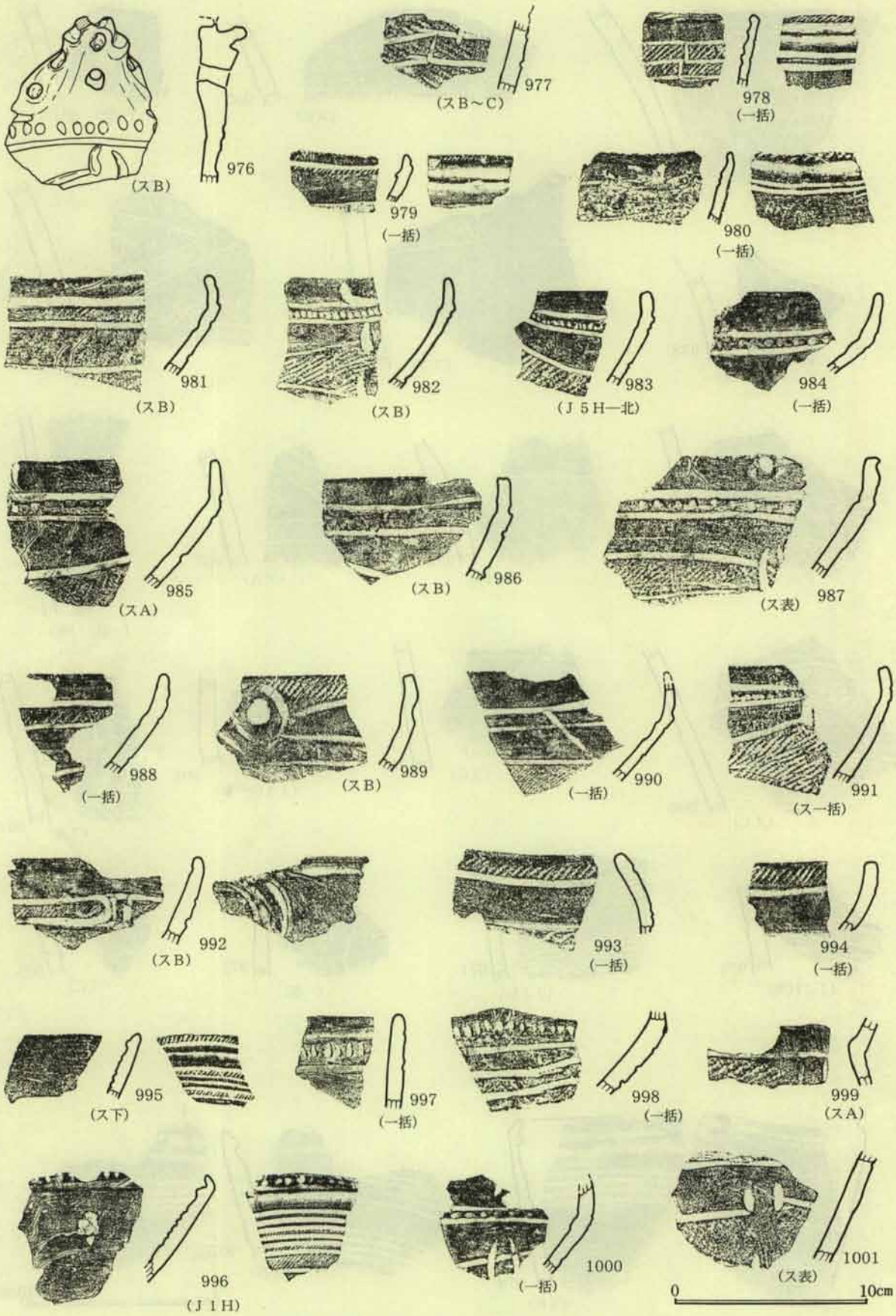
第89図　C地点遺物(63)　後期（堀之内式）



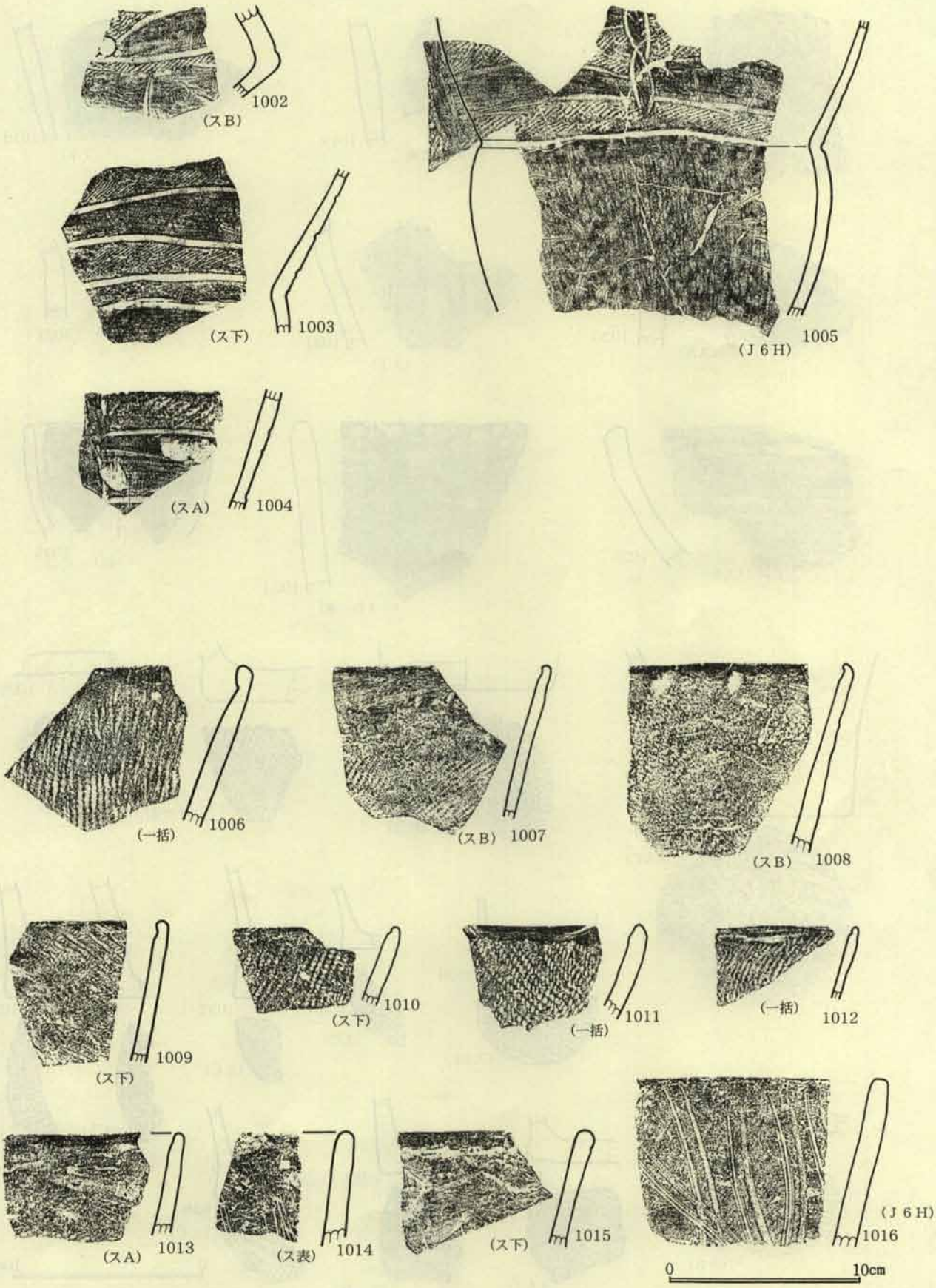
第90図　C地点遺物64　後期（堀之内式）



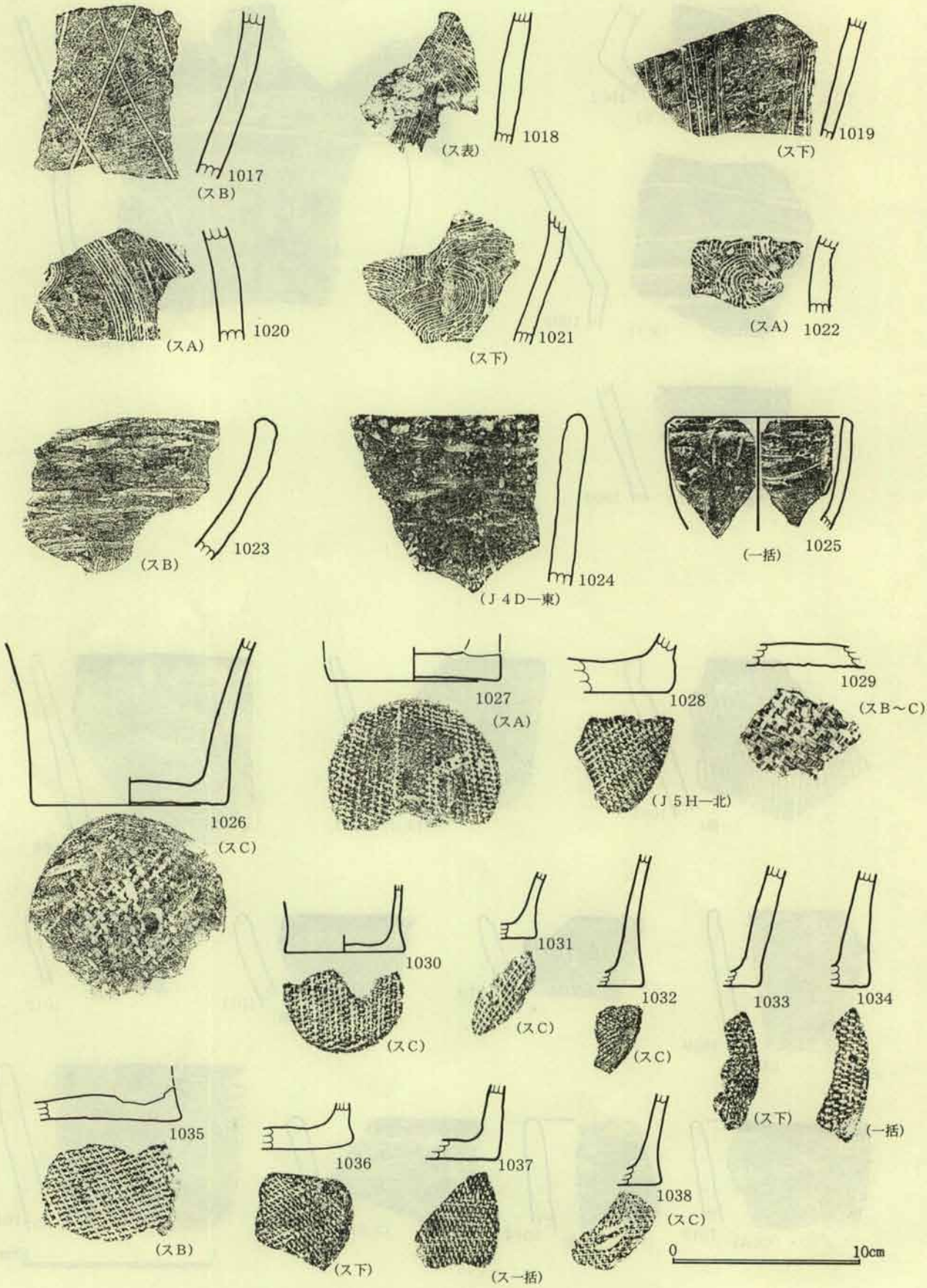
第91図　C地点遺物⑮　後期（堀之内式～加曽利B式）



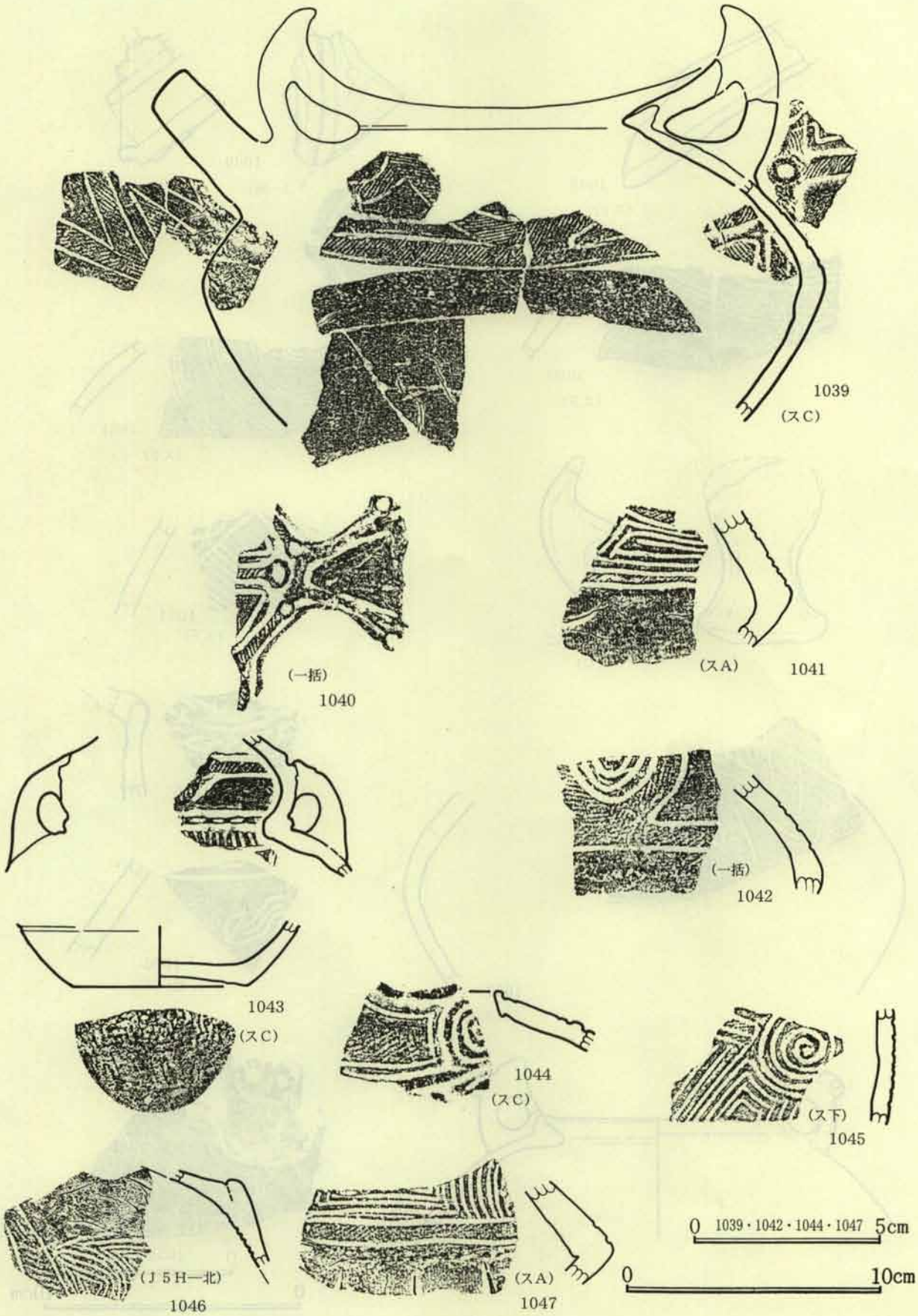
第92図　C地点遺物66　後期（加曽利B式）



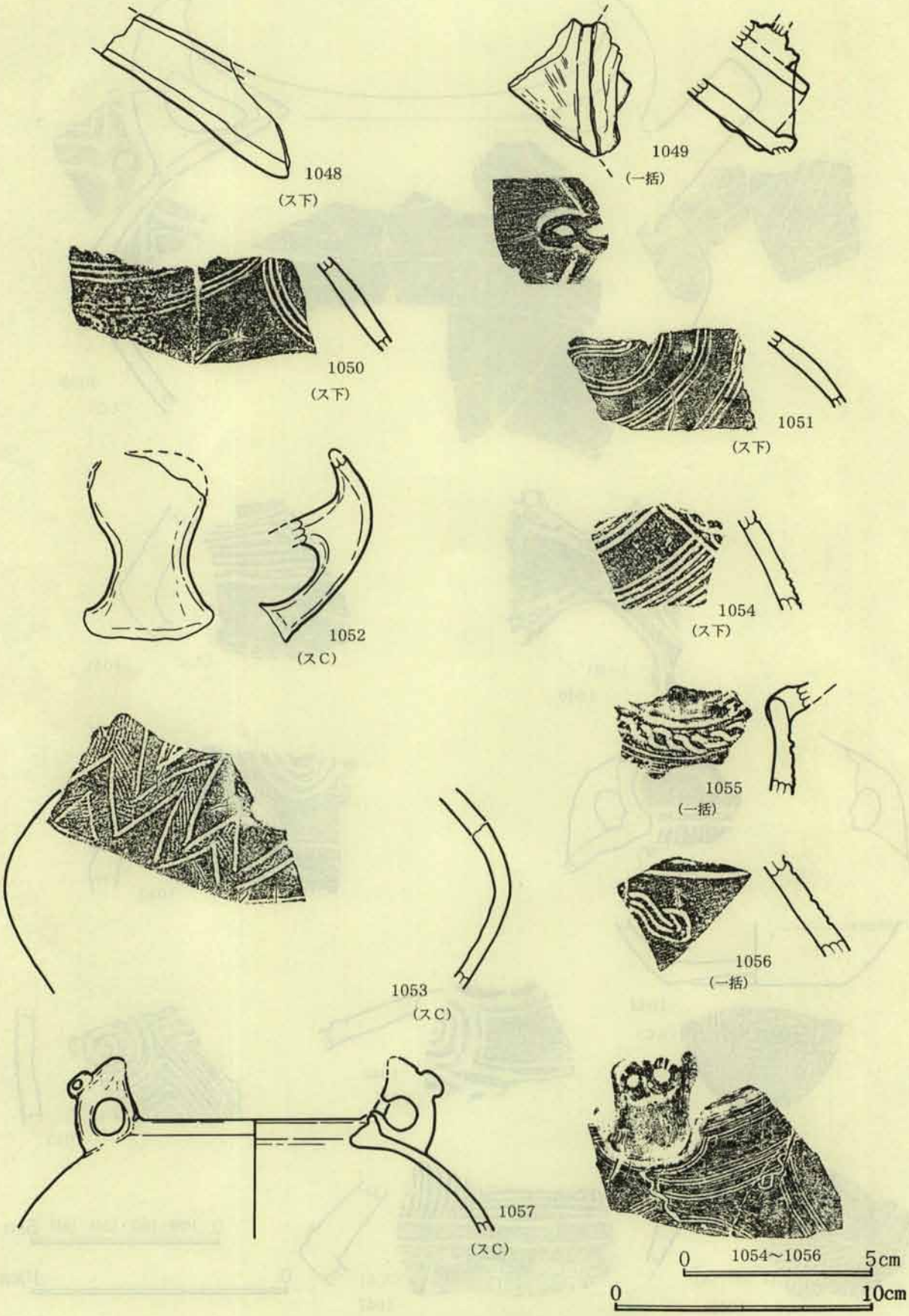
第93図　C地点遺物⑰　後期（加曽利B式）・同期（粗製土器）



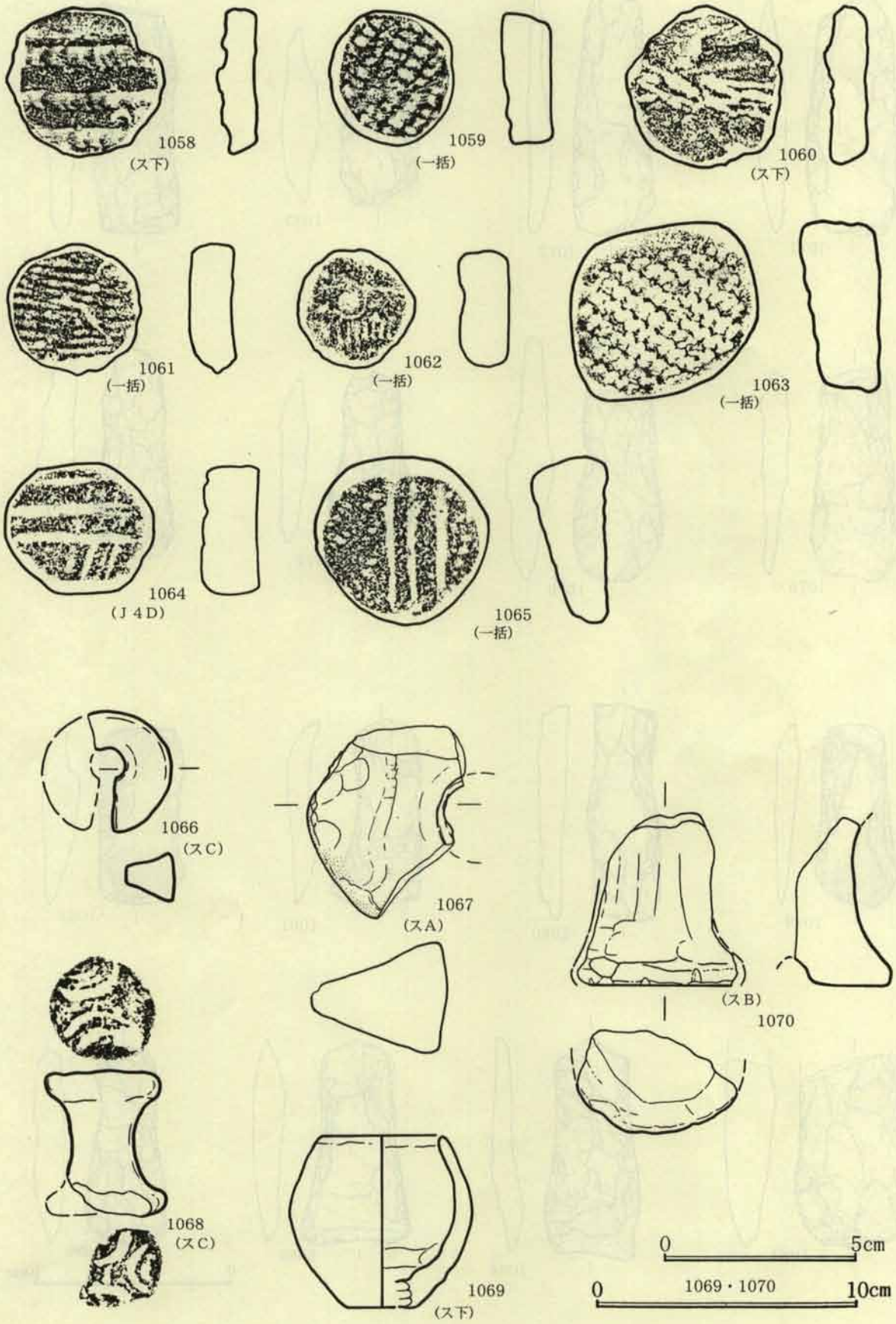
第94図　C地点遺物(68)　後期（粗製土器）・同期（底部片）



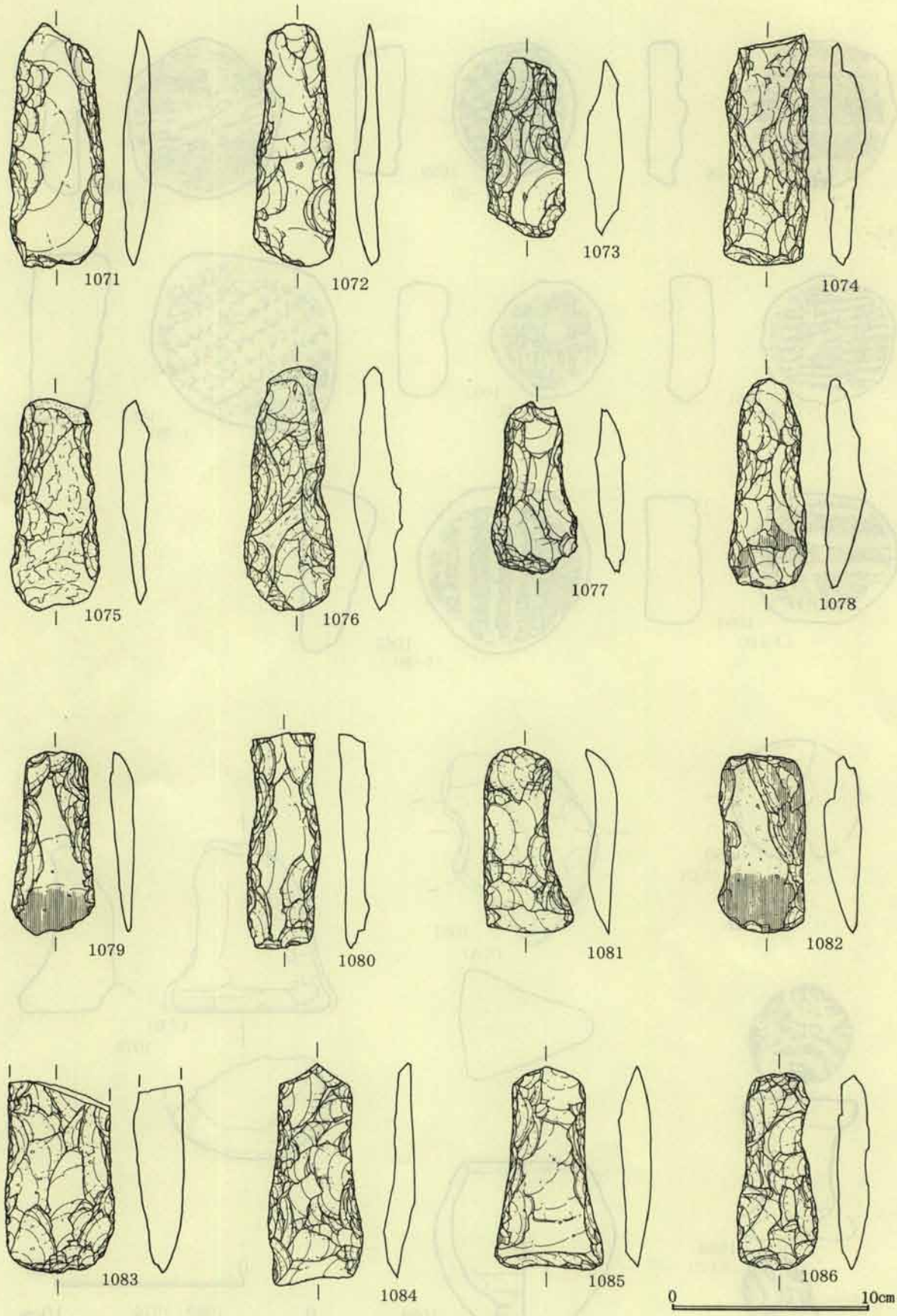
第95図　C地点遺物69　後期（注口土器）



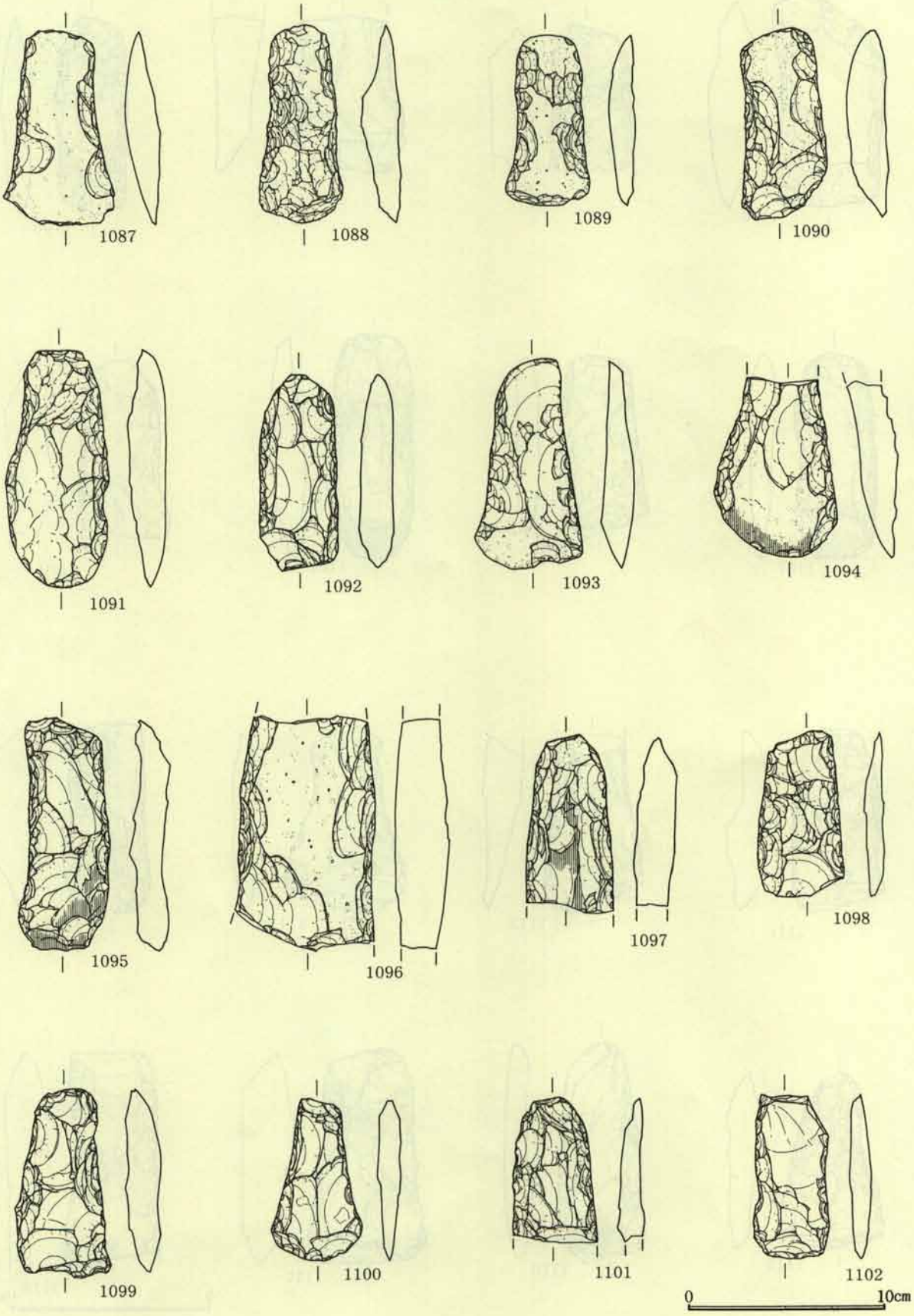
第96図　C地点遺物(70)　後期（注口土器）



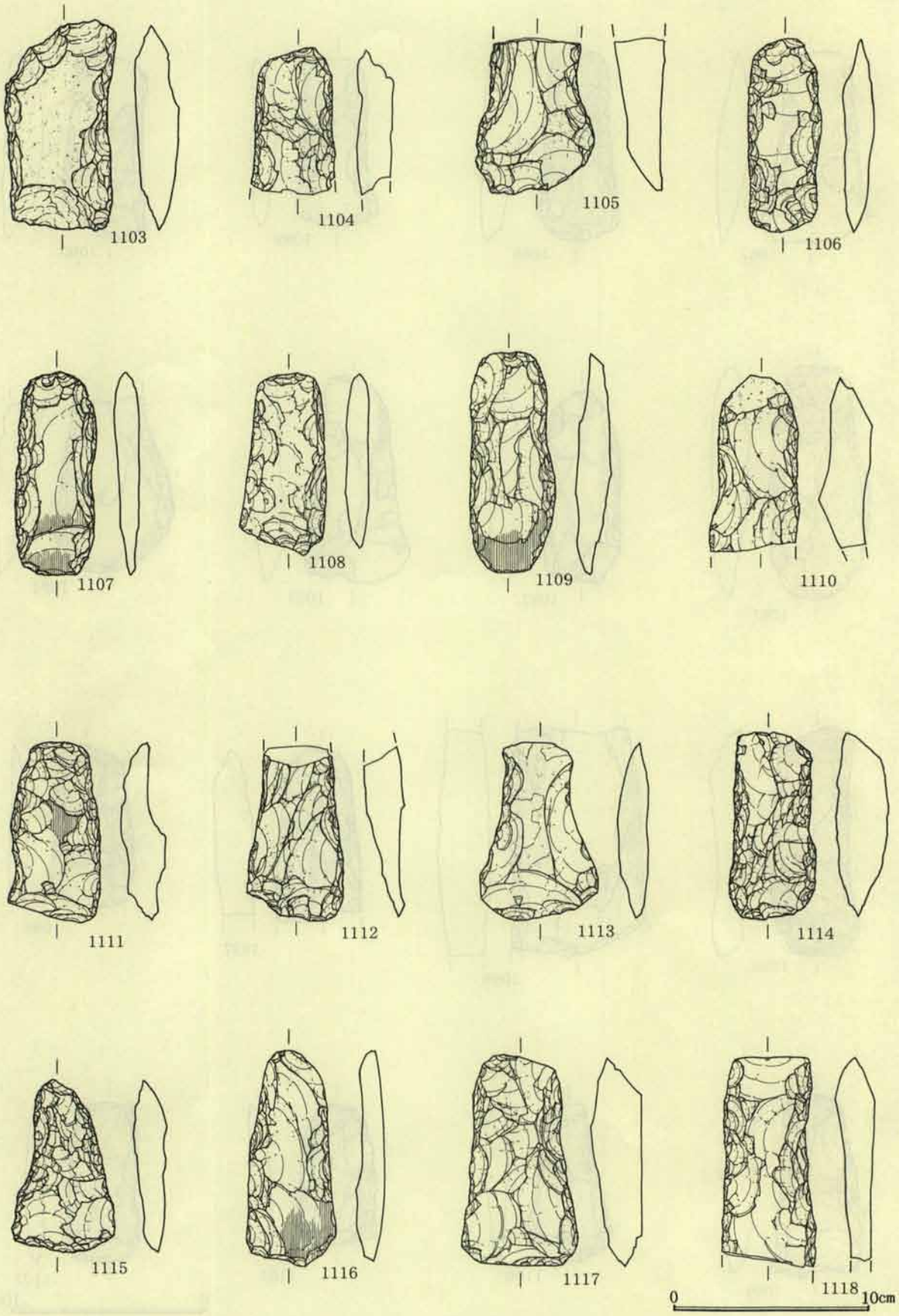
第97図　C地点遺物(71)　加工土製品・玦状耳飾り等



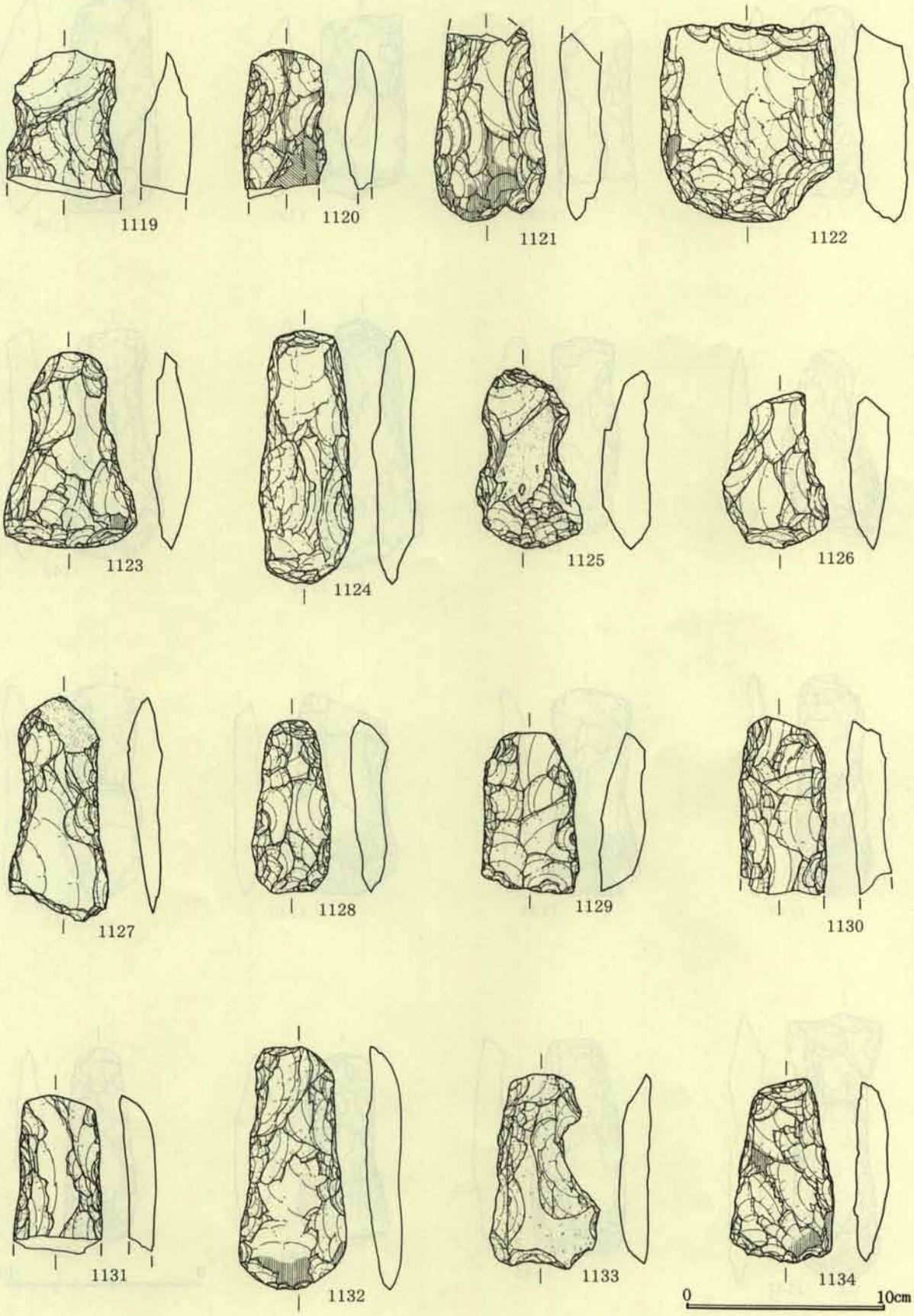
第98図　C地点遺物(72)　石斧(1)



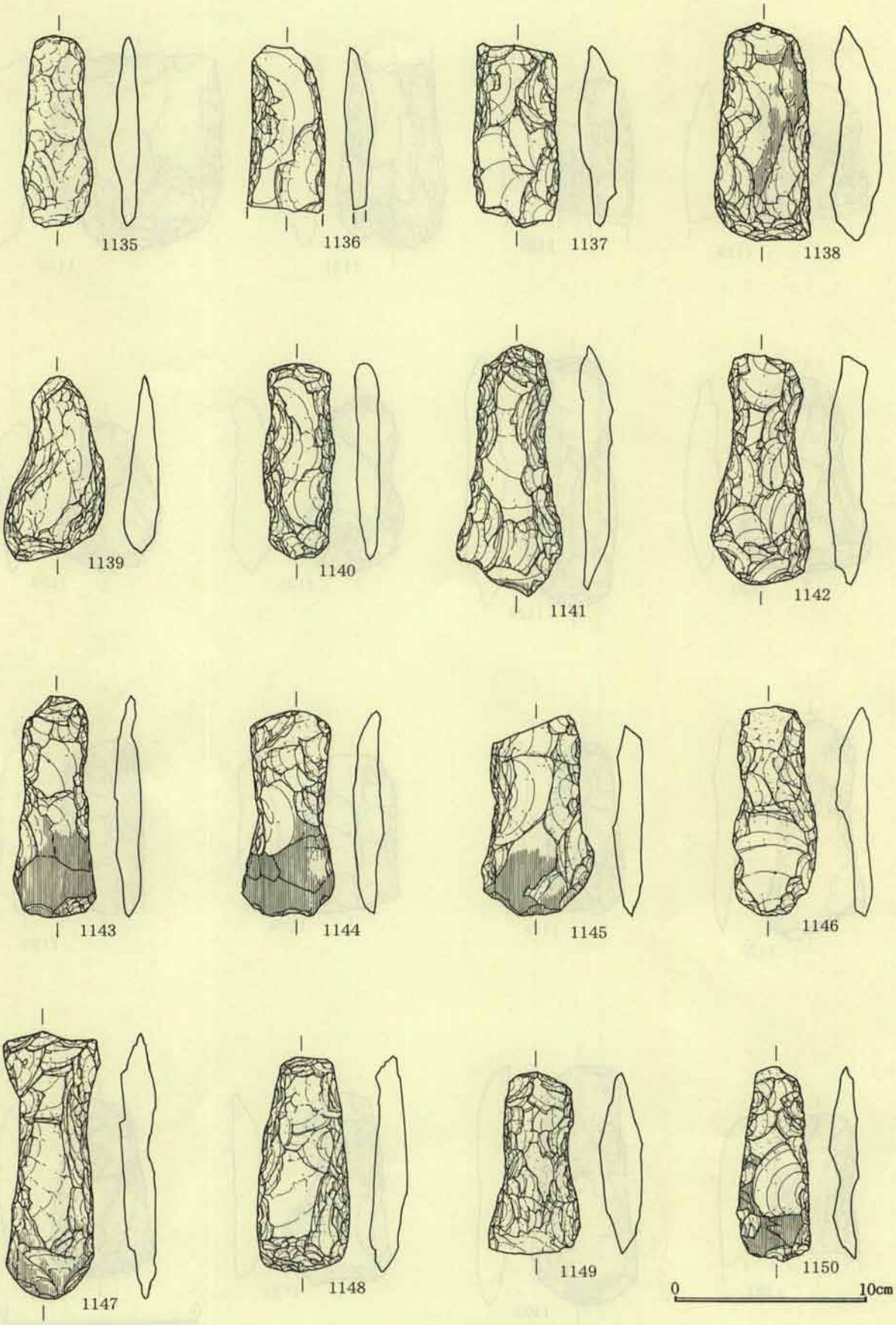
第99図　C地点遺物(73)　石斧(2)



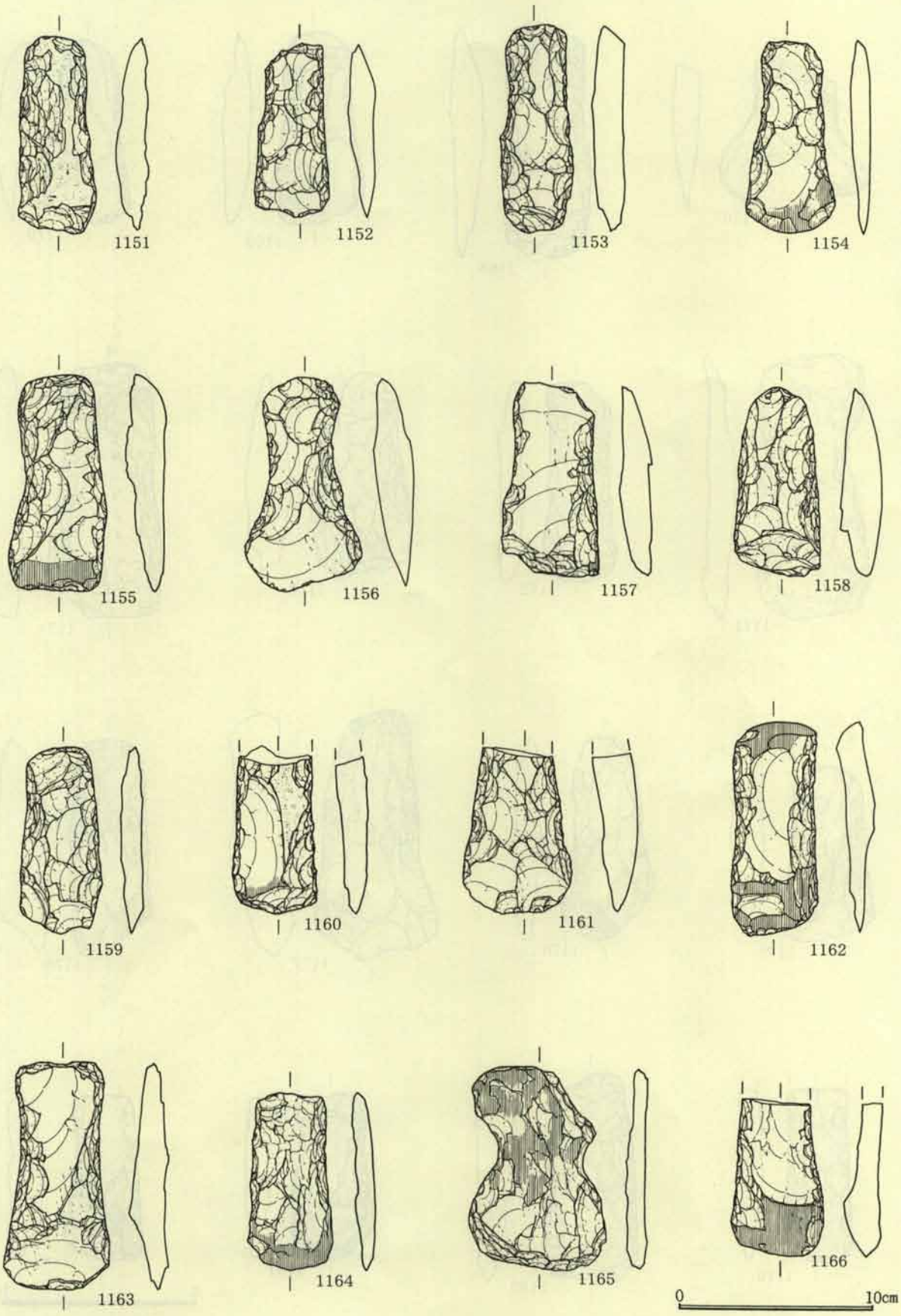
第100図　C地点遺物(74)　石斧(3)



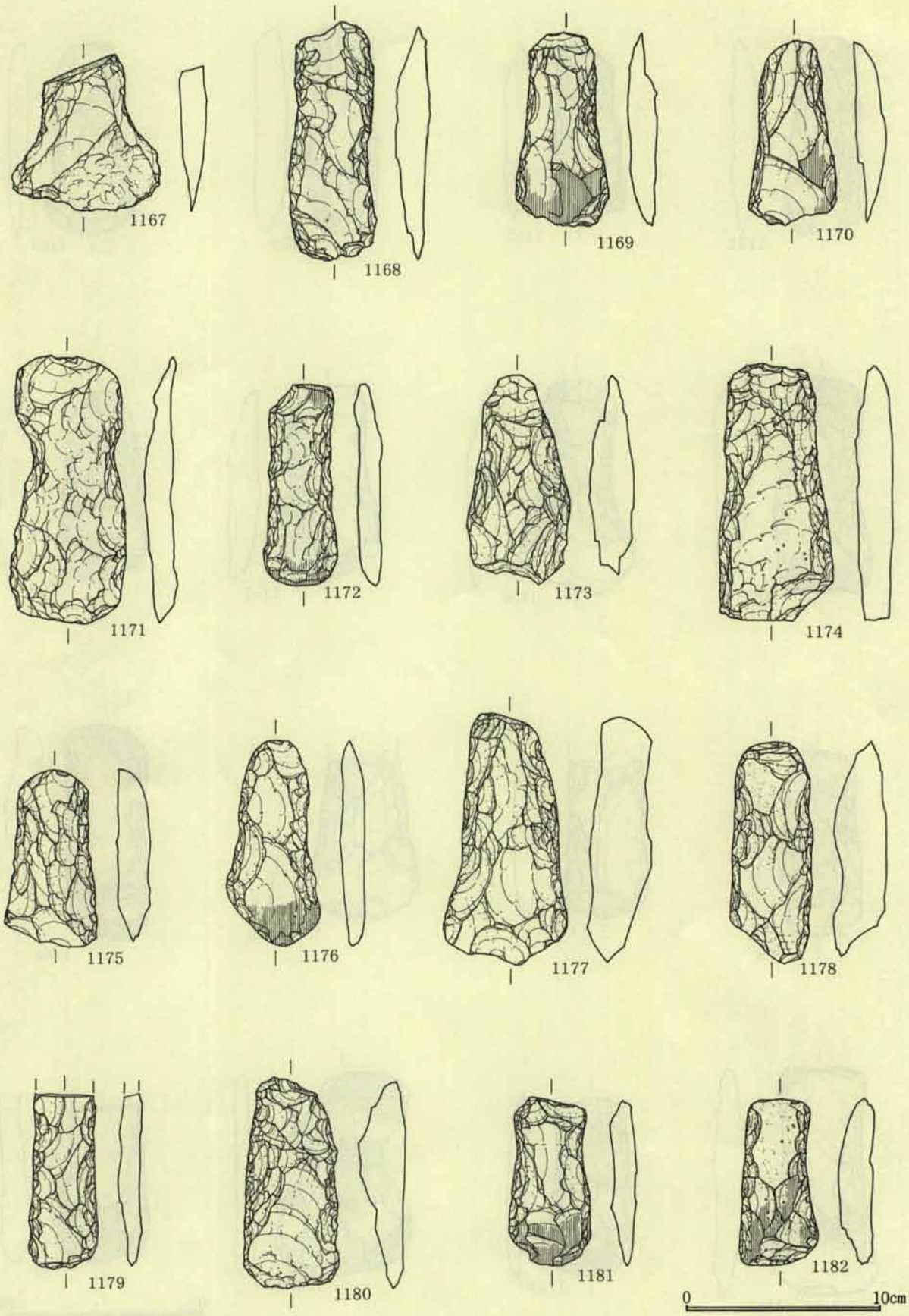
第101図　C地点遺物(75)　石斧(4)



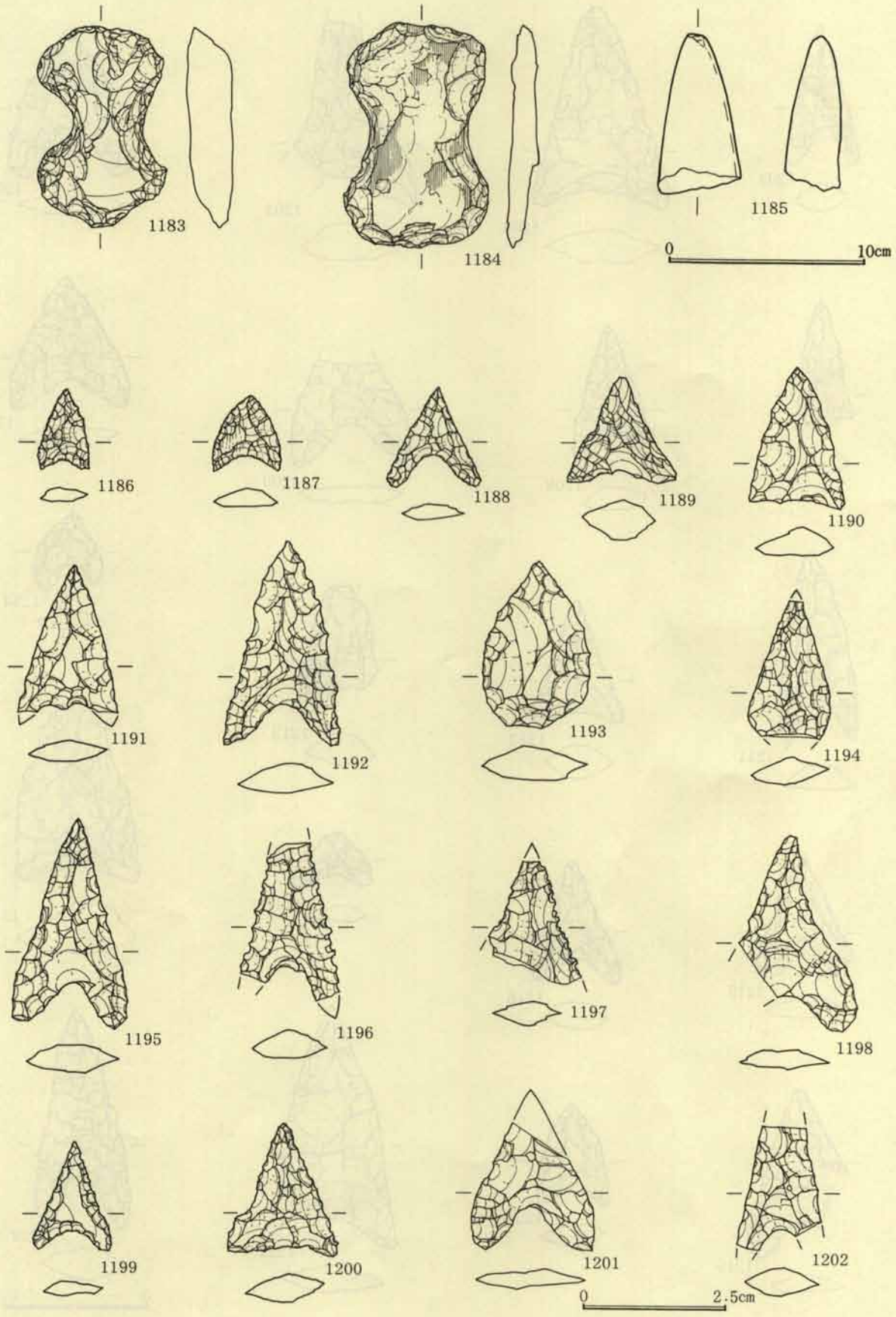
第102図　C地点遺物(76)　石斧(5)



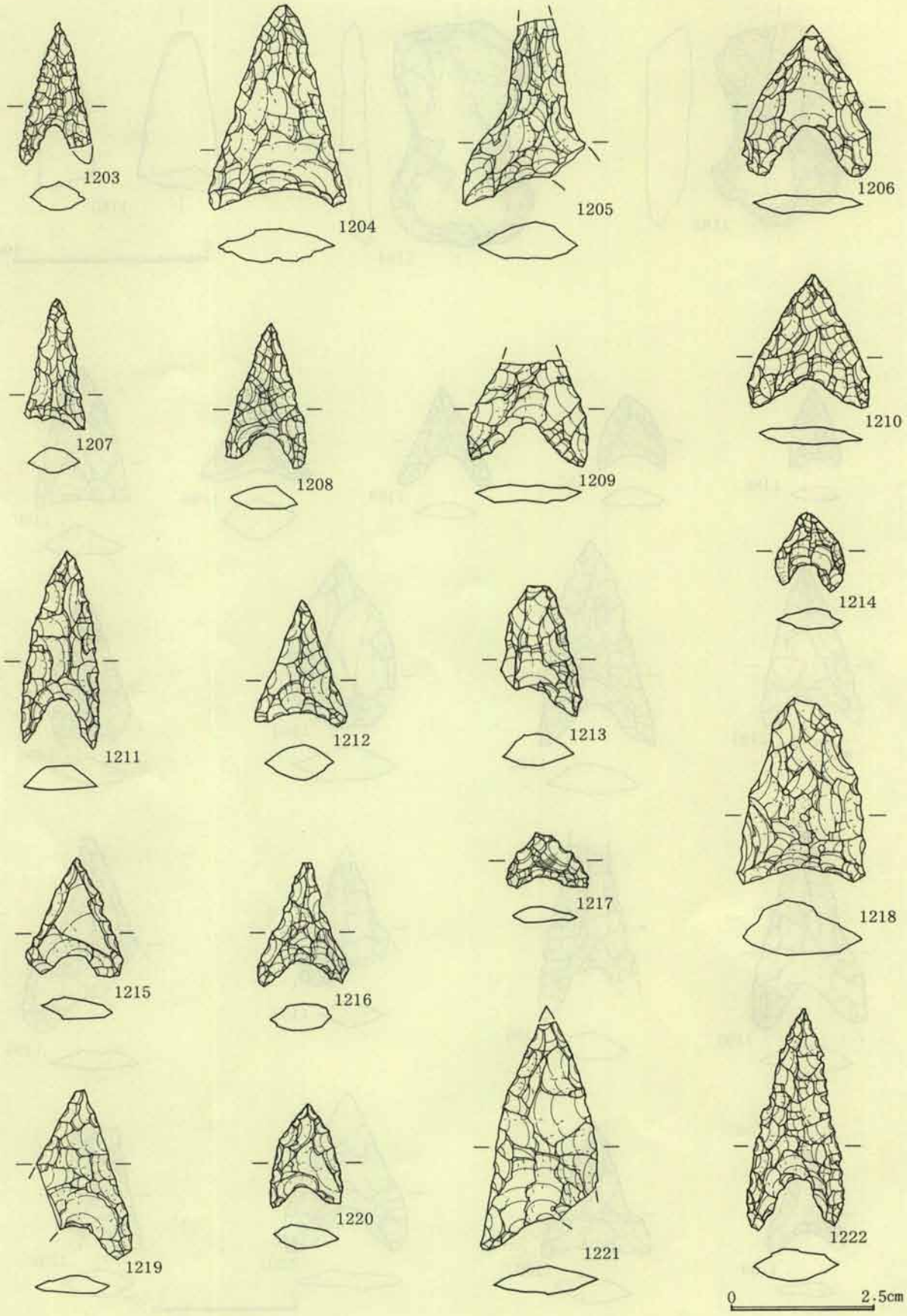
第103図　C地点遺物(77)　石斧(6)



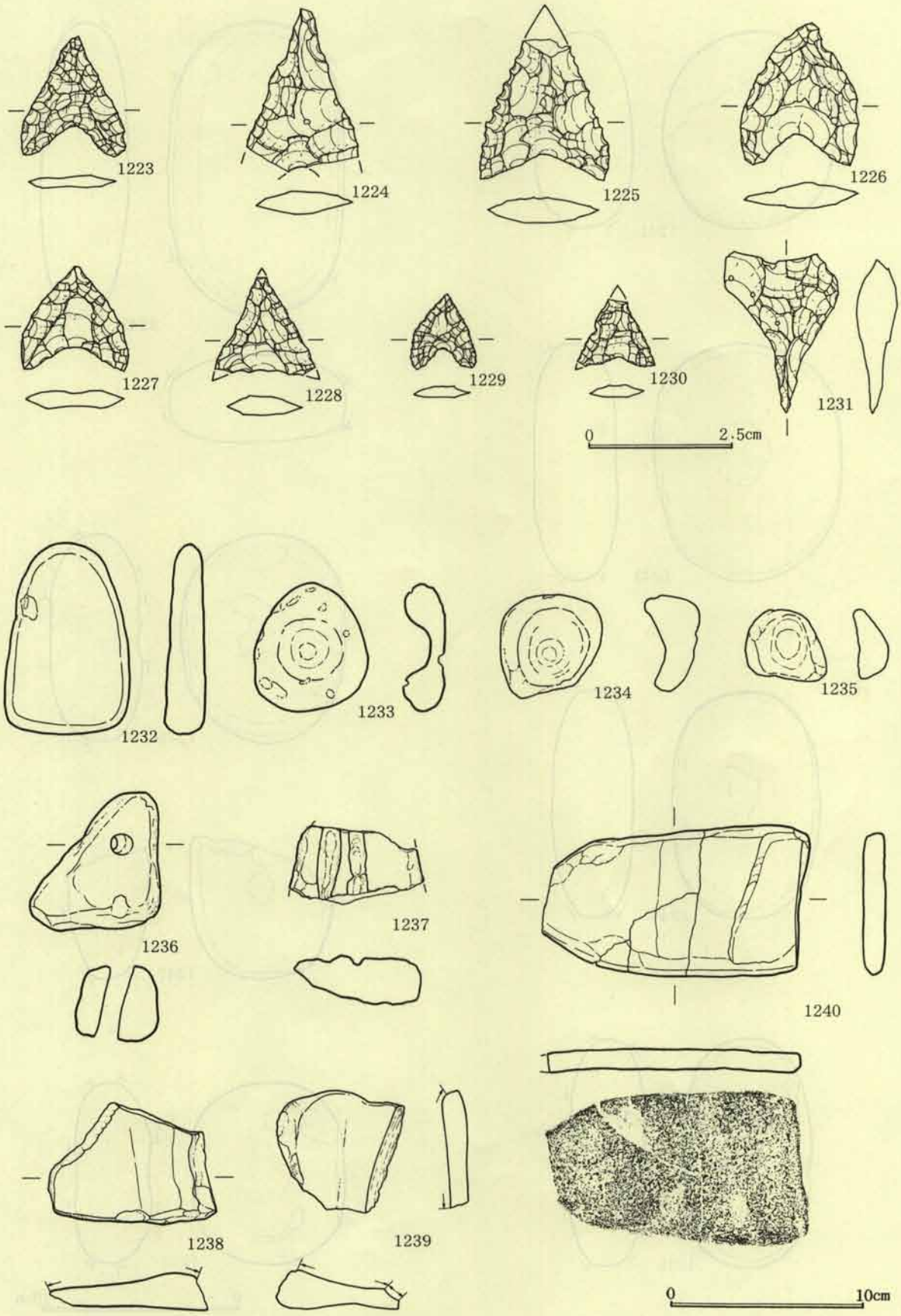
第104図　C地点遺物(78)　石斧(7)



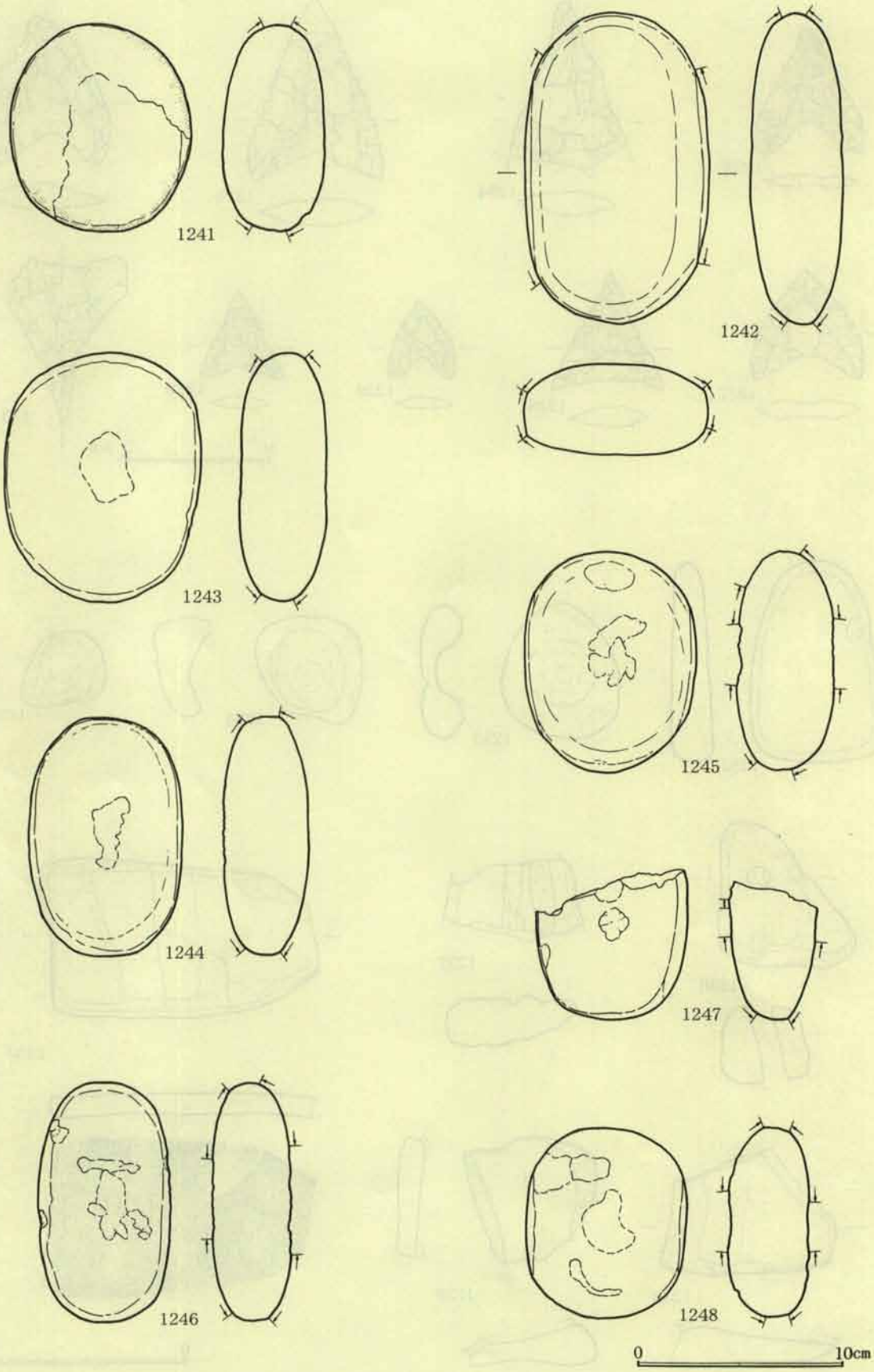
第105図　C地点遺物79　石斧(8)・石鏃(1)



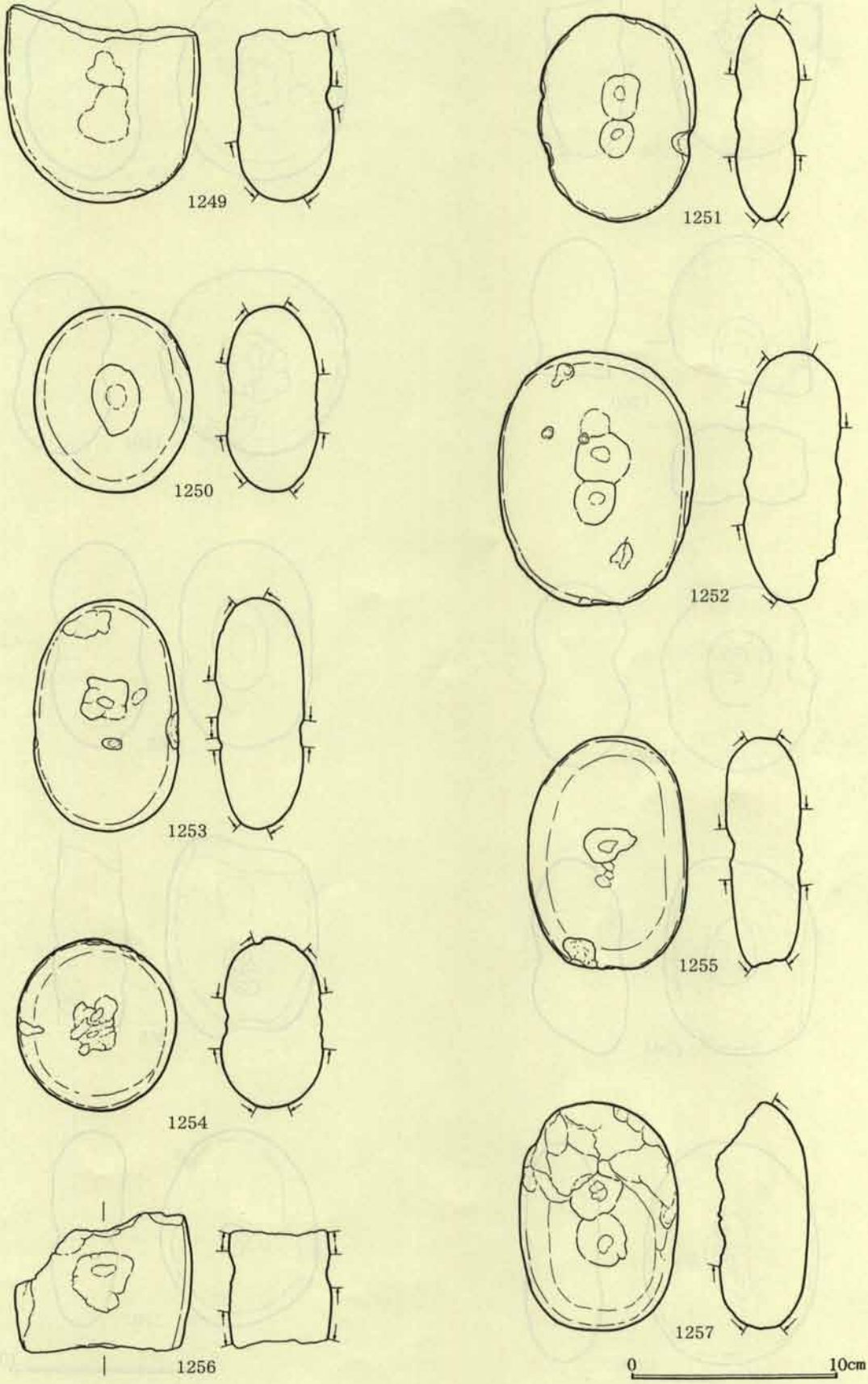
第106図　C地点遺物(80)　石鏃(2)



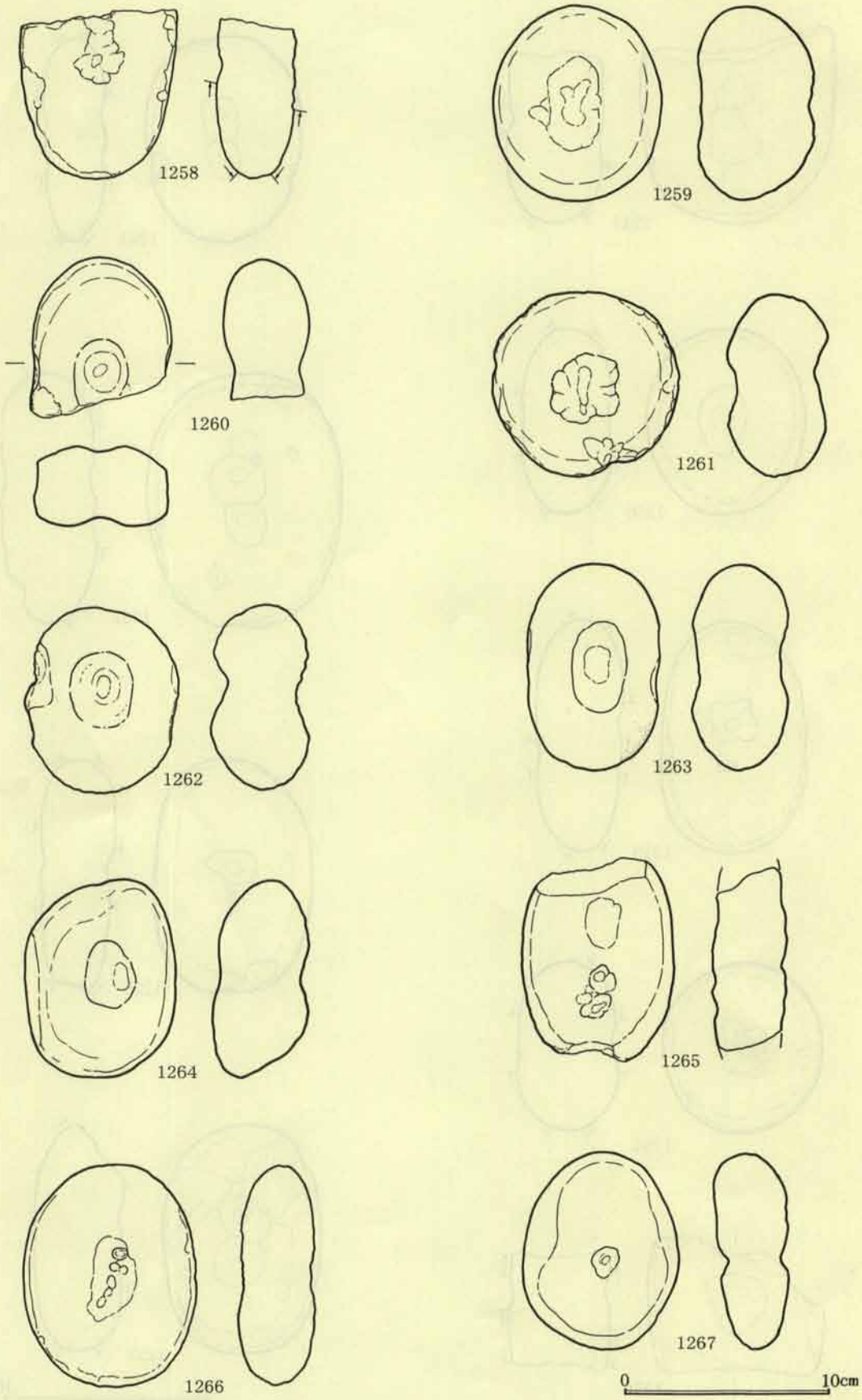
第107図　C地点遺物(81)　石鏃(3)・石錐・軽石製品・砥石等



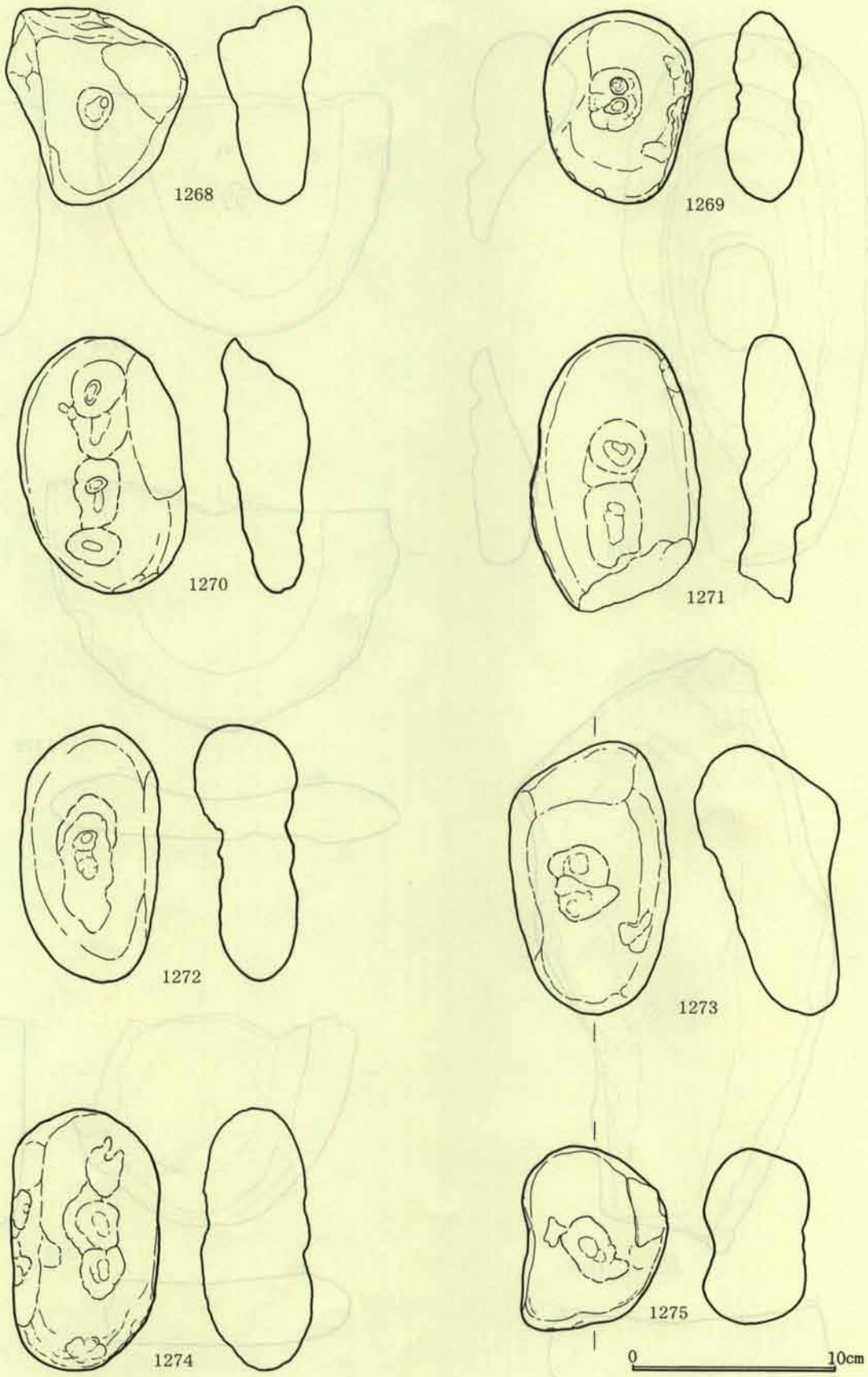
第108図　C地点遺物⑫　磨石・凹石(1)



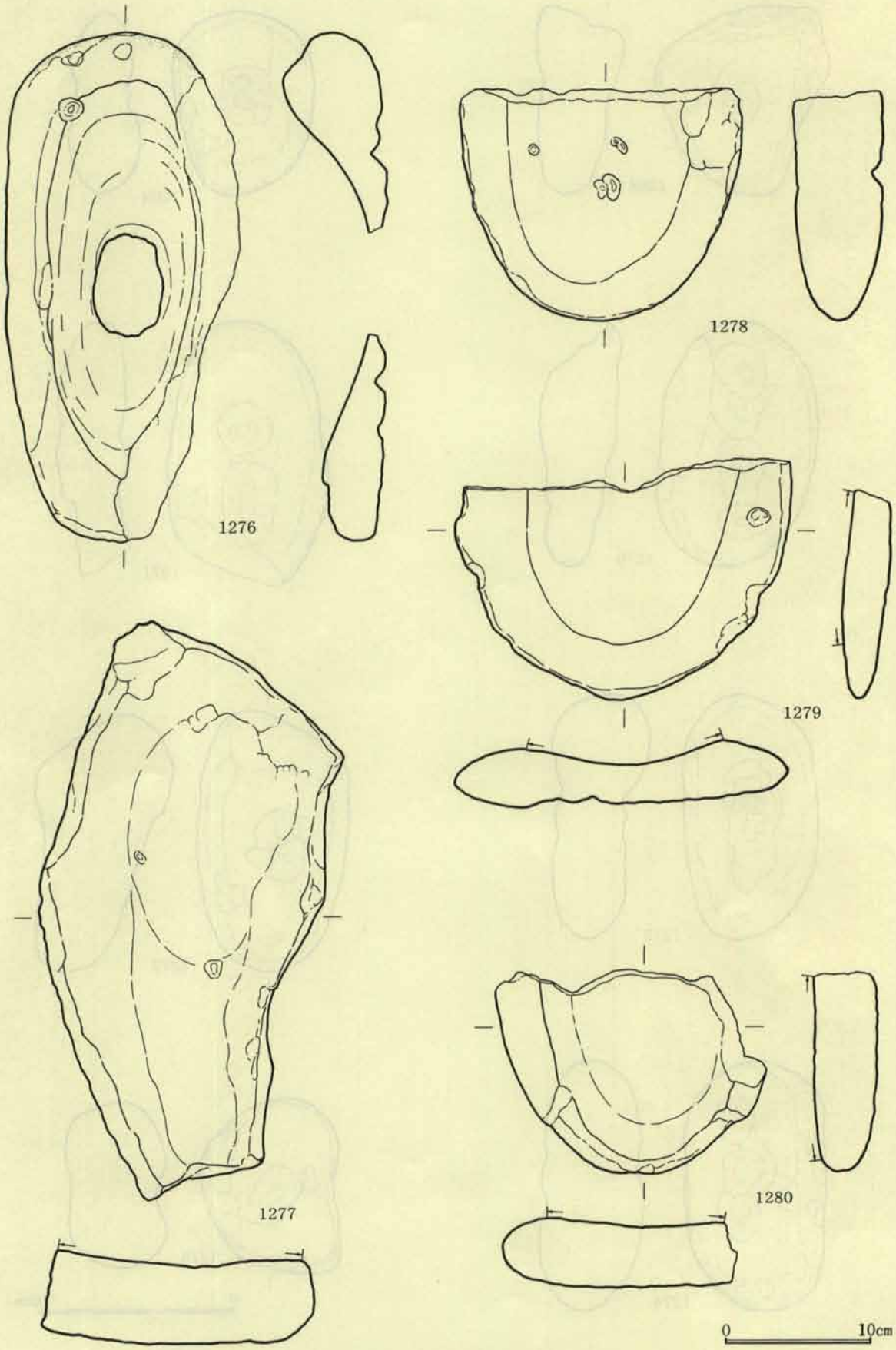
第109図　C地点遺物(83)　磨石・凹石(2)



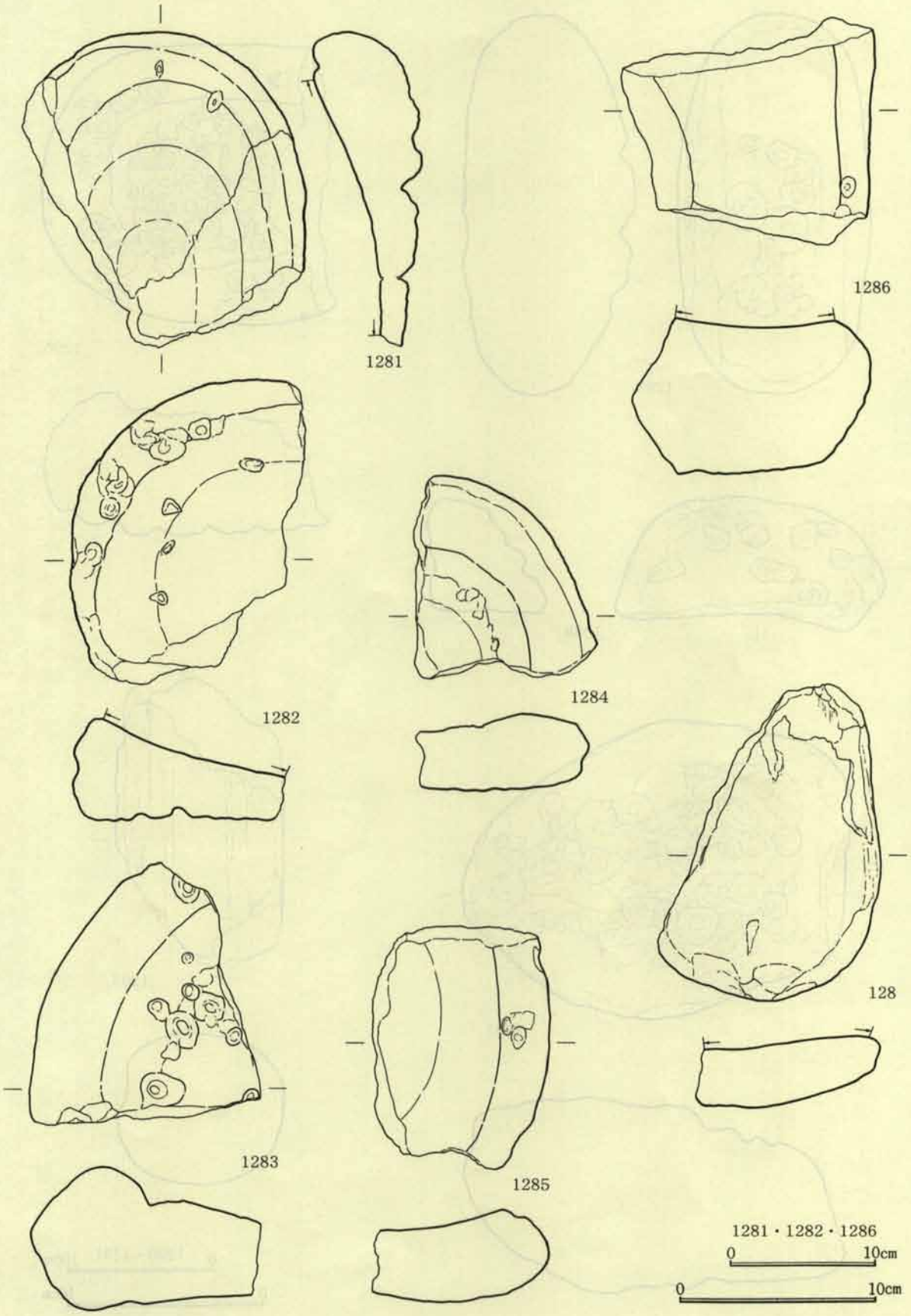
第110図　C地点遺物(84)　磨石・凹石(3)



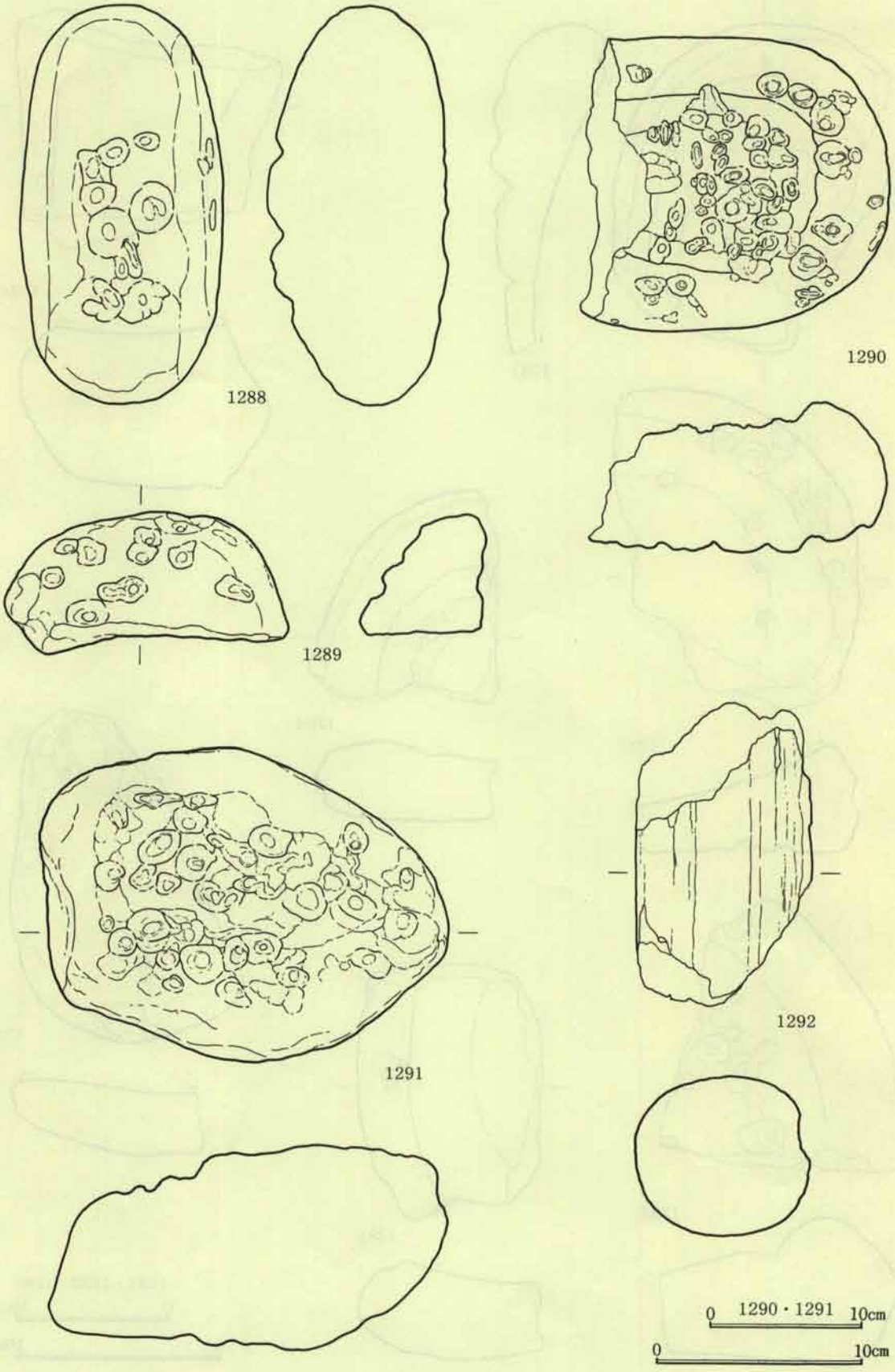
第111図　C地点遺物(85)　磨石・凹石(4)



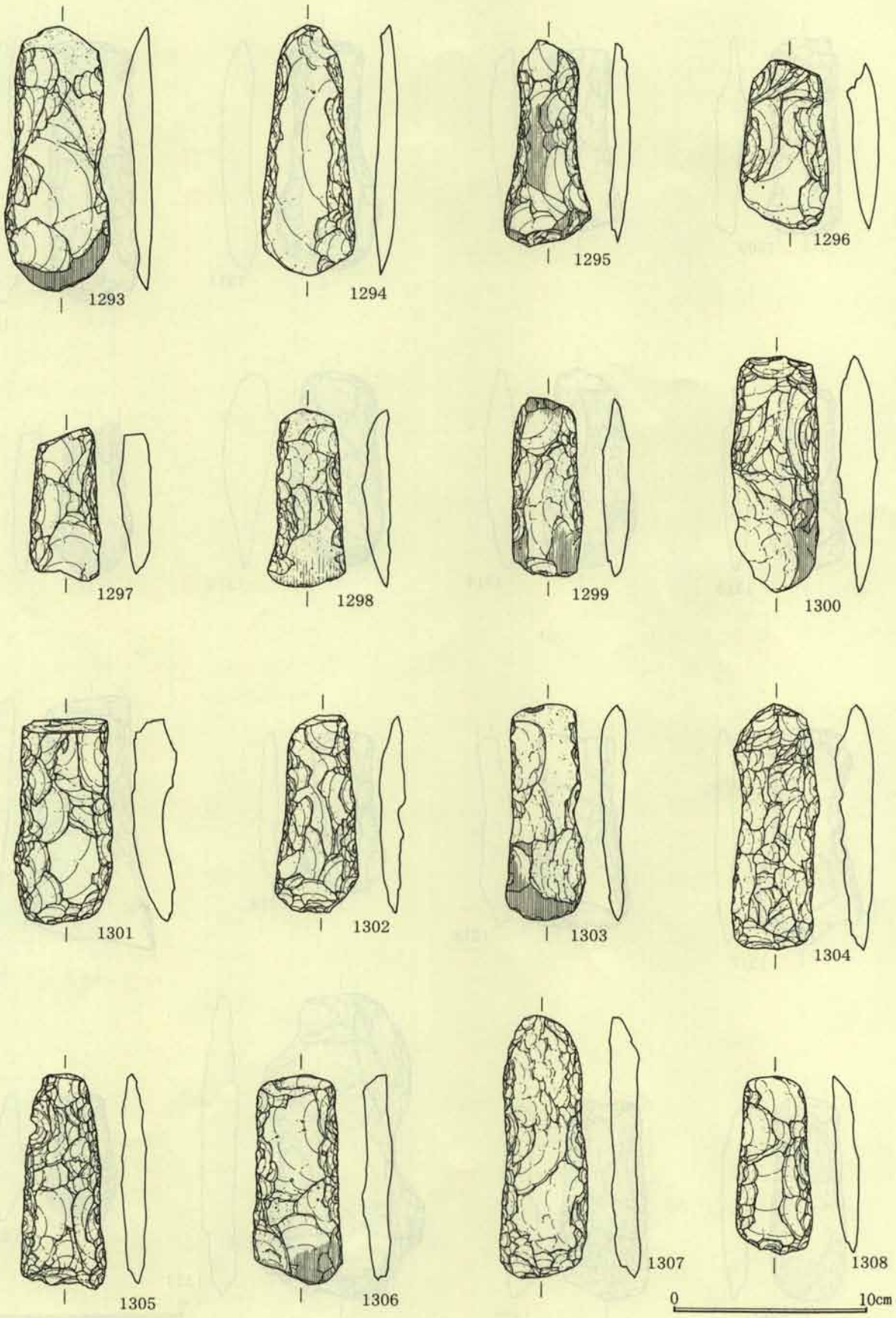
第112図　C地点遺物86　石皿(1)



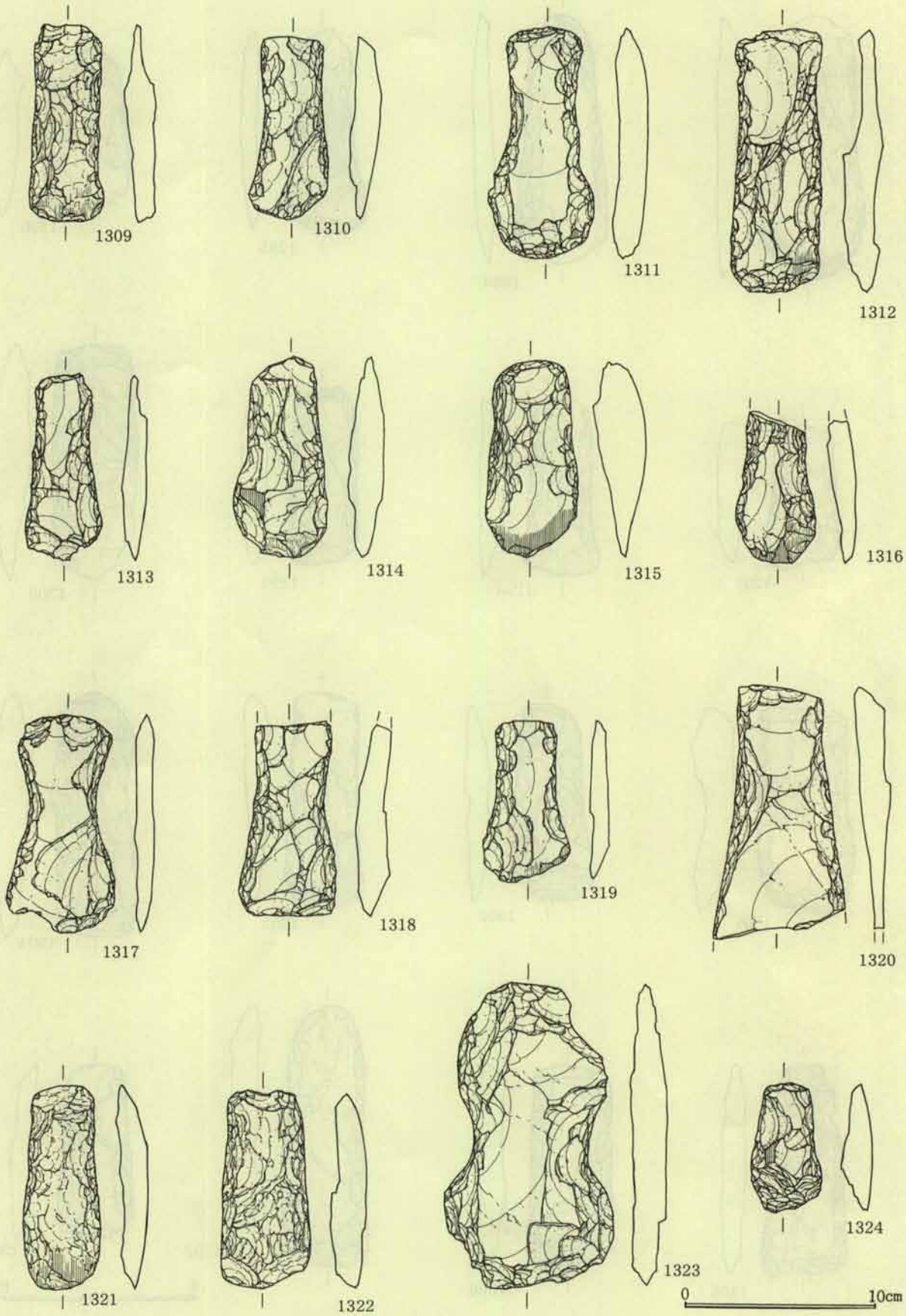
第113図　C地点遺物87　石皿(2)



第114図　C地点遺物⑧⑧　多孔石・石棒



第115図　C地点遺物(89)　石斧(9)



第116図　C地点遺物(90)　石斧(10)

〈付　　表〉

並木Ａ地点遺跡石器・土製品等の計測表

No	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材等	No	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材等
248	打製石斧	10.0	4.2	2.3	120g	無斑晶質安山岩	249	打製石斧	8.6	7.8	2.6	172g	頁岩
250	〃	10.8	4.0	1.8	88g	頁岩	251	〃	9.7	4.8	2.0	93g	頁岩
252	〃	9.2	4.6	1.7	83g	頁岩	253	〃	10.0	4.6	1.7	101g	頁岩
254	石鏃	2.7	1.7	0.5	1.8g	頁岩	255	石鏃	2.0	1.5	0.35	0.8g	チャート
256	〃	1.9	1.5	0.3	0.5g	頁岩	257	〃	3.2	1.7	0.25	0.9g	珪質頁岩
258	〃	1.7	1.6	0.4	0.7g	無斑晶ガラス質安山岩	259	〃	3.9	2.2	0.6	4.5g	黒色緻密質安山岩
260	石錐	3.3	1.7	1.0	4.5g	無斑晶ガラス質安山岩	261	石匙	2.1	2.4	0.35	1.4g	変質流紋岩
262	凹石	(11.5)	8.6	4.6	403g	輝石安山岩	263	凹石	9.8	7.4	5.2	493g	輝石安山岩
264	石皿	(14.3)	(12.7)	6.35	1229g	輝石安山岩	265	石皿	(16.3)	(12.6)	5.4	1150g	輝石安山岩
266	〃	(17.3)	(12.5)	6.2	1661g	輝石安山岩	267	玦状耳飾り	(5.5)	(2.4)	1.0	15.6g	頁岩
268	垂飾り	269	加工土製品										

並木Ｃ地点遺跡石器・土製品等の計測表

No	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材等	No	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材等
1058	加工土製品		4.0×3.8cm		9mm	160g	中期土器片	1059	加工土製品		3.3×3.1cm		1.3cm	16.6g	中期土器片
1060	〃		4.1×3.9		1.1cm	16g	中期土器片	1061	〃		3.3×3.2cm		1.0cm	12.6g	中期土器片
1062	〃		3.0×2.9cm		1.2cm	10g	中期土器片	1063	〃		4.8×4.2cm		1.8cm	47g	中期土器片
1064	〃	Ｊ４Ｄ	3.7×3.3		1.4cm	20.6g	中期土器片	1065	〃		4.4×4.3cm		1.9cm	34.4g	中期土器片
1066	玦状耳飾り	捨て場C						1067	玦状耳飾り	捨て場A				54g	
1068	耳飾り	捨て場C													
1071	打製石斧	表土	12.6	4.9	1.5	127g	ドレライト	1072	〃	表土	12.5	4.25	1.30	79g	頁岩
1073	〃	表土	9.3	4.1	2.0	79g	頁岩	1074	〃	表土	12.0	4.50	1.90	118g	菫青石ホルンフェル
1075	〃	表土	10.9	4.6	1.6	86g	頁岩	1076	〃	表土	12.7	4.70	2.40	133g	頁岩
1077	〃	表土	8.9	4.4	1.55	59g	頁岩	1078	〃	表土	10.9	4.00	2.10	95g	頁岩
1079	〃	表土	9.5	4.2	1.25	53g	無斑晶質安山岩	1080	〃	表土	11.2	3.80	1.55	84g	頁岩
1081	〃	表土	9.6	4.7	1.6	61g	頁岩	1082	〃	表土	9.3	4.50	1.90	97g	頁岩
1083	〃	表土	(10.0)	5.7	2.7	206g	無斑晶質安山岩	1084	〃	捨て場A	11.6	5.00	1.90	97g	無斑晶質安山岩
1085	〃		10.6	5.6	1.7	111g	無斑晶質安山岩	1086	〃	捨て場A	10.3	4.20	1.80	87g	頁岩
1087	〃	捨て場A	10.1	5.7	1.75	101g	無斑晶質安山岩	1088	〃	捨て場A	10.2	4.30	2.05	83g	頁岩
1089	〃	捨て場A	8.8	4.3	1.35	57g	無斑晶質安山岩	1090	〃	捨て場A	9.9	4.40	2.10	106g	無斑晶質安山岩
1091	〃	捨て場A	12.3	5.3	2.0	180g	変輝緑岩	1092	〃	捨て場A	10.1	4.10	1.80	113g	無斑晶質安山岩
1093	〃	捨て場A	10.9	5.5	1.8	95g	無斑晶質安山岩	1094	〃	捨て場A	(9.2)	6.40	2.65	154g	頁岩
1095	〃	捨て場A	12.0	4.7	2.1	146g	無斑晶質安山岩	1096	〃	捨て場A	(12.1)	7.30	3.00	390g	無斑晶質安山岩
1097	〃	捨て場A	(9.2)	4.5	2.25	120g	砂岩	1098	〃	捨て場A	8.6	4.50	1.30	48g	無斑晶質安山岩
1099	〃	捨て場A	9.8	4.9	1.9	100g	無斑晶質安山岩	1100	〃	捨て場A	8.4	4.60	1.15	42g	頁岩
1101	〃	捨て場A	(7.6)	4.3	1.45	56g	頁岩	1102	〃	捨て場A	8.5	3.90	1.15	53g	無斑晶質安山岩
1103	〃	捨て場A	11.0	5.8	2.3	175g	無斑晶質安山岩	1104	〃	捨て場A	(7.7)	4.40	1.90	87g	頁岩
1105	〃	捨て場A	(8.2)	6.2	2.8	141g	無斑晶質安山岩	1106	〃	捨て場A	10.2	3.80	1.75	79g	無斑晶質安山岩
1107	〃	捨て場A	10.5	4.2	1.4	80g	頁岩	1108	〃	捨て場A	9.4	4.50	1.25	67g	無斑晶質安山岩
1109	〃	捨て場A	11.6	4.5	1.85	121g	頁岩	1110	〃	捨て場A	(9.3)	4.70	2.70	128g	無斑晶質安山岩
1111	〃	捨て場A	9.5	4.8	2.4	115g	頁岩	1112	〃	捨て場A	(9.1)	5.00	2.25	91g	頁岩
1113	〃	捨て場A	9.3	6.2	1.65	92g	頁岩	1114	〃	捨て場A	9.8	4.50	2.80	157g	頁岩
1115	〃	捨て場A	9.2	5.4	1.7	71g	無斑晶質安山岩	1116	〃	捨て場B	11.4	4.70	1.55	103g	無斑晶質安山岩
1117	〃	捨て場B	11.2	6.1	2.65	206g	無斑晶質安山岩	1118	〃	捨て場B	(11.0)	4.90	2.05	147g	頁岩
1119	〃	捨て場B	(7.6)	5.9	2.65	142g	無斑晶質安山岩	1120	〃	捨て場B	(7.7)	4.30	1.65	67g	無斑晶質安山岩
1121	〃	捨て場B	(10.0)	5.7	2.3	141g	頁岩	1122	〃	捨て場B	10.3	8.90	2.90	366g	無斑晶質安山岩
1123	〃	捨て場B	10.1	6.8	2.1	139g	無斑晶質安山岩	1124	〃	捨て場B	13.0	4.80	2.25	171g	ホルンフェルス
1125	〃	捨て場B	9.3	5.4	2.6	134g	無斑晶質安山岩	1126	〃	捨て場B	8.0	5.50	2.35	83g	頁岩
1127	〃	捨て場B	11.6	5.1	1.8	98g	無斑晶質安山岩	1128	〃	捨て場B	9.0	4.10	1.90	76g	無斑晶質安山岩
1129	〃	捨て場B	8.3	5.0	2.4	117g	無斑晶質安山岩	1130	〃	捨て場B	(9.3)	4.50	2.55	123g	ホルンフェルス
1131	〃	捨て場B	(8.3)	4.6	1.9	89g	無斑晶質安山岩	1132	〃	捨て場B	12.6	5.50	2.00	159g	黒色緻密質安山岩
1133	〃	捨て場B	10.2	5.7	2.75	103g	無斑晶質安山岩	1134	〃	捨て場B	9.6	5.40	1.80	110g	黒色緻密質安山岩
1135	〃	捨て場B	9.9	3.6	1.4	60g	ホルンフェルス	1136	〃	捨て場B	(8.8)	4.10	1.50	66g	無斑晶質安山岩
1137	〃	捨て場B	9.6	4.5	2.0	106g	無斑晶質安山岩	1138	〃	捨て場B	11.3	5.00	2.60	165g	頁岩
1139	〃	捨て場B	9.7	5.3	1.8	91g	菫青石ホルンフェルス	1140	〃	捨て場B～C	10.3	3.70	1.30	70g	無斑晶質安山岩
1141	〃	捨て場B～C	13.1	5.7	1.9	110g	黒色緻密質安山岩	1142	〃	捨て場C	12.1	5.10	2.00	143g	頁岩
1143	〃	捨て場C	11.6	4.3	1.5	79g	頁岩	1144	〃	捨て場C	10.8	4.80	1.65	98g	無斑晶質安山岩
1145	〃	捨て場C	10.5	5.8	1.55	101g	無斑晶質安山岩	1146	〃	捨て場C	11.0	4.40	1.90	87g	ホルンフェルス
1147	〃	捨て場C	14.0	5.0	1.9	142g	頁岩	1148	〃	捨て場C	11.3	4.80	2.00	139g	無斑晶質安山岩
1149	〃	捨て場C	9.6	4.8	2.2	101g	無斑晶質安山岩	1150	〃	捨て場C	10.3	3.80	1.60	62g	頁岩

1151	打製石斧	捨て場C	10.4	4.1	1.75	87g	無斑晶質安山岩	1152	〃	捨て場C	9.1	3.8	1.45	60g	頁岩
1153	〃	捨て場C	10.9	3.8	1.70	94g	頁岩	1154	〃	捨て場C	10.0	4.7	1.10	54g	頁岩
1155	〃	捨て場C	11.6	5.1	2.20	155g	無斑晶質安山岩	1156	〃	捨て場C	11.2	6.1	2.10	112g	頁岩
1157	〃	捨て場C	10.1	5.1	2.00	105g	頁岩	1158	〃	捨て場C	9.8	4.5	2.20	107g	頁岩
1159	〃	捨て場C	9.8	4.2	1.30	69g	頁岩	1160	〃	捨て場C	(8.8)	4.4	1.65	75g	無斑晶質安山岩
1161	〃	捨て場C	(8.7)	5.7	2.40	125g	頁岩	1162	〃	捨て場C	11.2	4.5	2.15	108g	黒色緻密質安山岩
1163	〃	捨て場C	12.0	5.5	2.05	146g	無斑晶質安山岩	1164	〃	捨て場C	9.3	4.4	1.15	66g	無斑晶質安山岩
1165	〃	捨て場C	10.7	7.2	1.20	102g	頁岩	1166	〃	捨て場C	(8.3)	4.8	2.15	95g	頁岩
1167	〃	捨て場C	8.1	7.7	1.70	75g	頁岩	1168	〃	捨て場C	12.35	4.6	1.80	127g	頁岩
1169	〃	捨て場C	10.0	4.8	1.50	82g	頁岩	1170	〃	捨て場C	9.6	4.7	1.65	76g	ホルンフェルス
1171	〃	捨て場C	13.8	6.0	1.80	171g	頁岩	1172	〃	捨て場C	10.4	3.8	1.40	62g	無斑晶質安山岩
1173	〃	捨て場C	10.8	5.4	2.30	137g	無斑晶質安山岩	1174	〃	捨て場C	13.3	6.0	1.95	211g	無斑晶質安山岩
1175	〃	捨て場C	9.2	4.8	1.80	98g	無斑晶質安山岩	1176	〃	捨て場下段	10.7	4.8	1.35	77g	無斑晶質安山岩
1177	〃	捨て場下段	13.2	6.5	3.35	308g	砂岩	1178	〃	捨て場下段	11.6	4.4	2.70	169g	頁岩
1179	〃	捨て場下段	(9.3)	3.7	1.25	55g	無斑晶質安山岩	1180	〃	捨て場下段	11.1	5.0	2.50	152g	無斑晶質安山岩
1181	〃	捨て場下段	8.9	4.3	1.45	64g	黒色緻密質安山岩	1182	〃	捨て場下段	8.8	4.1	1.80	78g	無斑晶質安山岩
1183	〃	J2H	10.6	6.8	2.50	203g	頁岩	1184	〃	J2H	11.8	7.5	1.70	184g	無斑晶質安山岩
1185	磨製石斧					130g	変輝緑岩								
1186	石鏃	J6H	1.4	0.9	0.20	0.3g	黒曜石	1187	石鏃	J6H	1.3	1.2	0.35	0.4g	黒曜石
1188	石鏃	J1H	1.8	1.7	0.30	0.5g	無斑晶ガラス質安山岩	1189	石鏃	J6H	1.8	1.9	0.70	1.4g	黒曜石
1190	石鏃	J6D	2.5	1.7	0.50	1.9g	無斑晶ガラス質安山岩	1191	石鏃	J4D	(2.6)	1.7	0.40	1.3g	無斑晶ガラス質安山岩
1192	石鏃	J1H	3.6	2.0	0.55	2.4g	無斑晶ガラス質安山岩	1193	石鏃		2.9	1.9	0.60	3.2g	頁岩
1194	石鏃	J6D	(2.4)	1.4	0.50	1.4g	チャート	1195	石鏃		3.6	2.0	0.50	2.3g	無斑晶ガラス質安山岩
1196	石鏃	捨て場B	(2.8)	(1.7)	0.5	1.8g	黒曜石	1197	石鏃	捨て場B	(2.2)	(1.6)	0.40	0.9g	無斑晶ガラス質安山岩
1198	石鏃	捨て場B	3.4	(2.1)	0.35	1.7g	無斑晶質安山岩	1199	石鏃	捨て場B	2.0	1.4	0.30	0.5g	チャート
1200	石鏃	捨て場B	2.4	2.0	0.50	1.4g	玉ずい	1201	石鏃	捨て場C	(2.2)	2.2	0.35	1.2g	無斑晶ガラス質安山岩
1202	石鏃	捨て場C	(2.2)	(1.4)	0.50	1.4g	無斑晶ガラス質安山岩	1203	石鏃	表土	(2.5)	(1.3)	0.50	0.8g	黒曜石
1204	石鏃	捨て場A	3.6	2.4	0.55	3.6g	無斑晶ガラス質安山岩	1205	石鏃	捨て場A	(3.3)	(2.1)	0.70	3.1g	チャート
1206	石鏃	捨て場A	(2.4)	2.3	0.40	1.6g	無斑晶ガラス質安山岩	1207	石鏃	捨て場A	2.3	1.1	0.45	0.7g	無斑晶ガラス質安山岩
1208	石鏃	捨て場A	2.5	1.4	0.50	0.9g	黒曜石	1209	石鏃		(1.8)	2.1	0.35	1.1g	無斑晶ガラス質安山岩
1210	石鏃	捨て場A	2.3	2.1	0.30	1.1g	チャート	1231	石鏃	捨て場A	3.4	1.4	0.45	1.7g	無斑晶質安山岩
1212	石鏃	捨て場A	2.2	1.6	0.60	1.2g	無斑晶ガラス質安山岩	1213	石鏃	捨て場A	2.3	1.4	0.55	1.5g	チャート
1214	石鏃	捨て場A	1.4	1.2	0.35	0.4g	黒曜石	1215	石鏃	捨て場A	2.1	1.7	0.40	1.0g	頁岩
1216	石鏃		(2.2)	1.6	0.50	1.0g	変質流紋岩	1217	石鏃	捨て場A	(1.0)	1.4	0.30	0.3g	黒曜石
1218	石鏃	捨て場A	3.2	2.25	0.95	5.8g	無斑晶ガラス質安山岩	1219	石鏃	捨て場A	(3.0)	(1.7)	0.35	1.3g	無斑晶ガラス質安山岩
1218	石鏃	捨て場A	3.2	2.25	0.95	5.8g	無斑晶ガラス質安山岩	1219	石鏃	捨て場A	(3.0)	(1.7)	0.35	1.3g	無斑晶ガラス質安山岩
1220	石鏃	捨て場A	1.8	1.3	0.40	0.8g	無斑晶質安山岩	1221	石鏃	捨て場A	(4.0)	(2.1)	0.50	3.1g	黒色緻密質安山岩
1222	石鏃	捨て場A	3.9	1.7	0.55	2.4g	変質流紋岩	1223	石鏃	捨て場C	2.1	1.8	0.30	0.7g	黒曜石
1224	石鏃	捨て場C	(2.8)	(1.9)	0.40	1.8g	無斑晶ガラス質安山岩	1225	石鏃	捨て場C	(2.4)	2.2	0.50	2.2g	無斑晶ガラス質安山岩
1226	石鏃		2.4	2.1	0.5	2.1g	無斑晶ガラス質安山岩	1227	石鏃	捨て場下段	1.8	1.9	0.40	0.9g	無斑晶ガラス質安山岩
1228	石鏃		(1.7)	(1.7)	0.35	0.9g	無斑晶ガラス質安山岩	1229	石鏃		1.3	1.1	0.25	0.2g	黒曜石
1230	石鏃	捨て場C	(1.2)	(1.4)	0.20	0.3g	チャート	1231	石錐	J1D	2.8	2.0	0.70	2.6g	無斑晶ガラス質安山岩
1232	軽石製品	捨て場C	9.9	6.4	2.1	78g		1233	軽石製品	捨て場下段	6.7	5.8	2.15	31g	
1234	〃	捨て場B	5.4	5.2	3.0	35g		1235	〃	捨て場C	4.5	3.8		10g	
1236	軽石製品	捨て場A	7.1	6.7	3.85	65g		1237	砥石		(4.0)	(6.5)	2.30	67g	砂岩
1238	砥石	捨て場下段	(6.4)	8.6	2.0	116g	砂岩	1239	砥石	捨て場B	6.4	6.6	2.10	64g	砂岩
1240	〃	捨て場B	(13.8)	7.9	1.3	182g	砂岩								
1241	磨石	捨て場B	10.2	8.9	4.1	616g	石英斑岩	1242	〃	捨て場A	15.5	9.2	4.50	1025g	輝石安山岩
1243	〃	捨て場下段	12.2	9.7	4.3	825g	輝石安山岩	1244	〃	捨て場A	11.8	7.6	4.20	567g	輝石安山岩
1245	〃	捨て場下段	10.8	8.4	4.8	688g	花崗閃緑岩	1246	〃		12.0	6.5	3.90	478g	輝石安山岩
1247	〃		(7.3)	7.4	4.4	324g	輝石安山岩	1248	〃		9.5	7.5	4.10	504g	輝石安山岩
1249	〃	捨て場C	(9.7)	9.4	4.7	692g	輝石安山岩	1250	〃	捨て場C	9.0	7.7	4.40	400g	輝石安山岩
1251	〃	捨て場C	10.1	7.6	3.2	412g	輝石安山岩	1252	〃	捨て場C	12.4	9.4	4.70	704g	輝石安山岩
1253	〃	J2H	11.3	7.0	4.3	512g	輝石安山岩	1254	〃		8.3	7.7	4.00	460g	輝石安山岩
1255	〃	捨て場B	(11.3)	7.6	3.7	524g	輝石安山岩	1256	〃	捨て場B	(6.8)	8.5	4.90	449g	輝石安山岩
1255	〃	捨て場B	(11.3)	7.6	3.7	524g	輝石安山岩	1256	〃	捨て場B	(6.8)	8.5	4.90	449g	輝石安山岩
1257	〃		11.1	7.5	4.5	523g	輝石安山岩	1258	磨石	捨て場C	(8.3)	7.65	3.90	343g	輝石安山岩
1259	凹石	捨て場下段	9.5	8.15	5.7	551g	輝石安山岩	1260	凹石	捨て場B	(7.7)	6.9	4.20	284g	輝石安山岩
1261	〃	捨て場A	9.0	8.9	5.0	491g	輝石安山岩	1262	〃	捨て場B	9.0	7.5	4.80	368g	輝石安山岩
1263	〃	捨て場B	10.0	6.5	4.65	401g	輝石安山岩	1264	〃	捨て場B	9.7	7.3	4.70	409g	輝石安山岩
1265	〃	捨て場C	(9.9)	7.4	3.7	367g	輝石安山岩	1266	〃		10.9	8.4	3.70	467g	輝石安山岩
1265	〃	捨て場C	(9.9)	7.4	3.7	367g	輝石安山岩	1266	〃		10.9	8.4	3.70	467g	輝石安山岩
1267	〃	捨て場A	9.7	7.6	3.7	270g	輝石安山岩	1268	〃	捨て場C	9.6	8.9	4.60	399g	角閃石デイサイト
1269	〃	捨て場A	9.3	7.2	4.0	327g	輝石安山岩	1270	〃	捨て場A	(12.5)	8.0	4.30	495g	輝石安山岩
1271	〃	捨て場C	(13.6)	8.2	4.1	434g	輝石安山岩	1272	〃	捨て場B	12.6	5.8	4.95	520g	輝石安山岩
1273	〃	捨て場A	13.5	7.8	7.2	793g	輝石安山岩	1274	〃	捨て場A	12.9	7.2	5.50	619g	輝石安山岩

1275	凹石	捨て場B	9.1	7.1	5.2	466g	輝石安山岩	1276	石皿					3820g	緑色片岩
1277	石皿	輝石安山岩						1278	石皿	J6H炉	(15.9)	(19.4)	6.1	2554g	輝石安山岩
1279	石皿					1752g	輝石安山岩	1280	石皿					1546g	輝石安山岩
1281	石皿					2650g	輝石安山岩	1282	石皿					3165g	輝石安山岩
1283	石皿	捨て場C	(21.0)	(16.3)	7.10	2336g	輝石安山岩	1284	石皿	捨て場A	(13.4)	(11.9)	7.5	1242g	輝石デイサイト
1285	石皿	J2H	(10.4)	(9.4)	4.00	433g	輝石安山岩	1286	石皿	捨て場B	(12.5)	(9.2)	4.9	717g	輝石安山岩
1287	石皿	J4D周辺	(16.2)	(11.5)	3.70	875g	緑色片岩	1288	多孔石	捨て場A	19.7	10.0	8.9	2237g	輝石安山岩
1289	多孔石	捨て場C	(13.9)	(7.1)	(7.25)	576g	輝石安山岩	1290	〃	捨て場B	(20.2)	19.5	10.4		多孔質安山岩
1291	〃	捨て場C	26.9	20.7	13.90		輝石デイサイト	1292	石棒	捨て場C	(14.9)	8.5	7.8	1354g	緑色片岩
1293	石斧		13.8	5.4	1.55	129g		1294	石斧		13.0	4.9	1.2	88g	
1295	石斧		10.7	4.5	1.15	50g		1296	石斧	捨て場A	8.8	4.6	1.65	69g	
1297	石斧	捨て場A	8.0	3.8	1.75	63g		1298	石斧		9.2	4.0	1.55	62g	
1299	石斧		9.3	3.7		64g		1300	石斧		12.2	4.5	2.25	138g	
1301	石斧		10.7	5.2	2.45	161g		1302	石斧	捨て場B	10.3	4.4	1.6	72g	
1303	石斧		11.2	4.1	1.35	78g		1304	石斧		12.8	4.6	2.15	141g	
1305	石斧		11.3	4.4	1.45	72g		1306	石斧		11.0	4.7	1.6	103g	
1307	石斧		13.8	4.1	1.75	148g		1308	石斧	捨て場下段	9.4	4.0	1.4	61g	
1309	石斧		10.3	3.9	1.70	76g		1310	石斧		9.5	4.2	1.7	71g	
1311	石斧		12.1	5.5	1.80	135g		1312	石斧		13.8	4.7	2.1	141g	
1313	石斧		9.7	4.0	1.35	54g		1314	石斧	捨て場B~C	10.5	4.9	2.1	108g	
1315	石斧	捨て場C	10.3	4.8	2.80	142g		1316	石斧		(7.9)	4.2	1.65	51g	
1317	石斧		11.3	5.7	1.15	71g		1318	石斧	捨て場C	(10.2)	5.1	1.85	103g	
1319	石斧		8.4	4.6	1.20	39g		1320	石斧		(13.2)	6.8	1.95	167g	
1321	石斧		10.8	4.1	1.70	88g		1322	石斧	捨て場A	10.4	4.7	2.0	126g	
1323	石斧		16.1	8.8	2.20	349g		1324	石斧	捨て場A	6.9	3.7	1.7	44g	

写真図版

並木C地点遺跡作業風景

図版 1

並木Ａ地点遺跡

1　遺物出土状況

2　同上

並木Ａ地点遺跡

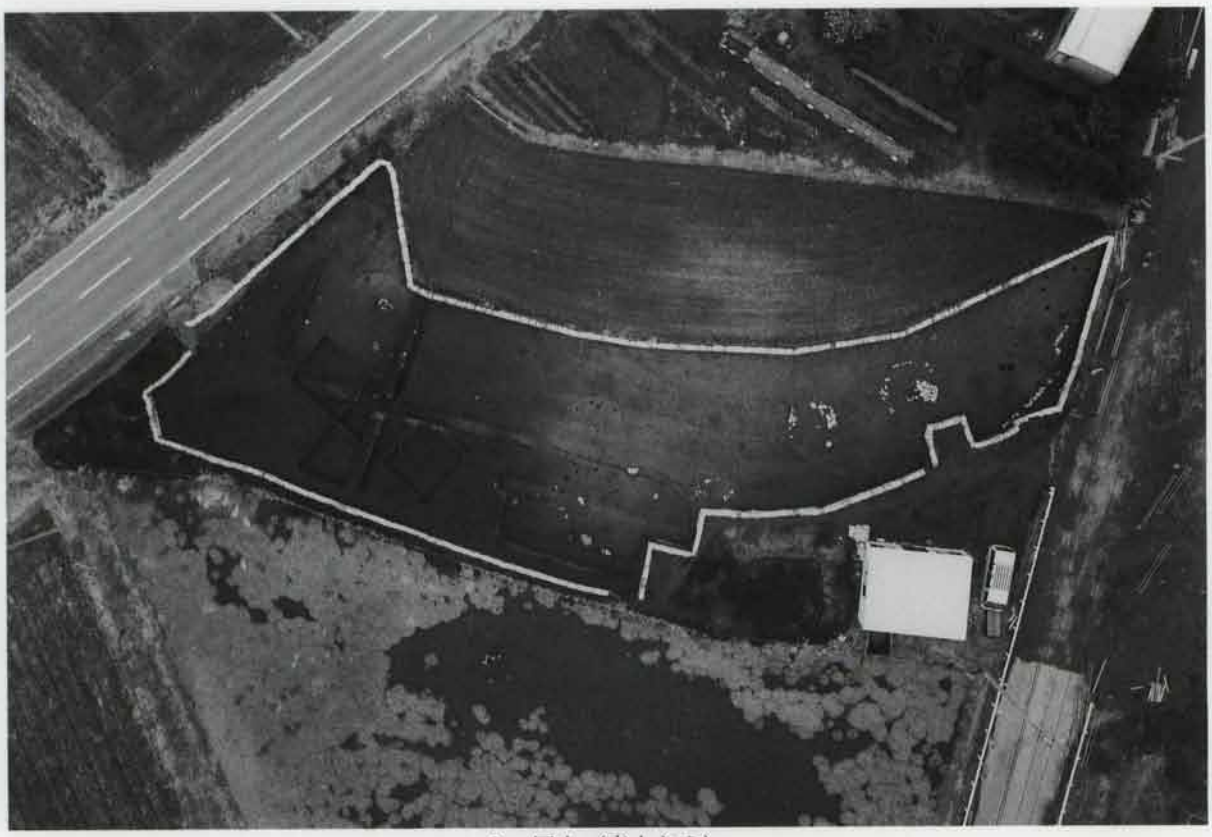
1　土層観察作業

2　完掘状況

図版３

並木Ｃ地点遺跡

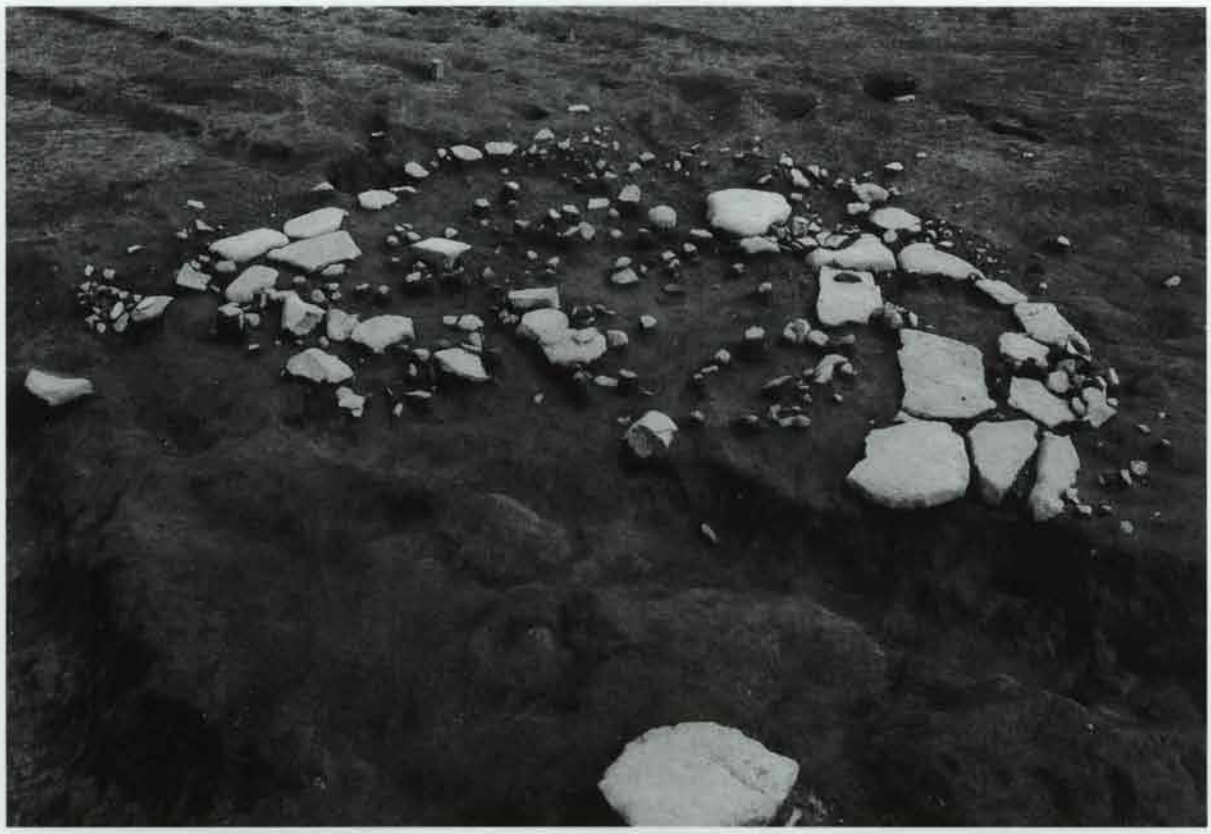
１　全景（北東より）



２　同上（真上から）

並木Ｃ地点遺跡

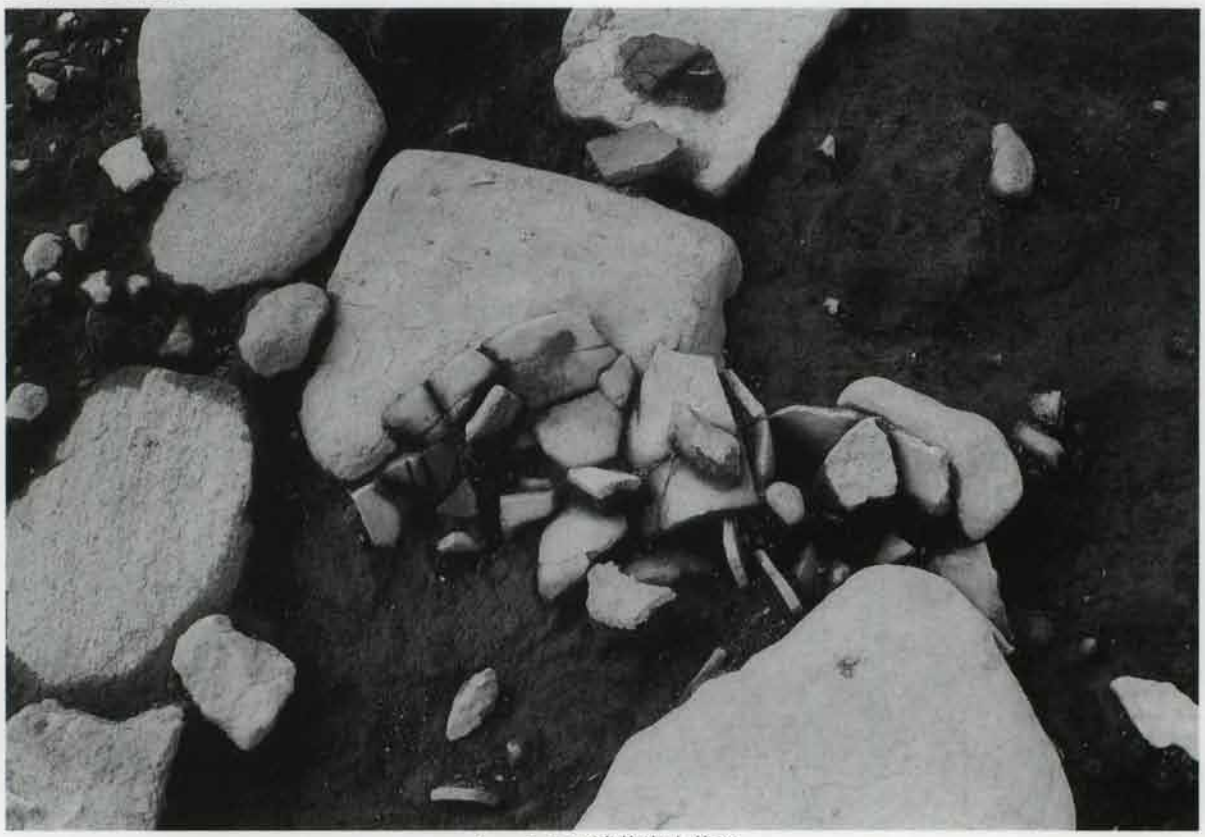
１　ＪＩＨ（南より）



２　ＪＩＨ（北西より）

図版５

並木Ｃ地点遺跡



１　ＪＩＨ遺物出土状況

２　同上

並木Ｃ地点遺跡

１　ＪＩＨ完掘状況（真上から）

２　Ｊ２Ｈ（北西より）

図版７

並木Ｃ地点遺跡

１　Ｊ２Ｈ　石斧出土状況

２　Ｊ２Ｈ　完掘状況

並木Ｃ地点遺跡

１　Ｊ５Ｈ　完掘状況（北より）

２　Ｊ５・７Ｈ完掘状況（真上から）

図版９

並木Ｃ地点遺跡

１　Ｊ６Ｈ　遺物出土状況

２　Ｊ６Ｈ　炉・石皿出土状況

並木Ｃ地点遺跡

1　Ｊ７Ｈ　遺物出土状況

2　同　完掘状況

図版11

並木Ｃ地点遺跡

1　Ｊ８Ｈ　炉

2　Ｊ１Ｄ　遺物出土状況

並木Ｃ地点遺跡

1　Ｊ２Ｄ・Ｊ３Ｈ（右隅の一部）

2　Ｊ４Ｄ周辺の遺物出土状況

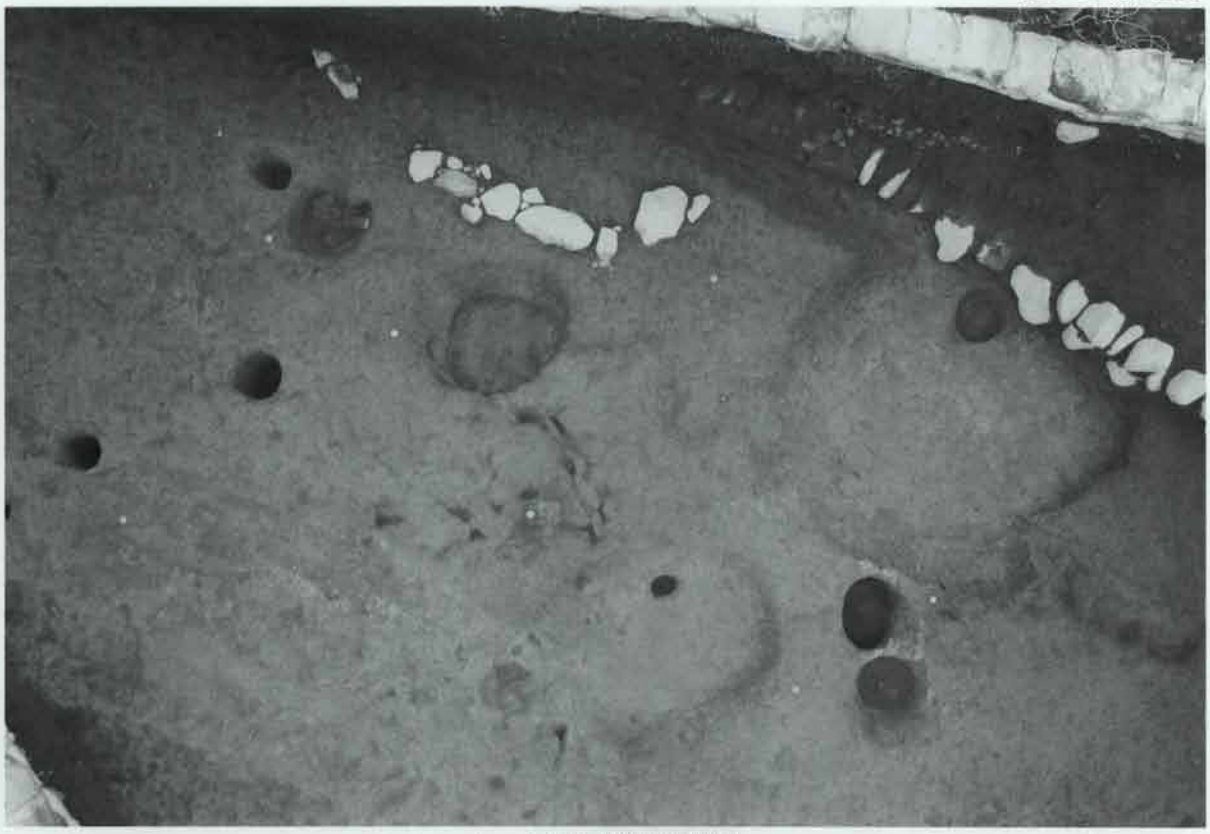
図版13

並木Ｃ地点遺跡

1　Ｊ４Ｄ　遺物出土状況

2　同上

並木Ｃ地点遺跡



1　Ｊ４Ｄ周辺完掘状況

2　Ｊ５Ｄ遺物出土状況

図版15

並木Ｃ地点遺跡

1　1号集石

2　2号集石

並木Ｃ地点遺跡

1　3・4号集石

2　捨て場遺物出土状況（北より）

図版17

並木Ｃ地点遺跡

1　捨て場Ａ区遺物出土状況

2　同上

1　捨て場A区遺物出土状況

2　捨て場B区遺物出土状況

図版19

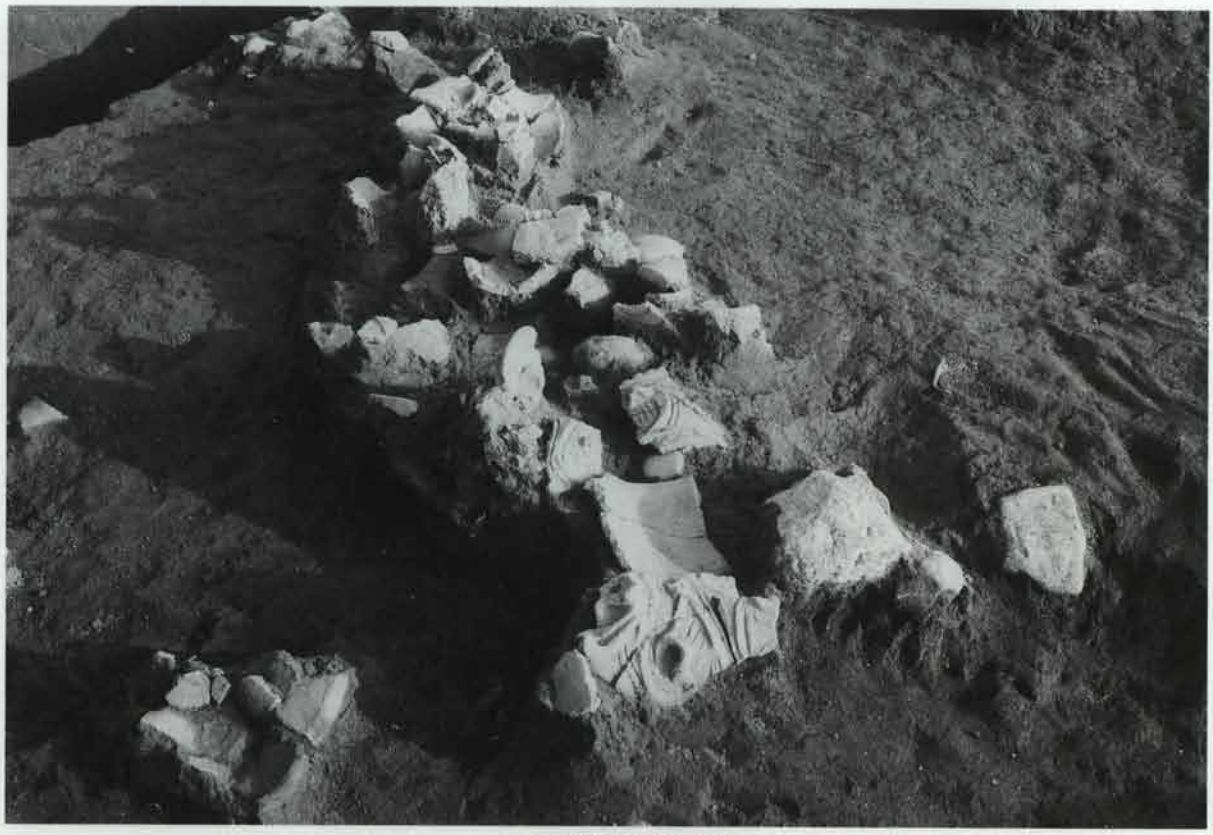
並木Ｃ地点遺跡

1　捨て場Ｃ区遺物出土状況

2　捨て場Ｃ～Ｂ区遺物出土状況

並木Ｃ地点遺跡

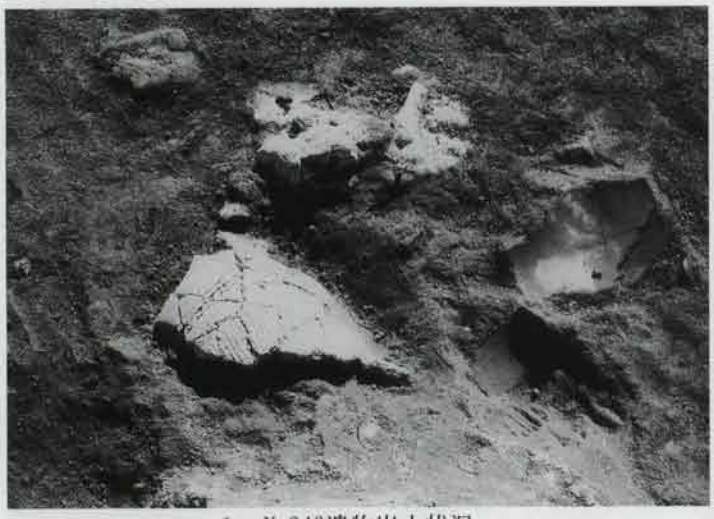
1　No118遺物出土状況



2　No324遺物出土状況

図版21

並木Ｃ地点遺跡



1　No343遺物出土状況

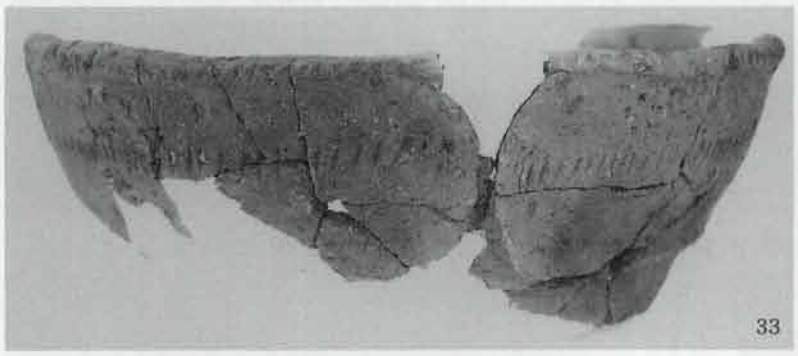
2　No119遺物出土状況

3　No918遺物出土状況

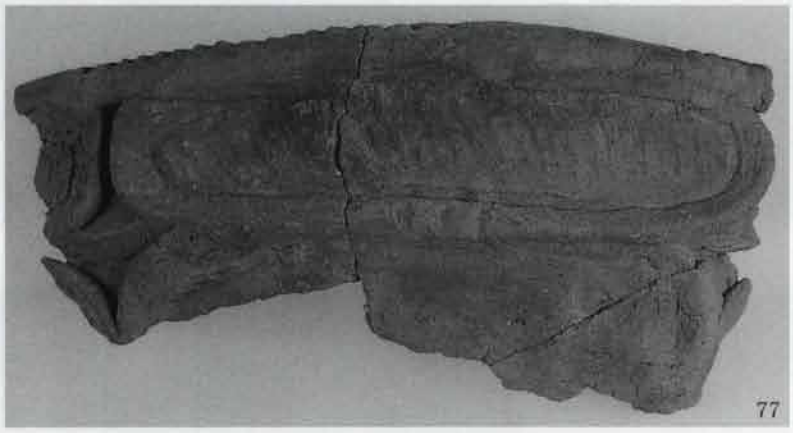
並木Ｃ地点遺跡

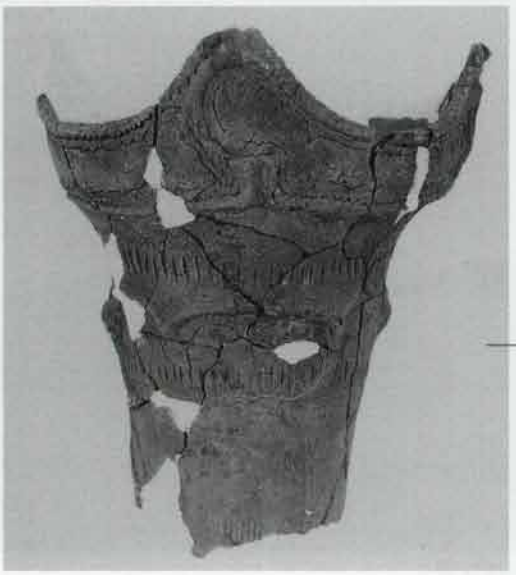
1　No238遺物出土状況

2　捨て場土層堆積状況

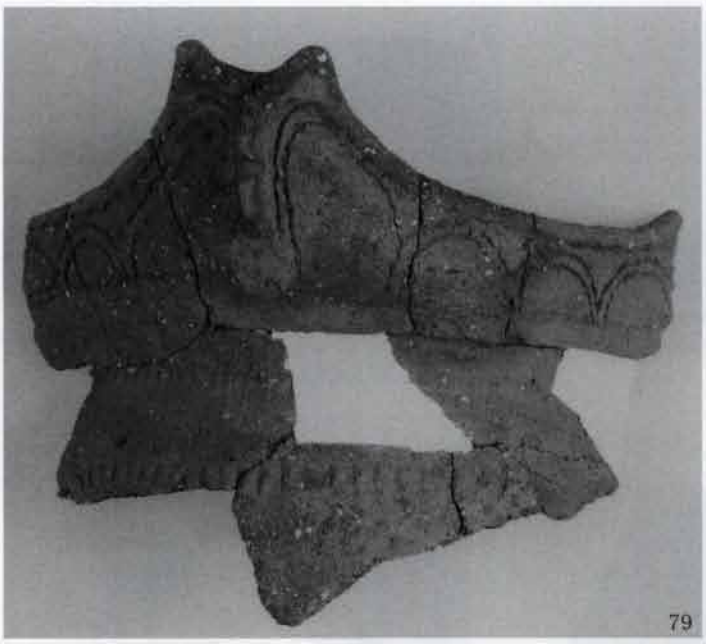

33

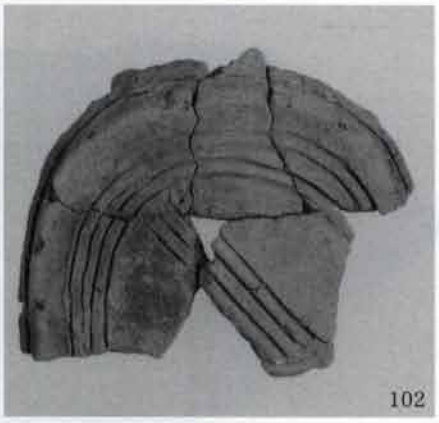
34


77

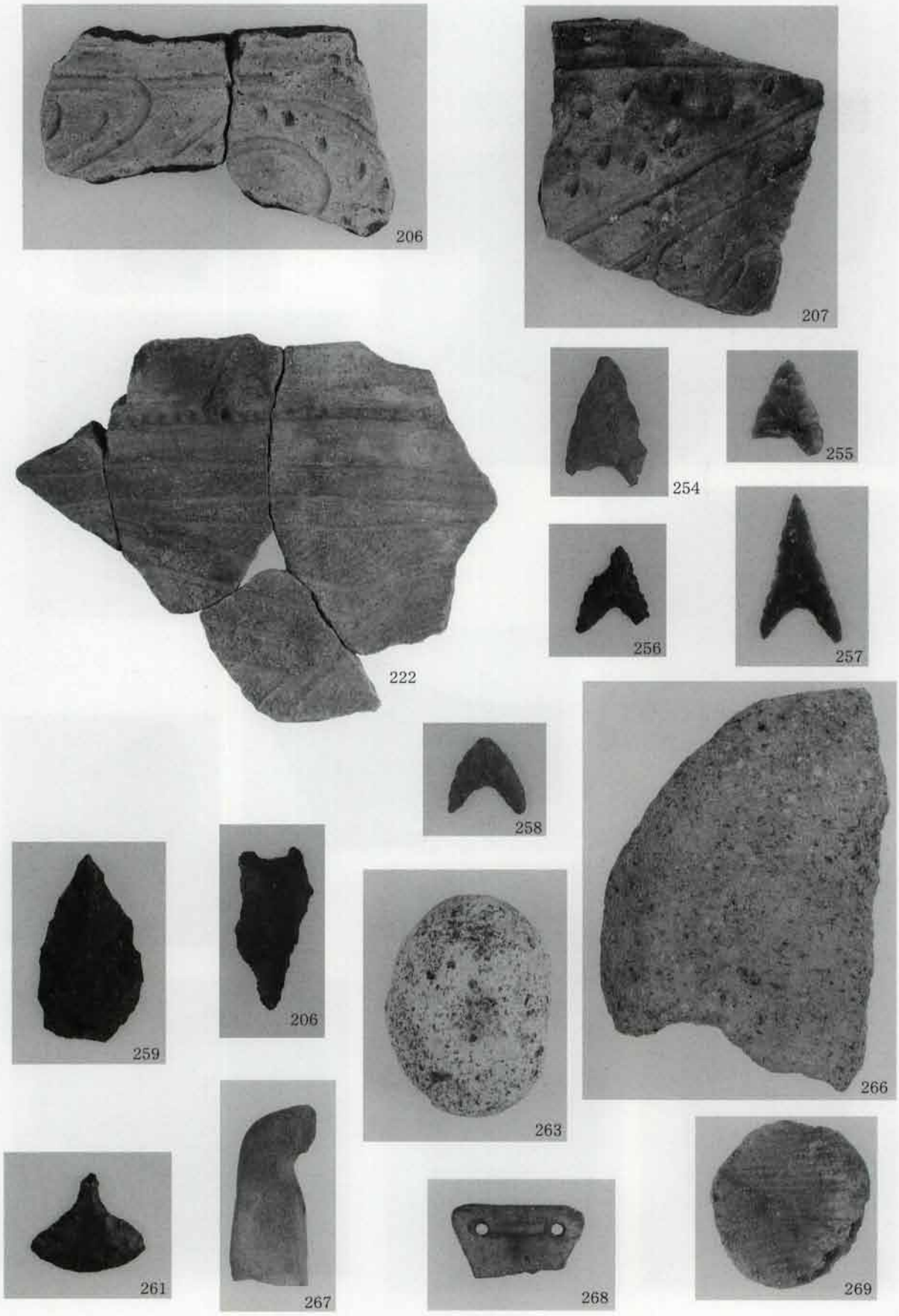

78

A地点遺跡出土遺物（1）

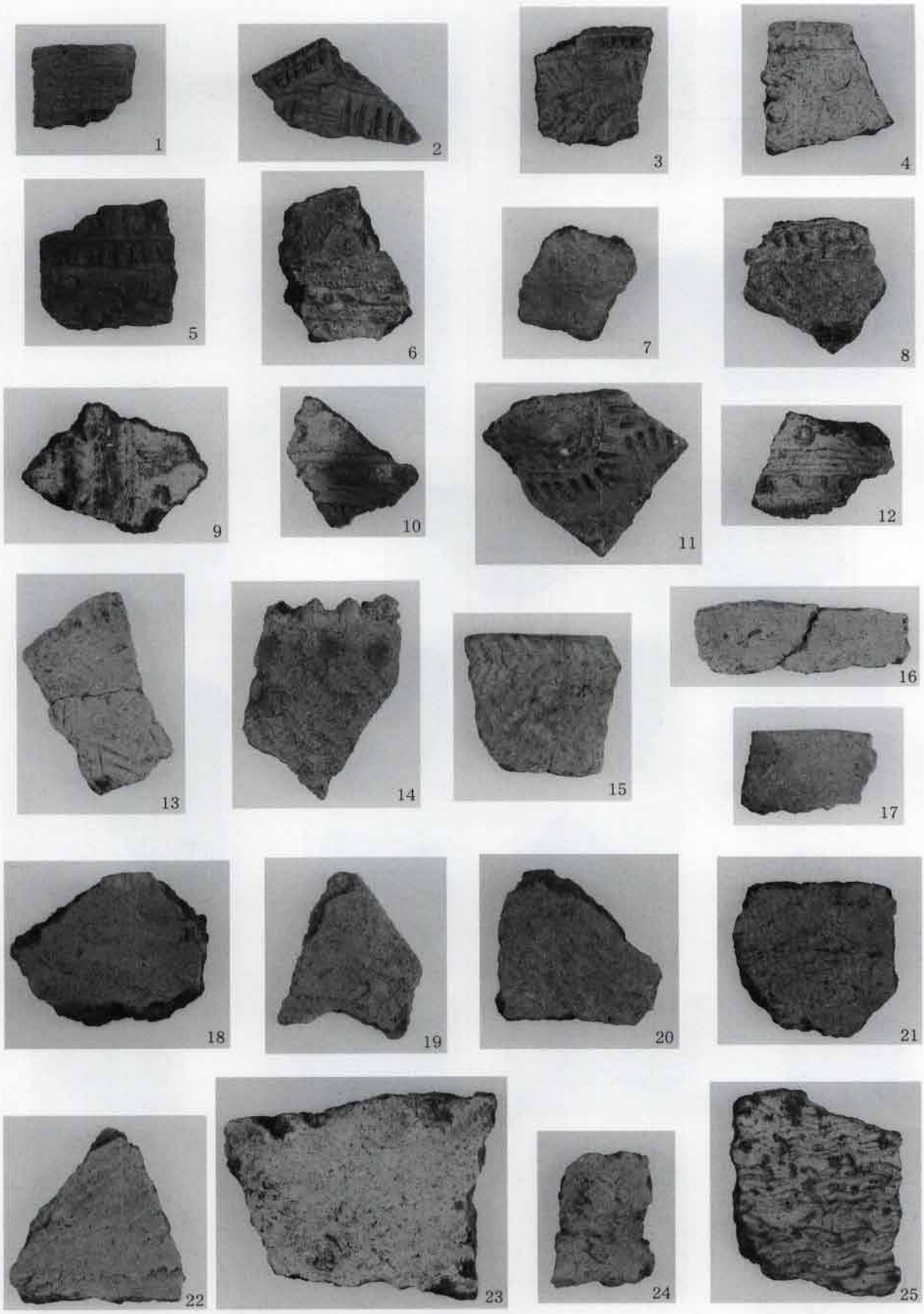




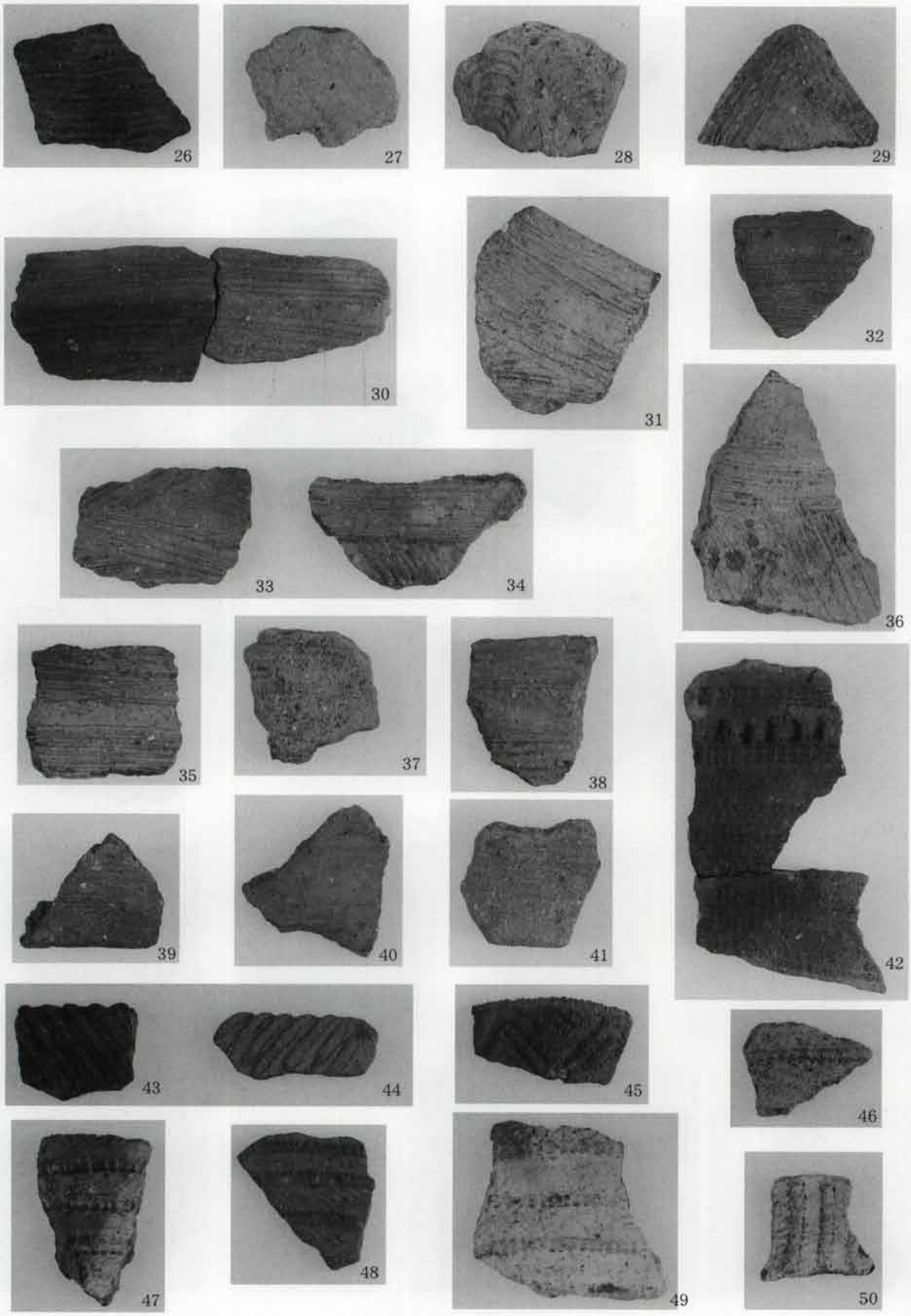
A地点遺跡出土遺物（2）



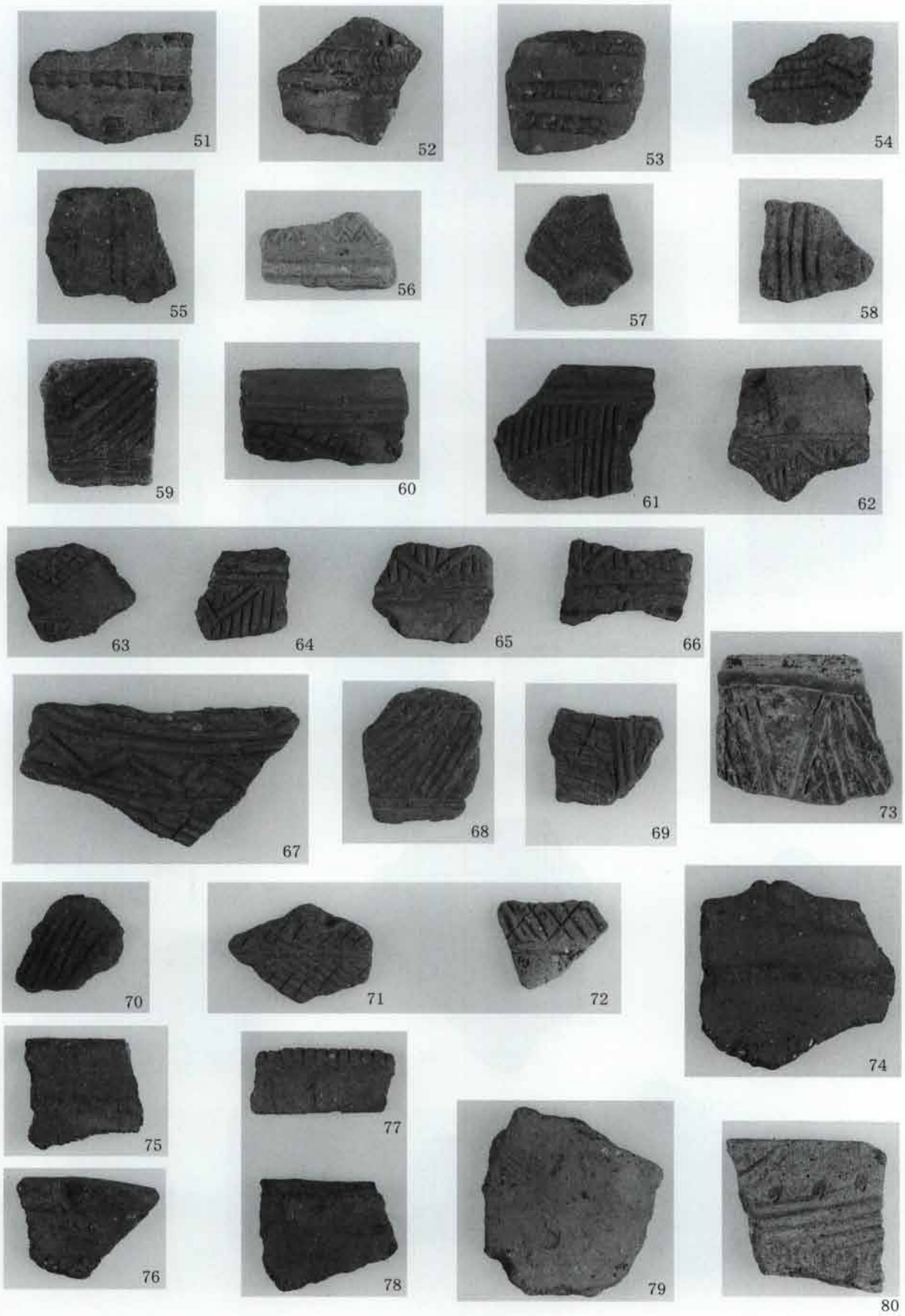
A地点遺跡出土遺物（3）



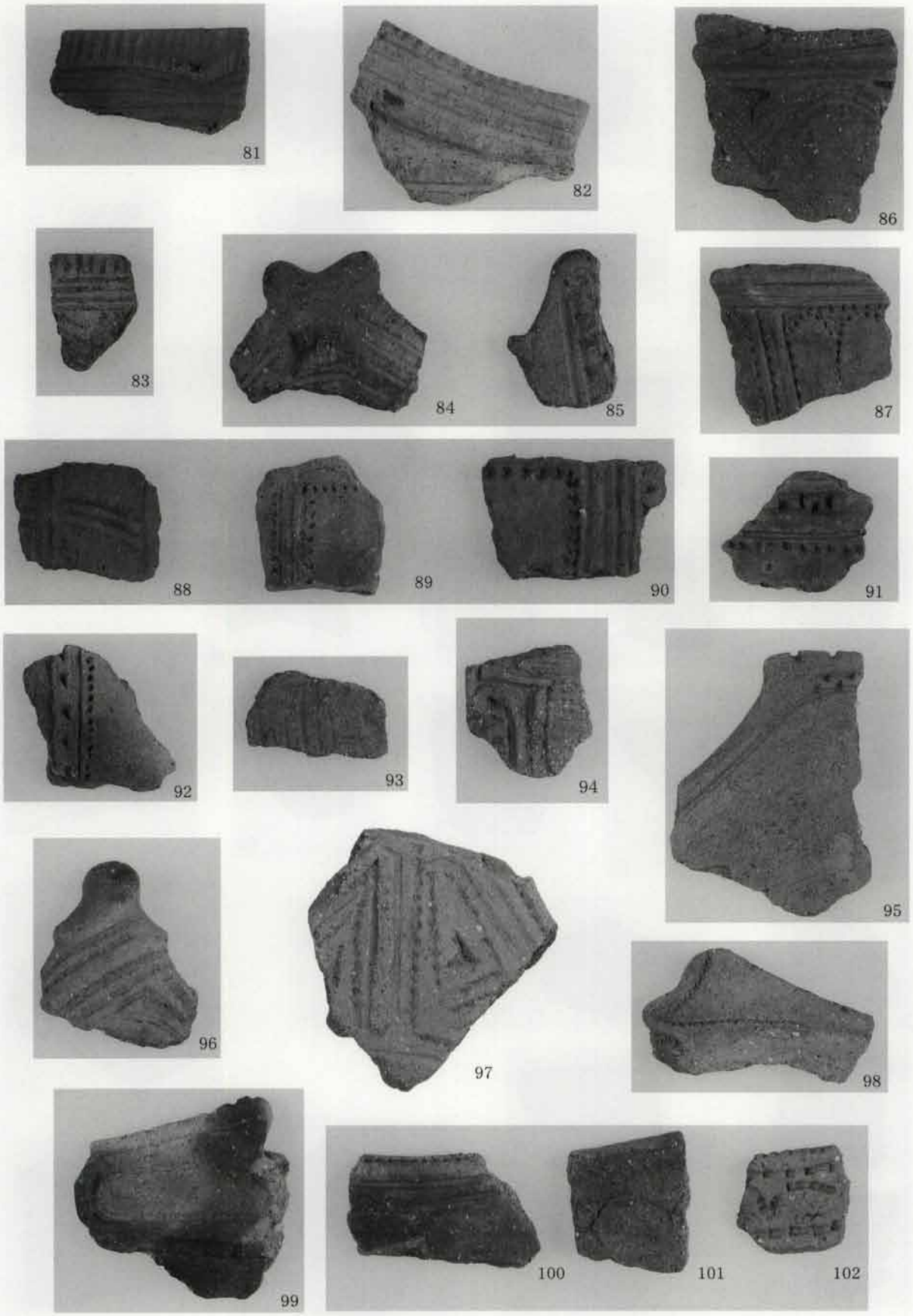
C地点遺跡出土遺物（1）


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

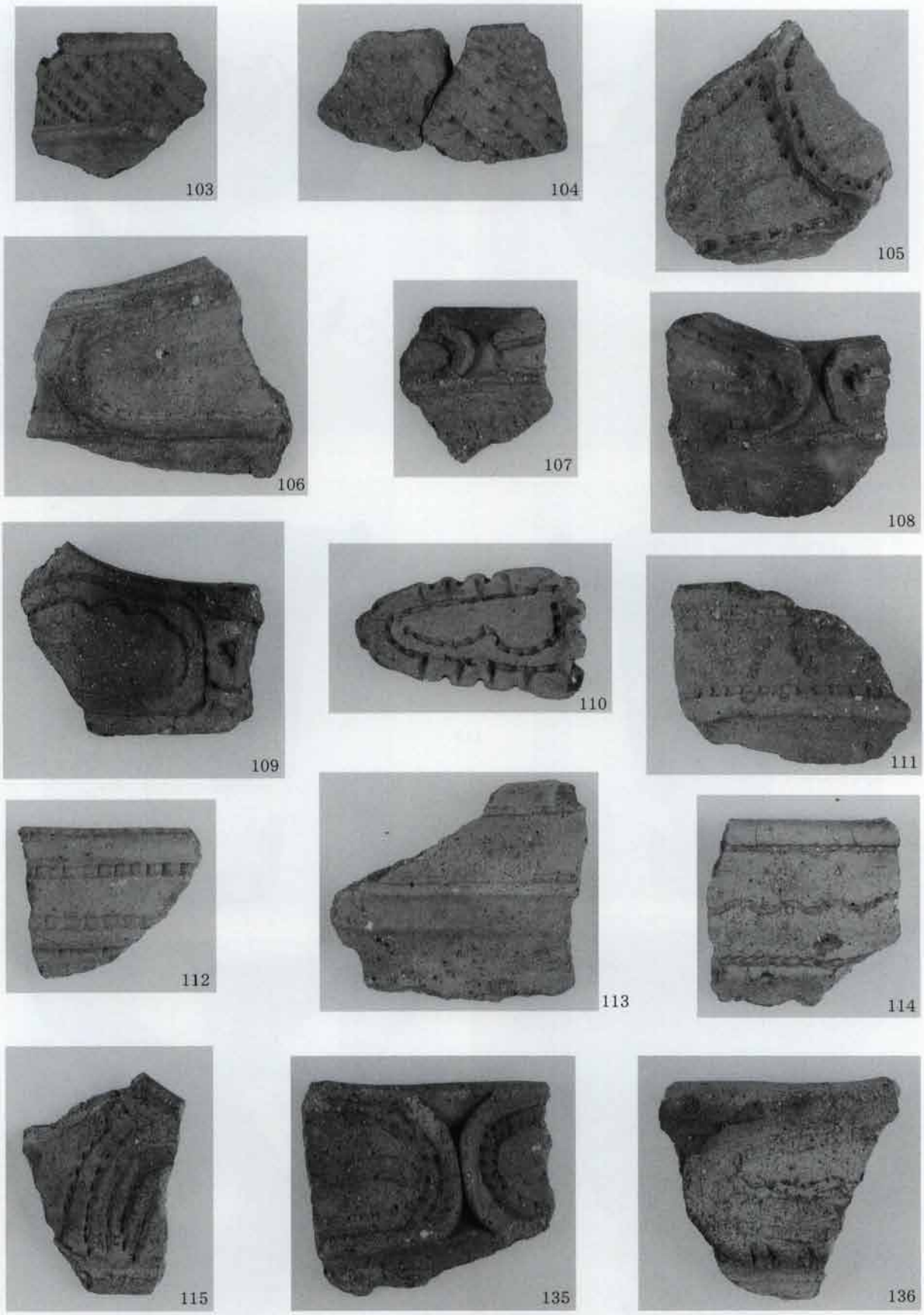
C地点遺跡出土遺物（2）


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80

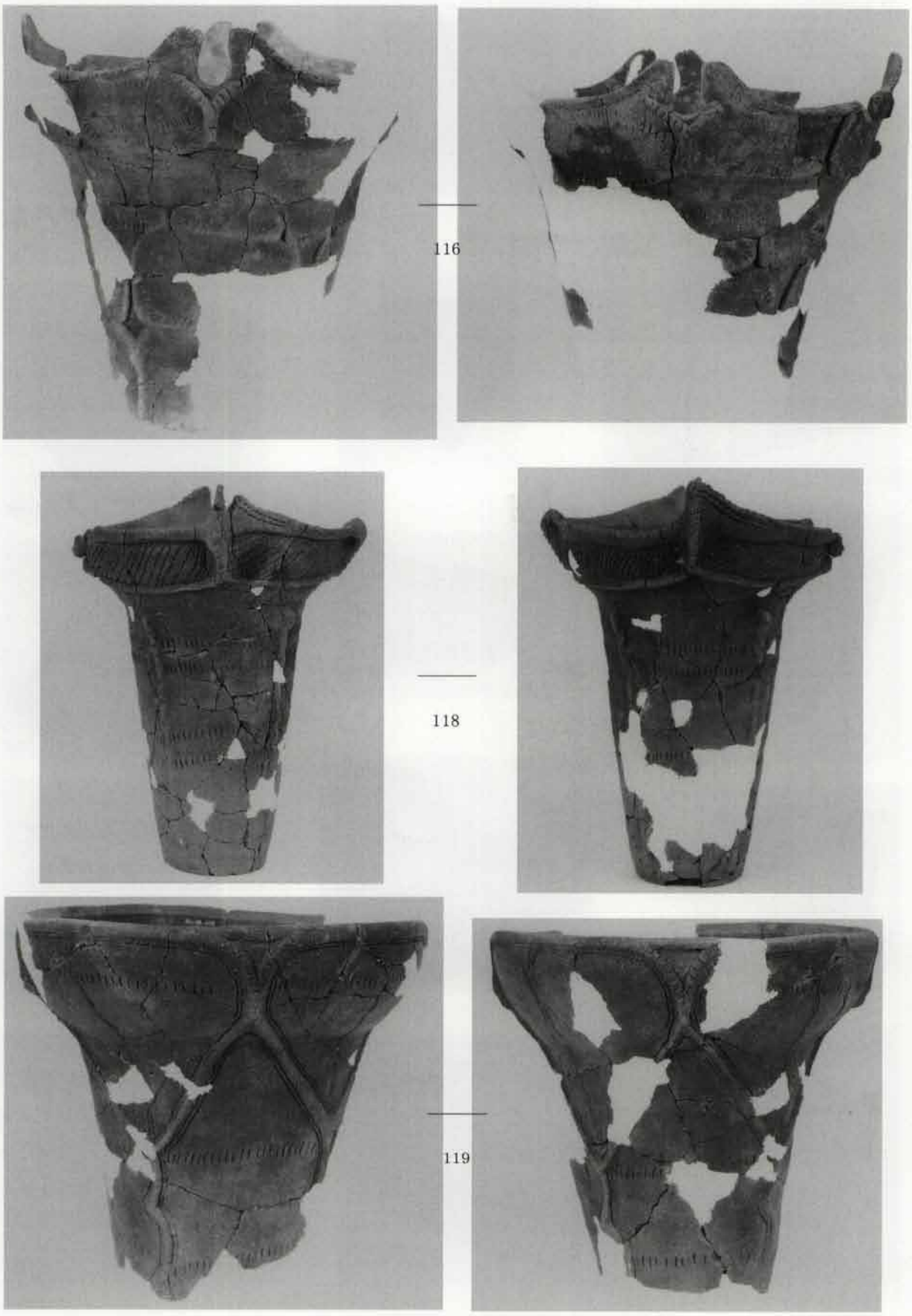
C地点遺跡出土遺物（3）



C地点遺跡出土遺物（4）



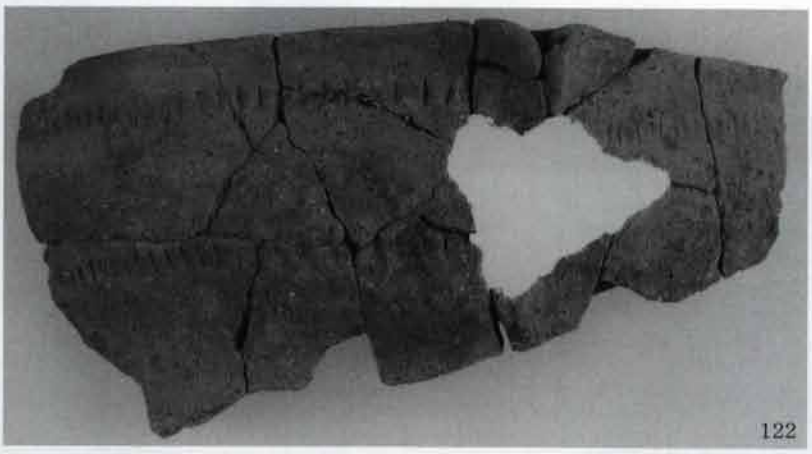
C地点遺跡出土遺物（5）



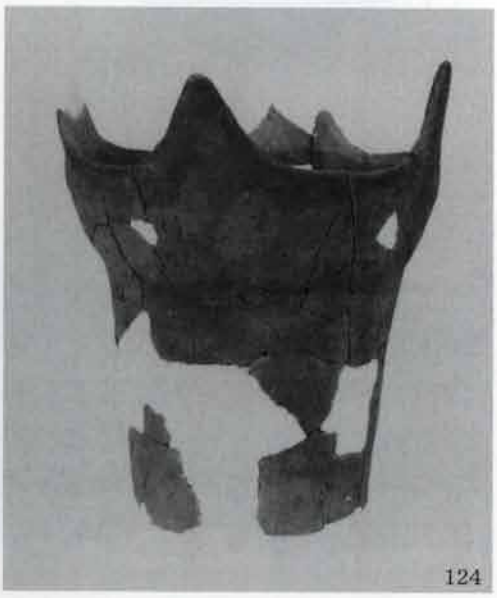
C地点遺跡出土遺物（6）

120

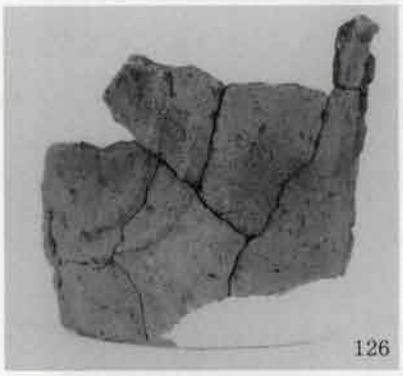
121

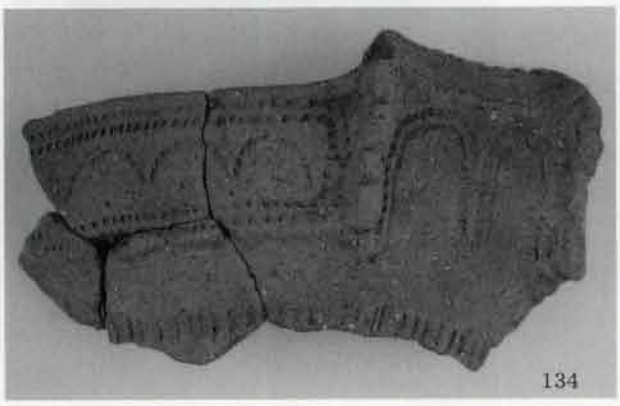

122

123

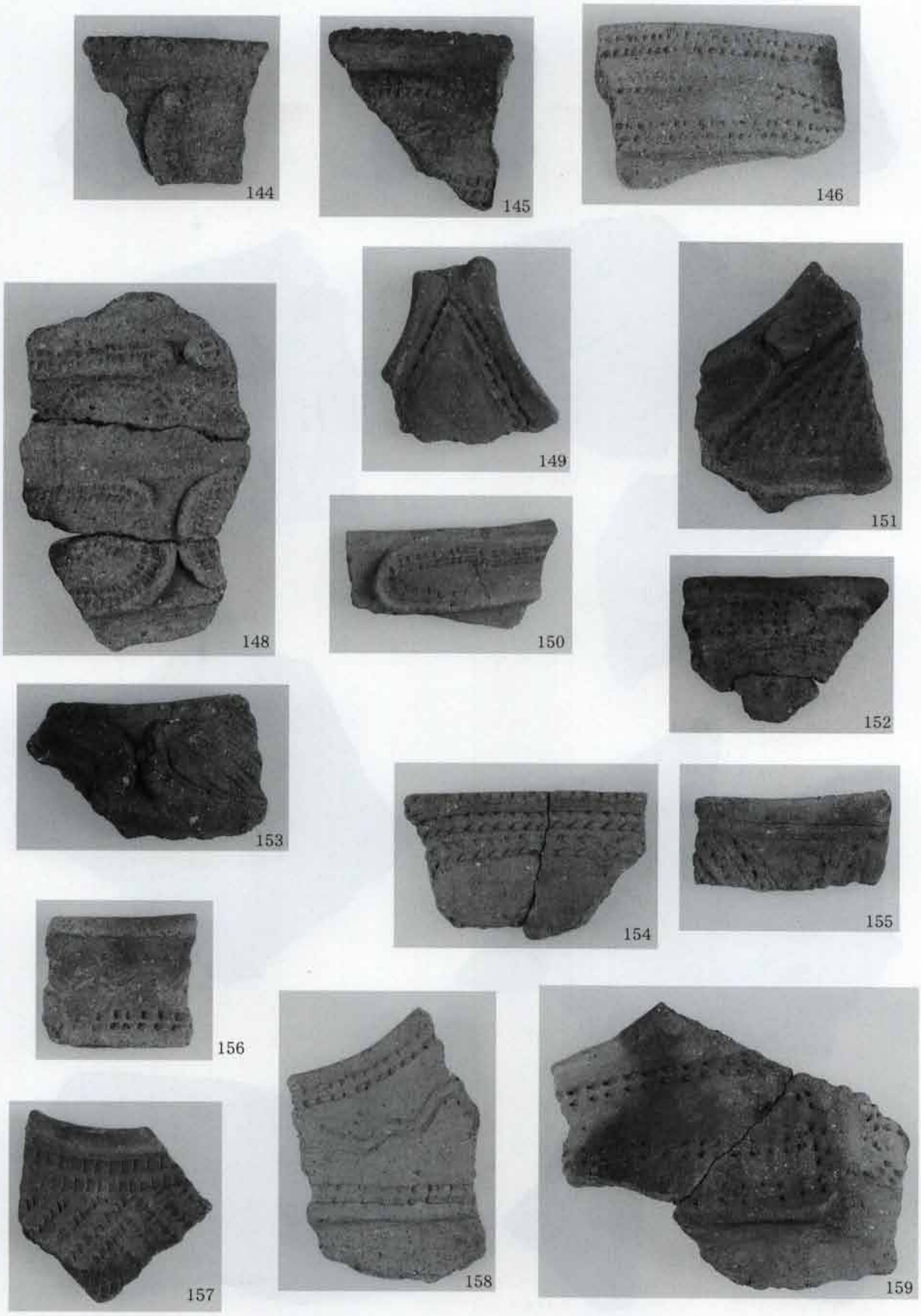

124

C地点遺跡出土遺物（7）

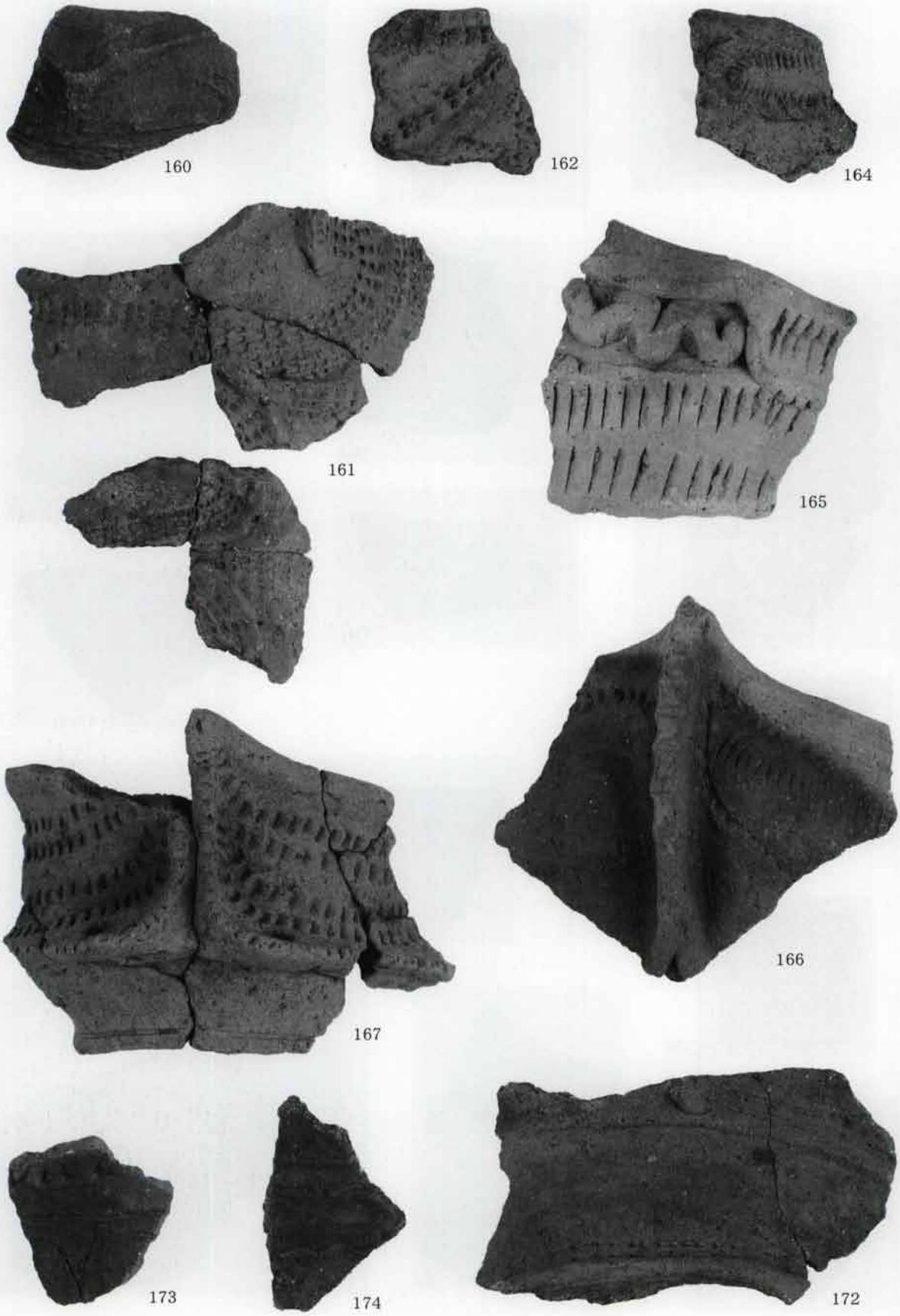




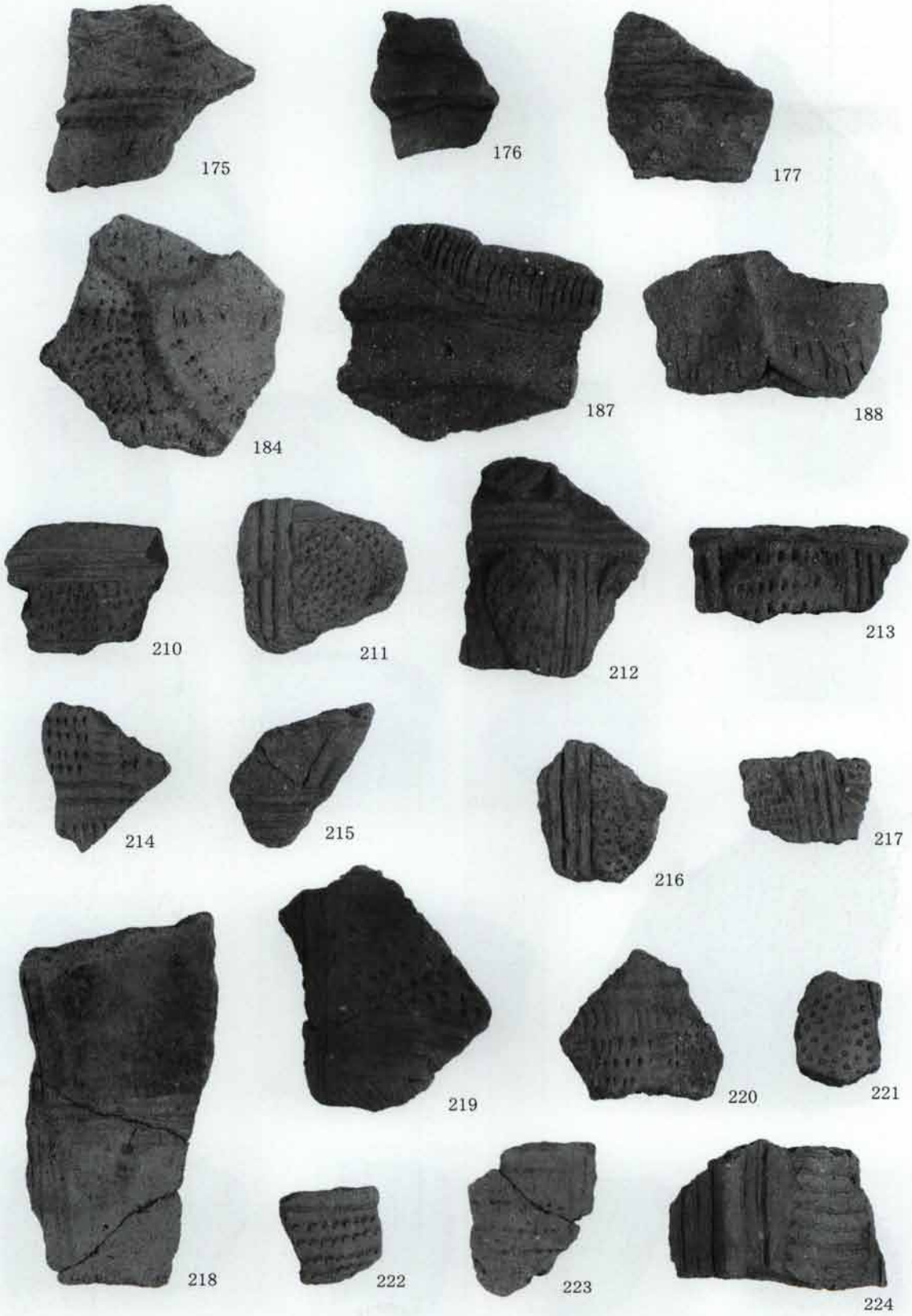
C地点遺跡出土遺物（8）



C地点遺跡出土遺物（9）



C地点遺跡出土遺物（10）



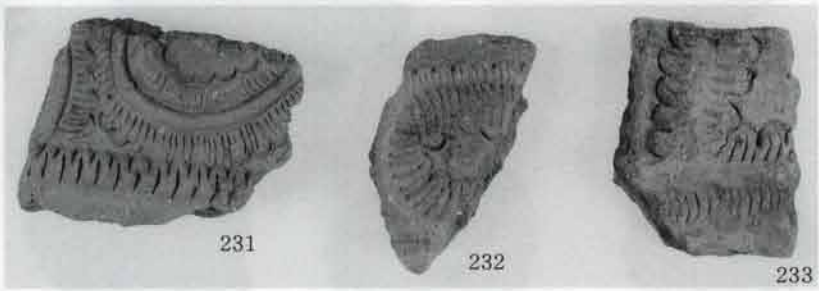
C地点遺跡出土遺物（11）

226

228

229

230


231 232 233

234

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

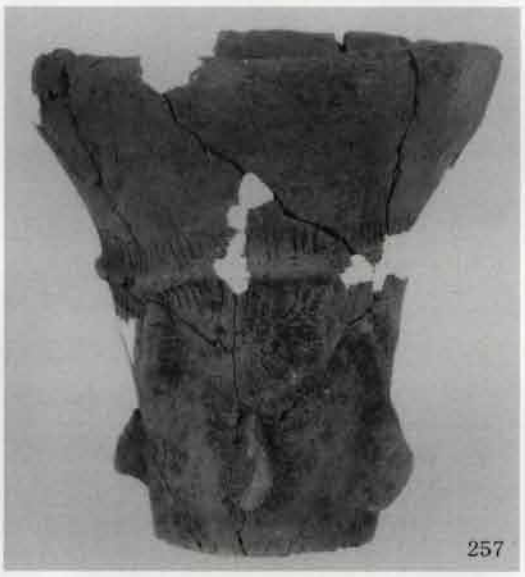
C地点遺跡出土遺物（12）

C地点遺跡出土遺物（13）

235

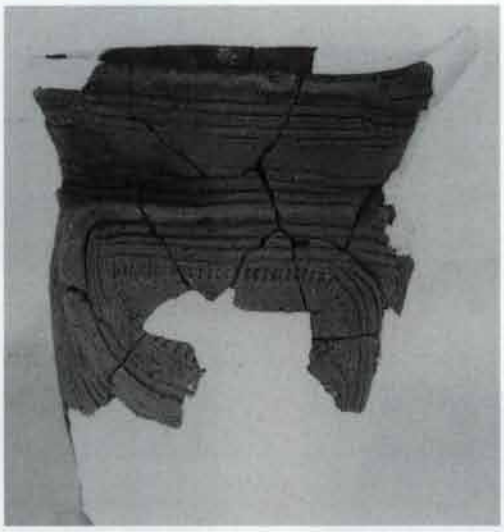
250

255

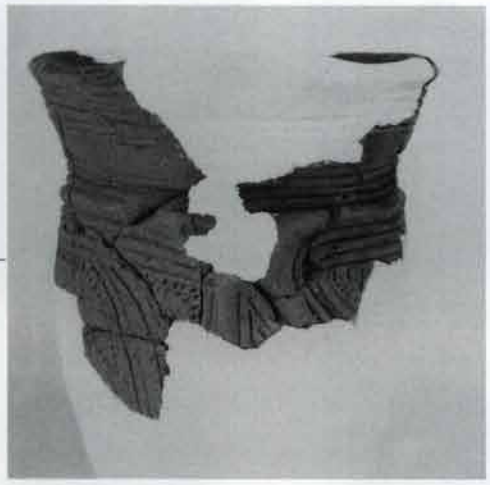

257

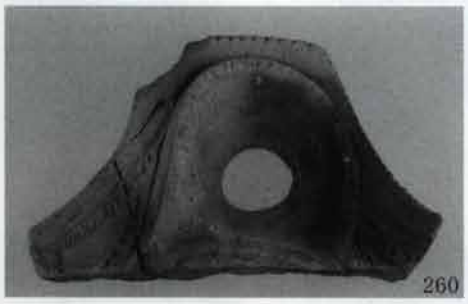
256

C地点遺跡出土遺物（14）



258





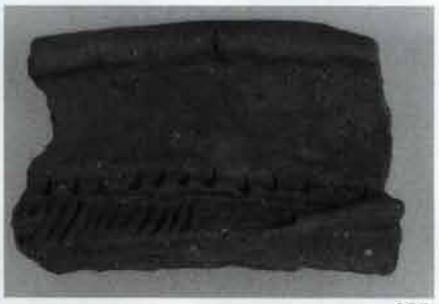
260

259

274 273

269

270



275

271

272

277

C地点遺跡出土遺物（15）

C地点遺跡出土遺物（16）

299

300

301

303

304

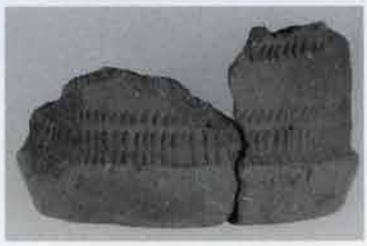
302

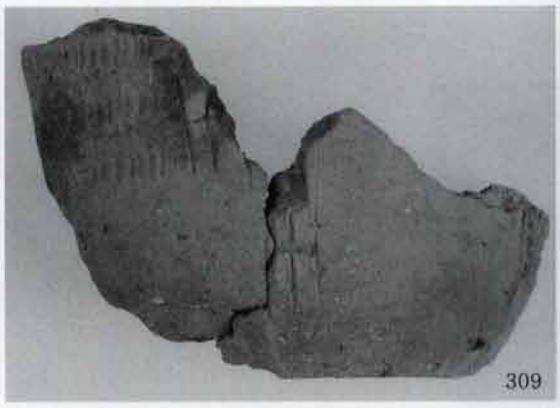
305

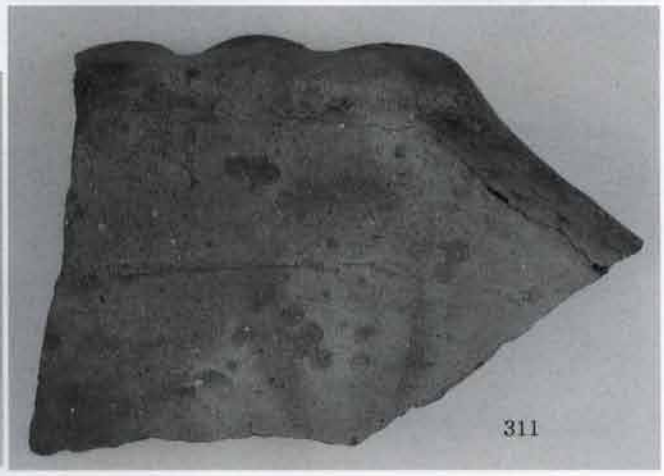
306

307

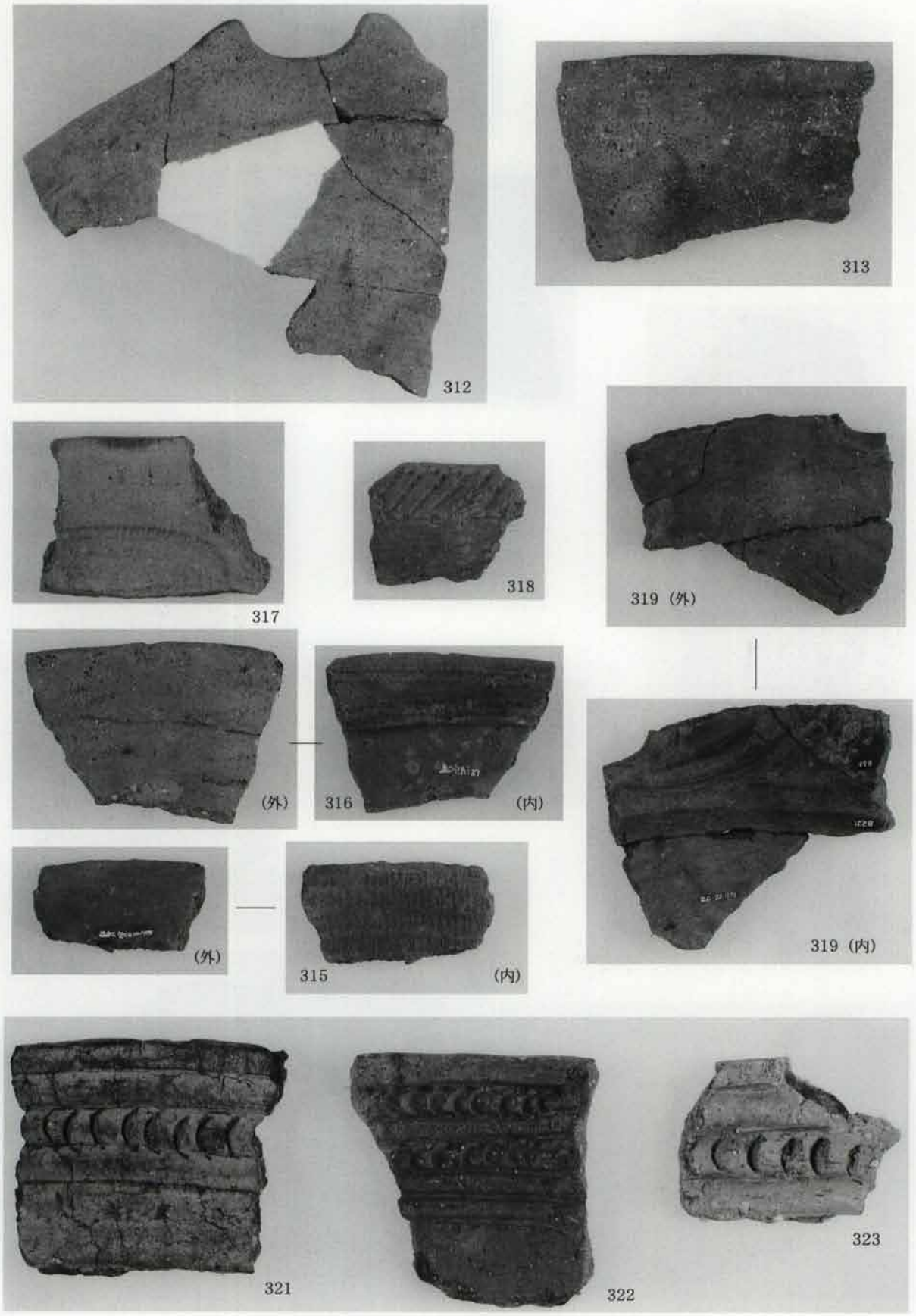
310


308

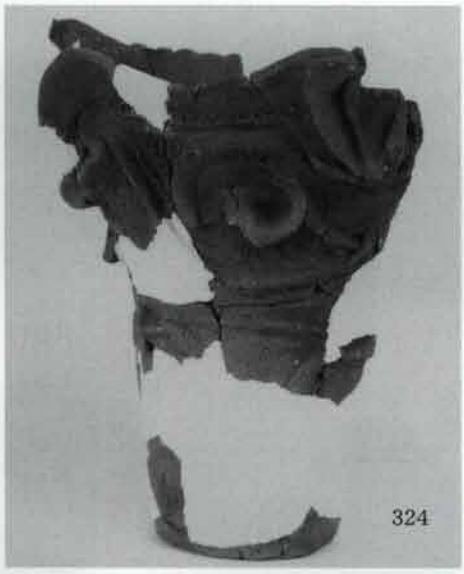

309


311

C地点遺跡出土遺物（17）



C地点遺跡出土遺物（18）



C地点遺跡出土遺物（19）

328

329

330

331

335

336

337

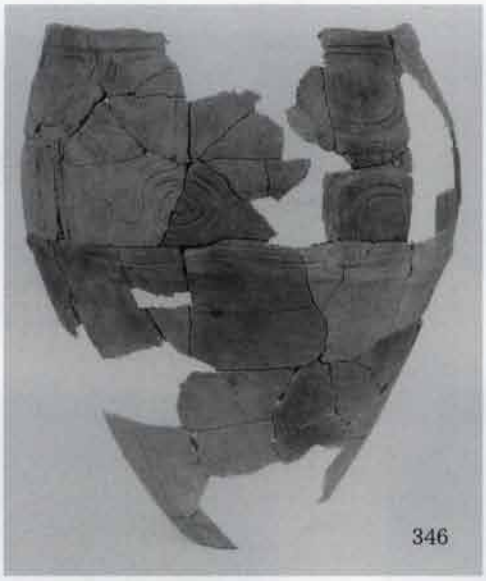
338

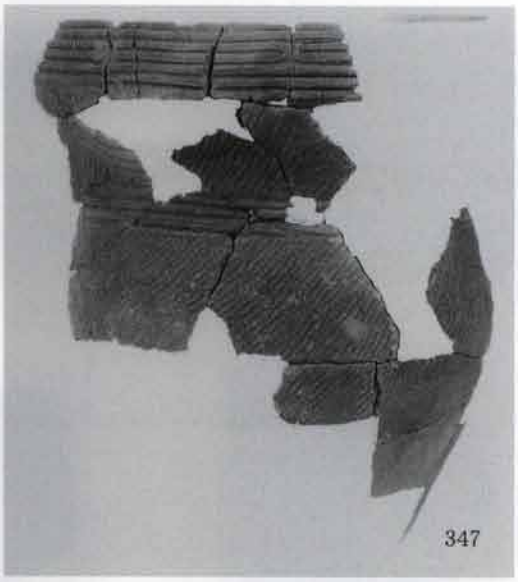
339

343

346

C地点遺跡出土遺物（20）


346


347

350

351 352

353

354

355

357

356

359

360

361

358

362

363

364

C地点遺跡出土遺物（21）

365

367

369

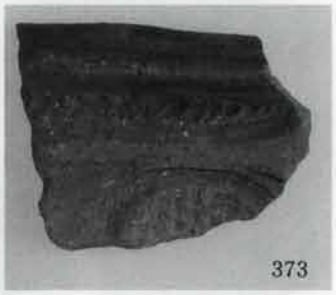
366

368

370

371

372


373

374

376

377

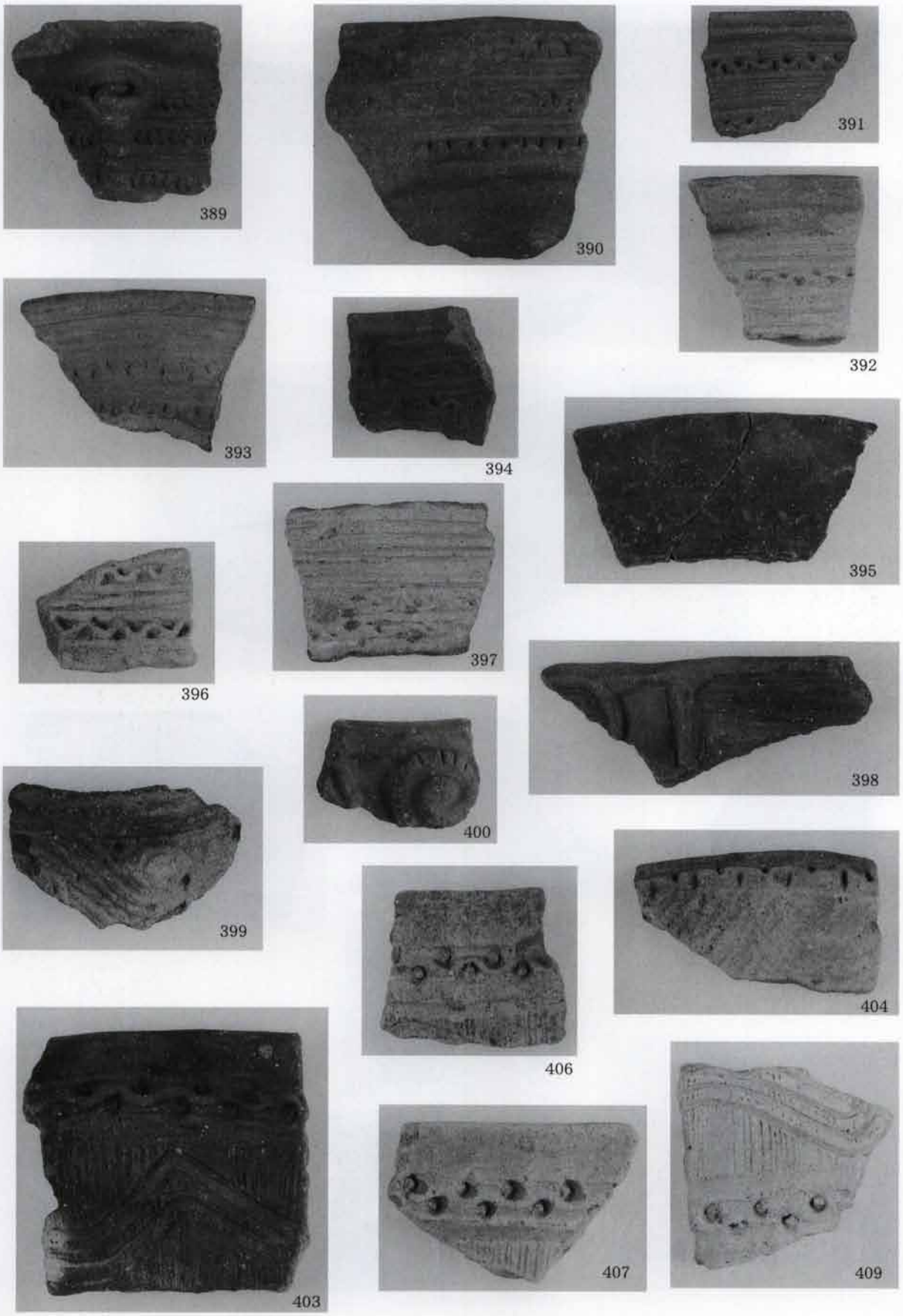
378

375

380

384

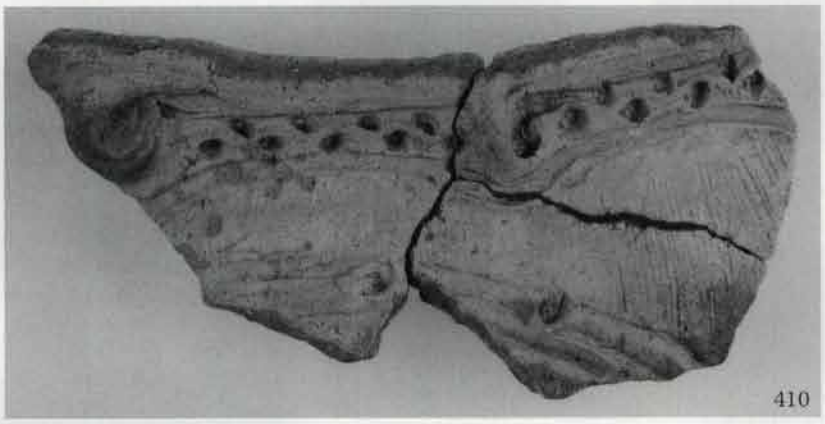
C地点遺跡出土遺物（22）



C地点遺跡出土遺物（23）

401

402

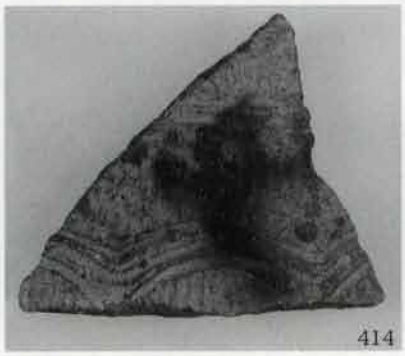

410

411

412

413

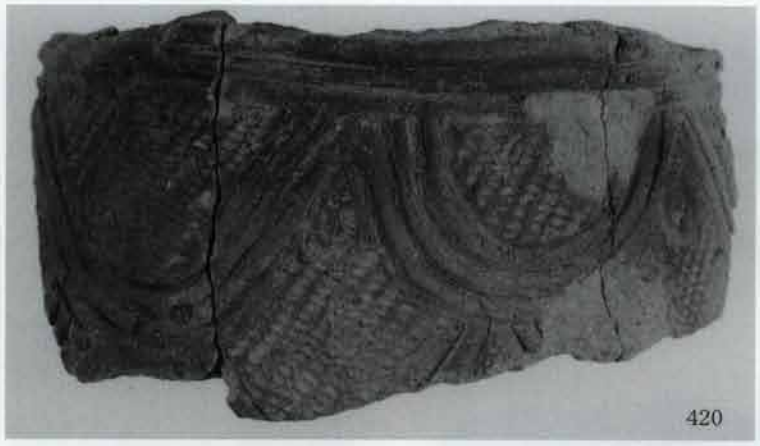
415


414

418

417

C地点遺跡出土遺物（24）

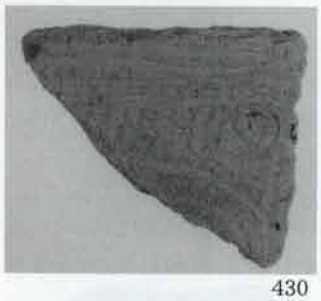

420

422

421

424

425


430

427

429

435

432

433

438

439

440

C地点遺跡出土遺物（25）

441

446

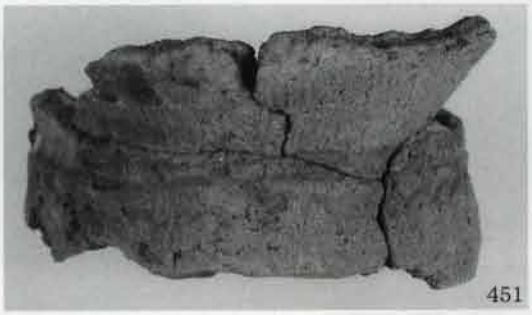
447

443

448

458

444


451

452

453

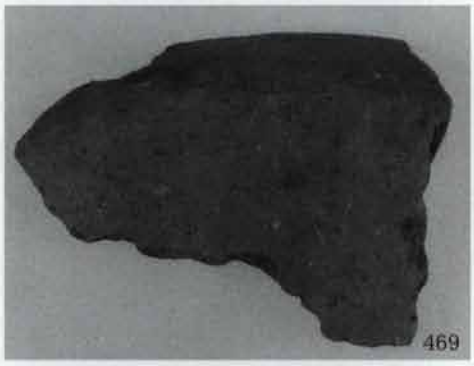
461

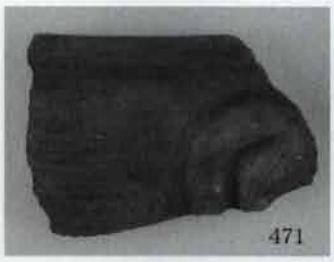
464

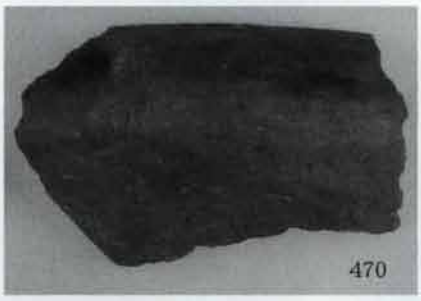
465

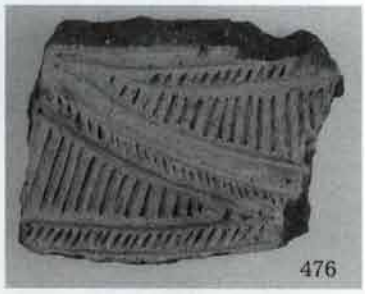
466

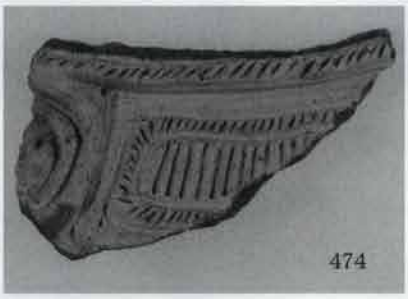
C地点遺跡出土遺物（26）

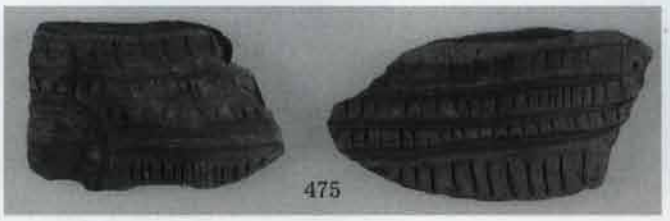


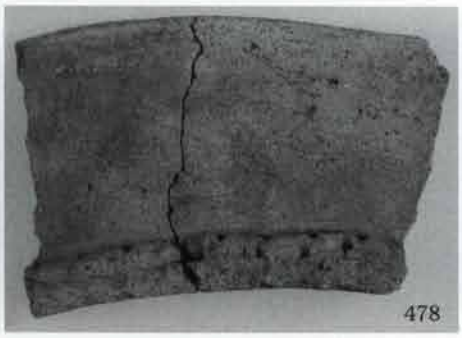










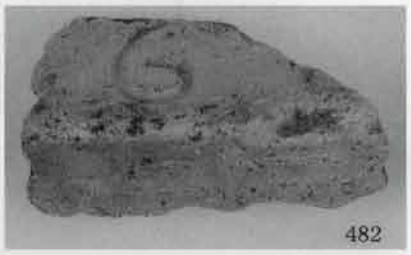


C地点遺跡出土遺物（27）

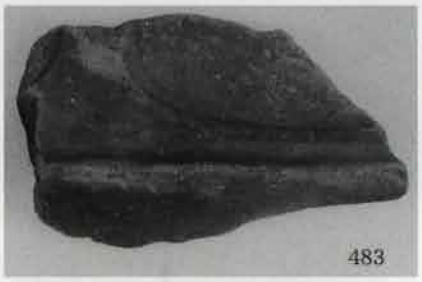
479

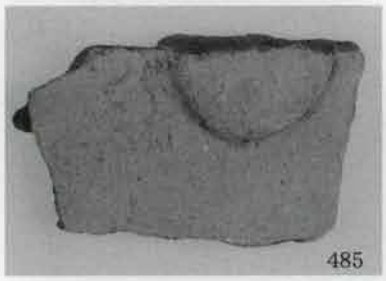
480

481


482

484


483

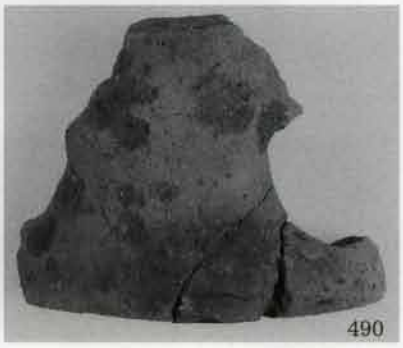

485

486

487

488

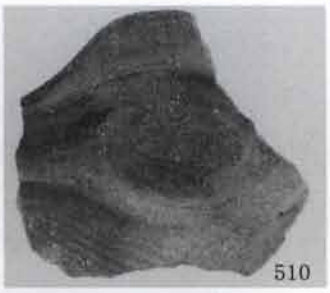
489


490

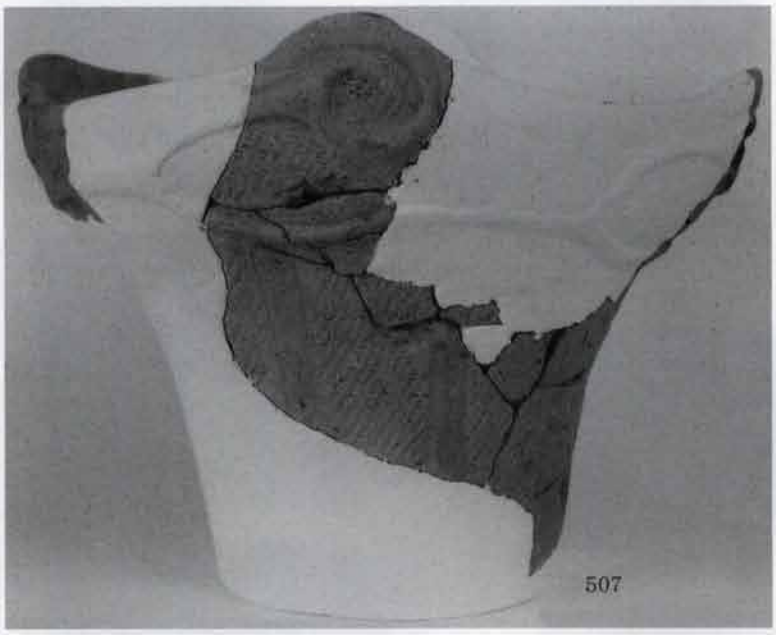
C地点遺跡出土遺物（28）

492

509


510

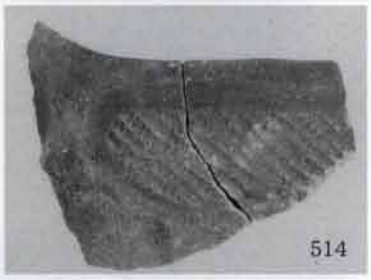
512


507

511

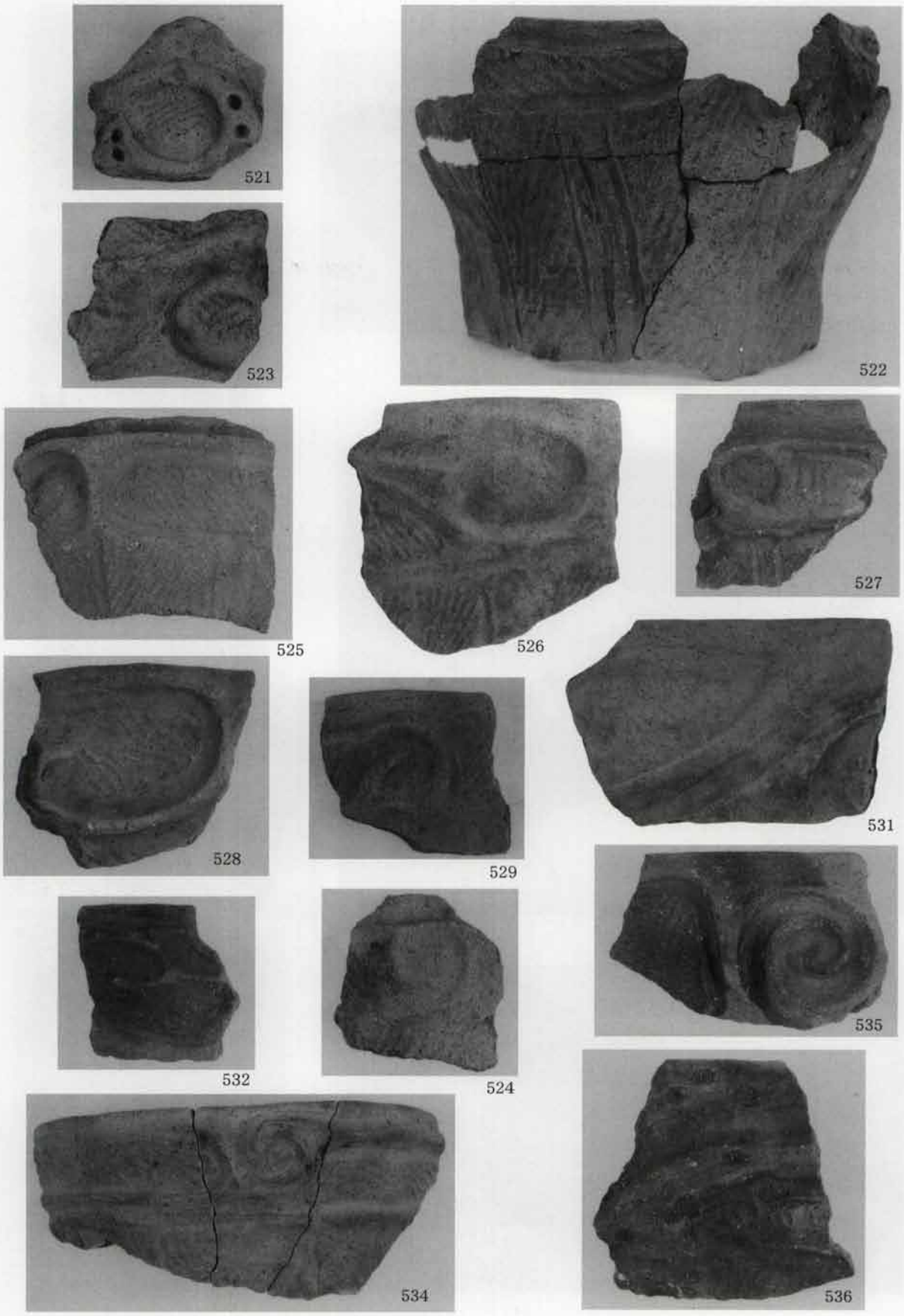
513

508


514

518

C地点遺跡出土遺物（29）

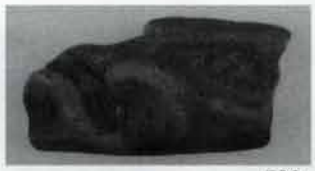


C地点遺跡出土遺物（30）

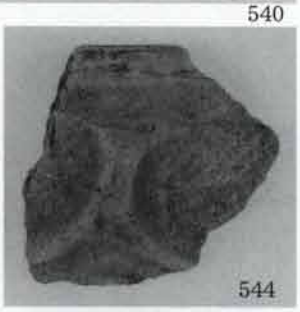
537

539

540


538

542

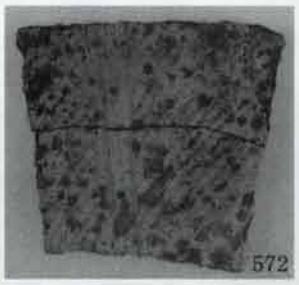

544

545

550

562

563


572

581

584

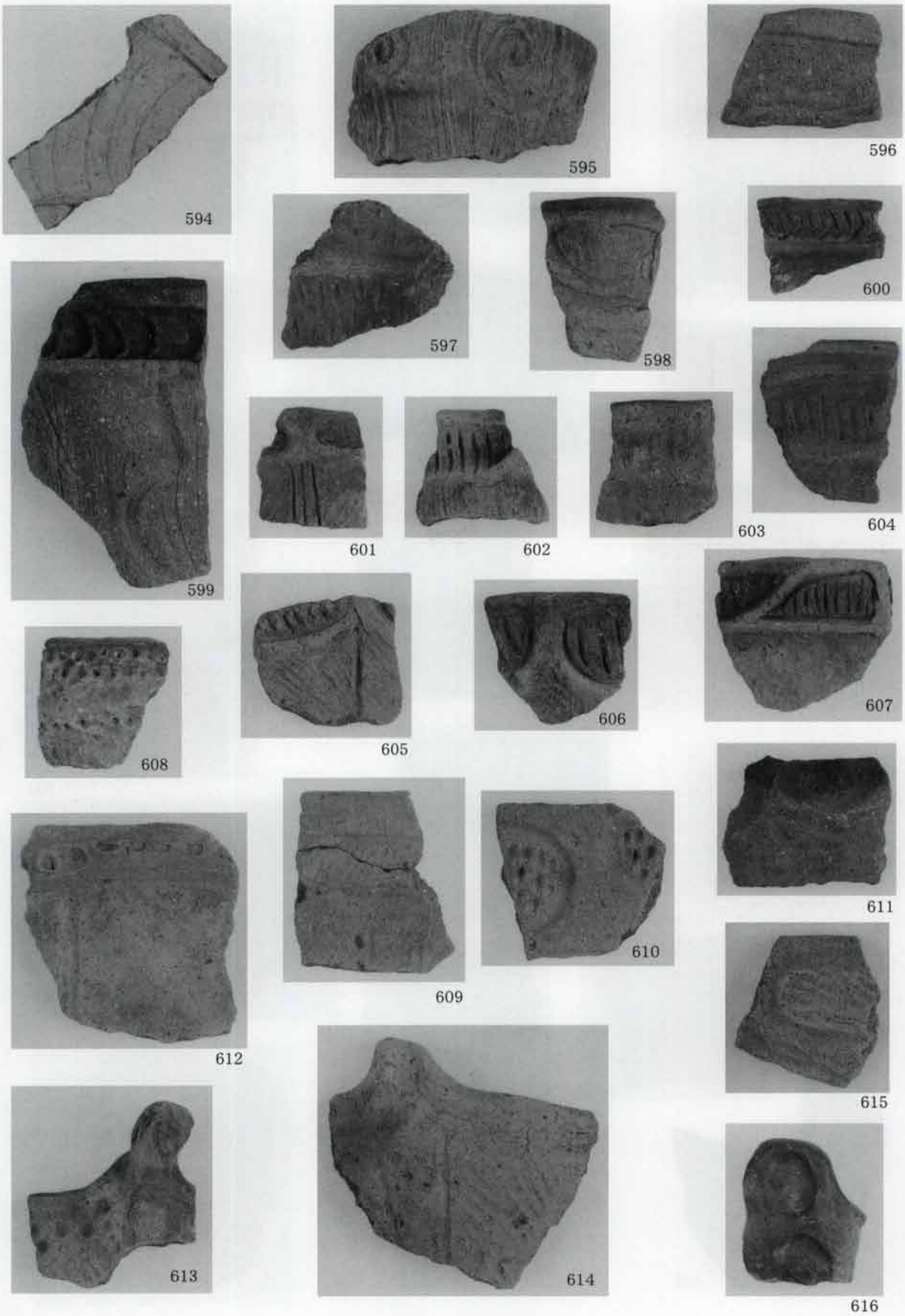
591

593

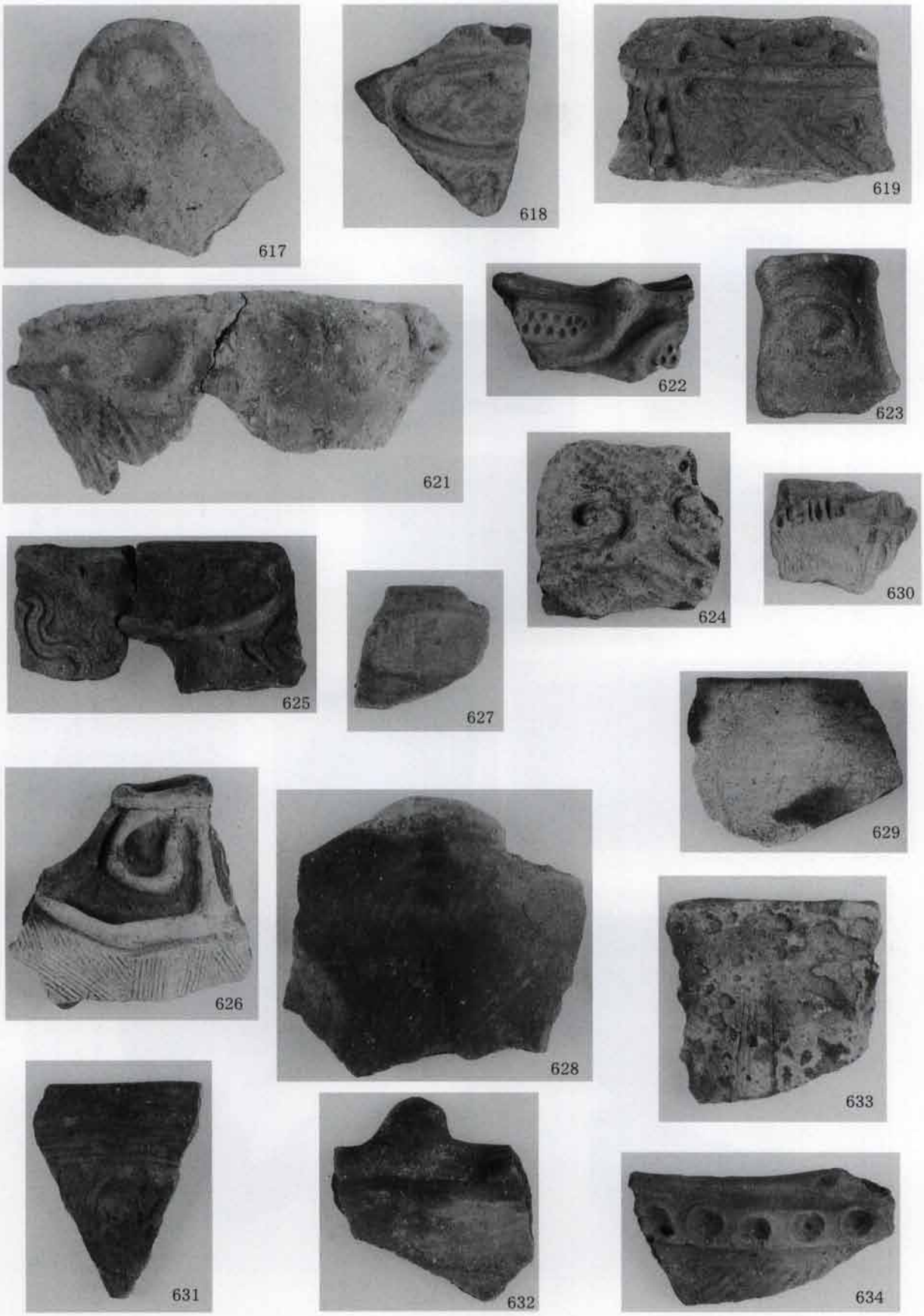
585

592

C地点遺跡出土遺物（31）



C地点遺跡出土遺物（32）



C地点遺跡出土遺物（33）

635

637

638

639

636

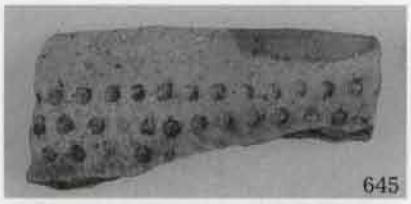
640

641

642

643

644


645

646

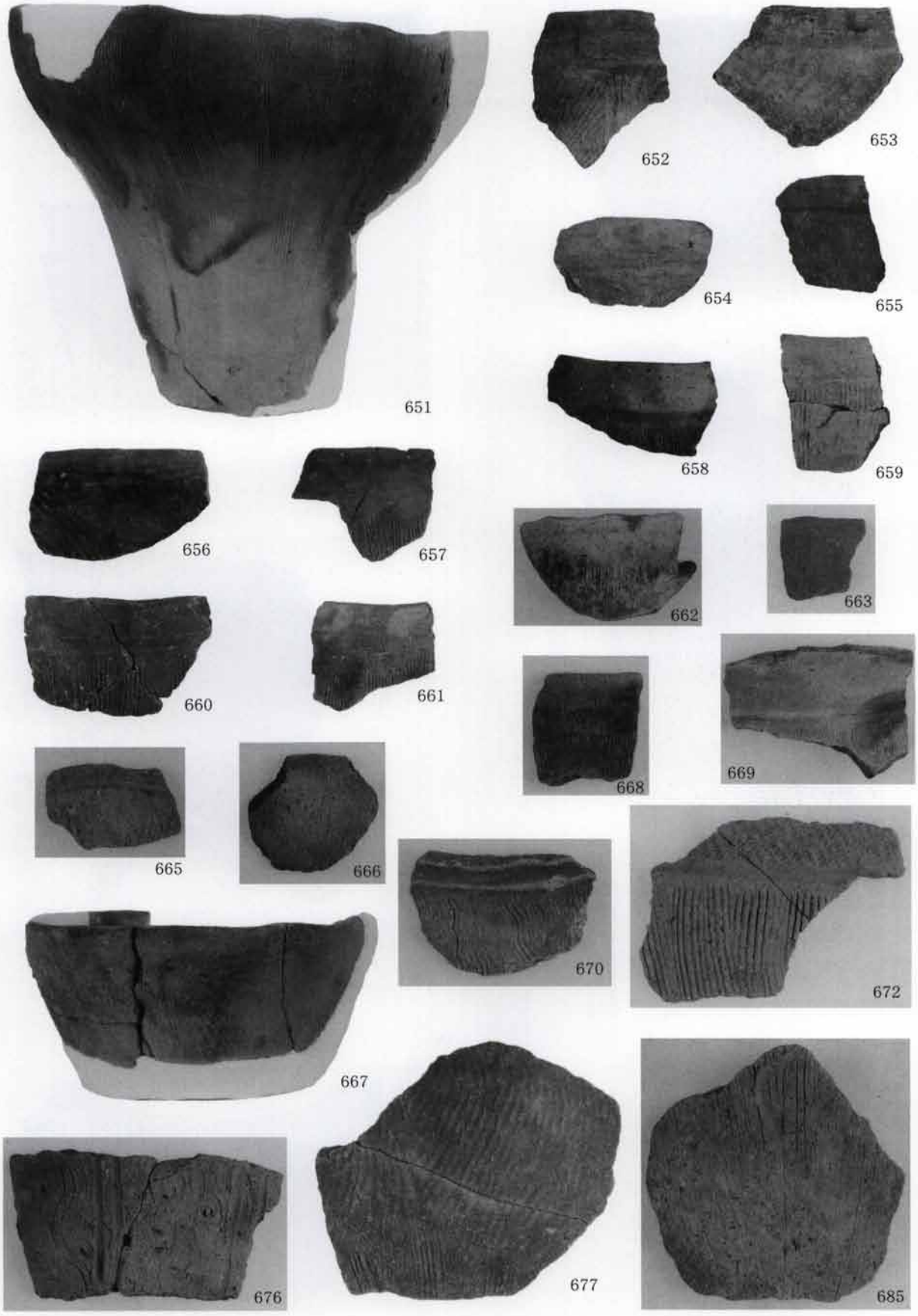
647

648

649

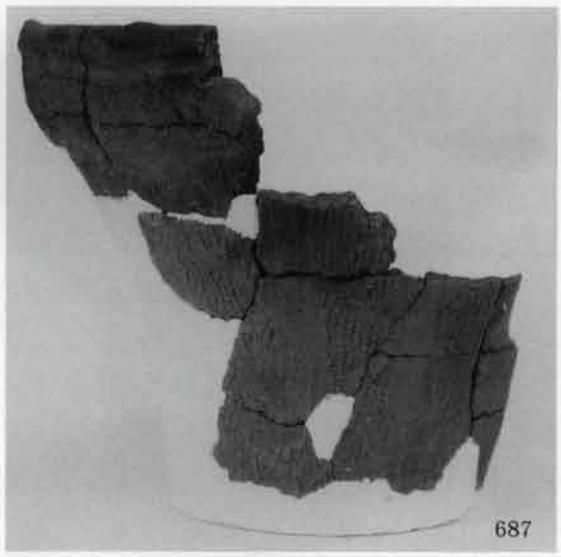
650

C地点遺跡出土遺物（34）



C地点遺跡出土遺物（35）

681

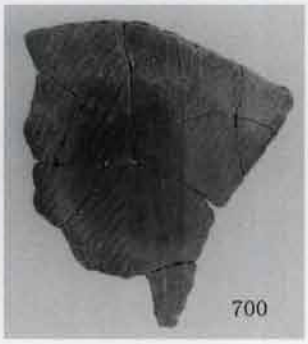

687

688

689

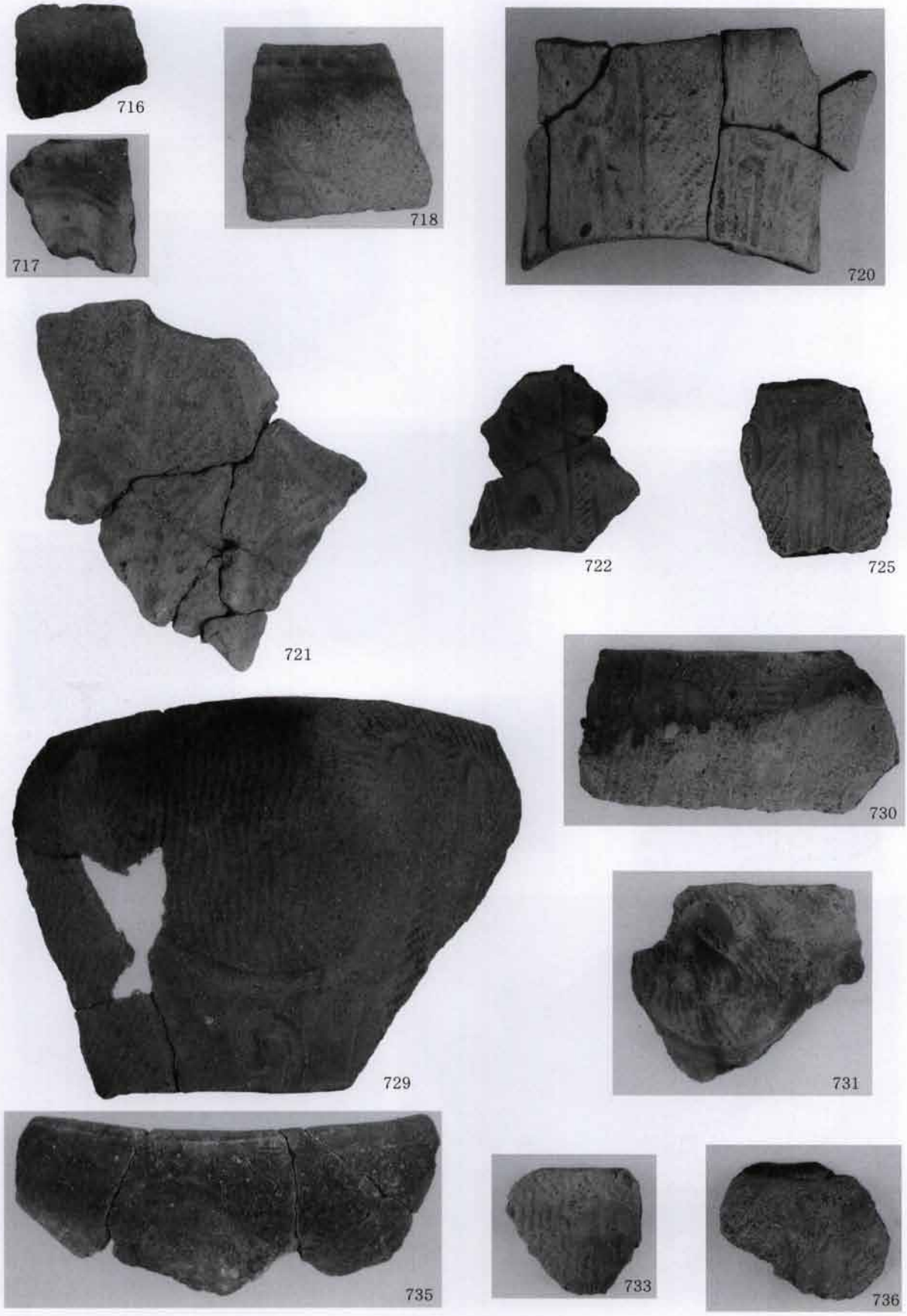
690

711

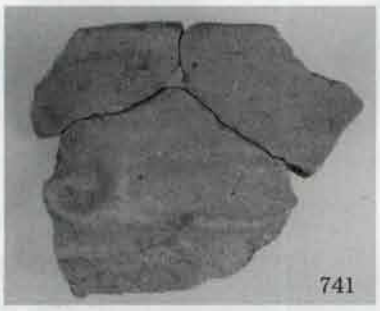

700

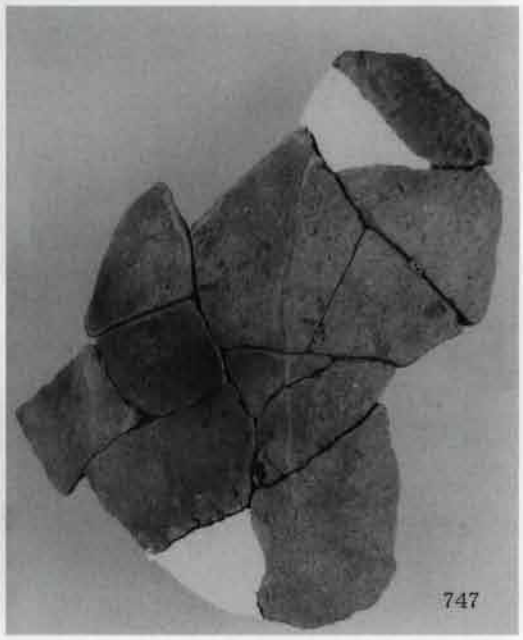
715

C地点遺跡出土遺物（36）

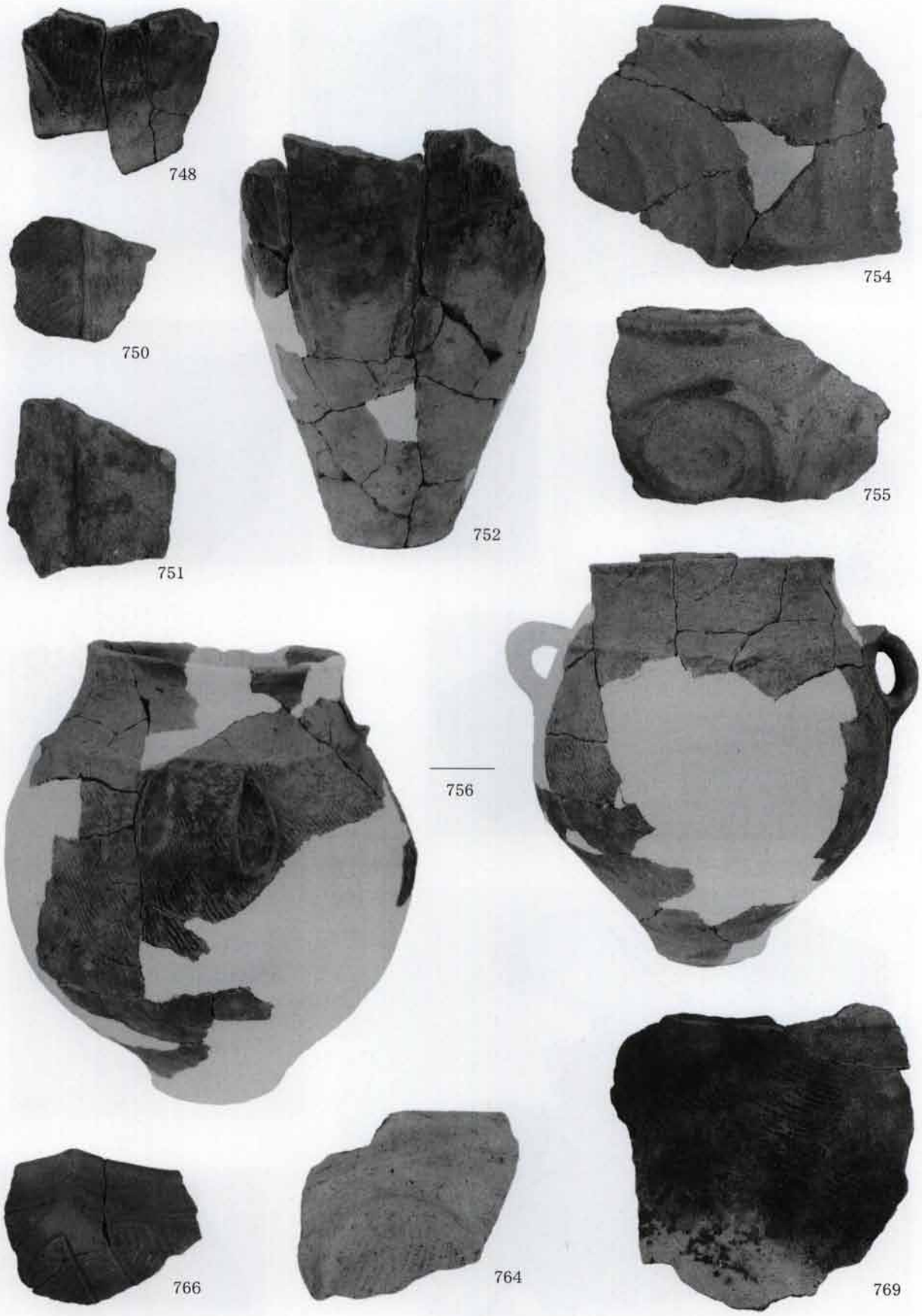


C地点遺跡出土遺物（37）

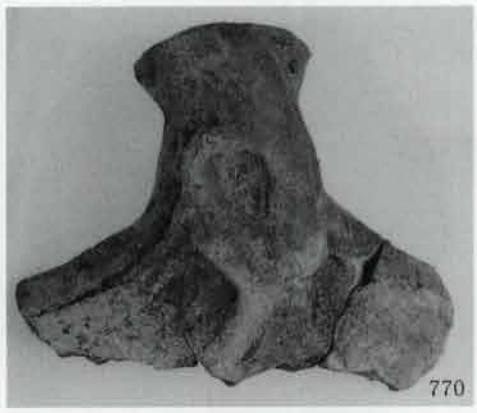




C地点遺跡出土遺物（38）

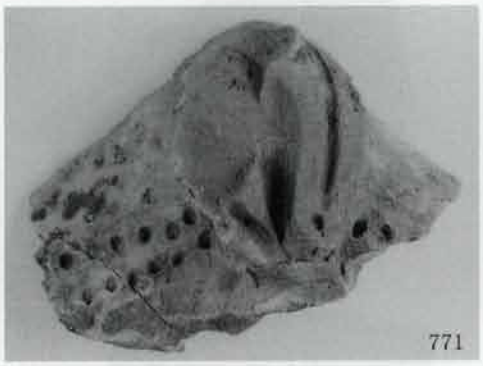


C地点遺跡出土遺物（39）

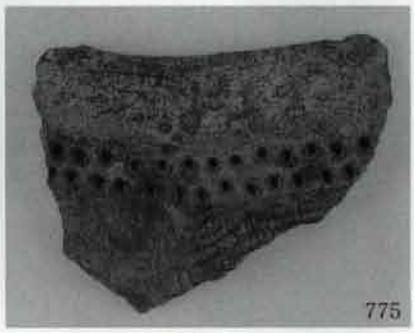

770

772

773


771

774

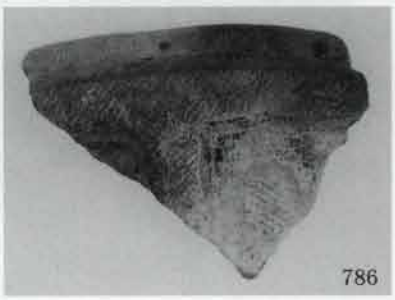

775

776

777

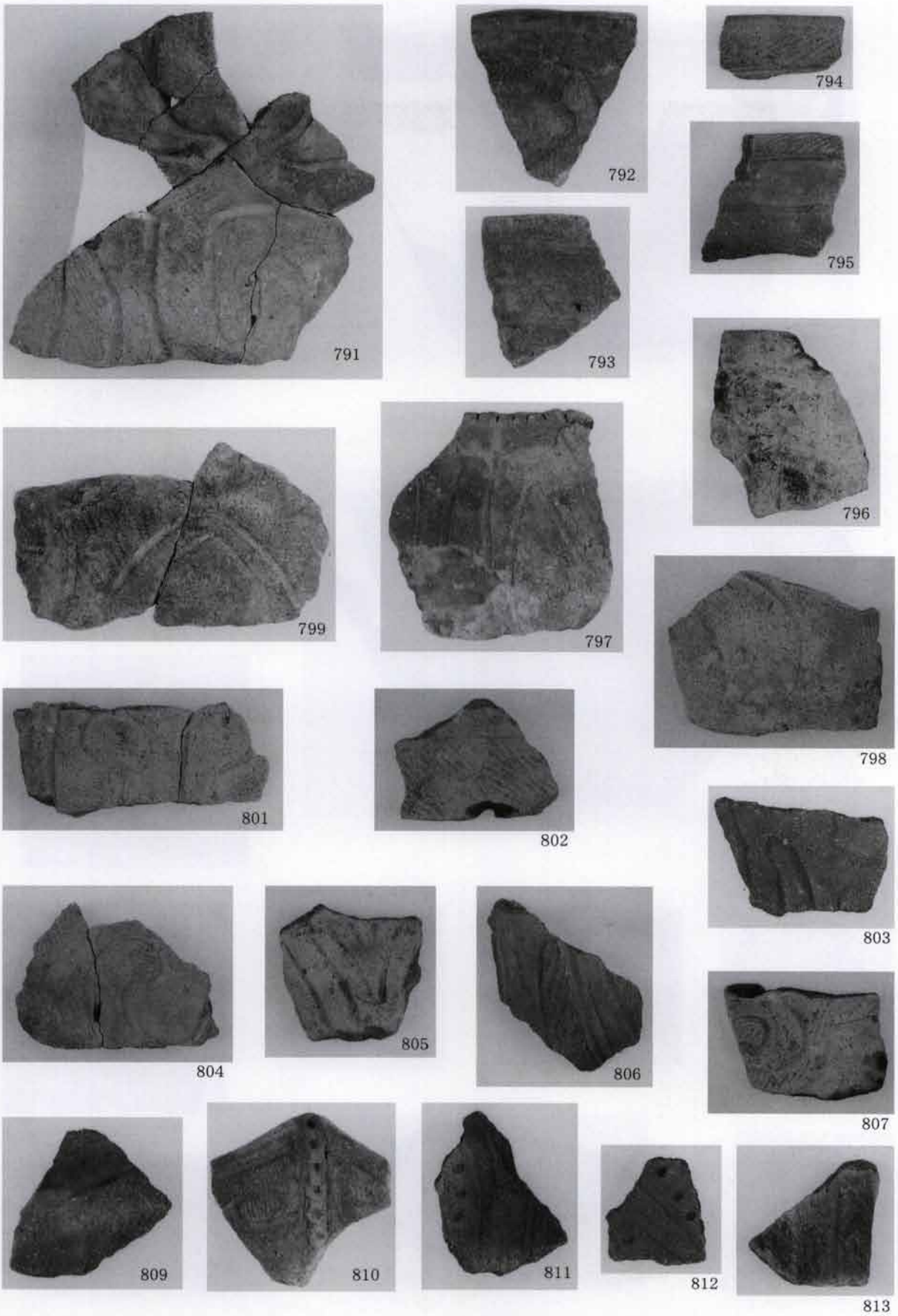
780

788


786

790

C地点遺跡出土遺物（40）

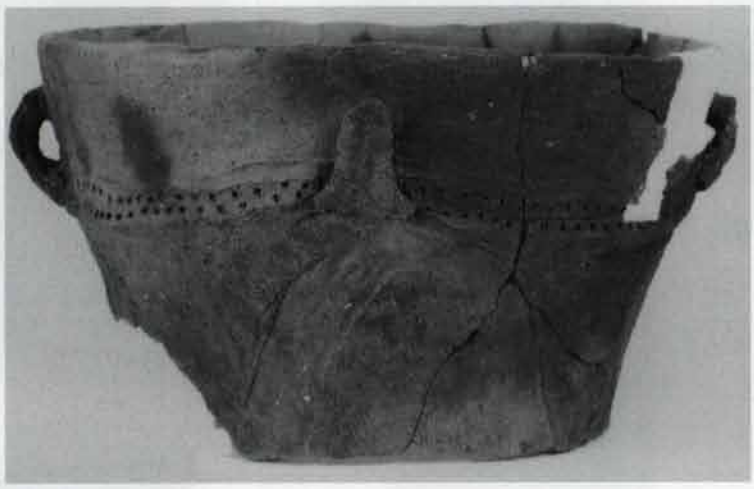


C地点遺跡出土遺物（41）

814

815

816



817

818

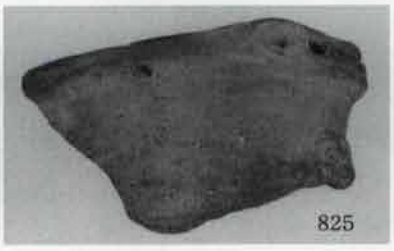
819

820

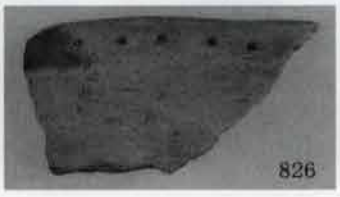
821

822

823

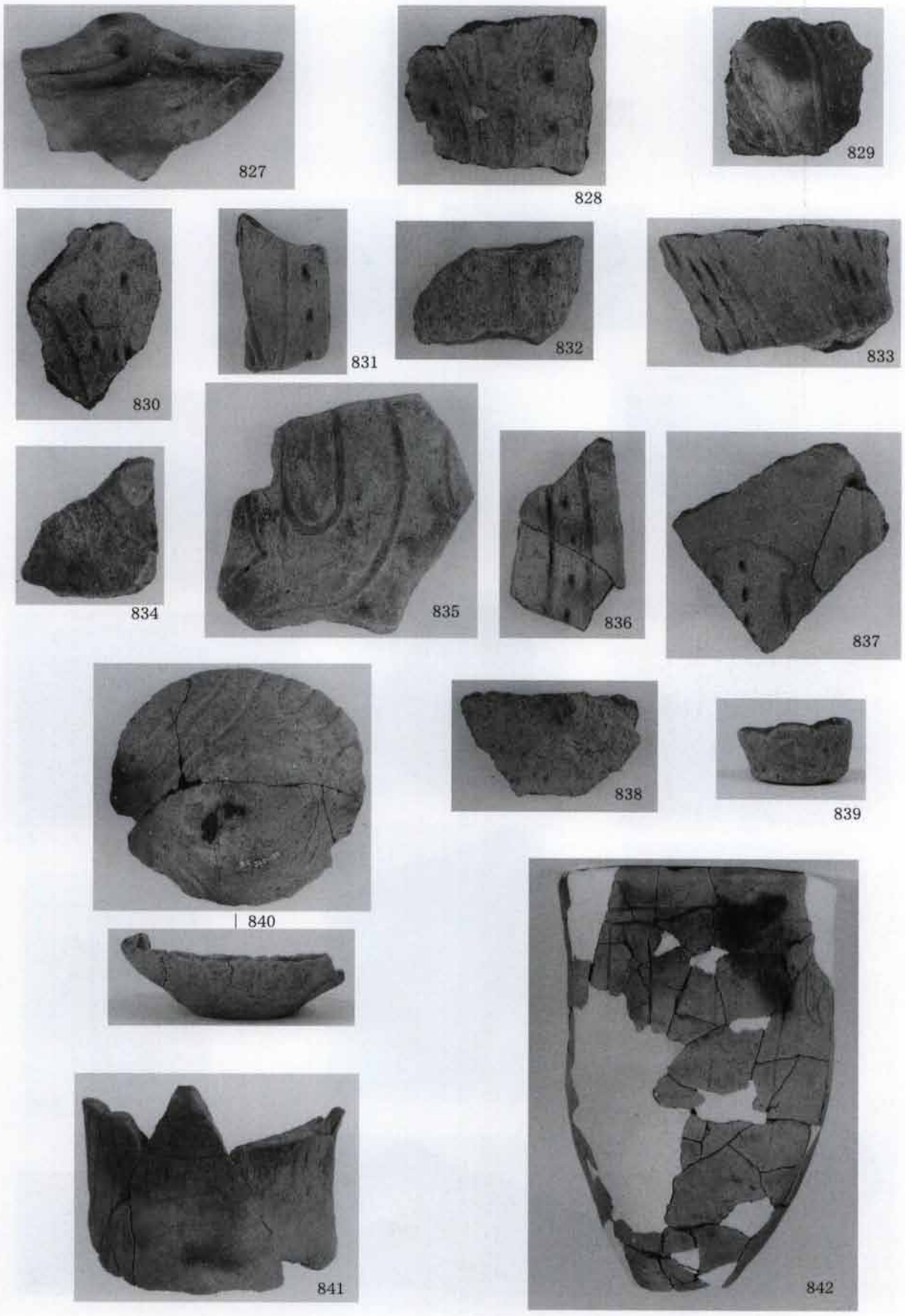


825

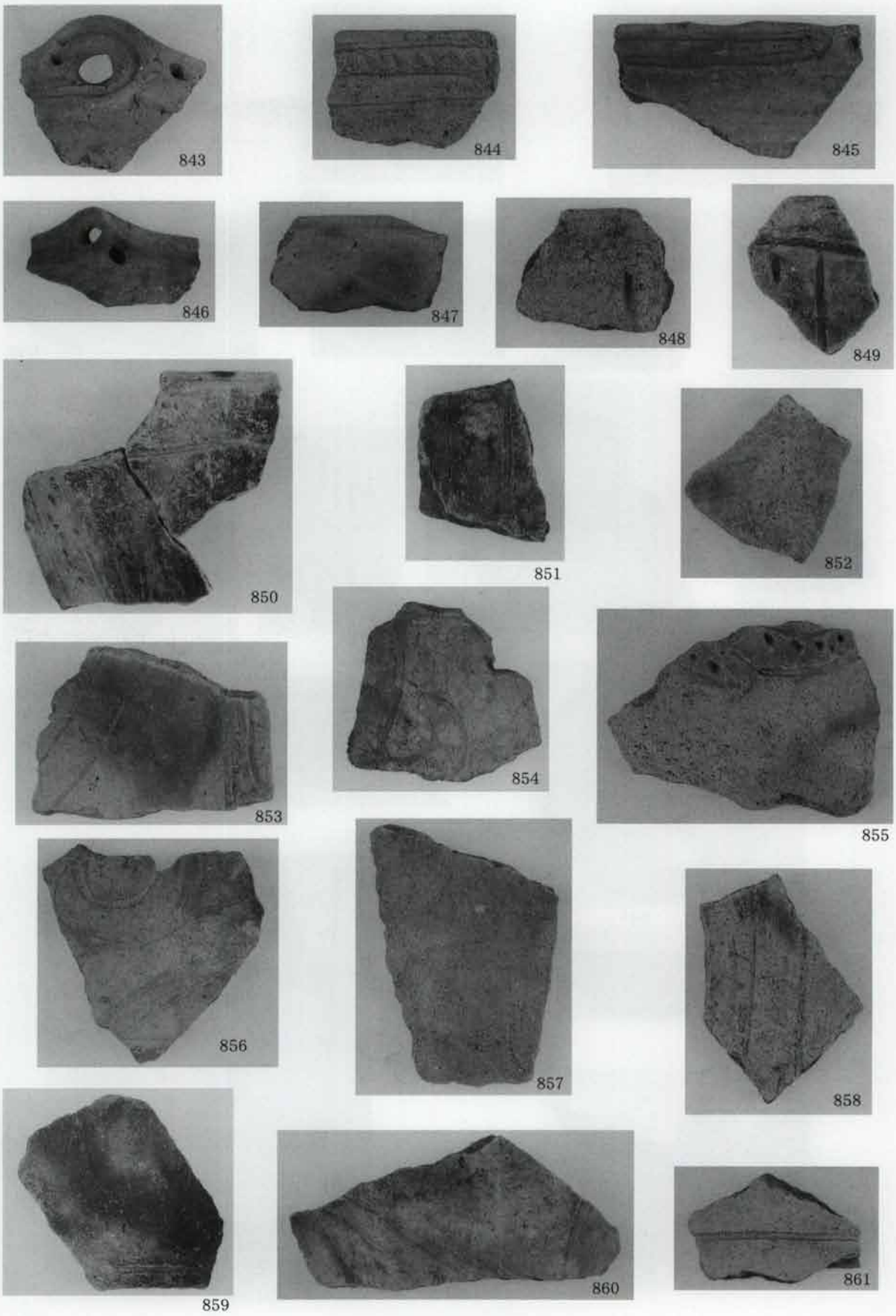


826

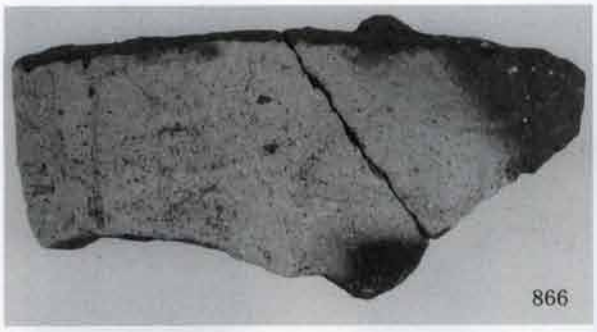
C地点遺跡出土遺物（42）

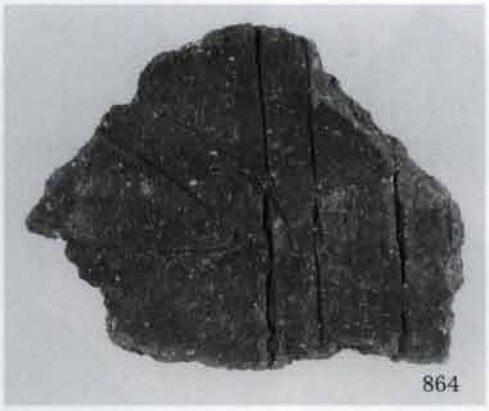


C地点遺跡出土遺物（43）



C地点遺跡出土遺物（44）


866


864

870

867

874

871

872

873

876

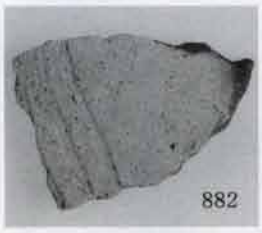
877

878

879

880

881

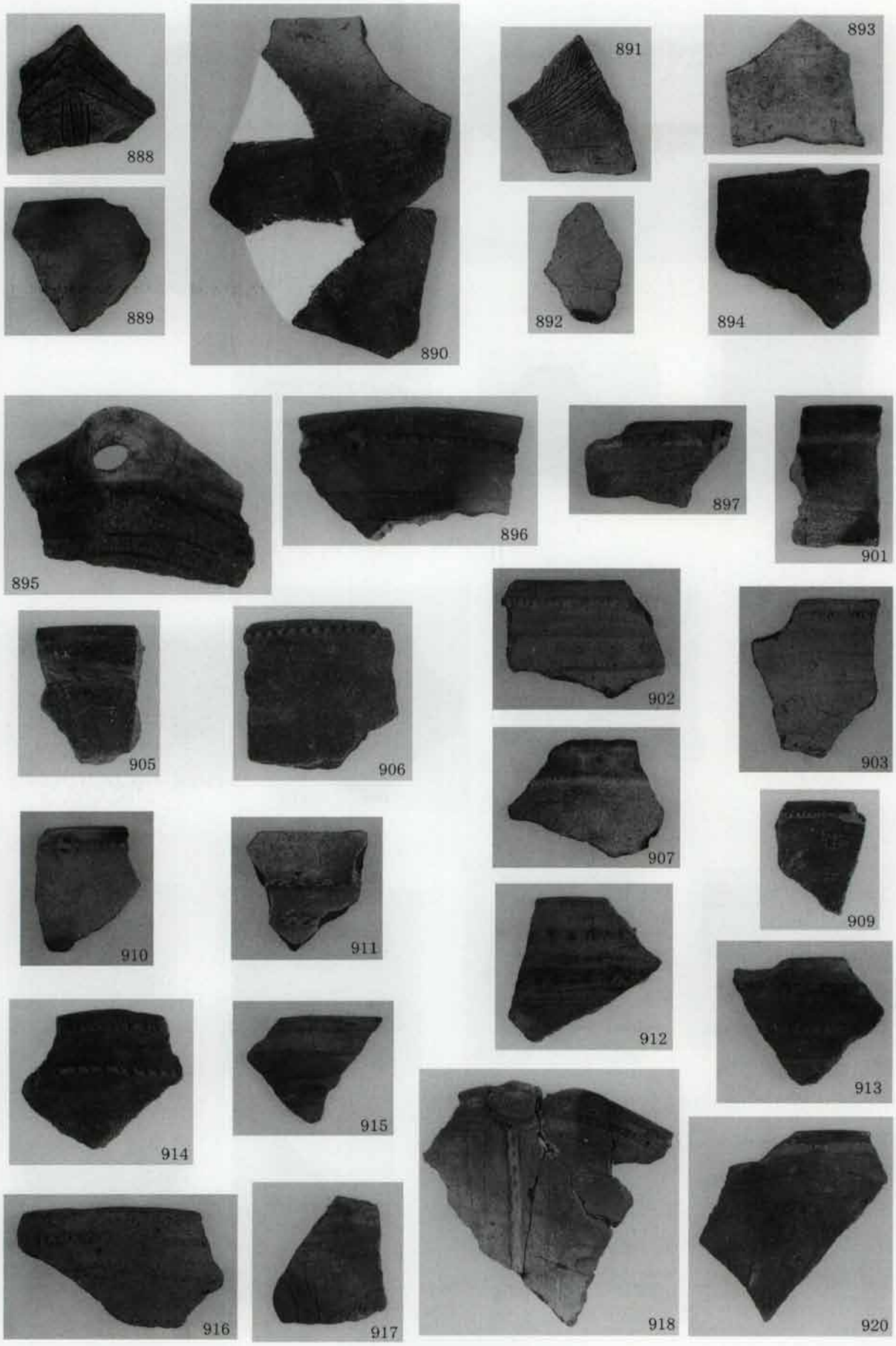

882

884

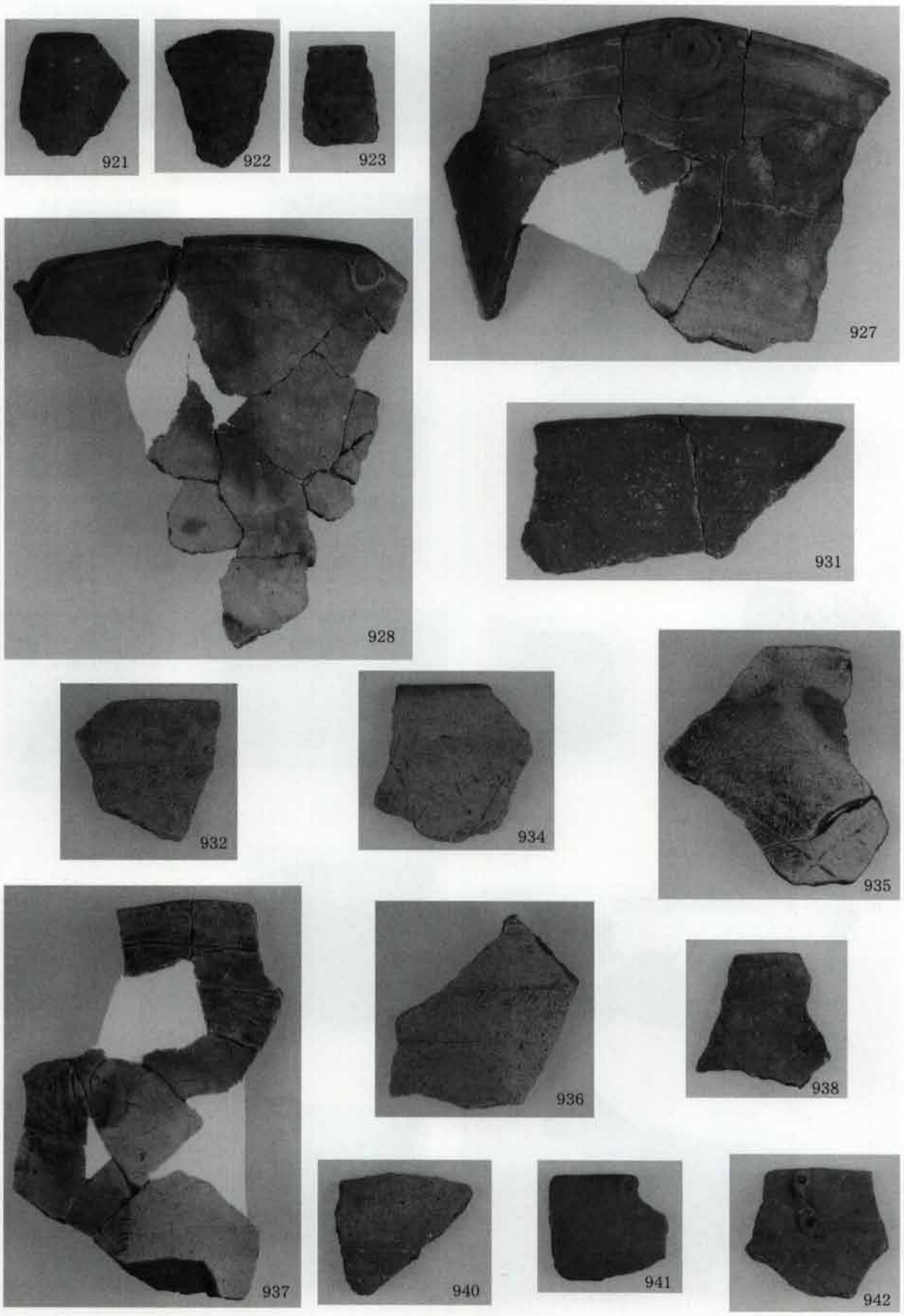
885

886

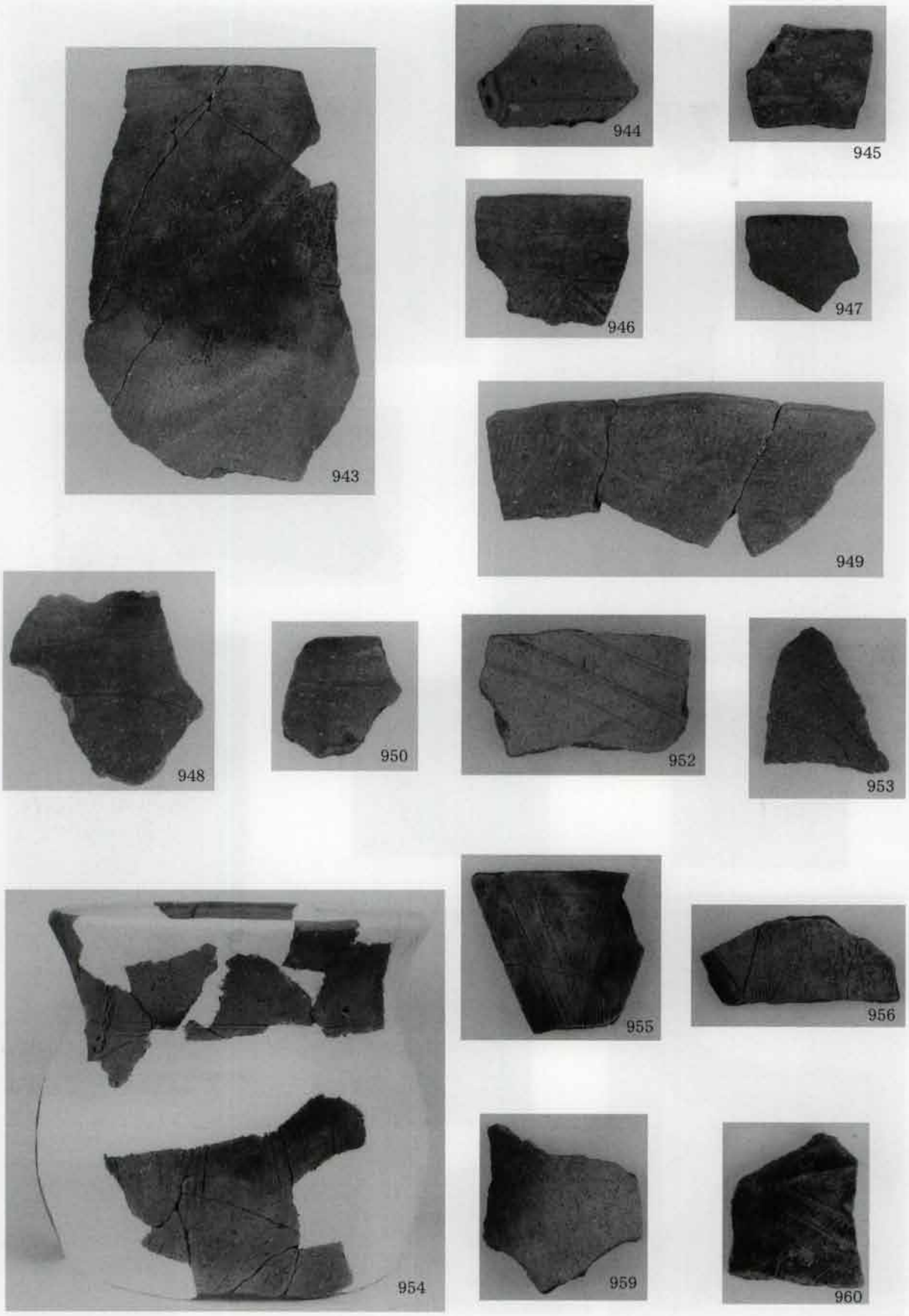
C地点遺跡出土遺物（45）



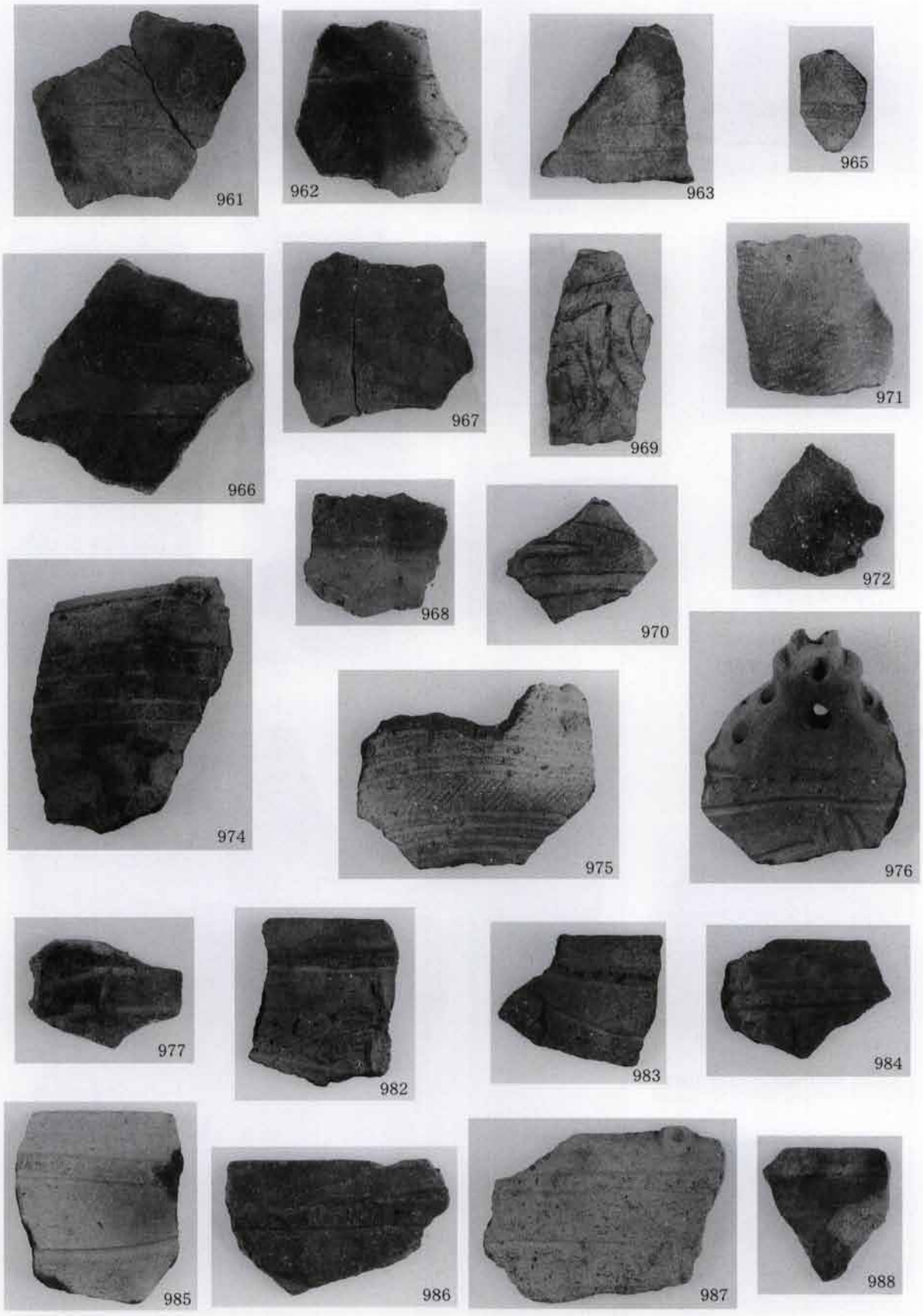
C地点遺跡出土遺物（46）



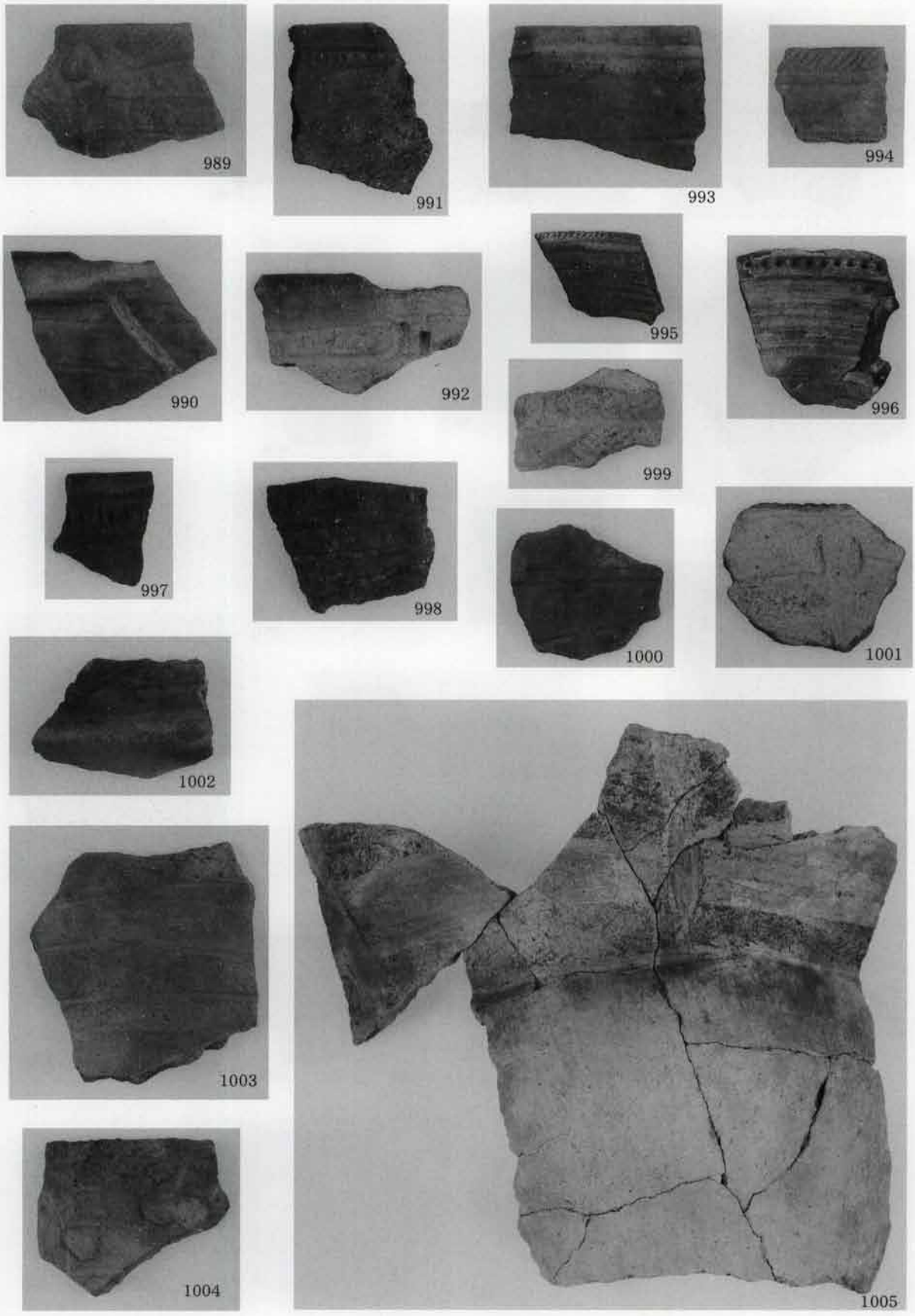
C地点遺跡出土遺物（47）



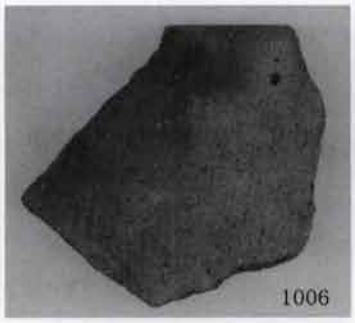
C地点遺跡出土遺物（48）



C地点遺跡出土遺物（49）



C地点遺跡出土遺物（50）

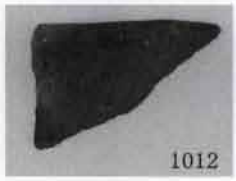

1006

1007

1008

1009

1011


1012

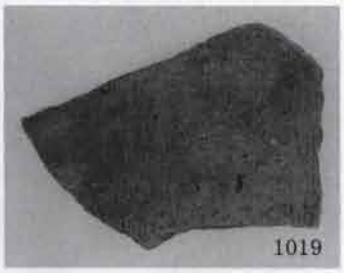
1014

1013

1016

1018

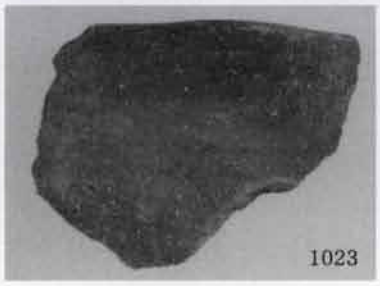
1017

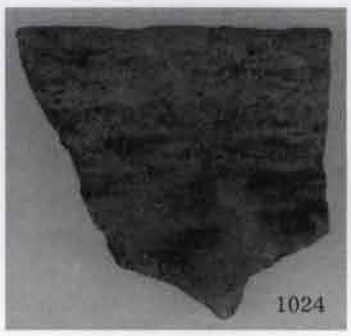

1019

1021

1020

1022


1023


1024

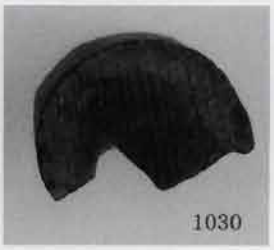
1025

C地点遺跡出土遺物（51）

1027

1028

1029


1030

1031

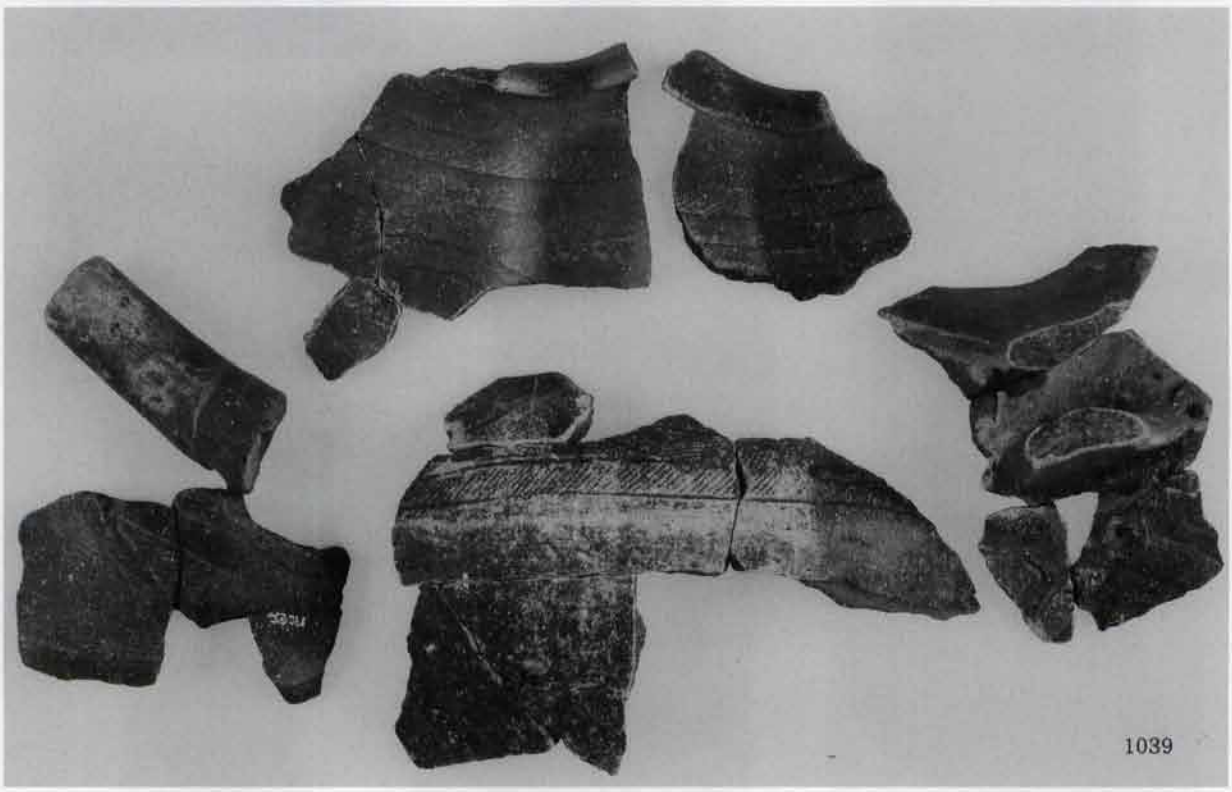
1033

1035

1032

1036

1038


1039

C地点遺跡出土遺物（52）

1040

1044 1041 1042

1043

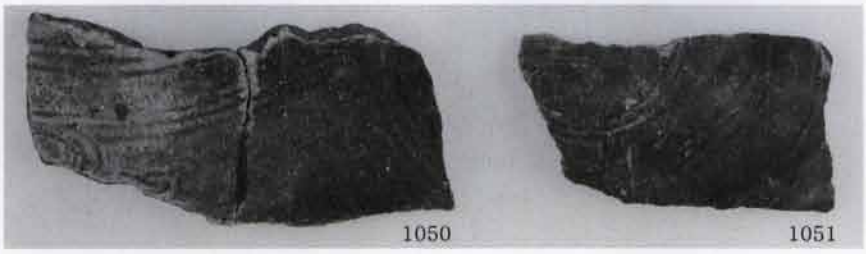
1045

1046

1048

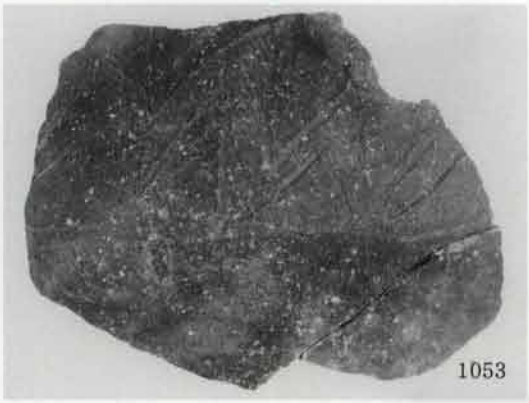
1049

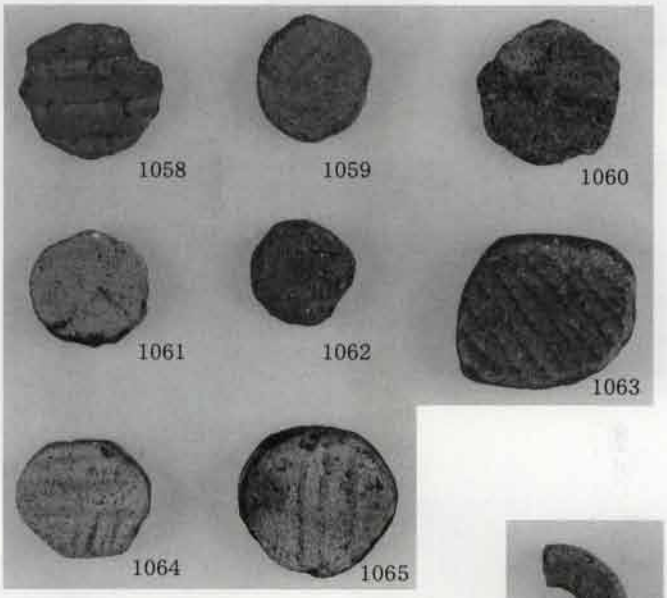
1047

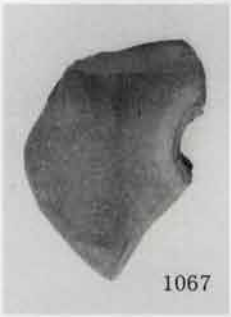

1050 1051

1052

C地点遺跡出土遺物（53）







C地点遺跡出土遺物（54）

1071

1072

1073

1074

1075

1076

1077

1078

1079

1080

1081

1082

C地点遺跡出土遺物（55）

1083

1084

1085

1086

1087

1088

1089

1090

1091

1092

1093

1094

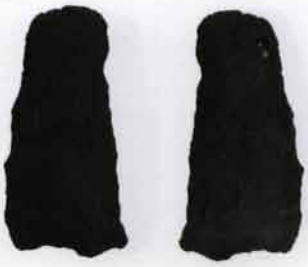
C地点遺跡出土遺物（56）

1095

1096

1097

1098


1099

1100

1101

1102

1103

1104

1105

1106

1107

1108

1109

1110

1111

1112

1113

1114

1115

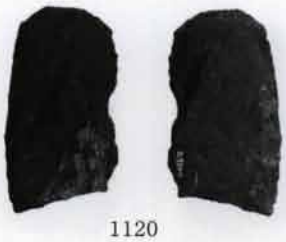
1116

1117

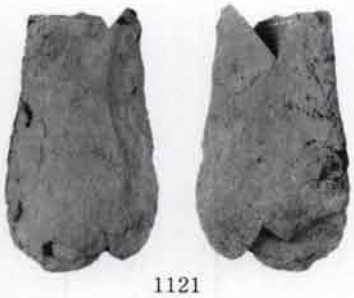
1118

C地点遺跡出土遺物（58）

1119



1120



1121

1122

1123

1124

1125

1126

1127

1128

1129

C地点遺跡出土遺物（59）

1130

1131

1132

1133

1134

1135

1136

1137

1138

1139

1140

1141

C地点遺跡出土遺物（60）

1142

1143

1144

1145

1146

1147

1148

1149

1150

1151

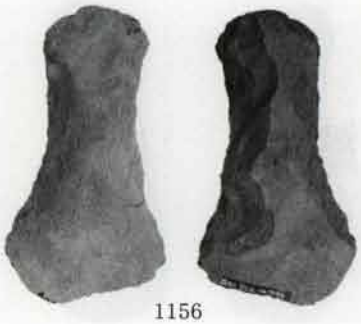
1152

1153

C地点遺跡出土遺物（61）

1154

1155


1156

1157

1158

1159

1160

1161

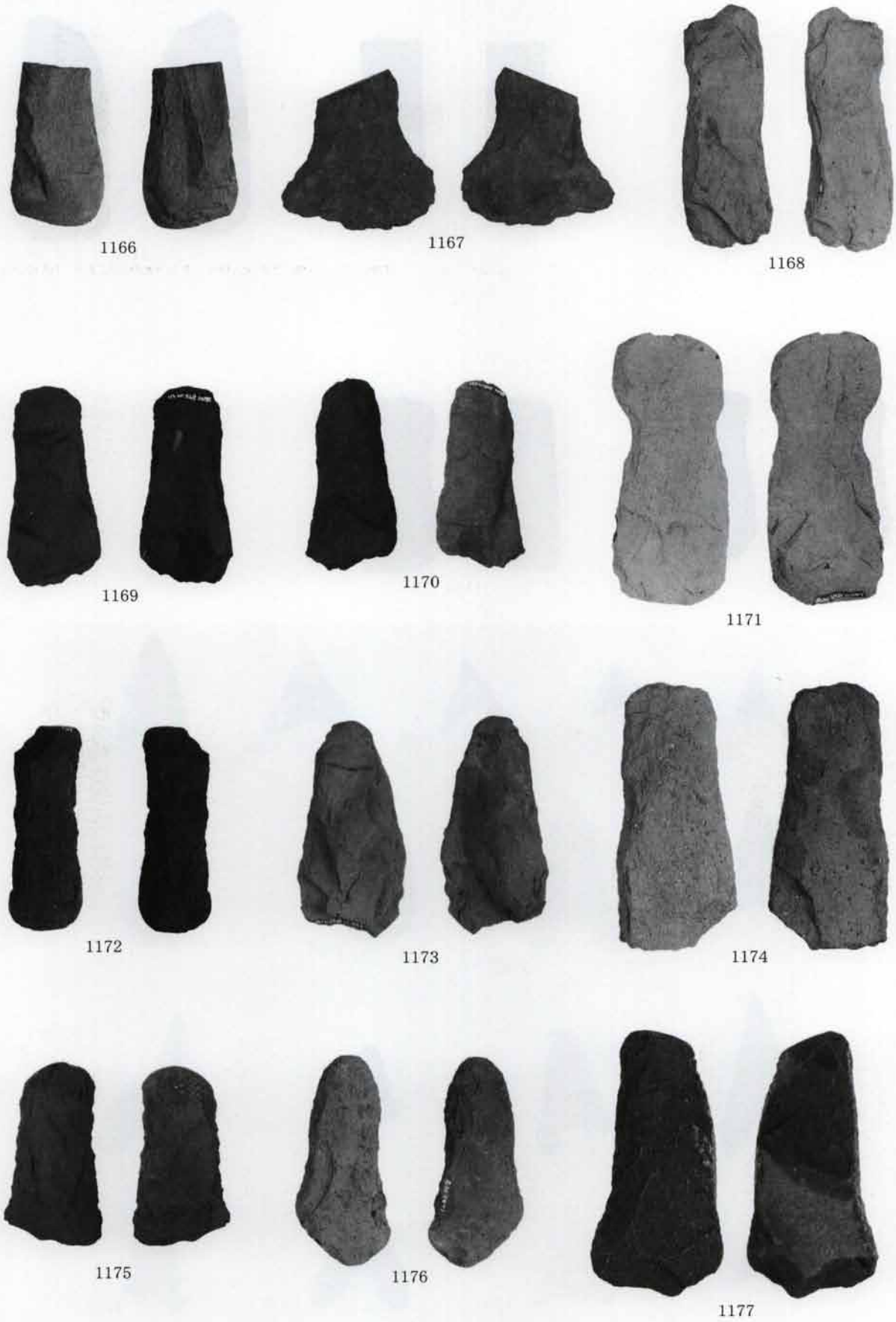
1162

1163

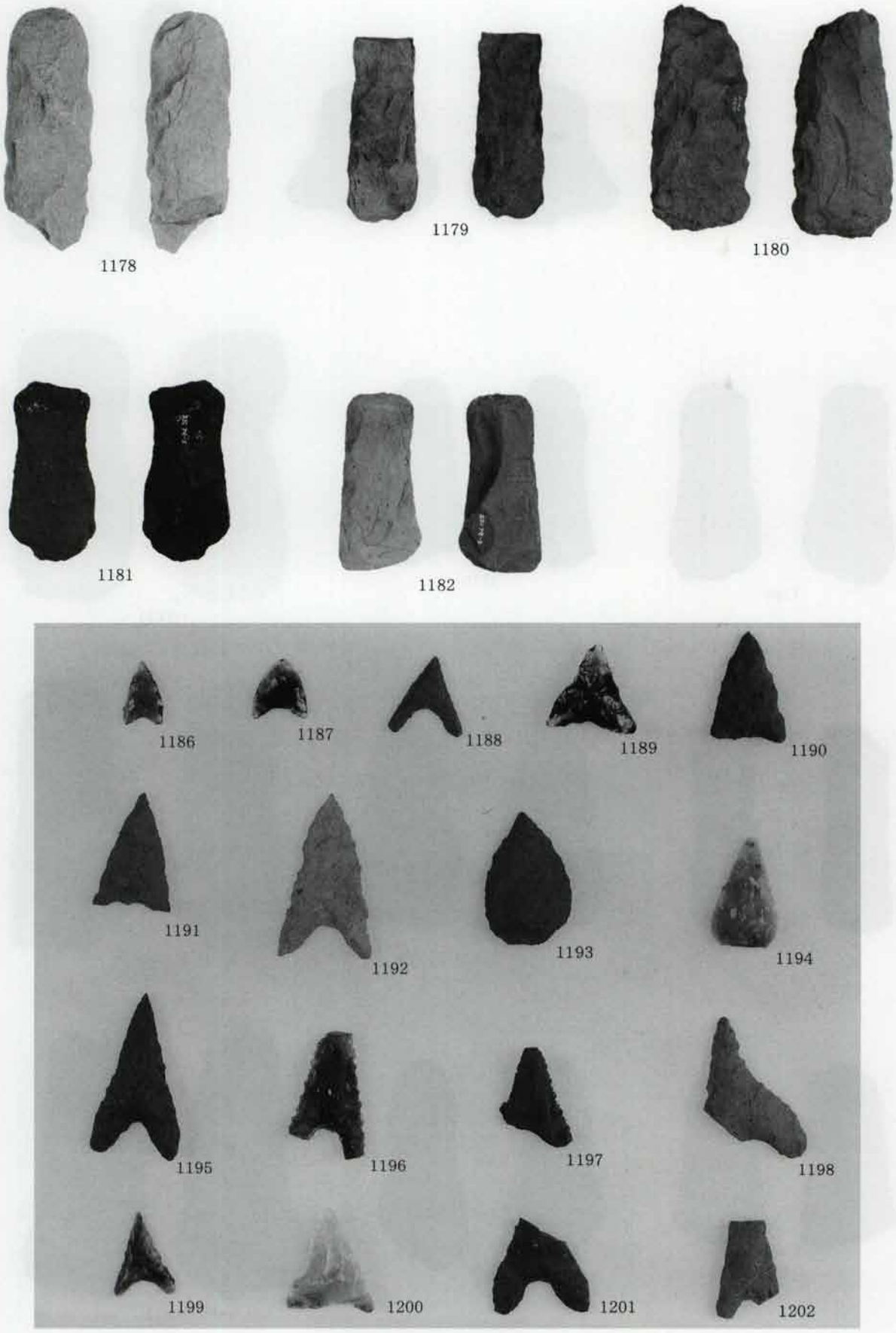
1164

1165

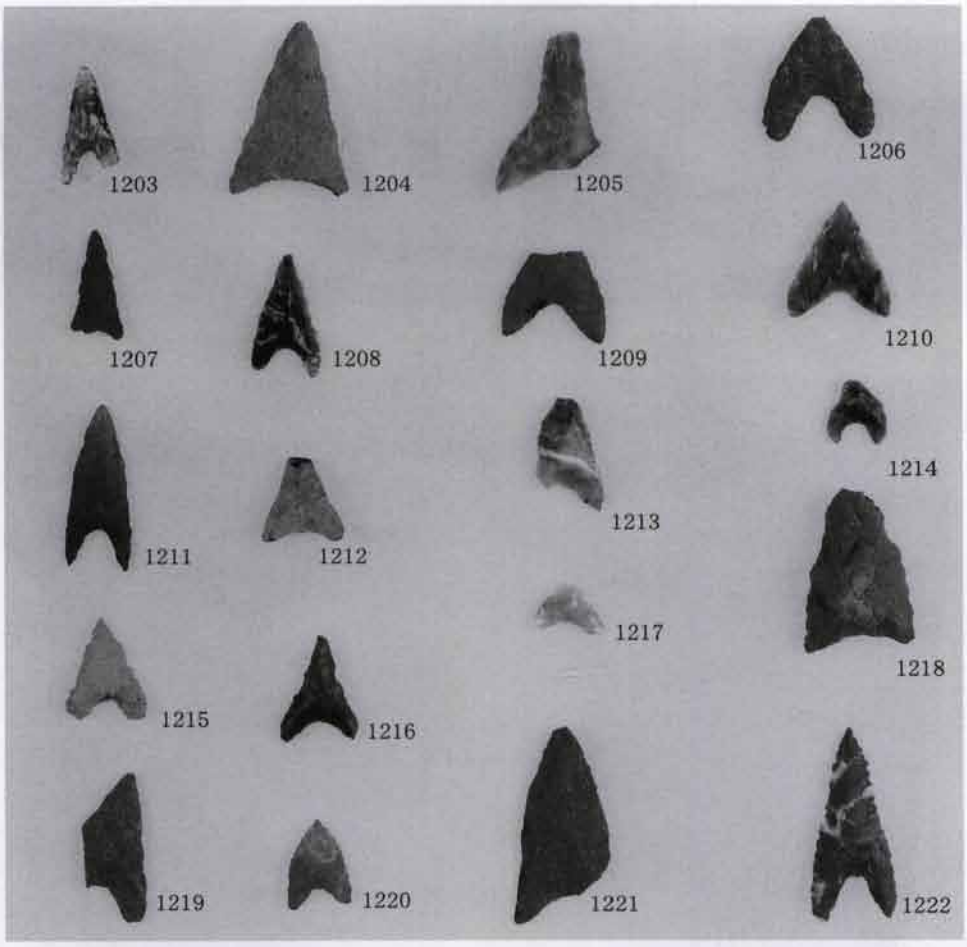
C地点遺跡出土遺物（62）

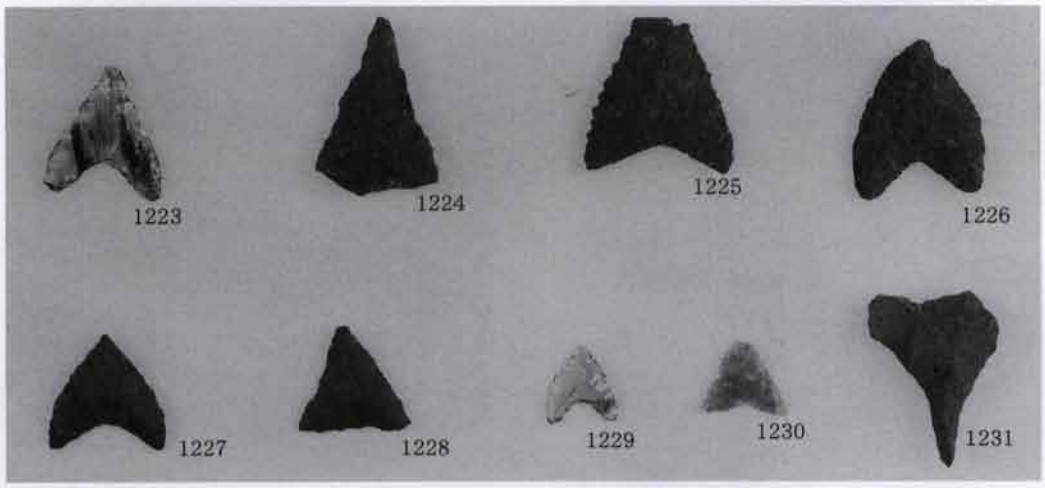


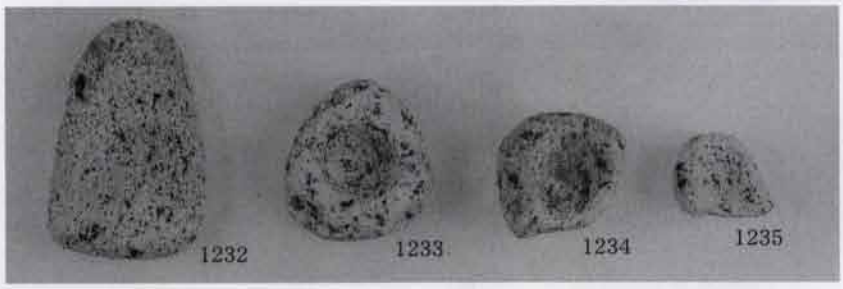
C地点遺跡出土遺物（63）



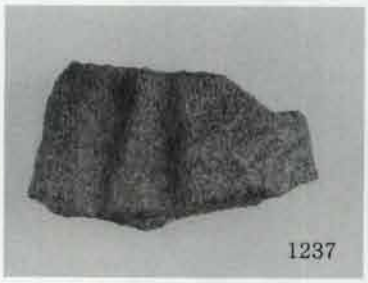
C地点遺跡出土遺物（64）

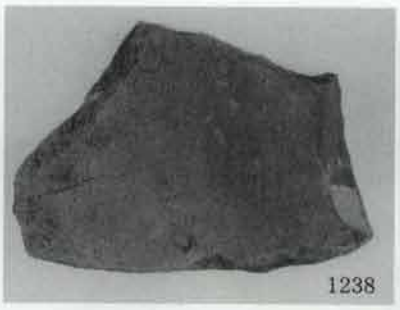






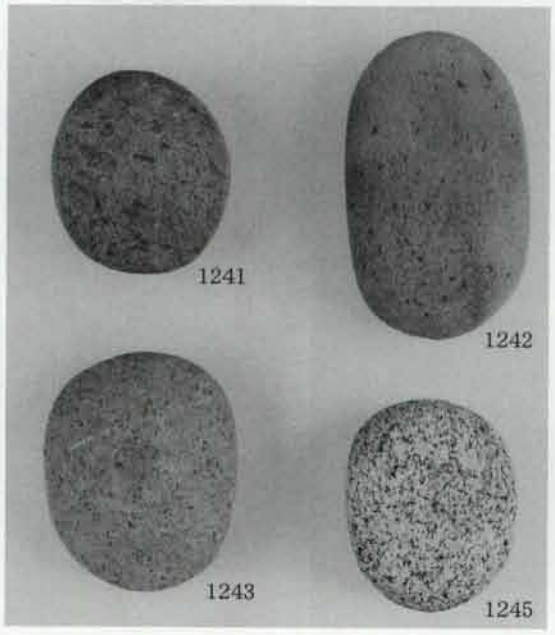
C地点遺跡出土遺物（65）

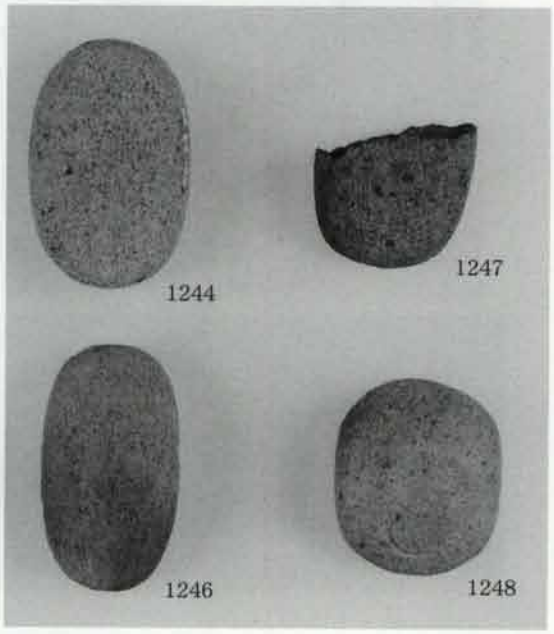

1237


1238

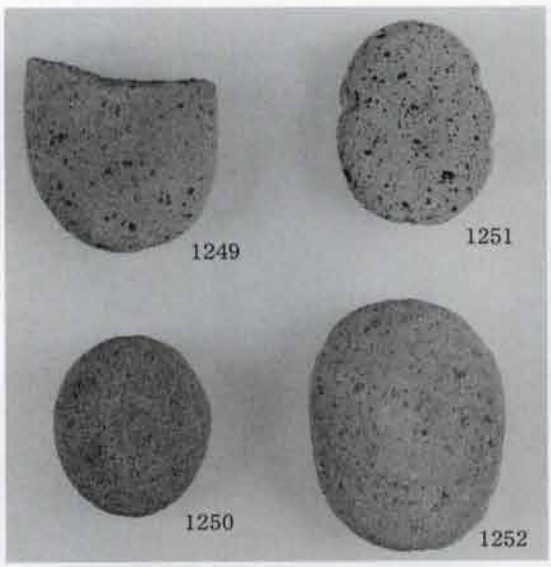
1239

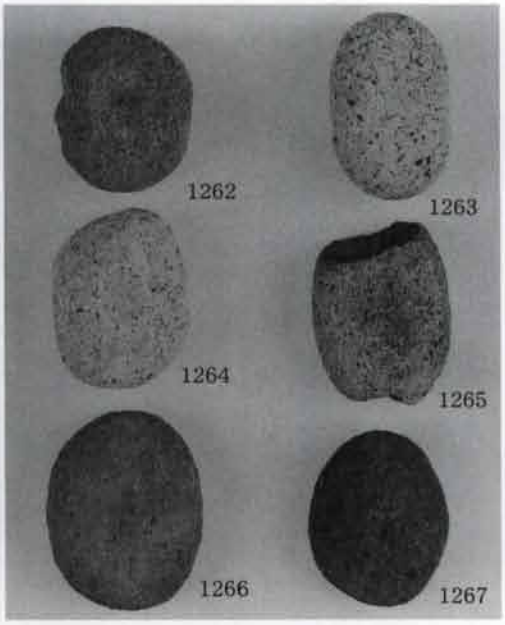
1240

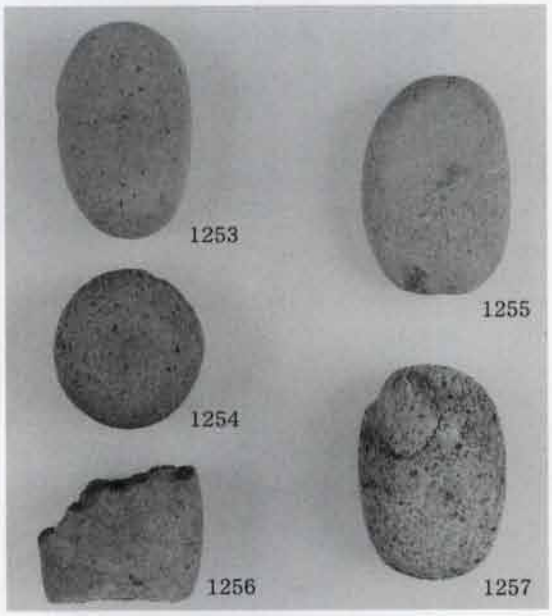

1241
1242
1243
1245

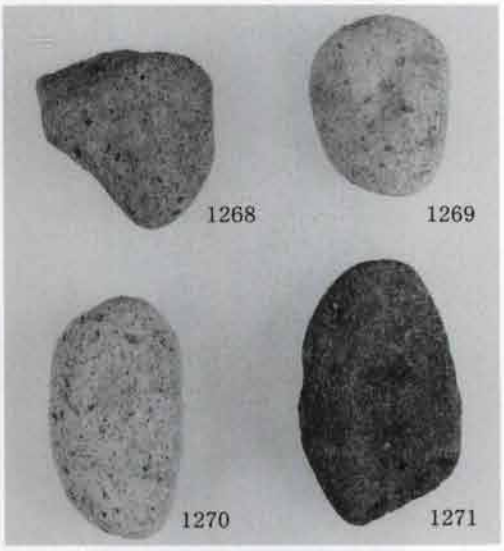

1244
1247
1246
1248

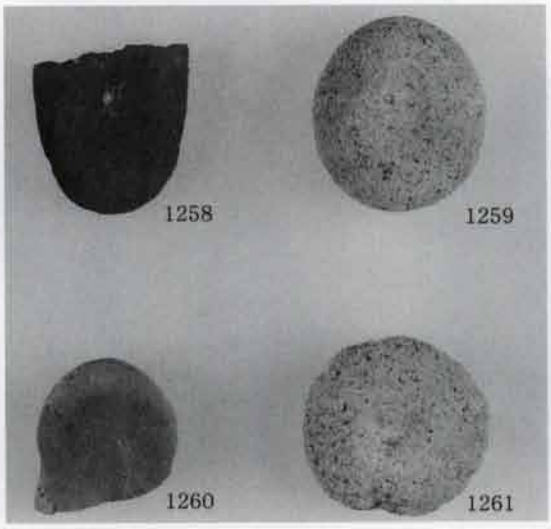
C地点遺跡出土遺物（66）

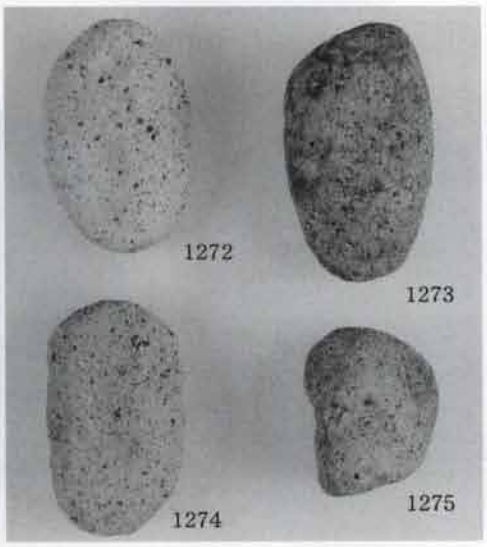




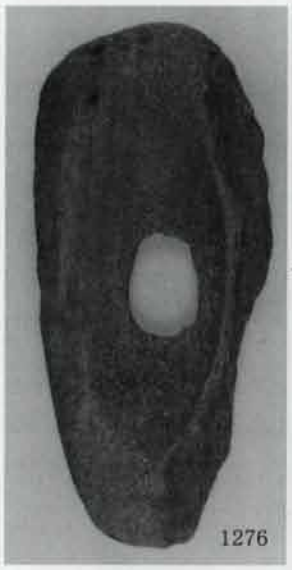




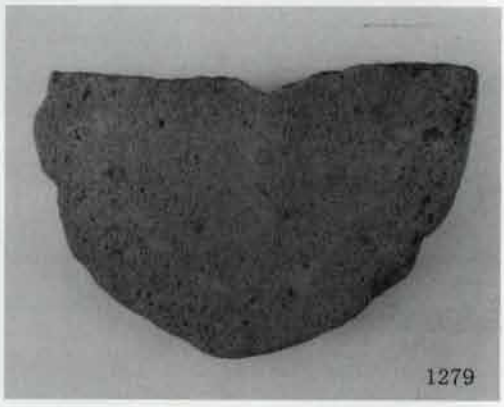


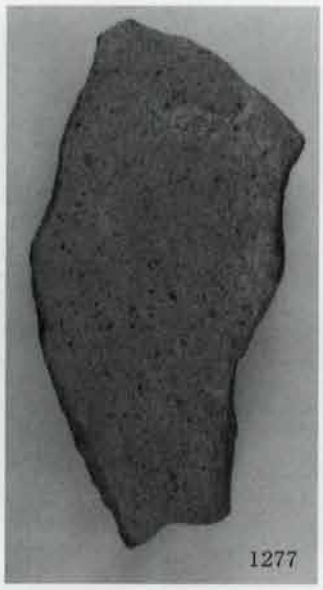


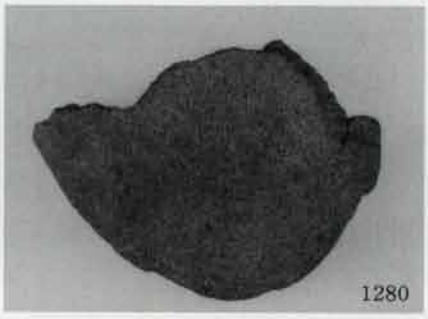
C地点遺跡出土遺物（67）


1276

1278


1279


1277


1280

1281

1282

C地点遺跡出土遺物（68）

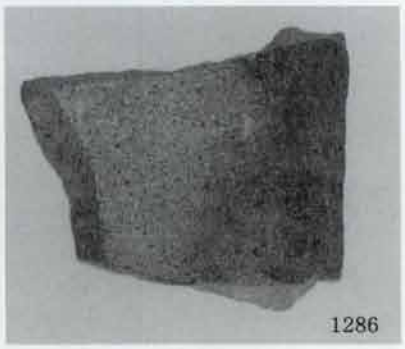
1283

1284

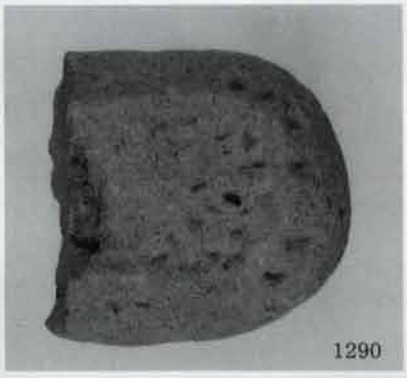
1285

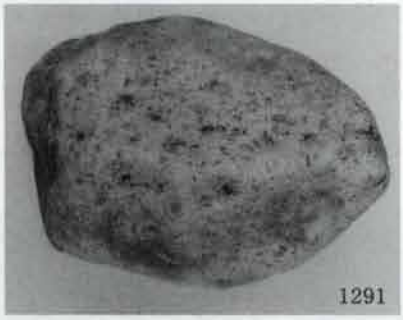
1287

1289


1286

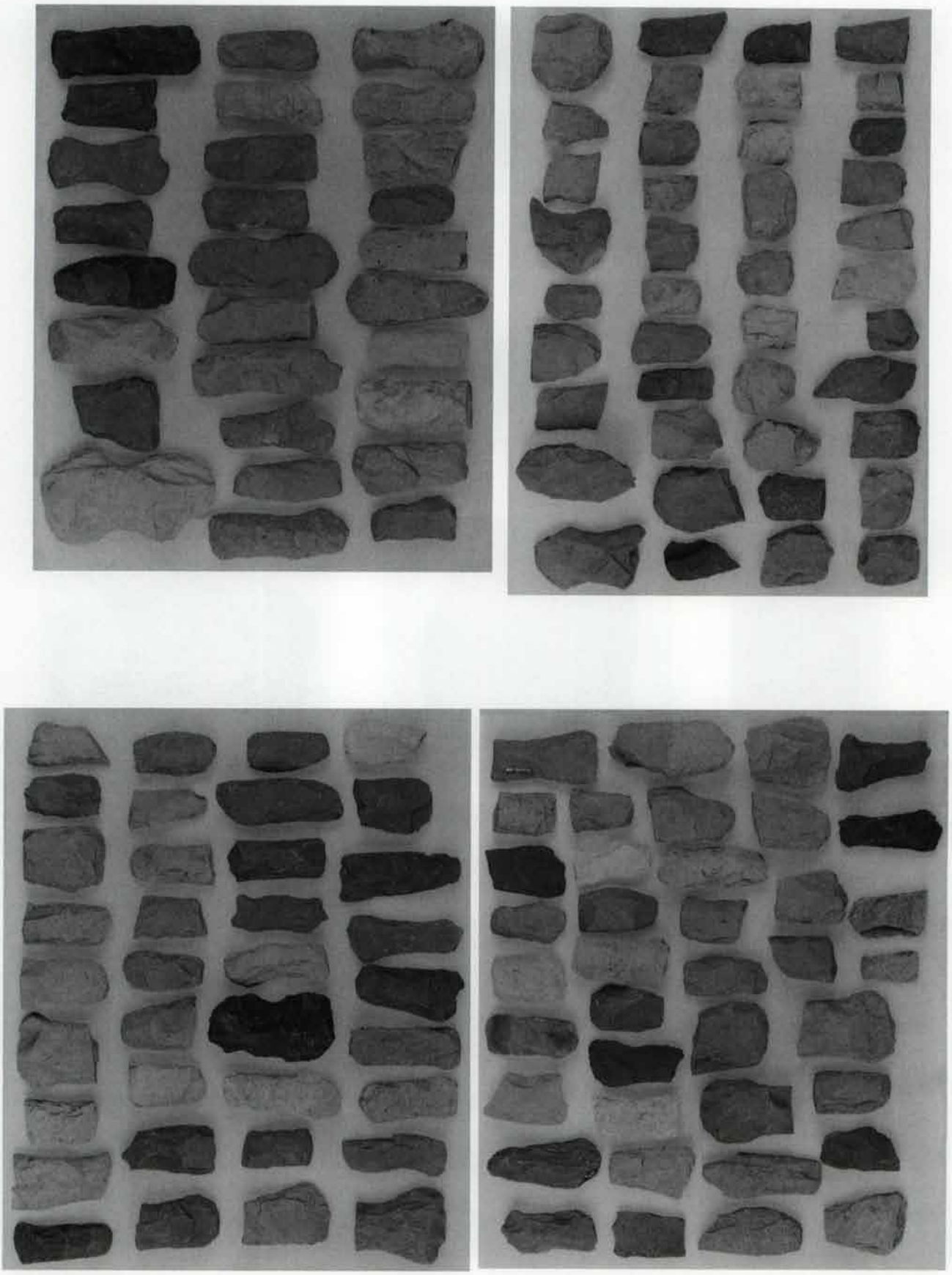
1288


1290

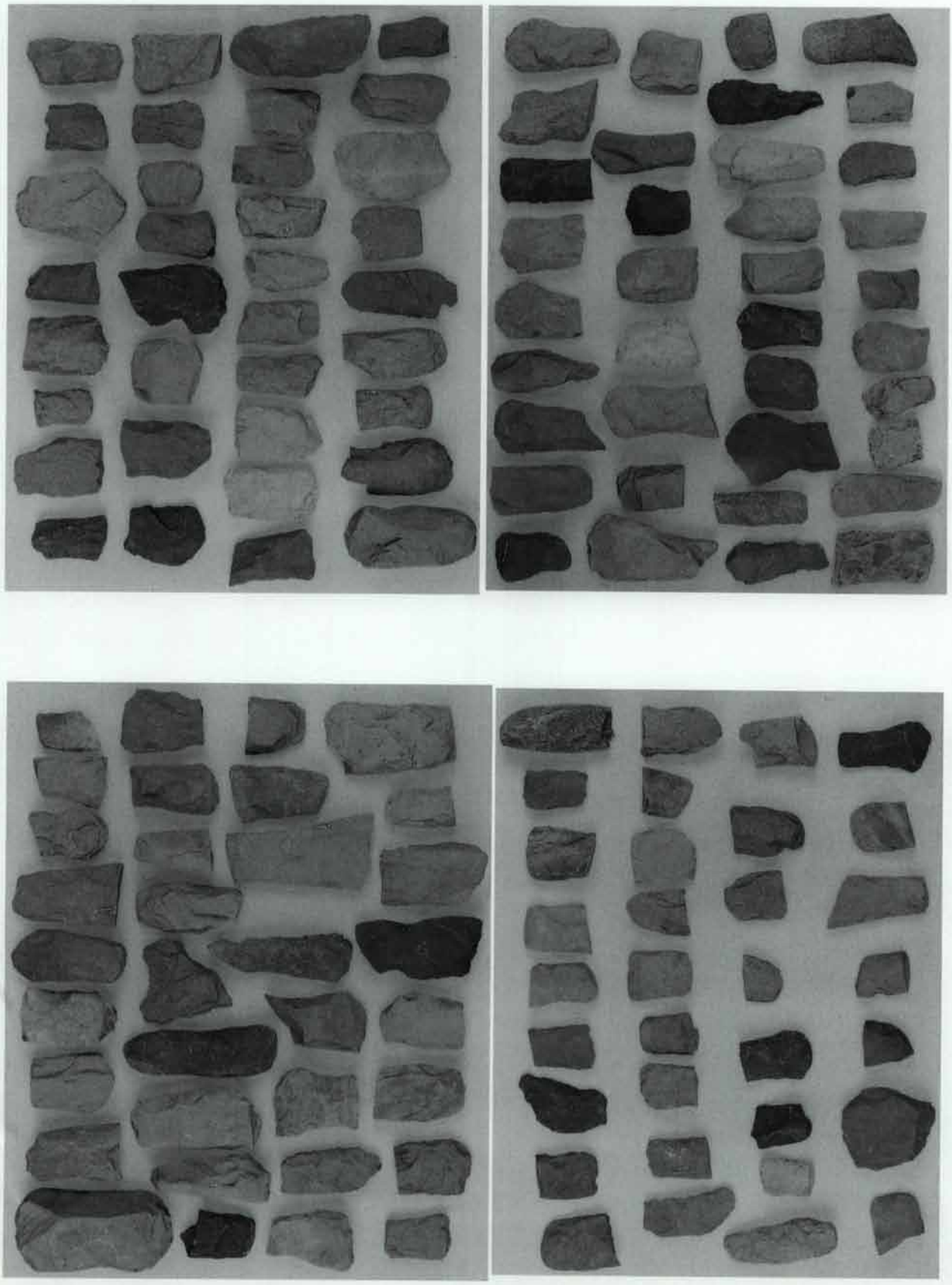

1291

弥生土器の底部

C地点遺跡出土遺物（69）

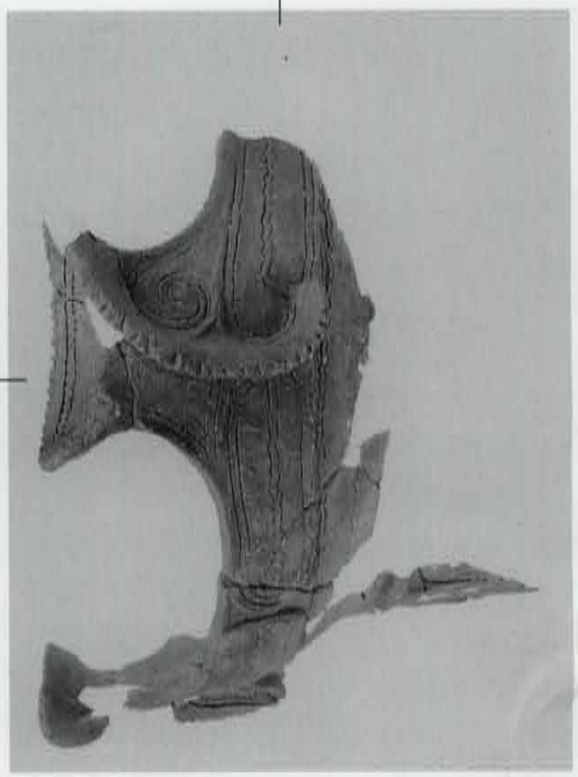


C地点遺跡出土遺物（70）



C地点遺跡出土遺物（71）

（写真掲載のみ）



（写真掲載のみ）

C地点遺跡出土遺物（72）

「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集

堀越並木（A・C地点）遺跡

平成16年３月30日

編　集　　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　行　　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

〒371-0231
群馬県勢多郡大胡町堀越1,115番地
TEL 027(283)1111

印刷製本　　朝日印刷工業株式会社